
櫻ノ舞 —gasaraki 外伝—

みなもと瑠華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

櫻ノ舞 — gasaraki 外伝 —

【Nコード】

N84450

【作者名】

みなもと瑠華

【あらすじ】

千年．．．いや、悠久の時を越え現代に存在する「嵬」（かい）

——鬼の末裔である豪和一族。

タクティカルアーマー

その開発途上にある二足歩行型兵器TAの被験者、

テストパイロットとして豪和の御曹司である17歳の豪和ユウシロウは存在していた。

かつて冷徹な企業論理を掲げる豪和に家族を奪われた伊集院佐和子は、

ユウシロウの家庭教師として豪和に近づく——だが、そこで垣間見

たユウシロウの姿は、
次第に彼女の心を変えてゆく。冷厳な刻^{とき}を刻む、過酷な現実。
しかし、それさえも超えて．．．ひと時、触れ合った心と心。
それだけが、今この瞬間^{とき}の、すべて。

第一章 ―桜ノ章―（前書き）

数年前に書いていたTVシリーズアニメ『ガサラキ』二次小説です
未だ未完ではありますが、初めてきちんと形にした執筆小説でも
一応TVシリーズより（ユウシロウが現特自に入隊前）一年前の設
定．．．

（というつもりでしたが、特に本編との繋がりをきっちり持たせな
くとも
よいような気が次第に．．．現時点では、そう割り切って書いてい
ます）

基本的な部分ではアニメ本編ないし小説版（あるいはドラマCD）
を踏襲しておりますが、

オリジナルキャラの主眼において物語が進み、後半はかなりの部分
で脚色してます

（特に小説版にて触りのみ言及されていた筑紫王朝エピソードにお
いて）

後半から歴史学者・古田武彦氏の著作「よみがえる九州王朝」など
も参考に．．．

アニメ本編の詳細については、末筆のDVD BOXプロモート用公
式webにて

（アニメ作品データ）

企画：サンライズ

原案：矢立肇、高橋良輔

シリーズ構成：野崎透

キャラクターデザイン：村瀬修功

ゲストキャラクターデザイン：山形厚史

メカニックデザイン：出淵裕、荒牧伸志

美術監督：池田繁美

色彩設計：岩沢れい子

助監督：谷口悟朗

監督：高橋良輔

音響監督：浦上靖夫

音楽：？島邦明

OPテーマ『MESSAGE #9』

作詞：種ともこ / 作曲・編曲：保刈久明 / 歌：種ともこ

EDテーマ『LOVE SONG』

作詞：種ともこ / 作曲・編曲：新居昭乃 / 歌：種ともこ

製作：テレビ大阪、読売広告社、サンライズ

著作：（C）1998 SUNRISE INC.・テレビ大阪

小説版（野崎透・著）

I 戦術甲冑タクティカル・アーマー（1999年4月1日） ISBN 4 - 04 - 4200

001 - 7）

II 傀儡子くぐつ（1999年6月1日） ISBN 4 - 04 - 4200

002 - 5）

III 接触ふれあい（1999年8月1日） ISBN 4 - 04 - 4200

003 - 3）

IV 未来あした（1999年9月1日） ISBN 4 - 04 - 4200

04 - 1）

ドラマCD

餓沙羅鬼見聞録CD1「風の記憶 砂の伝承」（1998年11

月21日）未来編。本編から3000年後の物語。

餓沙羅鬼見聞録CD2「天の人 海の民」（1998年12月19

日）古代編。卑弥呼の時代の物語。

餓沙羅鬼見聞録CD3「人、鬼」（1999年2月24日）平安末期編。第15・16話とは異なる時代の物語。

餓沙羅鬼見聞録CD4「出^{たび}発」（1999年4月7日）近未来編。最終話の後日談。

「ガサラキ」公式サイト

<http://www.gasarakinet/>

そのうち前半部分についての加筆修正なども考えてます

第一章 — 桜ノ章 —

序ノ舞

清^{さや}かなる 時の水面に 風渡る

睦月すぎれば 春の騒めき —

心つないだ 空の息吹

古^{いにしへ}の記憶 いっしか憶^{おも}へ

秘め事咲けども はらはらと

臨月きたりて 桜散るらむ……

1 .

私が初めて彼に出会ったのは、今から遡ること約5ヶ月ほど前、満開をすぎた桜が散り急ぐ、ある春の日のことだった。

—— 彼の名は、豪和ユウシロウ。

私はその日、由緒正しい地方豪族の流れを汲む、豪奢な構えながらも、ひっそりと静まり返った佇まいの中に重々しい歴史を感じさせる日本邸宅、豪和邸にやって来た。

彼、ユウシロウの家庭教師の任に就くために。

豪和の家は、中部地方は首都圏に程近い企業城下町、豪和市に居を構えていた。

そう、その地方都市の一つをも、その支配の傘下に置く巨大企業——それが豪和という家のもう一つの真実の顔であった。

私はその豪和の四男である御曹司のひとり、ユウシロウに語学、とりわけ英会話を中心に教えるべく、ここ豪和邸に赴いたのだ。

しかし、こうして私が豪和に近づいたのは、本当はそんなことのためじゃない。

私の家をめっちゃめっちゃにし、家族を奪った豪和そのものに復讐するため……。

私の名は——伊集院佐和子。

伊集院家は、かつて地方豪族であった豪和家に代々仕えてきた家柄であり、同時に日本有数の一大コンツェルンを形成する軍需兵器産業、豪和インダストリーの傘下にある、ある中堅企業を営んでいた。

しかし、およそ8年前、豪和が特務自衛隊と共同参画して、二足歩行型兵器？タクティカル・アーマー？通称TAの開発に着手した際、伊集院は突然豪和との取引を断ち切られてしまった。

それはあまりにも突然に。

豪和はそれが当然の事であるかのように、またその行為が、まるでこれまで続けてきたものと、ひと繋がり行為であるかのように、平然と私たちを裏切った。

それが、いまや日本有数の軍需産業と化した豪和という企業の正体なのである。

自らの利益のためならば、たとえ長年関係を続け温めてきたものであろうと、いやたとえそれが自身の身内のようなもので、永い歴史の歳月に亘って主従関係を続けてきたものであろうと、一切関係ない。

その乾いた企業論理は時に、弱い者に対して特に冷酷な牙を剥い

た。

それは、常に豪和に忠誠を誓い、献身を情らなかつた伊集院家に對しても、決して例外ではなかつた。

……私はそんな豪和が許せない。そう、決して許すことなどできない。

たとえ伊集院家が古来より豪和の家臣として、家そのものを存続させてきたのだとしても——私は豪和という一族の存在を許すことができない。

それが、たとえ自身に繋がる、永い歴史の系譜に終止符を穿つことになろうとも……。

8年前のあの日、追い詰められた私たち家族は、やむなく一家心中を試みた。

信賴を裏切られた絶望と虚しさも、燃え盛る炎に焼かれ、掻き消され、蒸発していける気がした。

父と母、そして兄と一緒になら、もう何も怖くはなかつた。

しかし、そんな思いとは裏腹に、運命の悪戯か、私はひとり生き残つた。

炎の中から救け出され、最初に目覚めた時、生きているはずがない、そう思った。

そうだ。自分ひとりが生き残つてどうするのだろうか？

私は、父や母や兄と共に、あの炎の中にいなければならなかつた。それなのに私は……。

だが流す涙も涸れ果て、ただ茫然と時を見送るうちに、胸の中に激情にも似た強い想いがふつふつと沸きあがつた。

私ひとりが生き残つたのは、もしかしたら、そのためかもしれない。かつた。

そのために神が——もしそんなものが在るのなら——与えてくれたひとつの使命だったのかもしれない。

私は復讐を誓つた。深い絶望と落胆のなかにこの身を囲うよりも。

その虚空のただ中へと私たちを突き落とし、家族を死地へと追いやった豪和に……。

そんな私を、陰になり日向になり支えてくれたのは、私をあつめたの
の中から救い出してくれた、ある一人の男だった。

国際ジャーナリスト連盟所属、鷹水誠司。

彼は私をアメリカへと留学させてくれた。そして私はその数年後、
米ハーバード大学を首席で卒業した。

それができたのは、豪和に対する強い憎しみの気持ちがあつたからだが、思えば常に彼が私の心の支えとなってくれたからこそ、私はどんな困難をも克服できたのだ。

鷹水がいなければ、私はきっと豪和に復讐するどころか、自分ひとりで生きていくことも、おそらく容易ではなかっただろう。

そして私は、いつからか国籍を超えて組織化された、ある国際ジャーナリズム団体で、彼の秘書として働くようになった。鷹水は、そのゲリラ的組織の中核をなす人物でもあった。

やがて鷹水は、私の婚約者となった。

鷹水の元で働くうちに、私はとうとう豪和に接近する機会を得ることになった。

そう——現在彼らが極秘に調査している、日本の軍需企業・豪和がこれも極秘裏に開発している、二足方歩行兵器について探るために、8年ぶりに米から帰国し、この豪和邸潜入に成功したのだ。

無論、表向きは豪和の四男、ユウシロウの家庭教師として。

*

「軍服——？」

父、乃三郎^{だいさぶろう}に連れられたユウシロウを初めて見た瞬間、私は言葉を失った。

ネクタイを締め、薄青色をした品の良い制服姿のそれは、明らかに階級章を胸と肩に付けた軍服姿そのものだった。

彼は民間人でありながら、豪和の二足歩行型兵器開発のために特別にチーム化された特務自衛隊の実験中隊に属し、大尉の階級を与えられている。

それは彼が、二足歩行型兵器T Aの開発になくてはならない存在だかららしいのだが、その詳細は世界各国に亘る私たちの組織の情報網によっても、まだ明らかにされてはいなかった。

初対面のユウシロウを前にした私の驚きは、その特自の制服姿であつたこともだが、それがあまりにも違和感を感じさせず、異様にしっくりしていたからなのだが。

しかし本当のところ、そう感じる理由は、もっと別な所にあつたのかもしれない。

「彼女が今日からお前が家庭教師としてお世話になる、伊集院佐和子君だ」

「伊集院佐和子です。どうぞよろしく」

「豪和ユウシロウです」

彼はとても十七歳になつたばかりとは思えないほどの、不思議な落ち着きに満ちた少年だった。こちらの問いかけに対し、ひと言ふた言答えるその言葉の丁寧さ。単に育ちがよいからなのだろうか？でも、その立ち振る舞いなどをも含めた彼の存在の全体像から、明らかに普通の高校生とはかけ離れたものを感じるのだ。

豪和の末息子として、確かに通常とは遥かに異なる環境下に置かれていたとはいえ、それはまるで十七歳にして、既に永い歳月を生きてきたかのような――その眸の色からは、そんな思慮深い何かが垣間見られた。

（後に私は、そんな彼ユウシロウが背負っているものの尋常ならざる大きさを知るのだが……）

ただ無口でおとなしいだけではない、ユウシロウは、そんな不思議な少年だった。

「伊集院先生……」

そう呼ばれて、私ははっとした。

彼と二人きりになったことを思い出したのだ。

ユウシロウは、いとも簡単に自分の存在をその場から消し去ることができる。それはおそらく彼が、この豪和の家で能を習っているからなのだろうか。

それでいて時々とても重苦しい、目には見えない息苦しいほどの圧迫感を感じさせるのだ。

一度彼を意識し始めると、その存在を無視することができなくなる。

「これから、どのようなカリキュラムで勉強を進めていけばよいのでしょうか」

そう抑揚のない声で問われて、私はやっと我に返る。

当然これは、彼の家庭教師の任に当たるに際し、父乃三郎から聞かされていた話ではあったが、実はユウシロウはとくに高校を卒業している。

つまり飛び級——相手がそれだけのIQの持ち主であることに、米大学を首席卒業の経歴を持つ自身が、特別引け目を感じるわけではないが、それでも、九歳も年下の十七歳。

どこかその独特の貫禄のようなものを携えた気配に気圧されたように答えた。

「そ、そうね。じゃあ……」

なぜか英会話だけは苦手という彼に、まず基本的な段階からレクチュアし、授業を始めることにする。

でもIQが飛び抜けて高いのに、英語が全く喋れないなんて……。

それでも佐和子には、それが全然おかしいことには感じられなか

った。ことユウシロウに関しては。
彼と顔を突き合わせるうちに、次第に表面の頼りなげな雰囲気と平
行して、どこか朴訥としているその人となり、それがなんとなく
如実に表れているように感じられてくるのだった。

*

——春。豪和の家の純和風の庭園を吹き抜ける心地よい風が、障
子の隙間から流れ込んでくる。

部屋には、私とユウシロウの二人だけ。私の英語のスピーチだけ
が、しんと静まり返った和室に響く。

目の前ではユウシロウが、熱心にそのスピーチに耳を傾けながら、
手元のテキストを目で追っている。

ただそれだけの、何もない時間——。

「……じゃ、ここまで読んでみて」

私は英文を朗読するのをやめると、ユウシロウを促した。

ユウシロウは、言われた通りの箇所を、少しつかえながらも、
忠実に細かい発音を真似てみせる。やはりそれだけ集中力が、ずば
抜けているのだ。

「OK。さすがに始めたばかりにしては上出来ね。でも、ここここ
この発音は……」

私はそんな風に毎日決まった時間に繰り返される、ユウシロウと
の穏やかなひと時を過ごしながら、頭の片隅では、自分に課せられ
た使命について、片時も常に忘れたことはなかった。

——何かの拍子にユウシロウから、豪和の兵器開発について、そ
れとなく訊きだす……実際はそれほど単純なコトではないのだろう
が、ユウシロウ自身のそばにすることで、必ず何かが掴めるはずだ。
そうやって少しずつ、ターゲットとの距離を狭めていく。そして、
いずれ豪和を。どんな小さな綻びが、この一大帝国を築く高い城壁
を崩すとも限らない。鷹水はのために私を豪和へとやった。いや、

むしろこれは私自身の意思でもあったのだ。国際的緊張から見ても、その尋常ならざる兵器開発が忌々しき事態であることを知るのは、だがもう少しあとの事になるのだが……。

そんなことを何気なく考えながら、私は目の前に俯き座っているユウシロウの表情を盗み見た。

何も知らない彼は、私のことをおそらくただの家庭教師としてしか見ていないだろう。

そう、それが当たり前……しかし、これから私がしようとしていることは、この何も知らない繊細でおとなしい少年一人までをも、当然巻き込んでいくことなのだ。

私のことを先生と信じて疑わず、こうして静かな同じ時を過ごしている彼を。

？いいえ佐和子、忘れたわけではないわよね。豪和が私たち伊集院家に何をしたのかを。一体誰が、平凡で幸せな家庭を一瞬にして奪い去ったとも思っているの？

そう思うと、春風にひと時収まっていた憎しみの感情が、急に胸に押し寄せてきた。

？彼だつて豪和の一員。いいえ、むしろ文字通り立派に豪和の力となる存在。ならば、決してこのままにしておくことはできないはずよ！？

そう思つて、私はユウシロウを密かに睨みつけた。

しかしその意に反して傍らの彼は、目の前で我知らず、机に前半身の体重を傾け、すうすうと軽い寝息を立てている。

「ユウシロウ？」

私はそつと呼びかけた。すると彼ははつとして飛び起き、所在なげに戸惑いを見せると、緊張した面持ちで詫びた。

「……ごめんなさい」

普段のどちらかというが無表情な、まるで能面のような彼の面影からは、想像もつかないようなその慌てぶりに、私は何もかも忘れ、思わず嘖き出していた。

そして、先程の憎しみの感情も、いつしか不思議とどこかに消え去っていた。

「あなた確か、夜は特自で訓練を受けているんでしょ？　きっと疲れてるのね。いいわ、少し休みましょう」

そう言っただけは、障子をすつと開けて縁側へ出た。ユウシロウに対する、そのあまりに自然な気遣いに自ら驚くこともなく。

縁側の陽だまりでは、午後の日差しが燦々と降り注ぎ、雲雀のさえずりが、そこに暖かい静寂を作り出していた。

ユウシロウも私に続いて縁側へ出ると、音もなく私の傍らに腰掛けた。

「ユウシロウ。私、以前から気になっていたことがあるんだけど、あなた、なぜ特自に行ってるの？」

私はまるで？　ただの家庭教師？　を装うように、平然と問いかけた。その何気ない問いに、ユウシロウはしばらく間を置いてから、そつと確かめるように答えた。

「……父や兄たちが望んでいるからです」

「あなたは？　あなた自身は望んでそれを承諾したの？」

あくまでユウシロウは正規の自衛隊隊員ではないが、出向という扱いで特別に特自——特務自衛隊に在籍している。私が彼の家庭教師として雇われたのだって、単に英会話だけとはいえ、大学へ通う時間を短縮してのことなのだろうが、それにしても。

彼が特自の——TA開発の雛型として扱われていることに端を発するように、豪和の兵器開発にとって、やはり彼はなくてはならない存在なのか。

考えてみれば、彼も豪和の犠牲者のひとりかもしれないのだ。いくらなんでも一企業の都合に、それも身内の者が振り回されているところか、それは一種の人権をも逸脱しているとまで言える。

ユウシロウは、自分の内面にまで食い込んでくるような、私の質問に少し戸惑いを覚えたのか、やや視線を逸らした。

「たぶん……」

「ユウシロウ」

私はそんな彼のことを気になってしかたなくなった。

彼は一体なんのために、そこまで自分自身を犠牲にしてまで、豪和の意のままに黙々と従っているのだらう。いくら豪和の企業のためといっても、限度というものがある。

豪和だって個人の、それも身内である、こんないたいけな少年の自由を奪う権利などないはずだ。

だが、確かに彼は豪和の四男であり、同時にただ一人民間人でありながら、大尉の階級を持つ、非凡な二足歩行型兵器のテストパイロットなのだ。

それだけは、哀しいかな明白な事実だった。TA開発の骨子を探ることと同時に、そんな彼を保護し、最終的に使い物にならなくさせること——それが暗黙のうちに私に課せられた、一つの使命でもあるのだった。

*

私は傍らで横になり眠っているユウシロウの寝顔を凝つと視つめた。

その寝顔は、ひと時、己の使命から開放された安らぎに満ちていた。

と、彼の着物の懷から、ころころと何かが転がり落ちた。不審に思つて手に取ると、それは小さな透明の硝子球だった。

その硝子球は、午後のまぶしい光を受けて、キラキラと万華鏡のように七色に美しく輝いた。

ふと見ると、その玉には小さく？みすず？と、彫り込まれてある。「女の子の名前？」

どこかでその名には覚えがあつた。私はふと思い出した。確かユウシロウの下に、もう一人美鈴という妹がいることを。

彼は妹から貰ったこの硝子球を、片時も肌身離さず懷に忍ばせて

いるのだろうか。確か彼の妹は、病弱なため療養中と聞く。

私はあらためて、ユウシロウの寝顔を見やった。そして、手にした硝子球を再び彼の懷にそっと戻そうとした。

しかし私が彼に近づいた次の瞬間、寝返りを打ったユウシロウのアップが、突然目と鼻の先に飛び込んできたのだ。

「……………」

次の瞬間、私は釘付けになった。

陽に透ける、さらさらとした柔らかな髪を揺らす微風。閉じた瞼の際に陰を落とす、思いのほか長い睫毛。すっと通った鼻筋。白くて柔らかそうな頬。そして、触れたら溶けてしまいそうな唇……。

瞬間、心臓の鼓動が弾け飛んだ。思わず身を引いた私は、そのまの姿勢で固まったまま、まじまじとユウシロウの寝顔を眺めてしまった。

何とかして呼吸を整えようとするのに、なぜだか胸が締め付けられるように苦しい。瞬間的に頂点に達してしまった心拍数は、なかなか元に戻ってくれない。

？…………ドクン…………ドクン…………ドクン…………ドクン…………？

なのに私の指先は、ゆっくりと誘われるようにユウシロウに伸びていった。まるで意思を喪くした操り人形のように。

時間の流れが、突然ゆっくりとスローモーションで流れ始めたようだった。

そしてその震える指先が、ユウシロウの前髪に触れるか触れないかという刹那、ユウシロウは目覚めた。私は、引つ込めるに引つ込めなくなった指先を止めたまま、ただその姿勢で凍りつくしかなかった。

「…………先生？」

目覚めたユウシロウは、目をぱちぱちさせ、何かと私を見上げる。

「…………あ…………。いま、は、花びらが…………そう、桜の花弁はなびらがついてい
たから、取ってあげようと思って」

「桜？」

半ば不思議そうに尋ねるユウシロウに、私はしまったと思った。桜なんて、とうの昔に散ってしまったからだ。

「いいえ、違った……光の加減で花びらに見えたのよ」

そう言っただけでなんとか誤魔化した、あのユウシロウは、特別にする様子もない。それでも私は決まり悪そうに、何気なく手にしたままの硝子球を弄んだ。

「先生、それは」

ユウシロウが私が手にした硝子球に気づいて言った。

「あ——」

私は再び若干凍りついたが、何も慌てることはないのだと、胸の中で自分に言い聞かせ、それをユウシロウにそつと差し出した。

「はい、これ。さっきあなたの着物から落ちたの」

ユウシロウは、ふつと微笑むと、

「……すみません」

少しだけ恥じらいながら、受け取った。

「妹さん？ 確か美鈴さんって」

「ええ。妹が別れ際にくれたんです。『私だと思って、大切にしてください』と」

「妹さんのこと、とても大切にしてるのね」

「ええ…… たった一人の妹ですから」

？ たったひとりの妹？

——何気なく呟いたそのユウシロウの言葉に、ふと私は胸の片隅が痛むのを感じた。

しかしふと盗み見たユウシロウの横顔には、とても幸せそうな微笑が浮かんでいる。

？ 羨ましい？——私は咄嗟にそう思う、いじましい自分自身を感じた。子供じみた羨望の気持ちだろうか。

しかし、そんな私にも兄がいたのだ。 たったひとりの、とても優しい兄だった。

でも、その兄は。兄だけでなく、父も母も……。

急に強張った怖い顔になって黙りこくってしまった私を見て、ユウシロウは怪訝な表情になった。

「先生……？」

その声に我に返った私は、ふと立ち上がりユウシロウに背を向けた。

「いいえ。なんでもないの……なんでも」

ユウシロウを妬んでどうする。

しかし、そう思えば思うほど、いたずらに切なく胸は締めつけられる。

しかし私は、何事もなかったかのように、元の教師の仮面を被り、ユウシロウを促した。

「——さあ、続きを始めましょうか」

2 .

？私はたった一人の彼の幸せを奪おうとしている。彼の妹は、私が彼を不幸に陥れようとしていることを知ったら、なんて思うかしら？？

私はしばらくの間、そんな思いから逃れられなかった。でも、それでは一体なんのために、私はこの家に潜り込んだの？

彼の父、豪和乃三郎は、8年ぶりに日本に舞い戻った私に、こう言った。

『……あの時はすまなかった』

？すまなかったですって？

——そんなたった一言だけで、すべてを水に流せるとでも思っているの？

私はどうしても豪和が許せない。豪和という存在がこの世にあり続ける限り、この心に平安は訪れない。きっと豪和一族をすべて根絶やしにしてしまうまで、私の心はずっと満たされやしないだろう。

でも、私は微笑って乃三郎に言葉を返した。

『いいんです。もう——』

おそらく乃三郎自身も、それで済むとは思ってはいないだろう。しかし、隠し持った鋭いナイフのように、私の冷たく光る微笑みの奥の光を知ってか知らずか、乃三郎は静かに目を伏せた。それはどこか赦しを求める殉教者のようだった。

*

「先生、終わりました」

ユウシロウは英会話のスピーチを終えるも、しばらくして私が何の反応も返さないので、テキストから顔をあげ、怪訝そうに物思いに沈む私をみつめた。

「——あ、ごめんなさい。終わったのね。じゃ、次はここから」

「ここはさつきやりました……？」

おもむろにそう返され、私はユウシロウを目の前にして、なぜだか自分がいつになく動揺していることを感じた。

「——ごめんなさい、私、今日はぼんやりしていて」

私は目頭を押さえ、繰り返しユウシロウに詫びた。考えてみれば、ここのところずっと疲れが溜まっていたのか、昨夜は一睡もできなかったのだ。

いや、実のところ本当は……。

「あの……ちょっと気分が悪くて。すまないけど、今日はこの辺にして——」

そう言いかけて立ち上がった途端、突然立ち眩みに襲われ、私はふらりとテーブルの上に崩れ落ちた。

「——先生？」

普段は冷静な彼も、これにはさすがにびっくりしたらしく、必死になって私に呼びかけた。

「佐和子先生！」

「初めて、呼んでくれたのね……私の名前」
その時の彼からすれば、どうでもいいことを、朦朧とする意識の中で呟き微笑んだ私は、心配して覗き込むユウシロウに見守られながら、ただ次第に気が遠くなっていくのを感じていた。

気がつくと、私は別室で布団に寝かされていた。

もうとつくに日は落ち、時計の針は深夜近くを差していた。

「あとは僕が看ているから」

奥女中らを帰す、そんなやり取りが頭の隅の方で聞こえた。

「私……」

見廻すと、傍らでユウシロウが真剣な顔を私に向けている。

「——大丈夫ですか？」

ユウシロウは、ずっと私の傍に付き添っていてくれたらしい。

「ユウシロウ？ あなた、特自に行かなくていいの？」

「今日は休みました」

しかし、例え出向とはいえ軍隊の性格上、休むといって、そう簡単に休めるものではない。そう思うと、頭の片隅に一抹の不安が首をもたげた。なぜ、そんなに簡単に……、それでも、単純にそうまでしてユウシロウが私の傍についてくれたことが、私はなんだかとても嬉しかった。

でもその一方で、私はそんな自分自身に戸惑い、自分でもわけが分からず、ただただ無心に驚くばかりだった。

「ユウシロウ」

「はい」

ふと私は彼に語りかけた。

「私がいまの私でなくなったら、あなたは私を許さないかしら？」
彼の前で咄嗟に口をついて、こんな言葉が飛び出してくると思っても寄らなかつた。しかし、そう思いながら私は続けた。

「あなたがこんなに私に優しいのは、私があなたの先生だから……きつとそうなのでしょ？ 他に理由なんて何もないわよね」

ユウシロウは思わぬその言葉に、ふと言い淀んだが、硬い表情ながらも、ようやく口を開いた。

「……分かりません、僕にも。でも、ひとつだけ言えることがあります。それは、いまの僕には、先生がたったひとりの先生だということです」

その言葉を聞いて知らず知らずのうちに、涙が頬を伝って流れるのを感じていた。なぜ……どうして。けれど、まるで堰を切って流れ出したような、その感情の奔流を、私はしばらく止めることができなかった。

「ユウシロウ、私、私は――」

でも、それ以上は言えなかった。

*

ここは豪和邸の地下に設けられた機密情報室。豪和の、それも総代ほか極々限られた者でなければ、立ち入ることのできない場所である。

その中二階。そこに豪和インスツルメンツの会長であり、豪和一族の総代でもあるユウシロウの父、豪和乃三郎がゆったりと椅子に腰掛けていた。

そして、部屋の前面に設えられた、様々に世界情勢を映し出すモニター画面の前で、ユウシロウの三人の兄たちのうちの二人――長男の一清、そして次男の清継が、画面の明かりに照らし出される部屋の薄闇の中、それぞれの場所で各々思いを漂わせていた。三男の清春だけが仕事の都合上、いまだ豪和の渉外にいた。

本当は日々続々と特自から送られてくるTAとユウシロウの被験データを検討するために、今ここに集った面々であった。が、その日は密かに別の議題が持ち上がっていた。

おもむろに清継がモニター画面に、ある一つのデータを呼び出した。そこには、ほぼ住み込みの状態で豪和邸に潜入した私、伊集院

佐和子の姿があつた。

「伊集院か……まさか生きているとは思わなかったな」

一清が微妙に薄い笑いを含んだ声色を吐いた。

「情報によると、彼女は留学のため渡米し、米ハーバード大を首席で卒業したそうだ。どうやら優秀な女性に成長したらしい」

科学という自分の管轄からすれば畑違いのことに、あまり関心になさそうな次男の清継が言葉を次ぐ。それでも女の身でそこまでになったことは褒めてやってもよかった。

「その後彼女は、あるジャーナリスト団体の秘書になったようだが、それがただの秘書ではないらしい。どうやら彼女には、その昔彼女を救い、後ろ盾となり渡米にも尽力した、素敵なフィアンセがいるとのことだ——」

「こいつがその鷹水誠司か」

清継が呼び出したもう一つのデータに一人の男の姿が映し出された。

「彼女がなんのために家庭教師なんて下手な芝居をしているのかは、押して知るべし……だけど。いいんですか、お父さん？」

それでも清継は、ユウシロウの英会話の教師として雇った、かつての乃三郎の同僚であつた伊集院大祐の忘れ形見、佐和子を豪和に迎え入れた父の真意が訊きたかつた。

「総代には総代の考えがあるのだ」

その一清の言葉に沿うわけではないが、乃三郎がややあつて重い口を開いた。

「彼女がうちに来てくれれば、何かと手間が省けることもあるだろう。違うか？」

「……まあ、確かに」

乃三郎の言葉を受けて、一清が不気味に呟いた。

第二章 ― 五月雨ノ章 ―

1 .

――初夏。

私は、かつてユウシロウが余流能楽の修行をしていたという、ある山間の郷”鬼哭石^{きなし}の郷”を訪れていた。無論ユウシロウに誘われてだ。

と、本当は言いたいところだが、実際は彼が実に三年ぶりに、郷に能の修行に赴くということを、彼自身から聞きつけた私が、ぜひ一緒にと半ば強引に頼み込んだのだ。

勿論、乃三郎の許可は取ってある……その許可が簡単に降りたところこそ、むしろ不可思議なことであり、実際はもつと殊更に警戒心を抱かねばならないことでもあったのだろうけれど。

でも、そんな一抹の懸念さえも忘れ、ユウシロウについてもっと知りたいというその思いは、確かに半分は単なる一エージェントとしての調査の一貫もあつたのだが、それ以上に本当は私自身が、純粹に彼について深く知りたいと思つたからなのだ。

彼は一体何を考え、なんのために現在のような生活を受け入れているのか。

そして豪和は、彼の何にそれほどまでに執着し、またそのように豪和が欲している彼の真の能力とは、一体なんなのか。

正直、真面目な話、私はどうしてもそれについて調べなければならなかった。

郷にある能の修行場を兼ねている古式ゆかしい古寺で、ユウシロウの師匠である余流能楽の宗家、空知検校が出迎えた。

「……これはようこそ。早速参られましたな」

「お世話になります」

一週間ほどの期間に限ってだったが、しばらく空知の家に世話になる私は、深々とお辞儀した。

穏やかな表情を常に携える老師、空知。これといって何も特徴はないが、その独特の佇まいに、私は何か特別な空気を感ずるのだった。

元々伊集院家は代々豪和に仕えてきた家系だったが、この空知校の家も、ある意味では同様に同じ使命を担っているといえよう。ただしそれは、能の伝承といった特殊なことに限ったものだった。

しかし私は、なぜ豪和の家に余流能楽が必要だったのか、案の定詳しいことは何一つ知らなかった。

そしてなぜ、豪和一族の中でただ一人の伝承者であるユウシロウだけが、辛い修行に耐えねばならなかったのかも。

＊

初夏のすがすがしい風を受けて、周囲の山々の緑が輝いて見えた。私は久方ぶりに豪和の家を出た開放感もあり、大きく伸びをした。実際は一週間だけだったが、この際うんと羽を伸ばそうと思ったのだ。自分の置かれている状況や役目を忘れ——ちよつと早めの夏休み、そんな気分もあったかもしれない。

しかしそんな私とは裏腹に、実に久しぶりにこの地に足を踏み入れたユウシロウには、なぜだか、かえって全身に張り詰めた糸のような緊張感が漲^{みなぎ}っていた。

私はユウシロウの家庭教師という名目を利用して、ほとんど軽い気持ちで彼についてきてしまったが、彼は再び自身の身に能のリズムを刻みつけるために、この郷に戻ったのだ。

彼には、？休暇を取る気分で来てください？などと言われてしまったが、そんなユウシロウのことを考えると、なぜだか自分まで気が引き締まるような気がした。

——それにしても、ユウシロウと能楽。異様なほどの、そのあまりの相性のよさに、私は思わず身震いするようだった。

きつと今の彼は、能があつたからこそ築き上げられたものなのかもしれないし、それに能という日本古来の伝統芸能の技芸によって彼の存在自体もまた一番に輝いてくるのだらう……。

その時の私は、単純にそう思っていた。

ある朝私は、早くから起き出して、ユウシロウが毎朝修行を続けているという、能舞台へ足を運んでみた。

澄み切った山間の朝の空気は、また格別だった。

そんな清澄な静けさの元、袴姿のユウシロウが、能の呼吸を自身の身に呼び戻そうと、ひとり稽古に励んでいた。

古い寺の一角を造り替えた木造の能楽堂の能舞台に、ぴんと張り詰めた空気が漂っているのが私にもわかった。

構えの姿勢で舞台のほぼ中央に位置したユウシロウは扇子を手にし、気持ちのよいほど背筋を伸ばし、静かに、目の前の空間に何かを思い描いているようにも感じられた。

宙を見つめるその眸は真剣そのもので、泉のように澄んでいる。彼が摺足で移動すると、空気がゆっくり弧を描いたような気がした。

そのままユウシロウは立ち止まると、力を蓄え、一呼吸のあと、ドン！と檜舞台を踏み鳴らす。その瞬発力の鋭さ、静と動の微妙な呼吸の使い分けは、見事と言ってよい。

だが、俄かに舞台上の場面^{シーン}が変わり、次第にユウシロウの動きは激しさを増していく。

早く、激しく――。

ユウシロウの額から、汗が滴り落ちる。ひたすらに激しさを増していく息遣いに圧され、彼の動きに支配された周囲の空気が鳴り、耳の奥が痛くなる。

私はそんなユウシロウの動きに目を奪われたまま、凍りついたよ

うに動けなくなつた。単なる錯覚だろうか……、しかし、そのままユウシロウの意識は、遠く忘却の彼方へと、次第に立ち入っていくかと思われた。

だが彼は目を閉じると、先程まで激しく上下していた呼吸を鎮め、すつと静かに足を地に付けた。

その途端、次第に周囲がもとの静けさを取り戻す。

私は何が起こつたのかわからず、ただひとりその場に立ち尽くしていた。

ユウシロウは何事もなかったかのように、もとの構えの姿勢に戻っている。

呆然としたままの私は我に返り、次の瞬間感激のあまり、思わず引き込まれたように両の掌を打ち鳴らしていた。その音に初めて我に返つたユウシロウは、舞台の袖でこちらに向かつて律儀に拍手している私を見つけた。

「——おはようございます。佐和子先生」

ひと呼吸の後、ユウシロウは私に挨拶した。

「おはようユウシロウ……素晴らしかったわ!」

私はたつた今感じた感動を、素直に言葉にして伝えた。

ユウシロウは私のその感嘆の言葉に少し恥じらい微笑すると、すぐに元の真顔に戻つた。が、私はその時、彼のその表情の奥に潜む蒼い翳りに気付かなかつた。

「さすがね。やはり本物は違うということかしら?」

重ねて褒めちぎる私に、ユウシロウは微笑みを返しながら無言で首を振つた。

「……なんていうかこう、水面に波紋が広がるような……さざ波が立つような。そんな感じがしたわ」

「確かに舞の呼吸の緩急は、そんなものに似ているかもしれません」
ユウシロウは控えめに私の感想に答える。

能のことに關して話している時、気のせいかユウシロウは、まる

で現^{うつ}を忘れるように、少しだけ饒舌になるような気がした。それだけ彼は能の修行に没頭しているのだろう。

しかし、話が豪和家代々に伝わる余流のことに深く関わってくるようになると、途端に口を噤んでしまい、なぜかその表情はそれまでとは打って変わって厳しくなり、やがて次第に暗い陰に打ち沈んでいくようにみえた。

それともそれは、単なる私の気のせいなのだろうか……。

だが私は、先程のユウシロウの舞を思い出していた。

確かにユウシロウは何事もなかったかのような表情で舞を終えたが、しかし一時の彼のあの舞の激しさは、私にある種の不安感を抱かせた。

そこには、いつのまにか現^{うつ}とはかけ離れた無限の境地へ踏み込んでいくような、二度とこちらの世界には戻っては来れないような、どこかそんな危うげな気配があつた。

私は目の前のユウシロウの沈痛な面持ちを見つめながら、自分の与り知らないところに存在し漂っている、そんな何か底知れぬ不安を感じずにはいらなかった。

*

確かにユウシロウは、豪和では特異な存在だ。

兄弟の中で唯一彼だけが特別扱いされ、家の中だけでも、あんな離れに住まわせられている。

そればかりか、普通なら高校生である年齢だというのに（実質的に行く必要性がないのだろうが）学校へ行く通常の生活も送らず、特務自衛隊で豪和の開発した二足歩行型兵器TA——タクティカル・アーマーのテストパイロットとして日夜、実験と訓練に明け暮れている。

それは勿論、巷からの見かけで捉えた彼の姿だが、それ以上に私は、これまでそんな彼を自分の使命を貫徹させるための、いわゆる

ただの道具としてしか見ていなかったのかもしれない。

少なくとも、彼自身をよく知るまでは……。

しかし、彼もまた豪和の一族にとって道具同然なのではないかと当たり前を感じていた頃から、私のユウシロウに対する見方は180度変わった。

そして彼もまた不幸な身の上なのだと思います、同時に自分がこれまでやろうとしていたことは、ほとんど豪和のしていることと変わらぬことであつたのだと——そんな悔恨の念が、いつしか私の心を包んだ。

勿論、豪和は許せない。しかしユウシロウだけは、何かが違う気がする。彼にはあんな非情なことをする人種とは明らかに隔たりのあるものを感じるのだ。

それどころか現にユウシロウ自体、彼らにずっと利用され続けているではないか。

私は、せめて心だけでもユウシロウの力になりたかった。彼にはきつと彼自身を支える第三者の存在が必要だ。

……それはおそらく彼にとって、三人の兄でも母でも父でもないのかもしれない。

だがしかし、こんな私が、はたして彼という存在の力になることなどできるのだろうか。——豪和に復讐を誓った、この私が。

「ユウシロウ……」

私はふと、いつもと少しだけ違う声音でユウシロウに近づき、語りかけた。

「私に力になれることがあったら、遠慮せず、なんでも言ってちょうだい。私、いつでもあなたのそばにいるから」

そう囁くと私はユウシロウの肩をそつと引き寄せ、抱いた。

……そう、まるで小さな子供に優しく接する時のように。

しかし私は、いま自分が何気なくしている行為の意味に気付き、思わずはっとした。そして瞬間的に膠着するユウシロウの身体を咄

嗟に離していた。

？……どうしたの、一体？

私は自分自身でも半ば戸惑っていた。冷静に考えれば、ユウシロウは私と九つも離れた一七歳の少年である。

しかし私は、いつしかユウシロウを心のどこかで？一人の男性？として意識している自分がいることに気付いた。確かにかつての私は、少なからず汚い言葉を使えば、そうやって女の武器を使うことで、豪和の四男である彼を陥れようとしていたのだ。

でも、違う。

この感情は、そんな不毛なものとはまったく無縁なものだ。

この大切な、たったひとつの切ない気持ちは……。

でも私は、そんな自分の思いを振り払った。

？ばか！……何やってるの。私には、誠司さんというひとがいるじゃない。それに一体なんのために、私はこの家にやってきたと思っているの。

豪和に文字通り殺された父と母と兄の無念を忘れたわけではないでしょう？

だけど、だけど――？

私の心で、二つの思いが同時に叫ぶ。身体がまっぴたつに引き裂かれそうだった。

きつとユウシロウは、こんな私の中の苦しい思いなんて、何ひとつ知らないでいるのだろう。あの澄んだ眸に映っているのは、あくまで一人の家庭教師としての私だけなのだ。

しかし勘の強いユウシロウは、なにがしか思い悩んでいる私に気付いたのかどうか、さっき私が告げた言葉の真意に対して、優しく微笑んで言った。

「――先生、ありがとう。きつと僕は、先生のことをずっと忘れないでしょう」

？なにそれ。まるで今生の別れの言葉みたいじゃない……？

私はそう思いながら、悲痛な思いでユウシロウの澄んだ鳶色の瞳

を見つめた。なんの一点の曇りもない、その綺麗な瞳の色を。

一体、彼の華奢な身体のどこに、凜としたこれほどの力が宿っているのだろうか。そう思わずにはいられない何かが、常に彼にはあった。

脆くて壊れそうな、まるで薄くて透明なクリスタルグラスのような危うさに縁取られている彼の印象と、それは不思議に同居していた。

できることなら私は、そんな彼の純粋な何かを守りたい。

時に激しく、時に儚く、硝子のように繊細なその心を守るために――彼のために、できることなら私は自分自身の存在を活かしたい……。

絶望的な思いのなかで、それでも私は、心からそう思っていた。

2 .

ある月の輝く晩、私は空知検校の屋敷の空知の部屋を訪れていた。ユウシロウの能の師匠である空知。

その古く鄙びた邸宅は、人里はなれた山間の、さらに奥深く人目を避けるかのように、ひっそりと建っていた。しかし、野手あふれる、その奥ゆかしく静かな日本家屋の佇まいは、この余流能樂宗家の穏やかな品格にこれ以上ないほど相応しく思われた。

「……いいお宅ですね。なんだかとても落ち着きます」

書院造りの和室に通された私は、それとなく辺りを見回しながら、あらためて言った。

「……お褒めに預かるほどの所ではありませぬが」

穏やかに微笑み、私に茶を勧める空知。

「――して、今宵参られたのは、何かお尋ねになりたいことがある由でしょうか」

いきなり確信を突かれ、私は思わずどきりとした。

が、すぐに真面目な顔で頷き、単刀直入に切り出した。

「お尋ねしたいのは、ほかでもない、ユウシロウのことなのですが」
その名に、空知の顔に心なしか哀しみの色が微かに浮かんだような気がした。

しかし、すぐに平静に戻って空知は口を開いた。

「ユウシロウ殿は豪和宗家に古くから伝わる余流能楽のただひとりの伝承者。それは既にご存知のはず——」

「——ええ。そしてその豪和でただひとり、いえ、民間人でただ一人、大尉と呼ばれる二足歩行型兵器ＴＡのテストパイロット……」

それから私はひと呼吸おき、一気にまくしたてた。自分でも信じられないような激しさで。

「私には納得できません。いいえ、きつと誰にだって！ いったい豪和は、彼に何をさせようとしているのか。私はただそれが知りたいのです。……確かに私は部外者かもしれませんが。しかし、はたしてそうなのでしょうか？ 私の家は代々、地方豪族であつた豪和の家に仕えてきました。でも、豪和はそんな私たちを見捨てた——なんのためらいもなしに。確かにそれは、いまや一巨大企業と化し、一地方都市をも、いえ、この日本全体をも揺り動かす力を持つ豪和にとって、小さな駒を捨てるような取るに足らないことだったかもしれません。でも私は許せない……許せないのです！ そんな人を人とも思わぬ、彼らのやり方が——」

私は、決してこんなことを言うために空知の元を訪れたつもりではなかった。

しかし一度吐き出された激情は、とどまるところを知らず、堰を切って溢れ出た。

「伊集院殿……」

しかし空知は戸惑うどころか、そんな私を変わらぬ慈悲と穏やかさに満ちた眼差しで包んだ。

「——余流という異端の能を伝える使命とはいえ、この空知の家も同じような役割を担って参りました」

私ははつとして空知を見た。その仏像のように静かな表情に、すべてを受け入れようとする無常の境地を、私は垣間見た気がした。「しかし、すべてが真実であるということが言えるのかどうか、この老人には最早確かめるべくもありませぬ。……だが、貴方には。貴方がたには——」

そう言つて空知は立ち上がり、障子を開けた。

障子の隙間から、俄かに心地よい夜気が流れ込んでくる。廊下を隔てた日本庭園には、蒼白い月の光が射し込んでいた。

「空知検校、あなたはなぜ、ユウシロウに余流能楽を教えたのですか——なぜ彼は、甘んじて、すべてを受け入れようとしているのでしょうか？」

私は、凝と立ち尽くす空知の背中に問うた。

「——唄」

「カイ？」

「さよう。すべては、ユウシロウ殿がその血を受け継ぐ者であったがため——」

その言葉に、空知の背中は、殊更に深く打ち沈んでいるように見えた。

私は一瞬言葉をなくした。が、すぐに我に返って、弾かれるように言つた。

「お願いです、教えてください！何もかもを……」

空知はゆっくりと振り返つた。

*

「先生、こつちです」

初夏の陽射しが降り注ぐ山道を、私はユウシロウに促されて歩いた。

きらきらと輝く木漏れ日がまぶしくて、私はかざした手のひらで額に滲む汗を拭つた。しかしユウシロウは、ひよいひよいと先に立

って、ほとんど道なき道を身軽に進んでゆく。

慣れない山道に、さすがに堪えてはいたが、自分が言い出したことでもあり、私は気を取り直してユウシロウに続いた。

しばらくすると、溪流の流れる静かな水音が聞こえてくる。

「疲れたでしょう？」

ユウシロウは肩で息をしている私を気遣ってくれた。

が、やはりその表情には、気づかなければ、まったくそうとはわからないが、相変わらず深い蔭が差しているのを、私は見逃さなかった。

「ごめんなさい。無理を言って」

しかしユウシロウは、無言で首を振ると、目の前に広がる溪流を見渡した。

石舞台——この山中の奥深く、僅かだが開けた場所に、それはあった。

一体誰が作ったのか、それさえも定かでなく、まるで永い歳月の間ずっとそこにあつたかのように、溪流に突き出たその岩棚を利用し、穿たれた石の能舞台は、ひっそりとそこに佇んでいた。

深い溪流に突き出した形で残るその舞台には屋根がなく、その四方に僅かばかり残されている柱の根が、無言で何かを物語っているように思われた。

そう、まるでそれは、いまのユウシロウのように……。

「ここが？」

「ええ。余流能楽の伝承者が、代々執り行なう神事の場合」

ユウシロウは、実際にまだここで舞ったことはないそうだが、彼の硬い表情に、私は先日の空知の言葉を思い出していた。

『ユウシロウ殿が余流能楽を習得なされたのは、嵬として神事を受け継ぐため——いえ、真にそれは、餓沙羅鬼を呼び出すため！』

餓沙羅鬼——。

それは人知を超えた、決して人が触れてはならぬもの。そしてそれを招ぐための餓沙羅の舞は、禁忌の舞。

『人知を超えた？ それは一体……』

空知の言葉に私は驚愕した。なんというものを、豪和は代々伝えてきたのだろう。

そして、それを受け継ぐ嵬とは……。

本当にその血が、ユウシロウの身体の中に流れているのだろうか。いや、だとしたら、豪和が彼に執着するのも、解らないではないかもしれない。人の力を超えた力を持つ、嵬。

でも、それと二足歩行型兵器とは、やはりどこかで何かが関係しているのだろうか？（これは？ 私たち？ の潜入調査の結果、判明したことだが）特自のT Aパイロットの中でも、ずば抜けて日々そのスキルを上げているというユウシロウ。

そこまでは、知っているのか知らぬのか、さしもの空知も何も話してはくれなかった。

私はあらためて、ユウシロウの横顔を見つめた。その顔は、なおも暗然とした蔭に包まれていた。

……やはり彼は自分が何者であるかを知っているのだろうか？

いままでずっと自分自身について何も語ろうとしなかったユウシロウを前に、私は思った。

「ユウシロウ、ここであなただは何をしようとしているの？」

ふと問いかけた私に、ユウシロウはどこか不安げな眼差しで、沈黙の言葉を投げかけた。そして言った。

「わからない。でも……」

「でも？」

「いずれ僕はここで舞わなければならない気がする」

そう呟いたユウシロウは、再び石舞台に視線を落とした。

その背中に、見てはならないものを見た気がして、私はずきりと胸が痛むのを感じた。

——ユウシロウと唄。そして、餓沙羅鬼。

それに豪和が開発に成功した二足歩行型兵器。

さらにそのテストパイロットである、ユウシロウ。

私はどうしても、それらを繋ぎ絡まる糸を解きほぐし、謎を解き明かしたかった。その見えない循環を知ることこそが、豪和を知ることであり、また皮肉にもユウシロウ自身を知ることでもあった。それを知ること、なぜだか私は、ユウシロウを救うことができようない気がしていたのだ。そう、たとえこんな私でも……。

3 .

ユウシロウとともに豪和邸に戻ったあとも、豪和に伝えられている餓沙羅鬼の伝承について、私は密かに調べた。

そしてある日ついに、豪和の家々に代々受け継がれている？骨唄？^{くがい}というものの存在に行き着いた。

？骨唄？——それは豪和の一族にとって、一つの強大な力の象徴でもあった。

しかし餓沙羅鬼同様、それにまつわる伝承は、まさに形骸的な神話そのものでしかなく、決して現実的な事実として受け入れられるようなものではなかった。

だがしかし、それからしばらくして、私の婚約者でもある鷹水が密かに送ってきた情報の中で、豪和の二足歩行型兵器の開発になくてはならないものであった？人工筋肉？なるものの存在が浮かび上がってきた。

その彼らが密かに？マイル1？と呼んでいる人工筋肉は、未知の構造を持つ金属複合体で出来ていた。そしてそれは、何らかの古い遺物から取り出されたものだというのが、この豪和の、それもごく限られたものしか知り得ない、いわゆるトップシークレットだった。それをなぜ、（豪和に潜伏していた

私ではなく、真つ先に鷹水が知ることができたのか。

無論、鷹水の所属する国際ジャーナリズム団体の情報網の底力を疑うわけではないが。

その点において、少し疑問に思う部分があったわけではないが、それよりも私は、その情報自体に、何か引つかかるものを感じずにはいらなかった。

およそ千三百年続くといわれる豪和一族の淵源である唄。

それは傀儡子の民といわれる、鬼神を呼び出すことのできる能力を持つ一種の軍事部族だったらしい。

彼らは骨唄という甲冑武具のようなものを操り、餓沙羅鬼を招く神事を執り行なう。

しかし、いつしか彼らが純然たる神事のためではなく、自らの野望のためにその骨唄を使い、殺戮のみを繰り返した結果、唄の一族はついに餓沙羅鬼の怒りに触れ、そして骨唄は永遠に封印されてしまった……。

だがしかし、唄の属していたと思われる北九州の古代王朝、筑紫王朝は、実在していた王朝だった。

それが何を意味するのは、いまはまだ定かではなかったが、私にはこれらの伝承が、単なる神話をも超えた神話に思えてならなかった。

空知検校が守り、現在に伝えている余流能楽。

それはおそらく、唄が唄であるための証。その神事の舞を守り、代々伝えていくために存在しているものだった。

しかしなぜ、その伝承者であるユウシロウが、豪和の開発した二足歩行型兵器TAの操縦士として選ばれたのか。やはりそこには何か深い繋がりがあるのだろうか。

骨唄とひとつになり、餓沙羅鬼の力に耐えうる強大な能力を発揮したという唄。

もし仮に真実、ユウシロウにその唄の血が流れているのだとした

ら……。

豪和の開発した人工筋肉とは、一体なんなのだ？

私は次第に、自分が決して触れてはならないものの中に、少しずつ足を踏み入れているような気がしていた。

でも、もう戻れない。

そう。私は彼を、ユウシロウを放つてはおけない。

たとえそれによって、私自身の身に危険が迫るのだとしても……。

もう戻れない。もう……。

*

「それでは、二足歩行型兵器の駆動系に用いられている人工筋肉は、そのクガイから取り出し、自然培養させたものだというのは、真実なのですね？」

鷹水はデスクから身を乗り出し、報告してきたあるエージェントに訊いた。

「ええ。豪和の情報バンクに秘密裏にアクセスさせた情報局員の報告データが確かであるならば」

鷹水は何かを思い巡らすように沈黙した。先頃、豪和に潜入した私、佐和子から送られてきた報告書の内容の数々が、鷹水の脳裏をよぎった。

「そのクガイについてもですが、豪和が行っている諸々の兵器開発の実験については、まだ明らかになっていないことが多く残されています。豪和にとって機密事項であるならば、当然かもしれませんが」

確かにそれ以前に、それほど簡単に豪和の情報バンクにアクセスできると思えないのだが……それでも、その言葉を聞きながら、鷹水は思った。

？それが真実であるならば、豪和に伝えられている伝承は、現在

に亘って生きたものであるということがいえるのか？しかし……？

豪和が特自と共同で極秘裏に行っている二足歩行型兵器の実験開発。それになくはないものであるクガイ……そして。

？なくてはならないもの……！？？

鷹水の脳裏を豪和の四男で、同時に二足歩行型兵器のテストパイロットとして、特自に委託配属され、開発の中心に据えられているユウシロウの存在がよぎり、いつしかその関心を占めていった。

そう——いま、佐和子が豪和邸宅で家庭教師として付き添っているユウシロウ。

彼についても、なぜ彼が豪和の実験において、なくてはならないものであったのか、多くの疑問が残されていたが、鷹水は次第に霞が晴れるように、すべての謎が一気に解き明かされていくような気がした。

？もし、豪和にまつわる骨嵬と餓沙羅鬼の伝承が真実であるならば……「嵬」であるユウシロウと、二足歩行型兵器・タクティカルアーマーとの繋がりも、自ずと見えてくるはず……？

そこまで考え、鷹水は全身に何か冷たいものが走るのを覚えた。

？豪和は一体、それを使って何を企んでいるのか……？？

そう、実の息子——肉親である、ユウシロウを使って。

そうまでして、豪和の総代である豪和乃三郎が目指そうとしているものとは。

第三章 ―夕顔ノ章―

1 .

――夏も盛りを迎え、私とユウシロウは、いつもの変わらぬ生活に戻っていた。

ユウシロウの成績は一步一步確実に上がっていった。しかしそれも、普段の真面目な彼の学習態度からすれば、当然の結果だったといえるかもしれない。

優秀な生徒を持った教師として、私は単純に満足だった。

だがしかし、それは既に日々繰り返される、表面上を上滑りしていく仮初めの出来事でしかなかった。

そう――そうしている間にも、鷹水からもたらされ、彼が探っていた情報の中から明らかになった真実が、私の心をずっと占めていたのだ。

？二足歩行型兵器――タクティカル・アーマー通称TAの駆動系に使用されている人工筋肉マイル1は、豪和に古来より伝えられている遺物である骨鬼の一部から取り出し、自然培養させたものだった？
もしそれが真実であるならば、骨鬼とユウシロウを繋ぐひと筋の糸は、より濃く太いものとなる。

豪和が、総代である豪和乃三郎を始めとする豪和一族が、ユウシロウを使って推し進めている計画の先にあるものは、やはり餓沙羅鬼――！

しかしそんなことが、そんな大それたことが本当に実現可能であるのだろうか？私は思いながら、得体の知れぬ冷たい寒気が全身を走るのを感じていた。

？けれどユウシロウを、彼をこのままにはしておけない……鬼の末裔であつたがために、どす黒く計り知れない野望の手段として扱われ、その大きな渦のなかに今まさに巻き込まれようとしている彼を

――？

私の中に、いつしか確かに、新たな使命感のようなものが芽生えようとしていた。

だが既にそんな己自身でさえ、激しくうねり、すべてを巻き込み押し流していく濁流のさなかに飲み込まれようとしていくことをさえ、その時の私はまだ知らなかった。

*

ある日私の胸に、ひとつの考えが浮かび上がった。

……それは最も簡単で、最も明解な回答。

出口の見えない迷路のような問いの中で、ずっとさまよっていた私に、それはある一つの行動の実行を囁いた。

だがしかしそれは、確かに大きなリスクを伴う危険な賭けでもあった。

？ユウシロウを、この豪和の家から連れ出すこと――？

しかし、どうやってそれを決行する？

それに第一、当のユウシロウ本人は、そのことを承諾するだろうか。彼だつてきつと、逃れられるものなら、豪和から逃れる術をこれまで何度か考えたはずだ。

でもユウシロウは逃れようとはしなかった。単に心理的な操作を施されていたからなのだろうか。当然それもあるだろうが、だとしても彼が豪和の仕打ちを、これまでずっと一人静かに受け入れ続けてきたのは、一体なぜなのか。

嵬として生まれたがために、伝説の武具である骨嵬を用いたTAの開発に参加、そして余流能楽を受け継ぎ、まるでそれが当然のことであるかのように、当たり前のようにに豪和に貢献してきたユウシロウ。

そしていつの日か彼は、あの石舞台で……。

私の脳裏に、空知検校から聞かされた餓沙羅鬼の神事について明

かされた真実が、今また再び浮かび上がった。

ユウシロウと同じ鬼の血を受け継いでいた空知の息子もまた、石舞台に立ち、餓沙羅鬼の神事を行った。が、彼は神事を最後まで執り行うことができず、ついには死亡したというのだ。

もう十六年も前の出来事である。

豪和のやろうとしていることは、人ひとりの命でさえも顧みようとしない、冷酷無比なものなのだ。目的のためならば、手段を選ばない……。

あらためて私の胸に忘れえぬ過去が去来した。

長年澱のように降り積もってきた怒りが再び込み上げてくるのを抑えられなかった。間接的にでも家族を殺され、たった独りの身の上になり、ただ復讐の念に駆られるだけの鬼と化した私。

だが今は決して、そんな自分ひとりの執念から来る思いではない。今の私は、自分以外の誰かのために——そう、ユウシロウのため。今、豪和への怒りと糾弾の念は、得体の知れない恐怖を伴い、いまや私ひとりの胸中に押しとどめておけない程のものとなっていた。？やはりこんなところにユウシロウを置いてはおけない！？

私はひとり胸の内で固く決心した。

*

そんな折も折、私、伊集院佐和子のかつての米ハーバード大の恩師から、近々東京で開かれるという若者向けのセミナー——米大学教授の講演会の誘いが入った。

一応、首席卒業という経歴のある私に、オブザーバーとして出席して欲しいというのだ。

急速に拡大してきた国際社会で、日本の占める割合は、半世紀前から非常に大きなものとなってきたのだが、あらためて留学など、次代を担う日本の若者を大学に誘致しようという試みからくる講演会だった。

奇しくも特自のエリート中隊に属しているユウシロウにとっては、特別IQが高く優秀であるという意味においても、それらの事柄は当面の彼には必要のないものとはいえ、ひとつの実体験として、よい機会であることは事実であった。

しかしはたして、豪和の家に半ば拘束されているユウシロウに、それらの事柄が許されることなのだろうか。

だが同時に、豪和の四男であるユウシロウとしても、表面上ではそれなりの扱いが必要であり、それはただ単に特自の出自として委託配属される以前に、表向き重要なことでもあったかもしれない。

特自での実験が一段落したこともあり、乃三郎は、私とユウシロウの東京行きを許可した。無論、数人のお目付け役を配しての条件付きではあったが。

それにしても、約一ヶ月前の鬼哭石の郷行きにしても今回にしても、よく乃三郎の許可が得られたものだと思う。

正直言つて、かつて伊集院家が豪和に仕えていた家柄とはいえ、そして乃三郎と父が同僚であったとはいえ、厳密には豪和の部外者である私をユウシロウに近づけすぎなのでは？

もし自分がTA開発や餓沙羅鬼の神事について実行する者ならば、ここまでその中核をなす人物であるユウシロウを自由にしたりしない。

それでも私は、乃三郎の”人の父”としての側面に、ある意味で期待していたのかもしれない。

たとえばそれが豪和の総代であったとしても？

いや、それこそが本来の人の心というものだ。

誰かを恨み、疑うばかりではない。たとえば裏切られようと、純粹に人を信じることも、時に必要なのではないか。

特に豪和に関しての、自分自身の心の変化に、私は自分でも驚いていた。やはりそれは、ユウシロウと出会ったからなのだろうか。

だからこそ私は、成功させなければならぬ。このただ一度きりかもしれないチャンスを見逃してはならない。

ユウシロウと東京の講演会に出席した折、私はとうとうそれを実行に移した。

確かに遠方に出掛けた際であればあるほど、それを決行するには都合がよかった。

もしかしたら、それは乃三郎の私と彼へのせめてもの恩赦？それとも、罨――。

ユウシロウと私には、数名の黒服のガードマンたちが付き添っていた。高層ビル群が建ち並ぶ都会の一角で行われた講演会の前後も、その最中も、彼らは片時も私たちから目を離すことはなかった。

いや、むしろ普段よりその監視の目は特別、厳しかったといえるのだが、既にそれは承知の上だ。

「ユウシロウ、走って！」

それは講演会も終わり、私が恩師にユウシロウを紹介し終え、豪和の車に戻るうかという矢先の一瞬の出来事だった。

突然、私はユウシロウの手を取って走り出した。

「待て！」

だが時既に遅し、私たちは都会の雑踏の中に紛れ込んでいた。当然黒服の男たちも二人を追いかけてくる。その光景は、さながらサスペンス映画の撮影風景を見るようでもあった。

長い髪が風に流れていく。必死に走っている最中も、私はしっかりとユウシロウの手を握っていた。

この手を決して離してはいけない。たとえ何が起ころうとも。そんな思いに、思わずユウシロウの手を握った右手にぎゅっと力がこもる。

戸惑いながら、ユウシロウは私と一緒に、休日の人いきを必死に駆けぬけた。二人はひたすら、自分たちを縛る運命から逃れようとした。

やっとガードマンたちを巻いたことに気づき、私たちは弾む呼吸を整えながら、立ち止まった。

「——なんだか、駆け落ちみたいね……！」

私はユウシロウに明るくそう笑いかけたが、その笑えるはずもない冗句に、結局二人して押し黙り俯いてしまった。

「……先生、なぜこんなことを？」

そうユウシロウに尋ねられても、私はその問いに明確に答えることができなかった。ユウシロウ本人には、今回の？計画？について、特に何も打ち明けてはいなかったのだ。

しかし本当は、事前にすべて話すべきだったのだろうか。

確かに豪和のやり方は納得できない。しかしそれはユウシロウ自身も、既に承知していることだったかもしれない。

では、すべてを承知していて彼は……？

それに豪和から、こんなに簡単に逃げられるとも正直思っていなかった。そのうち逃走した二人の元へ、追っ手の魔手が伸びてくることは容易に予想できた。

それなのに私は、こうしてユウシロウの手を強引に引っ張ってきてしまった。

それが本当によいことだったのかどうかも解らぬまま。

それは、なぜ？……それは、それは……。

二人は途方に暮れたまま、都会の街を歩いた。

こんな雑踏の人いきれの中では、ユウシロウの着ている折り目正しい特自の制服は、人目に珍しく映るらしく、日曜の昼下がりに、ただでさえ普通の若者たちの間にあって特に目についた。

私たちは我知らず、いつしか人気のない場所を選んで歩くようになった。

今ごろ豪和では、大変な騒ぎになっていることだろう。そんなことを思いながら、二人は都電に乗り、人知れず湾岸へと向かった。

「……ユウシロウ、疲れた？」

無言で海を見ているユウシロウに、私は声をかけた。

「大丈夫……佐和子先生は？」

慣れない都会をさまよい、疲れているだろうに、気丈にも僅かに

微笑み、そう言って自分より私を氣遣うユウシロウの顔を見た途端、私は今まで張り詰めていた緊張が突然、解かれていくのを感じた。そして次の瞬間、押しとどめていた感情が一気にあふれ出した。私は思わずユウシロウを自分の腕の中にきつく抱きしめていた。その時既に私の教師という肩書きは、脆くもどこかに崩れ去っていた。

「先……生……？」

ユウシロウは、明らかに戸惑っている。

しかし私はもう、こんな風に自分の感情を抑えつけていることが苦しくてたまらなかった。

教師と生徒だからではない。豪和と伊集院家だからではない。

それらの軛とは完全に切り離されたところに、もはやこの心はあった。

たとえ彼がどのような境遇にあらうとしても、私のこの気持ちは変わらなかった。いや、かえって彼の境遇を知ったことで、それは私のなかで確実なものとなっていたのだ。

”……そう、私はユウシロウが——？”

とめどなく心にリピートする言葉を、私はますますにでも、彼に伝えなかった。でも想いとは裏腹に、理性はすぐに私をがんじがらめにする。

「ユウシロウ……私……私……」

そう呟きながら、いつのまにか私は、彼の前で大粒の涙を零している自分に気づいた。止めようと思っても、まるでさざ波のように、胸の奥底から込み上げてくる。

いつのまにか、空には黒い雨雲が立ち込めていた。私たちは俄かに降り出した大粒のシャワーの中に取り残された。

ユウシロウは突然の私の涙に戸惑いながらも、そんな今にも崩れそうな私を支えようとするかのように、激しい夕立の中、今度は逆に私の手を取って歩き出した。

……どこへ？

私たちは、ずぶ濡れのまま、雨宿りできる場所を探した。

とりあえず入った店舗の片隅。雨粒の当たらない屋根の下で、それでも私の頬は涙に濡れたまま、二人の戸惑いはお互いの距離を僅かに計りかねていた。

そうしているうちに、雨脚は小降りになつてきたようだ。

「とにかく、このままでは風邪を引く」

そう言つて再び雨の中を、のろのろと歩き出すユウシロウと私。しっかりと私の手を引く彼の中に、私はこれまで一度も垣間見たことのなかった、頼もしい大人の男性の面影を見た気がした。

なのに今の私は、まるでさながら駄々をこねて泣きじゃくっている、小さな少女のようだ。

そろそろ日も暮れようというのに、このままでは二人とも身が持たない。

結局二人は、手持ちの現金で、小さな安ホテルのワンルームに身を落ち着けた。

？……こんなのは、嫌だ？

とうとう自分の気持ちも碌に伝えられぬまま、落ち着くところに落ち着いてしまった私は、それでも行き場のないもどかしさの中、そう思った。

しかし、そんな私の気持ちを他所に、ユウシロウがぼそりと言つた。

「——とにかく、身体を温めよう」

ユウシロウに促されて、私はシャワールームに押し込められた。

雨に濡れて冷えた身体を温める湯の感触は、とても心地よかったけれど、私は動揺を隠しきれない。

でも、同じように冷えてしまっているユウシロウのために、私はガウンを羽織り早めにシャワールームから出た。第一、大の大人の女がみつともない？

ユウシロウは怒つたような顔つきで、黙つたまま、私と入れ違い

に扉の向こうへと消えた。

……長い時間が経った。（少なくとも、私にはそう感じられた）今日のユウシロウは、とても大人びて見える。そのことが、かえって私をどことなく不安にさせた。

でも、濡れた髪の彼を見るのは、これが初めてだった。しかし、それを言ったら私だって同じだ。

二人はいま——教師と生徒ではなく——等身大のまま裸のまま、ここにいた。

こんなことをしてられる時間は、現実的に考えれば、もうあまり残されてはいなかった。

つかのまの邂逅。つかのまの休息^{やすらい}。

だが二人は逃げなければならぬ。どこか豪和の手の届かない処へ……。

そう考えると、いつしか私はユウシロウにおずおずと声をかけていた。

「……ごめんなさい」

しかし、ユウシロウはまだ黙っている。

「……私……あなたをどこか遠くへ逃がしたかった。どこか豪和の……あなたの運命の届かぬ場所へ。そのためなら私は、きつとどんなことも怖くない。そう、たとえ殺されても……」

その絞り出すような声を聞いて、ユウシロウははっとして私を見た。

その驚いた顔を見つめながら、思い詰めたような声で、私はとうとう自身の胸の内を彼に告げた。

「ユウシロウ……あなたが好き」

言葉にしてしまうと、意外と簡単だった。しかし、一体どうしたというんだろう。

それでもこんな風に、ただ真っ直ぐな気持ちのまま言えたのは、

きつと彼に対する強い想いがそうさせたのかもしれない。

けれど困惑し戸惑うばかりか、ユウシロウは次の瞬間、まるで慰めてくれるかのように、私を優しく抱きしめてくれた。

私は驚いた。彼の取った意外な行動は、私の胸の鼓動を殊更に高鳴らせた。

互いの皮膚のぬくもりが二人を包む。

まるで女の子のように線の細いユウシロウの肩が、急に広くしつかりとしたものに感じられる。彼の胸は少年らしい陽だまりの匂いがした。

「ユウシロウ、こんな私を受け入れてくれるの？」

私はつかのまの時の中で、ユウシロウに尋ねた。

なぜ私が彼の家庭教師として豪和にやってきたのかも、自分自身の身の上についても、すべてをユウシロウに話すと急に心が楽になった。（ただひとつの秘密を除いては……）

ユウシロウは、ほとんどすべての鎧を脱ぎ去った、そんな私の言葉に静かに答えた。

「……言っただろ。佐和子先生は、たったひとりの僕の大切な女性^{ひと}だっただって」

「え??」

以前、彼の口から聞いたものとは、微妙に違うニュアンスのその言葉を聞いて、私は信じられない気持ちに包まれていた。

ユウシロウは、私を教師としてではなく、ひとりの女性として見てくれているのだろうか？

豪和に潜入した^{スパイ}工作員としての私。

復讐の鬼と化した、不毛なこれまでの私。そのどの姿さえも超えて……。

しかし私はふと、彼の肩先が僅かに震えているのを感じた。

ユウシロウはずっと、不安定に揺れていた私を支えているのに精一杯だったのだ。それでも今彼は、変わらず私に優しくしてくれている。

私はそんなユウシロウのことが愛しくてたまらなくなった。そして初めて少しだけ積極的になって、ひと呼吸のあと、思い切って彼の耳元に囁いた。

「……ユウシロウ。キスしてもいい？」

ふと思わず見開くユウシロウの瞳。

ふいに出合った視線と視線が微熱に浮かされ、絡み合う。

頬を高潮させ、でも恥じらうことを忘れ、私の視線に捕らえられた彼が夢のように頷くか頷かないか、その刹那を合図に、私は目を閉じ、震える彼の唇に唇を近づけていった。

その瞬間、時間^{とき}が止まった。

そつと重なる二つの唇……重なる二つの鼓動。

触れ合ったその刹那、震えるユウシロウの躊躇^{ちゅうちう}いを、もどかしげに奪う。

やっぱり彼の唇は、思ったとおり柔らかだった。まるでそれは、

天使の唇みたいに。

「……ユウシロウ、好きよ。好き……」

逸る鼓動のなか、私は彼の耳元にそつと切ない吐息を漏らした。それにつられて、ユウシロウもまた次第に、精神のたがを外していく。少しずつ、ためらいがちに……。

私のバスローブが肌蹴け、しつとりと濡れた髪がユウシロウにしな垂れ零れていく。

こんな幸福な気持ちは、初めてだった。きっと彼が初めてだ。

いままでずつと、見えない鎧に覆われていた私の心を解いたのは、それはきつと、いままで出会った誰でもなかったのだ。

？ユウシロウ……？

私はいま、彼だけを感じていた。

彼のぬくもり、彼の息遣い、彼の鼓動。

そのすべてがいま、私の胸の中にある。

たとえば彼がどのような運命を背負っていようとも、たとえば、どんな刻^{とき}を、その記憶の中に宿していようとも……。

二人は次第にひとつになっっていく。

？私はずっとあなたを探していたのね？

薄れゆく意識の中で、私は思った。その思いは、まるで遠く意識の淵へ向かって、逆行していく時の流れのように、遙か彼方からやってくるもののように感じられた。

それはなぜ……？

？ああ……そうか？

私はユウシロウが？唄？であることを思い出した。まるでそのことが当たり前のことであるように。彼に触れている瞬間、彼のその血に流れている唄の記憶が、私をこんなところまで連れてきたのかもしれない。

だからこんなにも自然で、どこか懐かしい、そんな安らかな気持ちになれるのかもしれない。私は朦朧とする意識の中で、そう思った。

？……？？

心地よい温もりの中、突然、私は何かの違和感を感じて、我に返った。

「……どうしたの？」

ユウシロウは少しためらいがちに言った。

「……ごめん……でも、何だか信じられない」

「え？」

「先生と……こんな風になれるなんて」

ユウシロウは、さすがに少しだけ興奮気味のようだった。少しだけ？……そんなわけない。

「初めてだから……でも、きっと大丈夫。ありがとう。嬉しかった……先生がそばにいてくれて」

不思議に恥じらいながら、ぽつぽつと繋ぐユウシロウの言葉に、私は普通の一七歳の少年の面影を感じて、思わず緊張している彼の身体をぎゅっと抱きしめた。

「私も……すごく嬉しい」
そして再びくちづけ——。
今度は、深く……。

「せ……ん、せい……」

「……ダメ」

「……サワコ……」

観念したように目を閉じたユウシロウが、私の名を呼ぶ。

いつしか我を忘れ、きつく舌に絡みつく舌——息ができない。でも、それでよかったのかもしれない。呼吸することさえ忘れなければ、二人は一つになれなかったから。

次第に二人は、激しく揺れては打ちつける荒波に飲まれていく。私という熱く切ない感情が堰を切ってあふれ出す。

硬く目を閉じながら、その奔流を抵抗することなく、受け入れ翻弄され続けるユウシロウの額に、まるで真珠のような大粒の汗が浮かんでいる。しなだれかかる彼の髪をかきあげ、ただ激情のままに掻き抱く。

苦しげに切なげに、私に凭れかかり、身悶えするその苦悶の表情が、殊更に彼への愛しさをかき立てる。でもそれは、決してTAという鉄の塊に拘束されている時の、それではない。今、彼は一人じゃない。そう、私たちは。その熱も苦しみも、皆私に分けて。二人で行きましょう——ユウシロウ。もう、あなたを一人になんかしな
い。

? ……ハア……はあ……ハア……?

きれいだった。いままで見たどんな彼より、いちばん、ユウシロウがきれいに見えた。

それはまるで、砕けた硝子の欠片が、光の飛沫を散りばめながら、闇のなかに落ちていくような……そんな刹那の輝き。

私はいま、そんな彼を独占している。そんな言いようのない満足

感と幸福感のさなか、私たちは、ただその快感の先にあるものを求めた。

溶け合う肌と肌。重なり合う過去と未来。

——はやく、はやく。

私はこれでも、上手に丁寧にユウシロウを導いたつもりだった。でも、彼とひとつになれる嬉しさと感激のあまり、少しだけ強引すぎたかもしれない。

「——ユウシロウ？」

奔流が過ぎ去った後、私はユウシロウの耳元に囁いた。

その行き着いた果てで、いつのまにか彼は眠りに落ちていく。

私は、たった今ようやく手に入れたばかりの、そんな愛しい年下の恋人の柔らかな髪をそつと撫でた。

？このままずっとこうしていたい？

しばらくユウシロウの髪に触れ、気まぐれに弄びながら、私はただいたずらに過ぎていく時間を恨んだ。

……ユウシロウ。あなたが好き——。

私は何度も何度も、夢の中にいる彼に囁いた。

*

「起きた？」

眩しい光に、私は思わず目を瞑った。そして再び薄っすらと目を開けると、その光の中でユウシロウが微笑んでいた。

？——ドキン！？

瞬間、私の胸の鼓動が高鳴った。目の前のユウシロウが、ひどく大人びて見えたからだ。

私はそつと上半身を起こして、柄にもなく恥じらい、胸元にシーツを引き寄せた。

「——おはよう」

「おはよう……」

私は少しドギマギしながら答えた。

？とうとう朝を迎えてしまった……？

なんだか不思議だった。昨夜はあんなに夢中だったのに、いまこうして朝の光の中に二人でいると、妙なもどかしさが胸の中で戸惑っている。

何だか、ユウシロウの前でこうしているのが、やけに恥ずかしい……。

というより、むしろ自分の方が未成年の彼に対して、なんていうことをしてしまったのだろうという後悔の念が襲いきてもよいはずなのに。その灼けるような罪悪感、不思議に身体の奥で息を潜めていた。

それよりも私は、昨夜も感じたように、ユウシロウが自分よりずっと年上のような、奇妙な感覚に襲われていた。

「よく眠れた？」

「……うん」

ユウシロウは、微笑んで腰掛けていたベッドから起き上がった。しかし――。

「……どうする、これから」

私に背を向け、窓辺へと向かいながら、彼は自分自身に問いかけるように呟いた。

そう。先延ばしにしたくてもできない現実が、私たちの目の前に立ちはだかっていた。確かにこんな所でぐずぐずしているわけにはいかなかった。

しかしどこへ？ とりあえず彼を連れて行ける安全な場所は、鷹水のいるアメリカだろうか。

？鷹水……！！？

ふいに私は、彼の名が自然に出てくる自分に絶句した。本当に都合のよい時だけ――。

はたして私はこのまま、彼の元へ平然な顔をして帰って行けるのだろうか？ ユウシロウを連れて。

こんな気持ちのまま、彼を頼ってはいけない。それは正面切って、鷹水を裏切ることにならないだろうか。いや、既に自分は鷹水を裏切っているのだ……その事実を思うだけで、私は息が苦しくなった。でも、今の私には、彼を頼るしか他に術がなかった。ユウシロウを豪和の手から逃がすには、それしか有功な手だてがなかった。

そう、今は何としてでも私は、彼を守らねばならないのだ……。

「行きましょう、アメリカへ」

私は思い切って口を開いた。

「私の？ 知り合い？ の国際ジャーナリズム団体の本部がアメリカにあるの。そこなら、きっと豪和も手が出せないわ」

「でも……」

ユウシロウは振り返り、私を凝と見つめた。

「大丈夫よ。私の仲間に連絡を取れば、なんとか上手く手引きして貰えるわ」

しかしユウシロウは、首を振った。

「そうじゃない。佐和子は……先生は、それでいいのか」

「ユウシロウ？」

「俺にかかると、先生に迷惑がかかる……」

ユウシロウは、そう呟くと目を伏せた。

「……何言ってるの、いまさら……そんなこと、初めから承知の上よ。なんのために二人でここまで逃げてきたと思ってるの。そんなに私、頼りにならない？」

言いながら私は、次第に感情が高ぶってくるのを感じた。

「あなたのためだったら、私はどんなことでも覚悟できる……約束したじゃない、いつでもあなたのそばにいるって。だから、お願いだから、もうそんなこと言わないで……」

いつのまにか肩を小刻みに震わせ、柄にもなく私は泣いていた。もう何もかも、どうなってもよかった。ユウシロウ、彼のためだったら。

「ごめん……ありがとう」

ユウシロウは、そんなありきたりな感謝の言葉を返すのが精一杯だった。

そして嗚咽する私の背中をそっと抱きしめた。私はしばらく彼の胸に頬を預け、震えていた。

2 .

私たちは、急いで空港へと向かった。場所や時間的な問題もあり、成田より羽田の国際空港へ。

レンタカーを運転しながら、私はちらと助手席に座るユウシロウを見た。真新しい生成りのシャツとジャケットに身を包み、風に流れるサイドの髪をかきあげている。

『その前にその服、なんとかしなくちゃね——』

私は、ユウシロウの着ている特自の制服を指して言った。やはりいくらなんでも、目立ちすぎるか。

二人は、とある若者向けの服が並ぶブティックに立ち寄った。

『……うん、これなら大丈夫』

私の見立てた私服に着替えたユウシロウは、どこから見ても普通の少年に見えた。非常時とはいえ……、まるで純白の清純さそのままに、何を着ても似合うユウシロウに見惚れてしまう自分を苦笑った。

しかし、そんな自分の頬を叩いて喝を入れると、私はユウシロウに何気なく告げた。

『——私の仲間が用意してくれた便は、一時間後に出発の予定よ。それまで何としてでも、あなたを無事に空港まで送り届けるから』
車を運転しながら、私は先程のユウシロウとのやり取りを思い出していた。

ユウシロウを空港まで連れて行って、そこから先は——。
でも変ね。いくらなんでも、上手く行きすぎる。こんなに簡単に、日本を出られるものかしら？

勿論、空港で足止めを食らう可能性もまったく否定できない。そこで豪和がてぐすね引いて待っていることも十分考えられた。

私はあらためて、日本最大の一大コンツェルンを築く豪和というこの国を動かせるほどの力を持った大企業について、思い巡らせていた。その豪和が、彼らにとって稀有な存在であるユウシロウを、みすみす見逃すはずがない。

サングラスをかけた私の視線が、バックミラーへと滑った。

と、一台の車が、ぴったりと二人の乗ったクーペについて来ているのに私は気づいた。

？まさかね？

が、不運にも、私の勘は当たってしまった。後ろの真っ黒な車が突然サイドに寄ってきて、体当たりを食らわせてきたのだ。

——ガァン！

「……！」

その衝撃に、二人は思わず身を固くした。

「ユウシロウ、しっかり掴まって！」

私は叫ぶと、強くアクセルを踏み込んだ。しかし、追手は執拗に追いかけてくる。

「やっぱり簡単には行かせてくれないみたいね。それにしても、追跡の手が早すぎる！」

でも、ここまで来てユウシロウを奴らにみすみす渡してしまうなんてことできない。空港はもう目と鼻の先なのだ。

私は必死になってアクセルを踏んだ。二台の車は、前方を行く車を巧みに避けながら、湾岸道路でカーチェイスを繰り広げた。

が、突然、追手の車の窓が開き、中から男が放った銃弾が、私たちの車のリアウィンドを貫いた。

「嘘でしょ——ユウシロウ、大丈夫！？」

「——大丈夫だ！」

背を低くして身構えたユウシロウが答えた。

「どうやら、本気みたいね？」

しかし次の瞬間、追手の放った第二の弾丸が、ハンドルを握る私の左腕をかすめた。

「うー！」

ユウシロウは、それに気づくと叫んだ。

「佐和子先生！」

「大丈夫よ、これくらい」

しかし、言葉とは裏腹に、次第に視界が霞んでくる。刺すように痛む傷口から、いつしか血がドクドクと滲み出す。

でも、私は必死でハンドルを操作した。ユウシロウを、彼を無事に空港まで送り届けなければ……ただ、それだけの思いで。

だが、前方を走る大型トラックを避けようとして、私はハンドル操作を誤った。

——キキイ——ッ！

私には、それがスローモーションのように感じられた。

「……！」

二人の車はガードレールを飛び越え、宙を舞ったかと思うと、その向こうに広がる海面へと突っ込んでいった。

——バシャー——ン！

海面を叩きつける音に続いて、鈍い衝撃音と、周囲を包み込むゴボゴボとした気泡の音に、私の意識が鮮やかに蘇った。すぐに車内に大量の海水が流れ込んでくる。

二人の乗った車は、急速に海底に沈んでいった。

「先……生……先、生！」

「ユウシロウ！」

二人は必死で互いを呼び交わした。

しかし、鋭い腕の痛みに加えて、二人を隔てる大量の海水が、蒼白の私の意識をどこかへ連れていくこととする。ユウシロウ……！その言葉が、ただ脳裏で繰り返される。

「ごめん……ごめんね、ユウシロウ。あなたを守ってあげられなくて」

霞んでいく意識の中で、私は傍にいるはずのユウシロウの姿を探した。

「先生！しっかりして、先生！」

必死に叫ぶユウシロウの声が、次第に遠く聞こえなくなっていく。

*

ユウシロウは、気を失った私を抱えて、必死に泳いだ。

車内に閉じ込められてから数分が経っていた。なんとか窓ガラスを割り、車外へ出て海面に浮かび上がったものの、波間から道路上に数台のパトカーが止まり、二人を搜索する者たちの姿が、ちらと見えた。このまま水からあがるわけにはいかない。

「せんせい、佐和子先生！」

ユウシロウは泳ぎながら、何度も私に呼びかけた。しかし返事はない。だが、何とか息はあるようだった。

でも私は、随分と海水を飲んでいた。

？このままでは危ない？

すると、しばらくして彼の視界に、人工の島である対岸の埠頭が見えてきた。ユウシロウは意を決すると、海水を叩くその腕に力をこめた。

「ハア……ハア……ハア……」

ユウシロウは私を背負ったまま、肩で息をしながら岸に上がった。二人の服はすっかり水を含み、その重みも手伝って、私を背負うユウシロウの肩にかかる重力は、水からあがった途端、突然その重さを増して彼を襲った。

ユウシロウは二、三歩歩いたところで力尽き、私もろとも、どつと倒れた。だが、すぐに起き上がり、意識のない私を仰向けにするのと、その頬を叩いた。

「佐和子先生！」

しかし、私の顔からは、すっかり血の気が引き、まったく意識が

戻る気配がない。海上で応急処置で止血したため、どうやら左腕の出血は止まったようだが、やはり大量に水を飲んでいるらしい。

「……駄目か」

ユウシロウは、紫色になった私の唇にそつと唇を重ねると、同時に合わせた両手で私の胸元を規則的に押し続けた。

やがて、何度かそれを繰り返すうち、私はやつとのことで息を吹き返した。私はゲホ、ゲホと飲んでしまった海水を吐き出した。でも、まだ起き上がれない。

「よかった……意識が戻って」

私を覗き込んだユウシロウが、ひとまず安堵の表情を浮かべて言った。

「ユウシロウ！」

私は半ば涙目で微笑むユウシロウの顔を見ると、思わず起き上がり、彼に抱きついていった。

「ユウシロウ……ユウシロウ」

「まったく、先生は泣き虫だな」

泣きじゃくる私を見て、ユウシロウは笑った。

「だって、だって……このままもう会えないのかと思った……よかった、ユウシロウが無事で」

私は咽び泣きながら、切れ切れに言葉を繋いだ。

「もう大丈夫だから」

ユウシロウは、濡れた私の髪をかきあげ、優しく抱きしめながら言った。

「また、びしょ濡れになっちゃったな」

「……ほんとね」

二人は顔を見合わせると、思わず噴き出したけれど、しかしそんな私の表情が俄かに曇っていく。

「……ユウシロウ、ごめんね。あなたを日本から逃がせなくなってしまった」

「いいんだ。簡単に逃げられるなんて、思ってたから」

その言葉を聞いて、再び私の目にじわじわと涙が滲む。

「でも、でも……駄目。あなたは、逃げなくちゃ駄目」

私は涙目のまま、ユウシロウの顔を正面から見つめた。

「あなたには、自由になる権利があるんだから——」

しかし、そこまで言うと、次第に再び意識が遠のいていくのを私は感じていた。

「あ……」

「いや……嫌だ……またユウシロウと離れ離れになるなんて？」

「ユウ……シロウ」

私は朦朧としていく意識のただなかで、彼の名を呼んだ。ユウシロウは、そんな私の異変に気づき叫ぶ。

「佐和子先生……！」

どうやら、腕の傷が堪えていたらしい。それにかなり出血していた。ユウシロウの手のひらが触れた私の額には、脂汗が滲み、私は高い熱に支配されていた。

「ユウシロウ……自由に、なって——」

「佐和子先生！」

私はその言葉を最後に、意識を失い、再び何も届かない昏い淵へと沈んでいった。

*

どれくらい時間が経っただろう。いつしか私は暖かなベッドに寝かされていた。その傍らには、ユウシロウが無言で付き添っている。しかし私は容易に目覚めなかった。私の身体は、すっかり衰弱しきっていた。左腕の傷の負担のため、そして長い間海上を漂っていたために体温を奪われ、体力を使い果たしてしまい、酷い肺炎を起こしていた。

「大丈夫だ」

しかし心配そうに見守るユウシロウに、ベッドの傍らに佇んだ、

ある男が言った。

「これから向かう日本支部にあるメディカルセンターに行けば、よい医者もいるし、良い薬もある」

——そう。それは私の婚約者である、国際ジャーナリズム連盟に属する鷹水誠司であつた。

私たちは団体のクルーザーで、そのとある日本支部へ向かつていた。ここはその船上の一室。結局、私とユウシロウは彼らに救われたのだ。

しかしユウシロウは、ずっと硬い表情を崩さなかつた。彼らはユウシロウのことを事細かに知っていた。そのことが彼に、鷹水に対して警戒心を抱かせた要因だつた。

「佐和子を……その、救けてくれてありがとう」
「いえ……」

鷹水はユウシロウに握手を求めたが、依然、惘然とした表情のユウシロウはそれを見せ、席を立つた。

「豪和……ユウシロウ君。我々は君を歓迎する。……何も心配することはない」

だが、ユウシロウは相変わらず口を閉ざしていた。

3 .

そこは鷹水誠司の所属する国際ジャーナリスト連合、通称”F O I J”？日本仙台北支部。

表向きは単なるN P O法人のジャーナリスト団体だったが、彼らは世界中で違法に行われている政治経済などの裏工作の実態を暴くため、国際的に組織化され、取材は勿論、多岐に亘って様々な調査発表、情報のリークなどを文字通り水面下で行っていた。日本や米国は勿論、ドイツ、イギリス、フランスなど欧州主要国や、アジア方面にも数多くの要員を抱えている。

勿論、彼ら鷹水たちにとって、豪和の二足歩行型兵器についての取材調査も、いまや、その大きな焦点のひとつだった。

その点で言えば、彼らがユウシロウのことに關して色々と知っていても、何ら不思議はなかった。だがユウシロウは、直感で察知したのだ。彼、鷹水に心を許してはならないと。

そんなユウシロウの警戒心を目敏く感じ取ったのか、鷹水は口を開いた。

「何をそんなに警戒しているのか知らないが、君を悪いようにはしない。なんといっても佐和子の恩人だからな。それに我々は、色々と君に協力して貰いたいこともある」

豪和のやっている様々な実験に關して、詳しく話してくれとでも言うのか。

確かに鷹水の言うことは理にかなっている。実際、豪和の行っている理不尽な実験開発は、世間的に人道的に見ても俄かに許せるようなものではなかった。

だがユウシロウは、それでもためらう。それは一体なぜなのか。

*

その日本支部にあるメディカルセンターに移された私は、日増しに回復していった。

だが、私の心は揺れていた。そう、鷹水とユウシロウとのあいだで。

結局追いつめられていた私たちを救ってくれたのは、鷹水たちだった。しかし私は、そんな彼を既に気持ちの上で裏切っているのだ。そう……8年前、家族を喪い、行く処さえなくなった私を支えてくれ、生きる場所を与えてくれた。（豪和に復讐する機会を与えてくれたのも、彼だった）

これまで鷹水は、そんな風にずっと私の精神的、物質的な支えだった。いわば彼は大事な後見人ともいえる。いや、そればかりでな

く、文字通り彼は私の命の恩人であった。

彼がいたから、私はどんな辛いことにも耐えてこれたのだ。その内面的な強さを、私は彼の元で育むことができた。

そして、いつしか私たちは、本当に自然に将来を約束した。

彼の元という、戻るべき場所がある。そのことがどれほど私に勇気を与えてくれたか。そのことを誰よりも何よりも深く知っているのは、私自身だった。

でも、私は知った。ユウシロウに出会って。

……自分はずっと、他人に甘えて生きてきたのだ。

だがユウシロウは違った。

私を知る限り、彼はいつでも独りきりで生きていた。

豪和という鳥籠に飼われながらも、彼は常に毅然としていた。沈黙を言葉とし、全てを受け入れていた。

——それはなぜなのか。

——やはりそれは、彼が？ 嵬？ だから？

彼の強さは、彼が嵬として生きていかなばならない宿命から来るものののか……。

だとしたら、なんて哀しく痛々しいほど、彼は気高いのだろう。その凜とした潔い魂の美しさが、あるいは私の心を惹き付けたのかもしれない。

気高く、強く、美しく——そして何処となく壊れそうで。

そう、ただ強いだけじゃない。人は弱いから強い……そして強いから、弱い。その当たり前の人としての生の輝き。まっさらで、どこか危なっかしくて。

そんなユウシロウの姿は、私の心を奪った。彼は特別なようであり、当たり前になが持つ何かを胸に携えているのかもしれない。その輝きが、私にとって、とても愛おしく感じられたのだ。

だがそれでも、それとこれとは、当然のごとく別の問題なのだ。鷹水を裏切ることなど、私にはできない。いや、できるはずが、な

いのだ。

いつ何時も誠実であたかな人柄で、そして何より、どんな時も辛抱強く私を待っていてくれる。その鷹水を……。

第四章 ― 蟬時雨の章 ―

1 .

「それで、ユウシロウは？」

「大井埠頭の湾岸道路からレンタカーごと転落、その後県警の捜索隊を出させましたが、いまだ見つかっていません。が、遺体は上がっていませんから、おそらく無事なのだと思いますが」

一清の報告を聞いて、乃三郎は深く溜息をついた。

一清にしても乃三郎にしても、驚異的なユウシロウの体力的強靱さを知っているからこそ、とりあえず安心できたのではあるが。しかし……。

「やはり彼女は一緒なのか」

「おそらくは――ユウシロウを手引きしたのは彼女ですから、多分一緒と考えて間違いはないでしょう」

一清は、そう言うってから乃三郎の表情を盗み見た。

だがその老練な仮面は、多少険しさを増している以外は、いつもの変わらぬ威厳を保っている。

「彼女、伊集院佐和子は、お父さんのかつての同僚、伊集院大祐の忘れ形見。……だからとは言いませんが、少し彼女を甘く見ていたのでは？」

それより一清には不思議でなかった。なぜ乃三郎が彼女をユウシロウの家庭教師として、豪和邸に招き入れたのか。

おおかた佐和子を使って、国際ジャーナリストの最右翼である鷹水の動きを探ることが、その一番の理由だろうが、それにしても、あまりに隙を見せすぎている。

確かに彼女にとって豪和は、仇以外の何物でもなかった。その佐和子を自らの懷に安易に招きいれるなど、豪和の総代として、あまりに軽率すぎる。

その結果が、ある意味この不始末である。

ユウシロウを使って、膨大なデータを取らなければならないことは、この先、まだ山のように残されているというのに。

「大丈夫だ。ユウシロウは必ず戻ってくる……近いうちにな」

その乃三郎の言葉には、強い確信があった。一清は父のその落ち着き振りを半ば奇異に思ったが、

「お父さんには、何か考えがあるのですね？」

と問いかけた。しかし乃三郎は、ただ沈黙するだけだった。

「……そうですか、解りました」

だが一清は何かを察したらしく、口元に微かな笑いを浮かべ、そのまま部屋を出て行った。

切れ者で、頭がよすぎるくらいよすぎる一清と接していると、時々こちらの意図をはぐらかすのに苦労する。しかし、乃三郎は一人呟いた。

「何も解ってはおらん癖に——」

乃三郎は思いを馳せた。遙か昔、まだ自分が今のような野望に取り付かれていなかった頃、かつての友、伊集院大祐と共に過ごした日々を。

「すまぬ……伊集院」

乃三郎は目を閉じると、ひとり瞑想へと戻った。

*

「ユウシロウお兄さま……」

美鈴はひとり心配していた。あれからずっと消息を絶っているユウシロウのことを。

療養先から帰ってきた美鈴を待ち受けていたのは、兄の不在だった。

一清たちからは、特自でのシュミレーション訓練が長引いている

のだと聞かされていたが、内心美鈴は穏やかではなかった。彼女は知ったのだ。それが自分を安心させるための偽りであると。

美鈴は偶然、聴いてしまった。兄たちの話を……ユウシロウは今、特自の訓練施設にいるのではないということを。

「教えてください！ 一体お兄さまに何があったのですか」

乃三郎は美鈴に詰め寄られ、嘆息を漏らした。

美鈴のユウシロウを想う気持ちは、常に半端ではなかった。日頃から彼女はユウシロウに対する豪和の仕打ちに、当然納得のいかないものを抱いていたのだ。

” どうしてお兄さまだけが…… ”

美鈴は、特自の実験中隊で厳しい訓練を受けているユウシロウのことをいつも心配していた。そしてそんなユウシロウに対して、たまに帰ってきてても優しい言葉の一つもかけてくれない兄や母達のことを酷いと思っていた。

そして何より、それ以前に美鈴はユウシロウのことが好きだった。他の三人の兄たちに感じることもない優しさを、ユウシロウは持っていた。

それは豪和という古い家に生まれ、格式張った家族の間にあつて、幼い頃から常にあたたかな家族愛というものを欲していた美鈴に不思議な安らぎを与えたのだ。

美鈴の生活にあつて、ユウシロウの存在はそのすべてを締め付けているといつても過言ではなかった。

だから、彼が長期に亘って特自に赴く時も、それがしばしであっても、美鈴はユウシロウと別れることが辛くてしかたなかった。

彼と離れている間も、彼女はユウシロウのことを片時も忘れたことはなかった。兄と再び同じ時間を過ごすことを、美鈴はずっと心待ちにしていたのだ。

それなのに——そんな彼女を待ち受けていたユウシロウが行方不明という事件は、あまりにも容赦なく美鈴の心を深く突き刺した。

そんな美鈴の胸の内を察していた乃三郎は、せめて彼女を何とか

安心させてやりたかった。

乃三郎は言った。

「心配するな美鈴。ユウシロウは必ず戻ってくる……」

「お父さま…… お父さまはお兄さまの居場所を知ってらっしゃるのですね。どこ？ 一体お兄さまは、今何処に」

しかし乃三郎は、それ以上何も言わなかった。

美鈴はその無言の横顔を見詰めながら、今も何処かにいるはずのユウシロウの無事を祈ることしかできなかった。

＊

すっかり体調が回復していた私は、仙台で以前自分が暮らしていたマンションの一室に戻ってきていた。私は豪和邸に赴くまでの数ヶ月をここで過ごしていたのだ。

この部屋もまた、8年ぶりに日本に戻ってきた私のために、鷹水が用意してくれたものだった。

私は数ヶ月前に出てきたままの、きれいに整頓された部屋の中を見回すともなく見回した。

ここに以前いた当時の私は、豪和に対する憎しみの気持ちだけで生きていると言っても過言ではなかった。

しかし今は違う。今私は、ユウシロウという一人の少年に出会うことで、自分のしようとしてきたことが、いかに不毛な行いであるかを知ったのだ。

確かに豪和に対する憎しみは、まだ私の胸に内から消えていなかった。

しかし私は何かが違うと思った。豪和への復讐のため、そのために私は何か人間的なものまでも、どこかになくしてきてしまっていたような気がした。

豪和は確かに憎い。しかしこれでは、豪和それ自体のやっていることと同じではないか。

憎しみは憎しみしか生み出さない。どこかでその循環を断ち切らねば……。

そのことに気付いたのは、やはりユウシロウに出会ってからだった。

彼はまるで流れる水のごとく、すべてを受け流していた。しかしそれは彼を取り巻く周囲の状況に、ただ流されているというのとも、また少し違っていた。

あれほど物理的に拘束されているにもかかわらず、ユウシロウは常に凜としていた。その姿はまるで、強靱な沈まない鋼鉄のようだと私は思った。

作りは一見華奢なようだが、実際の彼の精神は驚くほど強いのだが、彼には、やはり自由になる権利がある。

私はそう思ったからこそ、ユウシロウを豪和から連れ出したのだ。ただなんの確証も持たぬまま。

しかし私はまもなく知る。そのことが結局は彼自身を、再び豪和に立ち戻らせることになるのだと……。

——私は、玄関先で鳴るベルの音に我に返った。

「はい」

扉を開けた私の前に立っていたのは、ユウシロウ本人だった。おそらく鷹水が場所を教えたのだろう。

「ユウシロウ……どうしたの急に？」

「よかった、元気そうで」

ユウシロウは私の顔を見ると、思わず微笑んだ。

突然尋ねてきた彼に私は一瞬戸惑ったが、すぐに笑顔で彼を部屋に招こうとした。が、

「今日は、お別れを言いに来ました——」

ユウシロウのその言葉に、私の表情が強張った。

マンション近くの公園の遊歩道を私たちは無言で歩いた。

『どうしても話しておきたいことがある』

先程のユウシロウの言葉が何度も頭でリフレインしていた。
でも、なかなかユウシロウは話し出さない。

しかし同時に私自身も、ユウシロウに告白しなければならいことが一つあることを知っていた。

夏も終わりに近づいたその日、竹林の濃緑の中で最後の残照を惜しむかのように蝸の音が響いていた。

その静寂が包む夕陽の中、重苦しい沈黙に抗うように、ふとためらいがちに私は切り出した。

「私もあなたに話さなければならいことが……いえ、謝らなければならいことがあるの」

ユウシロウはそんな私の緊張した面持ちを凝と見つめた。

しばしの沈黙のあと、私はやっと口を開いた。

「……ごめんなさい。私、あなたをずっと騙していたかもしれない。私には婚約者がいるの」

しかしユウシロウは一瞬寂しげな瞳の色で俯くと、動揺するでもなく言った。

「そうか……」

彼には何もかも解っていた？

私は思わず彼の顔を見つめた。その表情は、ある決意に硬く凍り付いているかのようにだった。

そして次の瞬間、ユウシロウは言った。

「今まで、ありがとう……」

「ユウシロウ？」

「佐和子先生には感謝している、とても……でも」

私はユウシロウの顔をさらに凝と見つめた。彼が言おうとしていることを、ひと言も聞き漏らすまいと。

「——豪和に、戻ろうかと思ってる」

ふと呟いたユウシロウのその言葉を聞いて、一瞬ずっと周囲の潮騒のようだった蝸の音が遠のくのを感じた。

なぜだか彼からその言葉を聞かされることを、いつからか私は予感していた。

「どうして……？　せつかく豪和から逃げられたのに」

しかし静かに反論する私に、ユウシロウは穏やかに告げた。

「これ以上、先生に迷惑はかけられない」

私はその一瞬、とても悲しくなった。

しかしそれが彼自身の私に対する精一杯の思いやりなのだとも解っていた。だからこそ、彼の運命がひたすら哀しかった。

そして何ひとつしてやれない、彼を助けてあげられない自分自身の無力さにも――。

「ユウシロウ、本当に行くのね」

瞳を潤ませながら、私はユウシロウの瞳を見つめた。その澄んだ瞳の中に、切なげな私の表情が霞んで見えた。

ユウシロウは優しく静かに頷いた。

「先生、ありがとう。僕も先生のことが好きだった――」

”……！”

そのユウシロウの言葉に、私の中でぷつんと何かが切れる音がした。

私は思わずユウシロウを腕の中に抱き締めていた。

「ユウシロウ……」

「佐和子、先生」

ユウシロウは私の背中を優しく抱きながら、その名をそつと囁いた。

私のぬくもりが、冷たく凍っていた彼の意識を次第に溶かしていく。

そのあたたかな感触に包まれながら、ユウシロウはひと時、幸福な感情に包まれ満たされていた。おもい

そして私も、ユウシロウの体温を直接肌を感じながら、自分の中にある決心が芽生えていることを知った。

「それで、ユウシロウ君を豪和に戻そうと言うのか？」

私に背を向け、窓外を眺めながら、オフィスの一角で鷹水は言った。

「ええ——第一にこれは彼自身が望んでいることなの。私たちには彼を拘束する理由も、ましてや束縛する権利もないわ」

しかし鷹水は、そうきっぱり言い放つ私をちらと振り返ると、こう言った。

「確かにそうだ——だが、それは許可できない……もしそう言ったら、君は僕を許さないかな？」

鷹水は、思わず緊張する私の顔から視線を外すと、ふっと溜息を漏らした。

「君は何のために豪和に潜入したんだ。豪和に復讐するため、君は僕たちに協力してくれた……いや、無論同士として。そうじゃなかったのか？」

「それは……」

鷹水の言葉に私は二の句が告げられなかった。確かに私には、彼に反論する権利など何ひとつないかもしれない。

しかし鷹水は次の瞬間、優しい表情になって私に囁いた。

「君が彼を哀れむ気持ちはよくわかる。そう、君はとても優しいひとだから」

そして鷹水は私に近づき、何気ない風を装って婚約者の素顔に戻ろうとした。何か悪い予感が、……だから敢えて鷹水は彼女を突き放した。

「だからと言って何も君が危ない橋を渡ることはないんだ。僕は本当は反対だった。君を豪和へやることなど……そうだろう？ 君には復讐など似合わない」

そう。豪和邸に潜入することを最初に言い出したのは私だった。その固い決意を知りながら、鷹水はそれでも私をこうして待って

いてくれた。……その変わらぬ優しさで。

でも――。

「佐和子」

鷹水は、さらに私との距離を縮めた。しかし、その唇が唇を奪おうとした刹那、その手をすり抜け、私は彼を拒んだ。

次の瞬間、私ははつとして我に返った。

「ごめんなさい……！」

私はようやくそう言い残して踵を返すと、戸惑いながら部屋を走り出ていった。

＊

「ユウシロウ君、君は？ 唄？ の末裔……だそうだな」
「カイ？」

ユウシロウは鷹水の言葉に顔を上げた。

仙台支部の屋上。その近くの寮で数日間、世話になっていたユウシロウが突然、鷹水を訪ねて来た。ま、何を言いに来たのか大体のところは解っていたが。

「ふ……知らないのか、自分のことを」

夕空が二人を照らした。その鷹水の言葉の真意を探ろうとするユウシロウにかまわず、鷹水は続ける。

「まあいい。それにしても驚いたよ。佐和子が君を連れて豪和から逃げ出したと聞かされた時は」

「……」

ユウシロウは再び沈黙の中に戻っている。

「豪和の開発したタクティカルアーマー――通称TAの実験において、いわば君はなくてはならない存在だそうだが、一体それはなぜだろうな？」

「それを聞いて、どうしようと言うんです」

「そうだな、……豪和に隠された千年の秘密。それを世に暴いて、

これから豪和がしようとしていることを、我々の組織が通じているメディアに検証させてみせようか」

そう言つて鷹水はユウシロウの反応を窺った。しかし彼は、まるで何一つ聞いていなかったかのように沈黙している。

だが、鷹水は既にすべてを知っていた。

豪和が骨鬼の組織を用いたTAを使い、そして？鬼？であるユウシロウを使つて、餓沙羅鬼の神事を復活させようとしていることを。それは古くから豪和の一族が代々その禁忌の舞によって求めてきた、権力という名の妄想……いや、野望か。

しかしその力を目覚めさせることのできる唯一の鍵である当のユウシロウ本人は、そのことをどう受け止めているのだろうか。

いや、彼は既に豪和の操り人形でしかないのかもしれない。そうでなければ、この哀れな少年が、ただ豪和の意図に従うばかりでいるはずがない。

しかし、本当にそうだろうか？

鷹水は隣に佇むユウシロウの眸の中に、只者ではない光が宿っているのを知らなかった。

それでもこの少年は、いつか自分から行動を起こす——それがいつのことなのかは分からないが、鷹水にはそう思えてならなかった。

”しかし佐和子は——”

鷹水は昨日の私の不可解な行動を思い返していた。

”一体佐和子と彼の間に何があったのだ……”

そのまさかの真実……鷹水は今すぐ側にいる華奢な少年が、自分の恋敵だということに気付いているのかいないのか、視線を遠くに投げた。

「それで君は豪和に戻つてどうするんだ。また父親や兄さんたちの言いなりになつて、特自で実験を繰り返すのか」

「解りません……でも」

「でも？」

「——先生は僕に自由になれと言った。僕にはその権利があると」

「だしたら佐和子は、豪和にとって厄介なことを君の心に植えつけたことになるな」

鷹水はやれやれといった調子で付け加えたが、ユウシロウは佐和子の言ったその言葉の意味について、あらためて思い巡らしていた。

「……お世話になりました」
つと、そう律儀に告げる朴訥とした少年の言葉を、鷹水は心なしか寂しげに苦笑いながら聞いていた。

*

「そうか。ユウシロウは自分からそう言ったのか」

「——ええ。これ以上、迷惑はかけられないと」

「……そうか」

乃三郎は目を伏せた。その瞬間、乃三郎の書斎にしばし沈黙が流れる。

「それにしても、本当に彼を使って神事を復活させるおつもりですか……？」

乃三郎は専用回線のモニター画面越しに問いかける人影に向かって口を開いた。

「僕はもしかしたらまた同じ間違いを繰り返そうとしているのかもしれない。……しかし傀儡子の一族の末裔であるこの心が、血が囁くのだ。お前は神事を伝えていかなばならないのだと」

「——貴方は自分の息子ばかりでなく、また別の？ 唄？ の血を受け継ぐ者の命を奪うおつもりですか？」

その非難の色を含んだ言葉の響きに、乃三郎は殊更に深く打ち沈んだ。しかし男は続ける。

「……佐和子は、どうやら彼を愛してしまったようです。貴方はまたもそんな彼女の心を間接的に不幸に陥れようとしている。貴方は、貴方の友人であった伊集院氏を、いや、その家族をも見捨てた——それは何のためですか？ そうまでして築き上げたい栄光とは、いつ

たい何なのですか』

眉根一つ動かさず聴いている乃三郎に、その言葉は降り注いだ。

『……しかし、こうしてこの場で私が貴方とお話しているのも、貴方の中に佐和子とその家族にしたことへの後悔の念が残されていると信じているからなのです』

男は一旦言葉を切ると続けた。

『——豪和に関する様々な情報を提供してくださったことには感謝しています。しかし本当に貴方はそれでよいのですか？本当に餓沙羅鬼の神事を復活させることを自ら承諾なさるおつもりですか』

乃三郎は男の言うことが間違っているとは思わなかった。

いやむしろ、自分がこれからしようとしていることにこそ、過ちはあるのだろう。そのことは既に8年前に喪った一つの命によって痛いほど己の胸に刻まれたはずである。

しかし、乃三郎の奥に巣食う思いとは裏腹に、すべての歯車は、今現在推し進められている豪和のプロジェクトに従い、既に動き始めようとしていた。

……もう、誰にも止められないのだ。それは豪和の総代である乃三郎にも。

いや、彼自身でさえも計り知れない大きな渦の中にすべてを巻き込もうと、時間の秒針はただ規則正しく歩を進めるだけだった。

「佐和子君のこと、今までありがとう……それからユウシロウのことも」

乃三郎はそう最後に言葉を残し、通信を切った。

”解っている、解っているとも……”

乃三郎は深く目を伏せると、ただ胸の内で、そう呟くことしかできなかった。

2 .

ユウシロウは、豪和邸に戻った。

帰ってすぐ彼は再び、以前のように特自での実験の日々に明け暮れる毎日に戻ることになる。

当然だが、その日々に佐和子の姿はもうない。

しかしその代わりに、そんなユウシロウを玄関先で美鈴が待っていた。

「お兄さま」

「美鈴……」

美鈴は何も変わらない兄の姿を見て、安堵のあまり思わず涙ぐんだ。「ユウシロウお兄さま、ずっと心配していました。お兄さまが行方不明だと聞いて私……でも、よかった。こうして無事に帰っていらして」

「……すまない」

ユウシロウは自分の身を深く案じてくれていた美鈴に、ひと言だけ詫びると、ただ泣きじゃくる彼女の肩を抱いてそっと慰めた。

「いつたい、どこに行っているの？ お兄さま」

しかしユウシロウはそれには応えず、美鈴の身を氣遣って言った。「あまり興奮すると身体に障る。さあ、奥に入ろう」

ユウシロウはそつと美鈴を促して一歩前に踏み出した。と、そんな彼を上がりかまちで一清が待ち構えていた。

「一体どこに行っていたんだ……そんなことは訊きはしない。だが、これだけは忘れるな。お前は豪和ユウシロウだ。我ら傀儡子の民の呪縛から、貴様は決して逃れられはしないのだと」

「……」

一清の鋭い一瞥を背中に感じながら、ユウシロウは美鈴と共に屋敷の奥へと消えていった。

”そう。俺は豪和ユウシロウ……だが、本当にそうなのか？”

ユウシロウは、ただ何の根拠もなくそう思う自分を不思議に思っただ。

しかしその思いが、決して偽りではなかったことを、ずっと後に

なつてから彼は知ることになる。

一方美鈴はユウシロウに抱きかかえながら、彼に纏わり付いていた、ある女性の”匂い”を感じ取って、胸の内で密かに狼狽していた。

それは、微かに鼻をくすぐる芳しい香水のような薫りだった。

”でも……まさか、そんな”

美鈴は己自身を疑ったが、以前と何ら変わらないユウシロウの優しい微笑みを見て、きつと気のせいだと自分自身に言い聞かせるのだった。

＊

「やっぱり私、行きます」

しかし鷹水は、今にも飛び出していきそうな危うい私の腕を掴んで引き止めた。

「君が今行つてどうなる？ 今度は顔パスというわけにはいかなんだぞ。いや、それどころか今行ったら、君まで豪和に軟禁されてしまう。君は豪和の秘密を知る者の一人だからな」

「でも！彼を放つてはおけない。このままでは彼もまた神事の犠牲にされてしまう！」

必死に抵抗する私を見て、鷹水は思わずその手の力を緩めた。そして溜息をついた。

「君はなぜそうまでして彼に固執するんだ。確かに豪和のしようとしてゐることは、世間的な一般論としても、そして我々ジャーナリズムに預かる人間にとつても決して見逃せない、許されざることだが、たとえジャーナリストのはしくれだとしても、それに殊更に君が加担することはない——いや、ユウシロウ君のことは君には全く関係のないことじゃないのか？」

「……関係ない？私にはとてもそうは思えない。だって私、私は」
私のその辛そうな表情を見て、鷹水は一瞬沈黙した。そして次の

瞬間、悟ったように口を開いた。

「そうか、やっぱりそうだったんだ……君はやはり彼のことを」
その言葉に瞬間的に私の身体が固まった。

「……ごめんなさい、誠司さん。私、これまで全部あなたにして貰ったことを決して忘れたわけではないの……感謝してる。でも、だめなの。私はやっぱり彼を、ユウシロウを」

皆まで言えず、苦悶の表情になる私に、鷹水は諭すように言う。

「解ってるのか？ 彼は普通の人間じゃない——彼は？ 鬼？ だ。いわば餓沙羅鬼を呼ぶための生きた兵器なんだぞ。それでも君は行くと言っのか」

「ええ、だからこそ私は……私は彼を救いたい。そんな権利、私にはないかもしれないけど。でも、もう止められない。私はもう、この命だつて惜しくはないわ。そう、彼のためなら——」

鷹水は私のその深く思い詰めた言葉を聞くと、低い声で呟いた。

「そうか、解った……そこまで君の決心が固いというなら、俺はもう止めはしない。だが、これだけは言っておく。決して無茶はするな。危ないと思ったら、すぐ手を引くんだ」

鷹水は無理な忠告だと思いながら、それでも最後まで私の身を気遣ってくれた。それが精一杯の彼からの愛情だと分かった。

「ありがとう……誠司さん」

私は真剣な顔つきの鷹水に背を向けると、そのまま振り返らずに部屋を出て行った。

*

「何、取材だと？ 何度言ったら解るんだ。すぐに断ってくれ」

乃三郎は、苛立たしげにインターフォンに向かって言い放った。

『それが……先方様は、軍事機密に関わる豪和の新兵器開発について、取材したいとおっしゃっているのです』

受付嬢が言い難そうに、おずおずと言葉を継いだ。

「なに？」

乃三郎は一瞬言葉を失った。

豪和の二足歩行型兵器開発は、決して外部に漏れてはならないトップシークレットだったが、そうすると……余程の情報技術がなければ、その情報バンクへのアクセスも容易ではないだけに、その相手は限られてくるのだった。

乃三郎は、己の心のうちを振り返った。しかし別の意味で若干驚いてもいた。

豪和の秘密に触れようとすればどうなるのか、一般的なマスメディアの出版関係者ならば、既にそれは解り切っている暗黙の了解でもあった。

それを正面切って取材に赴くとは……。

しかしそれでも、その相手に全く心当たりがないとは言い切れなかった。

「いいから断るんだ。そんな事実は無いと言ってやれ」

しかし次の瞬間、執務室の扉が開き、ある女性が姿を現した。

「取材の相手が私でも、ですか？」

「君は……」

乃三郎は、その女の顔を見て、思わず息を飲んだ。やはり。

そう——それは私、伊集院佐和子だった。

乃三郎は深く溜息をつく、口を開いた。

「……一体何をしに来たのだ。ここへ来るといことがどういことなのか、君には本当に解っているのか？」

たとえ「彼」と通じているとしても、まさか彼女がそこまで決行するなどとは。

「ええ。それは承知の上です、おじ様」

「それなら、話は早いわけだ」

と、その時、扉を開けて入ってきた長身の男がおもむろに言った。その男の氷のように冷たく鋭い視線に、一瞬私は身を硬くした。

「一清……」

乃三郎は、一清に厳しい一瞥を送り呟いた。

「一体どこからその情報を手に入れたのか、詳細は後ほどゆっくり訊くとして、さて、どうしましょうか、総代。いずれにしても取材の後、このまま彼女を黙って帰すわけにはいかないでしょうね」

不気味な陰を落とす一清の眼光に射竦められ、それでも私は怯まずに言い放った。

「豪和がどんな兵器を開発しようとしているのか、そしてその兵器とあなたの方の実の肉親であるユウシロウを使って、何をしようとしているのか、すべてを調べさせて貰ったわ」

「……それなら尚更、このままあなたを帰すことはできないな」

ふつと鼻で笑うと、一清はいつのまにか後ろに控えていた部下達に眼だけで指示した。

私は素早く背後に回った一清の二人の部下に、しっかりと両腕を抱えられた。

「失礼ですが、さて一緒に来て貰いましょうか」

私は二人の男に連れられ、執務室から廊下を経て、地下へつながるエレベーターへと歩き出すしかなかった。

「おじ様、一つだけ聞いてください！ 私はもう人を憎むのをやめました。憎むより、ずっと大切なことがあると——私はそれを彼からユウシロウから学びました。もう、つまらないことで自分を偽ったりしない。だから、おじ様も約束してください！ もう過ちは繰り返さない……あなたの実の息子を、神事の犠牲にするようなことは絶対にしないと」

しかし乃三郎は、深く瞼を伏せ、そのまま岩のように凍りつき沈黙した。

「おじ様！」

私の叫びは、やがて暗く深い地の底へと吸い込まれていった。

第五章 ―茜雲の章―

1 .

豪和が特自と共同開発しているT Aの実験は、既に第二段階へ移行しようとしていた。

ただし、ユウシロウが失踪していた二週間の間は、実際にT Aを使った本格的な走行実験は中断されていたが、それでもこれまで長年に亘って行われてきたシュミレーション実験によって得られたデータにより、T A開発自体が新たな局面を迎えていたことは事実だった。

しかし、それが出来たのも、ユウシロウがいたからこそであるというところこそ、最早疑いようの無い事実であった。

T A――二足歩行型兵器という全く新しい概念の兵器が、特に近年盛んに各地で勃発している都市部による戦闘において、その存在意義を確固としたものにできたのは、清継ら豪和の人間が”マイル1”と名付けた人工筋肉が発見されてからである。

これまで二足歩行型というアイデアを有した兵器は、各国で盛んにその概念研究が進められてきたが、今まで一度たりとも、それが事実上の開発段階へと進んだことはなかった。

というのも、それはすべて二足歩行型という形態に問題があったからである。なぜなら二足歩行という不安定な形態は、戦場という過酷な場所と条件で用いるには、あまりに脆弱すぎるからだった。

しかし錯綜した都市部における戦闘においては、二足歩行型兵器は突出した能力を発揮できた。それでもこの兵器が一定の機動力を確保するためには、必然的に装甲防御と武装を制限しなければならなかったのだ。そして二足歩行という非常に不安定な状態の姿勢制御自体についても、未だすべての問題が未解決のままだった。

だが、豪和のT A開発プロジェクトにおける人工筋肉”マイル1

”の発見と導入によって事態は一変した。まさに豪和のTA開発がここまで軌道に乗ることが出来たのは、この未知の人工筋肉の存在があったからだと言っても過言ではなかった。

しかし、その人工筋肉”マイル1”については、それ自体が自己制御機能を有した高分子モーターの集合体であるということの他は、まだ何ひとつ解っておらず、その構造などを含めた詳しい解析は、未だもって滞ったままであった。

そして、その未知の複合分子を持つ人工筋肉が、ユウシロウ自身の身体機能とに反応するという、これまでの実験と研究に基づいた事実が、この全く新しい概念を持つ兵器開発の鍵を握っていると言ってもよかった。

いや、正確に言えば、マイル1はユウシロウのある特定の精神状態に反応呼応して、急激にその制御能力を向上させるのだ。

それがなぜなのか、厳密にその反応を誘発させている原因を突き止めるところまでには、まだ研究は進んでいなかった。そしてそれを解明するためにも、ユウシロウのTA実験参画は、最早なくてはならないものとなっていったのだ。

ユウシロウ自身も、これまで自分がこのTA開発に参加すること
に何の疑問も差し挟むことはなかった。

だが今彼は、あらためてそのことについて思いを巡らせている自分
がいることに気付いていた。そしてそれは、彼が私——伊集院佐
和子と出会ってからだということにも……。

ユウシロウが豪和に戻ることを決意したのは、これまでと同様に、
ただ漫然と実験を繰り返すためではなかった。

ユウシロウは知リたかつた…… 本当の自分自身を。

これまでも、自分が何度か繰り返し感じてきた、あのなんとも形
容しがたい違和感。

それが何なのか、どこからやってくるものなのか分からないまま、

今まで彼はただ時折襲う、その空虚な感覚に翻弄されるばかりだった。

たとえばそれは、彼の思い出の中にあるはずの家族の記憶——清、清継、そして清春……彼の三人の兄たち。ユウシロウは自分が幼い頃の兄たちのことを覚えていた。いや、知っていた。勿論、自分の家族のことなのだから知っていて当然なのだ。しかし彼はその記憶が、どうしても自分自身のものであるという気がしなかった。

”違う……違う……違う！”

一体それはどうしてなのか？ なせいつも、こんな風にあって当たり前であるはずの記憶が、突然ばらばらに四散してしまうのか。ユウシロウは疑うともなく、常にそんな喪失感を感じ、それと人知れず闘っていた。

そして彼は私と出会い、私は彼と出会った。それによってユウシロウは、そんな泡のように浮かんでくる疑問と正面から向き合うことを決めたのだ。

”自由になつて——”

”自由？”

——そう。私が彼に言った、その言葉を聞いてから……。

”きつと何かが解る”

ユウシロウは、そう感じていた。

彼が豪和に戻ることを決心したのは、私たちにこれ以上要らぬ迷惑をかけたくないという気持ちもあったが、それ以上にユウシロウは、誰かが自分を呼んでいるような気がしたのだ。

このまるで鎧のようなTAの装甲に囲まれ、その懷に抱かれる時、ユウシロウはこれまで何度も、”そこ”にいたような感覚に包まれた。それはどこか懐かしいような哀しいような——苦いような甘いような。

ユウシロウはTAに乗る度に、次第に自分の中の何かの感覚が研ぎ澄まされていくのを感じていた。

——それは一体何なのか？

だが、その疑問に答えるものが、この二足歩行型兵器にあることも、またユウシロウは知っていた。

時折彼は、自分がこのＴＡの人工筋肉と”会話”しているような錯覚に捉われるのだった。いや、それは既に錯覚などではなかったのかもしれない。実際に彼は、この人工筋肉”マイル１”と会話していた。

だがそれは、もしかしたら人工筋肉ではなかったのかもしれない。ユウシロウ自身が会話していたのは、もっとその向こうにあるもの——その向こうに確かにいる、”誰か”。

ユウシロウはＴＡに乗る度にいつも感じていた。誰かが自分に語りかけてくるのを。だが、それが誰であるのか、さしものユウシロウ自身にも解らなかった。

＊

「一体いつになったら、ここから出して貰えるのかしら？」

無駄なことだと思いつながら、殺風景な密室の中から、私は外の入り口前で見張っているガードマンに扉越しに尋ねた。

「一清様がよいとおっしゃるまでです」

男はただ無愛想に言った。

「この分じゃあ、永遠にここから生きて出られそうにないわね……」
私は溜息混じりにそう呟いたが、それが単なる冗談で終りそうにないことをも、私は薄々感じていた。豪和は、そういう人間の集まりなのだ。そのことを知っているのは、何を隠そう、この私自身でもあるのだ。

”そう……そうやって邪魔な人間は、いとも簡単に消されてきた”
豪和が日本有数の一大軍需産業として、のし上がって来たその陰で、彼らが事実上何をしてきたのか、私の組織の情報は既に何もかも握んでいた。そして私自身も、その犠牲者の一人とも言える。

それを世間に公表するのは簡単だ。しかし、それによって生じる様々な微妙な問題が、私たちマスメディアに携わる人間の判断に足踏み之余儀なくさせていた。

それは、この日本と言う国の機構にまで関係する微妙な事柄だった。それだけこの国は悪戯に腐敗し、ただ脆弱な政治や経済基盤の上に成り立っているだけの脆さを抱えていた。

そう、それはまるで一枚の薄皮のような氷の板の上に乗っているようなものだ。たとえ表向きはどれほど豊かになろうとも、その物質的な豊かさでさえ、既に緩慢な壊死へと向かっている腐敗の一步に過ぎないのだということに、この国の大多数の国民である多くの人々は誰一人気付いてはいなかった。

いや、むしろ気付こうとさえしていないのかもしれない。

ともかく、このＴＡ開発に特自が関わっているという事実だけでも、十分に問題はあった。豪和がこれまでＴＡ開発を世間からひた隠してきたのも、実はそのことが深く関係していた。

その微妙な憲法問題が絡んでいるうちは、この兵器の開発は絶対に極秘にしなければならなかった。もしそれが公表されてもしたら、この兵器と同時に特自は瞬間に危険視され、おそらく全国民の非難的となるだろう。

そして何より、この国が軍事的に脅威となりうる強力な兵器を有することは、国連の常任理事国として、世界との盟約に違反する動かせない事実でもあった。

そう——たとえば集団的自衛権という一問題が残されているとはいえない。

いくら軍需産業として名を馳せているとはいえ、それによって生じる豪和の打撃も、無論相当なものとなる。いや、最早そんな生易しいものではない。

しかしだからと言って、なぜ私たちまでが、そんなことに臆病にならなければならないのだ。

私たちは”真実”を知っている。それを世間の人々の目に曝し、

その闇に光を当てることこそが、私たちマスメディアの真の仕事なのだ。

豪和がこれまでしてきたことによって、虐げられてきた人々……その人たちの無念を晴らすためにも、その真実は公の下に明かされなければならぬ。

私は、それこそが正義だと思ってきた。だからこそ、鷹水のいる組織のために、これまで働いてきたのだ。

しかし、時に明かしてはならぬものもある。

悪戯に光を当て、無闇に人の目に曝してはならない暗い闇の世界もあるのだということもまた、一つの真実であった。

鷹水はそれを知っているからこそ、豪和のTA開発について真実を掴んでいながら、これまで大きく出ようとはしなかったのだろうか。

”悪”は”正義”によって裁かれねばならない。

しかし、それによって傷つき行き場を失う人々もいる。

たとえそれが偽りの平和だったとしても、その穏やかに仄いだ景色を守るために、私たちはそんな密かに胎動している世の闇に目を瞑らなければならないのだろうか。

それとも……？

一体、何が悪なのか……何が正義なのか……。

2 .

豪和の三人の兄のうちの一人、清春がユウシロウの所属する特自に出入りするのとは、実際、とても珍しいことだった。

それは彼が三人のうちでも、最も特自と豪和が共同で行っている実験開発に遠い場所にいたからだとも言える。

その鋭敏な手腕と類稀なる実行力ゆえ乃三郎の片腕として、会社経営の一端を任され、既に豪和インスツルメンツになくってはならない存在となっている長男、一清。

そしてT A開発の大元を成している人工筋肉マイル1の研究者として現在、豪和中央総合研究所、通称総研にてT Aに関する総ての次世代プロジェクトに携わっている、典型的な研究者肌の人間である次男の清継。

さらに三男の青春は、いまや豪和の渉外を中心となつて海外を飛び廻り、一清や乃三郎をサポートしていた。

その青春がこうして帰国し、あまり本来彼の仕事とは関連の薄い特自のシュミレーター施設にやってきているのには、何かそれなりの必要性があるからなのだが。

だがそれは当然ユウシロウの知る所ではなかった。

「実験は順調に進んでいる」

自分の後ろで共にシュミレーションデータを映したモニターを見つめている青春に向かつて、清継がおもむろに口を開いた。

「しかし不思議だな。以前よりユウシロウの成績が向上しているように見えるが」

専門外の青春の目にも、T Aの動きは以前よりスムーズに見えた。「これまで二週間近く失踪していたというのに……本当に、まるでその遅れを取り戻しているかのような」

弟の言葉を継ぐように、さらに清継が唸った。

「それにしても、あの女はユウシロウにとって危険な存在だ」

「あの女……伊集院佐和子のことか」

「彼女のおかげで丸々二週間分がふいになった。だが、なぜかは知らんが、以前よりユウシロウは実験に対して意欲を見せているように見えるのだが」

「それが伊集院佐和子のおかげだと？」

青春が半ば面白そうに言った。

「ふ……だとしたら我々は彼女に感謝しなければならいのかな」

「そつえば一週間前、彼女が会社に現れたそうだ。のこの何をしに来たかと思えば、どうやらT Aに関する取材だそうだ」

「それはますます物騒だな」

「でも、今はそのまま、地下の施設に一時宿泊して貰ってるそうだよ」

「一清兄さんか」

「確かに今、彼女に騒がれたら面倒だから……まあ、彼女にその勇気があればの話だが」

その時、ドアの向こう側で何か物音がした。二人が振り向くと、そこには厳しい表情で佇むユウシロウの姿があった。

「ユウシロウ！」

「一清兄さんが、先生に何をしたんだ？」

ユウシロウは二人を睨みつけて訊いた。

「聴かれたか……」

清継はふと溜息を漏らしたが、言った。

「彼女のことはもう忘れる。お前に家庭教師はもう必要ないだろ？」

「違う！」

そのユウシロウの強い反発に、二人は一瞬たじろいだ。

「お前、何を……」

「先生に何かしたら、俺が許さない！」

「——ユウシロウ！？」

ユウシロウは、そのまま部屋を走り出ていった。

「待て！」

「兄さん……あの女は一体ユウシロウに何を……？」

立ち尽くす清継に清春は問いかけたが、その疑問に答えることは清継にも、そして清春自身にもできなかった。

*

「何、ユウシロウが？」

インターホン越しに訊くと、受付にユウシロウが来ているという。今、彼は特自のシュミレーターにいるはずだが。

「一清様にお会いになりたいとのことですよ」

受付嬢が丁寧と言った。

「――解った、通してやれ」

一清は半ばユウシロウが来ることを知っていたかのように、平然と頷いた。

数分後、執務室のドアがノックされ、ユウシロウが案内されてきた。

「何の用だ」

「先生は、伊集院先生はどこですよ？」

「ふ……」

ユウシロウからその名を聞くと、一清はいかにも可笑しそうに身を振った。

「特自から抜け出してまでやってきて、何の用かと思えば、そんなことか。だが、それだけの意思をお前に与えたということは、あの家庭教師もまんざらでもなかったのだな……そう、まるで人形のようなお前に」

ユウシロウは一清の言葉を聞きながら、身じろぎもせずに兄を睨みつけていた。

「だが、あれ以上好き勝手させる訳にもいくまい。お前もあんな女に関わっている暇は無いはずだ」

一清は氷のような眼差しでユウシロウの凝視を受け流し、言った。だが、

「俺は人形じゃない――」

ユウシロウはいっそう厳しい視線を一清に向けたまま言い放った。その強い言葉に一瞬一清は目を見張ったが、すぐに元の調子に戻って続けた。

「あの女の身柄を拘束したのは、何も豪和のためだけではない。今TAの開発を世間に知られてみる。いい世論的だ。どんなことになるかそれが解らないお前ではあるまい」

確かに一清の言葉には一理あり、ある意味では正しかった。

今、特自と豪和が極秘裏に行っているT A開発実験の一端が世間に知れ渡れば、いたずらに国民一人一人の不安を煽るだけだ。

これまでT A開発が極秘に行われてきたのは、当然そうならないためでもあった。（無論、その半分は企業としての豪和を守るためでもあったのだが）

当然、佐和子にもその是非については解っているはずだった。

今、彼女を解放したとして、はたして彼女はそれを世間に公表しただろうか。たとえ彼女が真のマスメディアの権利を主張したのだとしても……。

「とにかく、お前は実験に戻るんだ。それとも、これ以上彼女に迷惑をかけたいのか？」

その言葉にユウシロウは口を噤んだ。手段を選ばない一清のことだ。これ以上干渉して、彼女に何かされてもしたら……。

ユウシロウはそのまま特自に、実験に戻るほかはなかった。

*

あれから、ここに監禁されてから、もう一週間が過ぎていた。

その間中、私はずっと考えていた。本当にこれでよかったのかと。こうなることは、おおよそ覚悟していたはずだった。

しかし自分はそれでもじつとして要られなかった。

ユウシロウ——そう、彼のために何かしないではいられなかった。でも、今の自分に、彼のためにはたして何ができただろう。マスコミという肩書きを持つてはいても、今の時点でも、その明確な意思をはっきり主張できないでいる。

こんなちっぽけな自分に、彼のために何ができるのだろう。自分は自分なりの「正義」を振りかざしたつもりだった。でも、それは、その「正義」は、はたして真実だったのだろうか。

そんなことを考えるうち、私はユウシロウへの自分の気持ちについて、深く考えるようになった。

ただ彼をあのまま、あの豪和の家に置いてはおけないと思った。民間人でなおかつ未成年でありながら、豪和の都合のままに特自に配属され、何の自己の権利も承諾されないまま、まるで操り人形のように豪和に利用されている。

それからすれば私の行為は、普通に考えても当然のことだった。

……あの家でのユウシロウの扱いを見れば誰だって。

だが、一方豪和がそういった特殊な——いやある意味で異常な野心的性格を持った家であり企業でなければ、自分のしたことは立派な犯罪行為なのだ。何しろ、未成年の少年を無断で連れ出したのだから……。

そして互いの気持ちを確認した上とはいえ、結果的に彼と特別な関係になってしまった。

でも、ユウシロウは17歳のただの少年ではない。彼は？ 嵬？ なのだ。

そしてだからこそ、豪和のモルモットとして、TAパイロットとして理不尽な実験を続けねばならないのだ。だが、これこそ立派な犯罪行為でなくてなんなのだ。

だが、その理屈も彼ら豪和の人間たちには通用しない。なぜなら彼は？ 嵬？ だから。

？ ああ、ユウシロウに逢いたい——？

しかし、そう思う一方で、私は彼への思いをじつと封じ込めねばと感じていた。そうすることが今は彼のためなのだ、そう思った。

ユウシロウは自分の意思で豪和に戻ったのだ。

きっと彼なりの決着の付け方を彼は悟ったのかもしれない。

だから私は今は彼を、ユウシロウを信じたい。

と、その時、私の軟禁されている部屋のロックが解かれ、ドアが突然開かれた。そして、そこに現れた人物は——。

「おじ様！？」

不意に現れた乃三郎の姿に、私は意憑を突かれた。

「今なら出られる。佐和子君、儼と一緒に来てくれないか？」

「……」

突然のことに私は絶句した。

「実は君にまた頼みたいことがあってな……今度は？娘？を教えて貰いたい」

「娘？」

その時まで忘れていたが、私はユウシロウの下に妹が一人いることを思い出した。

「美鈴さん……ですか？」

「そうか。ユウシロウに聞いていたか」

「でも、こんなことをして……」

「大丈夫だ。私を誰だと思っているんだ？」

「助けていただいたことには感謝します。でも……」

あの一清が黙っていない、そう思った。

「……心配するな。それより、美鈴をよろしく頼む。あれは小さい頃からずっと病弱でな。それで今も学校を休んでおる」

「……はい」

突然の乃三郎の申し出に、私は戸惑いながらも、ただそう返事するのが精一杯だった。

3 .

「新しい先生？」

美鈴はふと振り返り、乃三郎に尋ねた。

東京の学校から静養のために、ここ豪和市の中学に転向してきた美鈴だったが、このところまた体調をくずしがちだったため、今は学校を休んでいた。

それに、再会したのもつかの間、ユウシロウはまた特自に出掛けたしまい、またしばらくの間会えなくなってしまったのだが、それでも美鈴は、少しでも兄の近くにいられることを幸せに思っていた。だが、一応義務教育を受けている中学生である美鈴は、豪和の一人娘としては尚のこと、勉学に励まなければならなかった。

しかし、ちょうど担当の家庭教師が都合で来られなくなってしまっていた矢先だった。

「彼女は僕の知り合いの娘でな、とても優秀な先生だ。そうだ、以前はユウシロウの家庭教師もしていた」

「ユウシロウお兄さまの!？」

*

私は今度は美鈴さんの家庭教師として、彼女に語学と、そして数学などを教えることになった。

「豪和美鈴です。よろしくお願い致します」

彼女は由緒ある豪和の末娘らしく、非常に礼儀正しくおとなしい、そしてとても優秀なよい生徒だった。それはユウシロウと少しも変わらなかった。

例によって、乃三郎に紹介された美鈴を前にして、私は思った。

確かに、あの時自分を監禁した一清が、このまま黙ってはいないという一抹の不安を抱きながらも、それでも今は、ただ再び穏やかに過ぎ去る時間を信じていた。

以前ユウシロウを教えたこの家で……。美鈴さんの先生をしていただける今だけは、ユウシロウのことは、しばし忘れようと思っていた。

それに、やはり彼の妹だけあって彼女は、少しだけユウシロウを偲ばせた。それは彼女が殊更に兄のことを想っているからでもあったのだが。

だが、ある時、そんな美鈴に微妙な変化が現れた。

いつもは座敷に置かれた机に差し向かいで座っていた私たちだったが、ふと彼女の隣に座って、彼女のノートを覗き込んだ時だった。その途端、美鈴がびくつと膠着したように私には感じられた。

「……どうかした？」

「いいえ、何でもありません」

すぐに美鈴は否定し、私もその時は美鈴の言うように何でもないと思っていた。

しかし次の日、私は彼女から思いもかけぬ質問を受けた。

「伊集院先生……先生はユウシロウお兄さまが行方不明になられた時、お兄さまと一緒にいられたのですか？」

「えっ」

私は言葉に詰まった。思いもしない問いかけに戸惑う私を前に、美鈴自身も戸惑った。

「い、いいえ。ただなんとなく、そんな気がして……」

美鈴はそのまま黙り込んでしまったが、その日を境に、私たちはなんとなく互いにぎこちなくなってしまった。彼女も私も言葉にこそ出さなかったが、二人の間に常に変に張り詰めた空気が漂うようになってしまった。

ただ何となく漠然と互いが互いを警戒しあっていた。

だが、本当に何かを恐れていたのは、実は私の方だった。

そしてある時、そのピンと張り詰めていた心の糸が、ぷちんと音を立てて切れた。

「……伊集院先生。私、先生にお聞きしたいことがあります」

美鈴の思い詰めたようなその声色に、私は思わず緊張した。

「先生は……やっぱりユウシロウお兄さまと」

私は勘の鋭い美鈴の問いかけに絶句した。

「ユウシロウお兄さま、ずっと帰っていらっしやなくて……そして私、偶然、春お兄さまたちの話を聞いてしまって。その時お兄

さまは、女の人と一緒にだつて」

二人の間に緊張した空気が流れる。その膠着した空気を破るかのように、美鈴は淡々と続けた。

「先生は、以前ユウシロウお兄さまの家庭教師をなさっていたとお聞きしました？」

「……ええ、そうよ」

美鈴の有無を言わさぬ雰囲気気圧されたように、私はただそう答えた。

「私にとってユウシロウお兄さまは、本当にただ一人のお兄さまなのです……一清お兄さまたち、他の三人のお兄さま方とは違つ……たつた一人の大切な」

ふと美鈴の声が懐かしく潤んだように思えた。しかし次の瞬間、再び美鈴は強い口調になつて言つた。

「ですから、私には解るのです——」

私はびくつとなつて息を殺した。

「先生は……ユウシロウお兄さまのことが好きなのですか？」

「……美鈴さん」

私は殊更に戸惑いを隠しきれなかつた。でも、否定はできなかつた。

「……お兄さまが帰つてらっしゃってから私も私、ずっとお兄さまを信じていました。だつてお兄さまは、決してそんな方ではないですもの……でも、あの時、お兄さまから女の方の香水の匂いがして」

私ははつとした。

美鈴さんは、それが私の香りだと気付いたのだ。

どうしてもつと早く気が付かなかつたの？

この娘は、美鈴さんは……きつとユウシロウのことを。

「美鈴さん、私は」

「伊集院先生、先生は、お兄さまが好きなのですね」

美鈴はもう一度訊いた。

私は真つ直ぐ問いかける彼女の真剣な眼差しに射竦められ、動け

なかった。その瞳には決して嘘はつけない気がした。

そして観念するかのように、とうとう口を開いた。

「ええ、好きよ」

その途端、美鈴は涙目で私をキッと睨み付けると、わなわなと唇を震わせ、ひと言、

「許せない！」

そう小さくぴしゃりと言い放って、部屋から出て行ってしまった。

翌日から美鈴は、気分が悪いと言って自室から一步も出ようとしなくなった。勿論、私に会おうともしなかった。

私は半ばしかたないと思った。

そう。ユウシロウとのことは、誰に何をどう思われようと、もう弁解などできないことだった。それよりも辛かった。私は彼女から、美鈴から、一番大切なたった一人の優しい兄を奪ってしまったのだから。

たえ？妹？とはいえ、それは彼女の尋常でないユウシロウへの想いを知ってしまったがために、尚更胸を痛めつけた。

小さい頃から身体が弱く、満足に学校へも通えないため、これまでずっとたった独りだった美鈴——そんな彼女の大切な絆。

この大きすぎるほど大きい、ある意味不気味な静けさを醸し出す豪和の家の中で、小さな、でもあたたかい、この上ない確かな温もりを求めて、彼女はずっと一人さまよい続けてきたのかもしれない。それが美鈴にとって、ユウシロウだったのだ。

そんな彼女にとって私は……いいえ、それだけじゃないわ。

そう、私は彼女から、たった一人の大切な純粹無垢な思い出でもある、ユウシロウという17歳の兄を奪った、文字通りの汚らわしい年上の大人の女よ。

？ごめんなさい……ごめんなさい、美鈴さん？

私は、いつのまにか独りきり部屋の中で泣いていた。

「総代、なぜあの女を解放したのですか」

一清の幾分非難を含んだ声音と、例の怜悯な視線を背後に感じながら、乃三郎は空中に視線を漂わせていた。

「まさか、今度は美鈴の家庭教師にするためだけに、彼女を再びこの豪和の家に連れて行ったとしても言うのではないでしょうね？」

乃三郎は、一清の尋問に一切答えようとはしなかった。

が、ややあつて、やっとその重い口を開いた。

「彼女には大切な存在価値があるのだ……そのために帰国した彼女をユウシロウの家庭教師として雇った」

「それは——？」

これまで一清はずっとその理由を乃三郎の口から訊きたかったのだ。

なぜ豪和に復讐しようとしている佐和子を、それと知っていないがら、わざわざこの家に招き入れたのか。だが、これまで終ぞ、乃三郎からそのことについて語られることはなかった。

しかし乃三郎の口から出たのは、意外な事実だった。

「それでは、あの女は……」

「そうだ、彼女は伊集院の本当の娘ではない。彼女は佐和子は、この豪和の家の人間なのだ」

一清は初めて聞かされたその真実を、身じろぎ一つせずに聞いていた。

「まさか、それも？ 兎？ と何か関係があるというのでは……」

「そうだ、その？ まさか？ だ」

その乃三郎の言葉に、一清はにやりと口元を歪めた。

？ 絶対に許せない、絶対に？

美鈴は何度も心の中で繰り返した。まだ脈を打つ心臓の鼓動が早鐘を打ち、ドキドキしている。

彼女は、自分からたった一人の大切な兄を奪おうとしている。いや、ユウシロウはもうあの女と……。

まだ実際にユウシロウ自身から、事の真相を訊いたわけではなかったが、美鈴には、ある確信があった。

お兄さまは何かが変わった、明らかにこの数ヶ月間で。

随分とユウシロウと会っていないかった美鈴だけに、ことユウシロウのことに關しては、鋭い勘が働くのだった。

でも、美鈴には俄かに信じがたかった。

あの兄が年上の女性と……確かにユウシロウ本人に彼女との事を訊いた訳ではない。だからまだ救いはあった。

それに何より兄は一人で戻ってきたではないか…… たった一人の妹の元へ。

それは、佐和子との関係を絶つために？ それともあるいは、彼女とは何でもないことの何よりの証なのではないか。

それは、ユウシロウ自身にもう一度会って確かめれば、すぐ判ることだ。

しかし美鈴には、それがなぜだか、とても躊躇われた。ユウシロウを信じないわけではない……でも……。

美鈴は、嫌な胸騒ぎを感じずにはいらなかった。

*

？まさか、あの女にそんな存在価値があるとはな……？

乃三郎の話を、一見ほとんど驚きもせず聞いていた一清だったが、それでもこの話は、彼には意外だった。

ずっとあの女——伊集院佐和子には何かあるとは思っていたが、まさかそんな伏兵であったとは。

あるうことが豪和の血縁にあり、それも、もしかしたら最も？ 兎？ の血を色濃く引く人間かもしれないとしたら……。

それなら彼女を豪和の懷へ、そしてユウシロウの最も近くへ置い

たのも納得がいく。

事実、彼女と出会ってからというもの、ユウシロウのT A実験の成果は驚くほど上がっていた。図らずもユウシロウと彼女の結びつきが強いものであったことが証明されたのだ。

すべては？ 唄？の血筋を強固とするため……。

幾ら彼女やユウシロウ自身が己の身内だとしても、手段を選ばない。やはり乃三郎は真の意味で？ 唄？に、いや餓沙羅鬼に取り憑かれた人間だったのだ。

？ククツ……？

一清は腹の底から込み上げる笑いを抑えることが出来なかった。

「お父さん、貴方はやはり本物だ」

一清の呟きは、まるで執務室の暗い壁に吸い込まれていくように、低く不気味に響いた。

4 .

ある晩、美鈴は意を決して乃三郎の書斎を訪ねた。コンコン、と美鈴がノックすると、

「入りなさい」

中からくぐもったような父の声が聴こえた。部屋に入ると、

「どうした、もう具合はいいのか？」

本に落としていた視線を上げ、乃三郎が訊いた。

「あ……はい」

美鈴は自分を覗き込むような乃三郎に戸惑うように、俯いて応えた。しかし彼女は決心したように、次の瞬間口を開いた。

「あの、お父様。ひとつお聞きしたいことがあるのです——！」

「ん？ なんだ」

「あの……」

言い淀む美鈴。最初の勢いと打って変わって、なかなか話を切り出そうとしない美鈴の逡巡を知ってか、逆に乃三郎はこの大切な一

人娘に囁いた。

「伊集院君がお前のことを心配していた——具合はもうよいのかと」
その名を聞いた途端、美鈴は思わず身を硬くして顔を上げた。そして……、

「先生と、あの……ユウシロウお兄さまのことなのですが」

美鈴はそこまで言っただけの瞬間、頬が紅潮するのを感じた。そして視線を逸らし、そのまま続けた。

「ユウシロウお兄さまと先生は……」

だが、そこまで言うのが精一杯だった。

美鈴は言っただけの事実を言ってしまったかのようになり、触れてはならないことに触れてしまったことを悔やむように、弾かれたように踵を返すと、小走りに部屋を出て行ってしまった。

「美鈴……」

乃三郎は、その瞬間、美鈴が二人の関係について知ってしまったことを察したのだった。

？私、お父様に何を訊こうとしていたの？

美鈴は先程のことを深く後悔していた。それは彼女の恥じらいからくる後悔でもあった。

そして、

？お兄さまに会いたい？

ただそう強く願った。お兄さまに会えば、きっとこの見えない不安はすぐに解消される。

大丈夫。そう、きっと大丈夫よ。

お兄さまは、いつでも私に優しくかった。あの時、帰ってらっしゃった時だって。

そうよ……お兄さまは、私だけのお兄さま。私にとって世界でたったひとりだけの……。

その時、美鈴は家を抜け出して、兄に会おうと決心していた。

その頃期せずしてユウシロウも、もう一度一清の元へ赴き、今度こそ私を助け出そうと心に決めていた。

事実TAのシュミレーター走行実験も、まるであの空白の二週間を取り戻すかのようにユウシロウの成績がアップしたおかげで、一段落付いていたのだ。

？やはり先生をあのままにはしてはおけない？

ユウシロウは特自にいる間中、片時もずっと私のことを忘れたことはなかった。

が、ユウシロウは知らなかった。私が再び豪和邸に来ていることを。

そしてある夜、特自の実験センターの宿泊施設の門を潜って外に出たところで、ユウシロウは本当に偶然、美鈴と出合ったのだった。

「美鈴？」

「お兄さま……！」

「どうしてここに？」

「……」

ユウシロウの問いに美鈴は口籠った。でも、すぐに満面の笑みを浮かべて、兄との再会を美鈴は喜んだ。

「会いたかった、お兄さま」

とりあえずユウシロウは、彼女を家まで送ろうとしたが、美鈴はなかなか帰りがらなかった。確かにせっかく偶然会えたのに、そう思う気持も解らないでもなかったが。

「皆が心配している。どうした？美鈴」

時間も時間だけに、ユウシロウは美鈴を促した。

だが、次の瞬間、ユウシロウは美鈴が微かに涙を浮かべているのに気付いた。

「美鈴……」

「お兄さま、私、寂しかった。せつかく家に帰っていらしたと思っ
たら、もう出掛けてしまわれて……でも私、お兄さまを困らせるつ
もりなんか少しもなかったんです」

「すまない、美鈴」

ユウシロウは優しく美鈴の肩を抱きしめようとした。

しかし、その途端、美鈴の身体がびくつと膠着した。美鈴は反射
的にユウシロウから離れた。

「美鈴？」

美鈴の身体は心なしに震えていた。そしてユウシロウを捉えたそ
の瞳は、明らかにいつしか凍りついていたのだった。

しばらくして、美鈴はやっとの思いで口を開いた。

「お兄さまには……今お兄さまには、好きな方がいらっしやるので
すか？」

「……！？」

ユウシロウは、突然の妹からの意外な質問に戸惑った。そして瞬
間、彼の脳裏に私の顔が浮かんで消えた。

「美鈴……お前」

美鈴は戸惑い言い淀むユウシロウの顔をじつと見つめた。

「伊集院先生、今家に来ています」

「先生が！？」

私の名を口にした途端、突然ぱつと驚いたように見開かれたユウ
シロウの瞳に、美鈴は一瞬びくつと身体を硬くした。

「そうなのね……やはりユウシロウお兄さまは？」

すると突然、美鈴は表情を無理に明るく変えて話し始めた。

「伊集院先生、今私の勉強を見てくださっているんですよ。とても
解りやすく教えて下さるし、それにとっても優しくして下さって……
本当に素敵な方ですよ」

背を向けた美鈴の声が次第に小さくなり、俄かに震えていくのに
ユウシロウは気付いた。

「……美鈴」

次の瞬間、美鈴はぱつとユウシロウに振り向き、一気に訊いた。

「……お兄さまは、先生のことが好きなのですか？」

「……！」

互いに瞳を見開いたまま、二人は夜の路に立ち尽くしていた。

ユウシロウは面と向かつての美鈴の問いかけに、実際、躊躇していた。

？俺が先生のことを……？？

あらためてユウシロウは自問した。

実際にそうかもしれないかつたし、でもまだ彼には自分自身の気持ちを正確に量りかねている部分があつたのも、また事実だつた。

確かに先生——伊集院佐和子は、ユウシロウにとって魅力的な女性だつた。というより、むしろそれは佐和子自身の彼への積極的な働きかけが、そうさせていたのかもしれない。

ユウシロウは、その時まだ受身だつた。

それはこれまで続けてきた豪和のＴＡ開発に参加していたことも繋がる。

彼はおよそ５ヶ月前、すべてに対して受動的で真っ白な自分であつたことを思い出した。

でも、それも彼女——伊集院佐和子との出会いが切っ掛けで、すべてが雪崩のように崩れ出していった。新しい何かが彼の中で始まり、新たな時が流れ始めた。

その切っ掛けを作つた佐和子との出会い。

これまで真っ白だつた彼の空白を埋めた、一線を隔てた先に在る年上の美しい女性^{ひと}。

ユウシロウはあらためて思い返した。そんな風にまぶしく輝いていた彼女との日々を。

確かにまるで借り物のように感じられた、これまでの彼の記憶からすれば、すべてが初めてのまぶしい体験だつた。

その時間を？好き？という言葉で言い表すことができるのなら、ユウシロウは年上の女性である先生——佐和子と確かに恋をしてい

たのかもしれない。

まだ無垢な赤ん坊のような未完成の自分の心を、佐和子は鮮やかな色彩で彩った。

ユウシロウはおそらく生まれて初めて？恋愛こい？という感情を経験した。

それは彼女自身の情熱がそうさせたのかもしれないが、互いに惹かれあい求め合ったのは確かだった。

それがきつと？恋？？

……いやユウシロウにとって、きらきらと眩しく生きている実感そのものと言ってもよかったかもしれない。

そんな生の喜びを、佐和子はユウシロウに運んできた。

実際、殊更に何事においても真摯なその性格が、一人の人間としてユウシロウはとても好きだった。

そして何より――。

”自由になつて”

――ひたすら自分を氣遣つてくれるそのあたかな優しさが、彼は嬉しかった。

美鈴意外に初めて彼を”ひとりの人間”として扱ってくれた、信頼というものをくれた、その静かな眼差しが。

それが不器用な彼にとって、恋と呼べるのなら恋なのかもしれない。

だがはたして、それだけなのか……いやもつと違う、そう何かが。彼はあらためて、自分自身が？唄？であることを実感として思い出した。

……彼女は一体誰なのだろう？

あらためてユウシロウは佐和子の姿をその脳裏に追った。

けれど今は、美鈴にそんな自分の気持ち正直に伝えるべきではないとユウシロウは思っていた。たとえ妹とはいえ、真実を知って

今傷つくのは美鈴一人なのだ。

ユウシロウは、どんなに美鈴が兄である自分のことを慕ってくれているのか、よく知っていた。本当に美鈴のそれは兄以上、妹以上の感情であつたのかもしれない。

そしてユウシロウは、そんな美鈴の存在に本当に感謝していたし、事実、彼女を妹として、とても大切に思つてもいた。

ある意味で、最愛の妹――。

それなのに、ある意味で身勝手な自分の気持ちのせいで、彼女をいたずらに傷つけることなど彼には到底できなかった。

「先生は俺にとって？先生として？大切な人だ……でも、本当にただそれだけだ」

「本当に？」

「……ああ」

「うそ――！？」

美鈴は胸の中で思った。

お兄さまの本当の気持ちは、私が一番よく知っている。伊集院先生に初めて会つた時、それがよく解つたもの。

美鈴はユウシロウといるのが急に耐えられなくなって、兄を振り返りもせず、ぱつと駆け出した。

「美鈴！」

その頃、美鈴が突然いなくなったことに気付いた豪和邸の人々は、俄かに騒然となつていた。

「豪和市警に搜索命令を――！」

「待て――とりあえず我々だけで探せるだけ探すんだ。まだそう遠くへは行っていないはずだ」

乃三郎の指示の元、美鈴の搜索が大々的に、だが密に行われた。もしかしたら？

私は彼女は、ユウシロウに会いに行つたのだと察した。

私が提案するまでもなく、当然特自へも連絡が入れると、な

ぜかユウシロウも特自の寮からいなくなっていたことが判明した。

もしかしたら二人が一緒にいる可能性も否定できなかった。

「私も探しに行きます」

「頼む」

私は豪和邸を後にし、寒空に澄み渡る夜の市街へと出て行った。

第六章 ― 月影の章 ―

1 .

慌しく足早に過ぎていく季節は、既に初秋に突入していた。

日本アルプスの山々に囲まれた盆地に位置する豪和市。

その地方都市にも、既に乾いた秋風は俄かに目に見えるように吹き始めるようになっていた。

澄み切った冷たい夜気が頬を掠めていく。

私はぽつぽつと街路の灯る舗道を、足早に歩を進める。さらに豪和市の一角にある特自の実験センターに向かってタクシーを拾う。今頃ユウシロウと美鈴は自分の思った通り、ともに出合っているのだろうか。

その頃ユウシロウは、人の波に飲まれた美鈴を追って、夜の路をさまよっていた。

やはり病弱な美鈴のことが心配だった。それほど遠くへは行けないとは思いつながら、ユウシロウは美鈴の身を案じた。

たったひとり、兄である自分を求め、ずっとさまよっていた美鈴の心は、だがしかし今は、独りきり夜の寒空の下を、あてどなく漂っていた。

そう思うと、ユウシロウの胸は痛む。

美鈴は俺と先生のことを……。

だが、幾ら悔やんだとて、真実は何一つ変わらない。

もし何か一つ実の妹である美鈴に自分ができることがあるとしたら、何よりも自分の心に嘘をつかないことだ。それこそが誠心誠意、最愛の妹に対する偽りない兄でいることなのかもしれない。

しかしそれは同時に、美鈴にとって最も残酷な仕打ちであることも、また変わらなかった。

「美鈴、どこにいる……！」
だが、どれほど案じても、今の美鈴には兄の心でさえ届かなかった。

しばしタクシーに揺られた私は、シミュレーションセンターのある特自実験棟の門前に降り立った。

ここで日々ユウシロウは……。

ふと、そう思い巡らせたが、すぐに気持ちを切り替え、そこから改めて二人の足取りを追うことにした。

ユウシロウと美鈴さん——血を分けた実の兄と妹。それなのに、やけに心が騒ぐ。

何より美鈴さんの私を見る棘のような視線が痛かった。

それでも私は、ユウシロウとの事を偽ることなどできなかった。

二人に芽生えた何かはもう花開き、確かな実を付けようとしていた。

”お兄さまが好き——”

明らかに美鈴の潤み詰るような瞳はそう語っていた。

どこまでも一途で純粋なその想い。

けれど”私たち”は、もしかしたら、たぶん似た者同士なのかもしれない……？

——美鈴さんは、きっと認めようとしなくてもいいかもしれないけれど。

でも、私にはその気持ちが痛いほどよく解る。

そう、たとえ兄妹だろうと。教師と生徒だろうと。

ふと前髪を揺らして通り過ぎる夜風にコートの襟を立て、私はまたユウシロウの温もりを思い出した。その同じ温もりを欲している少女がひとり、彼を恋しがって泣いている。

そう思うと、殊更にきりりと胸を刺す痛みが増した。

私たちはユウシロウという静かなる青い惑星を廻る、まるで二つの衛星のようだ。

その二つ月は互いに反発しあっているようで、その実その引力は、どうしようもなく引き合ってしまうのかもしれない。

そう——ユウシロウという、かけがえのない大地を中心に据えた
まま。

美鈴は死んでしまいたいと思っていた。

”お兄さま……ユウシロウお兄さま”

その名ばかりが何度も脳裏をよぎる。このまま兄の面影を抱いて、
冷たい湖の底に身を投げてしまいたい。

そう、オフィーリア。あのシェイクスピアの一節のように……。

常日頃、愛読してもい、まだ学校に通学していた頃、所属してい
た演劇部の劇の台本でもあったそれを思い出し、この場に河も湖も
ないのに、美鈴はまるで不幸に酔うヒロインのように思った。

けれど心とは裏腹に、自分はその兄の前から逃げ出した。逃げ出
してしまった。

……最愛の兄。

そうよ、ユウシロウお兄さまは……私……私の。

そこまで切なく思い詰めて、いつでも感情がストップする。いや、
正確には自らブレーキをかけてしまうのだ。

それでも美鈴は、いつしかユウシロウと自分との間に現れた、美
しい女教師の存在を知ったことで、いつかその思いを停めることを
やめてしまいそうな自分自身がここにいることを知って、心ならず
も狼狽した。

——怖い。

それでも、限界まで昂ぶった思いは留まるところを知らず、気づ
けば、いつのまにか理性のたがを外してしまいそうになる。

……でも。

それがユウシロウお兄さまのなら……。

怖くない、と思った瞬間、美鈴はとんでもないことを考えている
自分自身に気づいてしまった。

嫌！……私、わた、し、は……。

そんなのじゃない。そんなの、まるで”あの女”^{ひと}と一緒にじゃない。

違う、私とユウシロウお兄さまは。

そこまで考えて、美鈴ははっとした。

”伊集院先生、も……？”

いつしか美鈴の足取りは、その心とともに鈍くなっていった。何より、碌に上着も羽織らず、制服のままの姿では、さすがに夜風が身体に障ってしまったようだ。

繁華街を行き交う人の波から外れ、ふらふらと歩くその足には、既に力がこもっていなかった。

”帰りたい……ユウシロウお兄さまのところへ”

熱っぽくなった額を携え、はあはあと美鈴は肩で息をした。

”私、伊集院先生に酷いことを言ってしまった——”

今更のように、その恋敵であり自分と兄の先生でもある女性の悲痛な表情を思い出しながら、美鈴はきゅっと胸が苦しくなるのを感じた。

許せない——絶対に許せなかった。

けれど、でも。

先生もユウシロウお兄さまも、お互いがきつと好きなのですね……。

二人の間に自分が入り込む隙など、最早ないのだと悟った。……

それでも。

私、もうお兄さまの傍にいられないのか、な？

そう思った途端、目の前が暗くなった。

「美鈴さん……！」

聞き覚えのあるその声に助け起こされ、美鈴さんは舗道の片隅で目を開けた。

「……伊集院、先生……？」

「よかった——皆、心配しているわ。きっとユウシロウも……」

その名が目の前の女性の唇から零れるのを目にすると、美鈴さん

はひときわ目を見張り、心配げに自分を抱いて見下ろす、切れ長の瞳と視線がかち合うのを感じた。

その瞬間、思わず私は出かかった言葉を嚙んでしまった。

しかし、ふいに視線を逸らすと美鈴さんは言った。

「ごめんなさい、先生」

「……美鈴さん」

彼女が何を考え、何を言わんとしているのか、私には手に取るように解った。

それよりも――。

すっかり冷え切った美鈴さんの身体をコートでくるむと、冷たくなったその手を握った。

「先生の手、あたたかい……」

実際はこの寒空の下、美鈴同様にコート一枚羽織っただけでいたのだから、それほど私の手は温かいとは思えなかった。

でも美鈴さんは、その手を弱々しく握り返した。

「ユウシロウお兄さまも、きっとこの手が好きなのね……」

ぼんやりと夢みるように言うと、美鈴さんはそのまま目を閉じた。

「美鈴さん……！」

その後、私が偶然ユウシロウと出合ったのは、気を失った美鈴さんを背負い、車を拾おうと夜の街をほんの少し歩き出してからだった。

「先生……美鈴！」

不意に二人が一緒であったことを知り、瞬間ユウシロウは戸惑ったが、美鈴さんの容態に、それどころではないと悟り、すぐに駆け寄った。

「熱が少し……でも、もう大丈夫よ」

「よかった……」

さすがにほつと胸を撫で下ろし、ユウシロウは私から妹を受け止め、今度は自らの背にその華奢な身体を背負うのだった。

予定を変更し、大事を取って私が携帯で救急車を呼び寄せると、ユウシロウは口を開いた。

「すみません——ご心配をおかけして」

久しぶりに逢えたのに、なんだか少し淋しい。

そんな贅沢な寂しさが二人を包んだ。

でも、今はそれでもいい。

たとえ他人行儀であろうとも、こうして久方ぶりに互いの顔を見交わせただけでも、私は十分だった。それより——。

意識を失っているとはいえ、美鈴さんの手前、その嬉しさを素直に態度に表すことが、なぜだか躊躇われた。

それはユウシロウも、きっと同じだろうが。

病弱で、ユウシロウしか精神的に頼れるきょうだいのいなかった美鈴さん。

たえ”兄妹”だとは言え。その心には、やはりユウシロウの存在が必要不可欠なのだ。

そのことが解っているからこそ……。

到着した救急車に美鈴が運び込まれると、碌に言葉も交わさず、ひと時の僅かな再会を終えるその瞬間、二人は無言のまま、目と目で深く会話した。

今度はいつ会えるのか……。

そんなことに思いを馳せるより、ユウシロウと私には、もうすべてが解っていた。

今、そして今後、二人がどうすべきなのかを。

”先生、無事でよかった……”

”ユウシロウ、元気なのね……”

瞳と瞳で頷き合い、まるでテレパシーでも交わすかのように、二人は沈黙を以て話した。

まるで見えない硝子の壁越しにみつめあっているかのように……互いの眼差しが静かに絡み合い、いとおしげに刹那の手のひらを合わせ。でも。

きつと離れていても一緒にいる。そんな確信とも思える何かが、私たちの間に漂っていた。

美鈴さんを豪和市内の病院まで送り届けたら、ユウシロウは再び特自での実験の日々に戻り、そして私は……。

ああ、そうか。美鈴さんの容態が安定しない間は、豪和の家にいても――。

きつと美鈴さんは、またすぐよくなるだろう。おじ様も、もうしばらく美鈴さんの勉強を見てくれと言ってくれるだろう。……けれど。

どちらにせよ、どこまでも暫定的な家庭教師でしかなかったのだ。それも、豪和総代である乃三郎の配慮がなければ、一体今頃どうなっていたことか。私は蛇のような一清の凍った視線を思い出した。

「先生、ありがとう――さようなら」

「さよなら……ユウシロウ」

ユウシロウの口から零れた別れの言葉に、私は蒼白の表情で答えた。

でも、まだすべてを諦めたわけじゃない――
そう、まだすべてを。

見あげると、薄青い光源を微かに放つ、冷たい三日月が目に入っ

た。
また会いましょう――ユウシロウ。

きつと、いつか、また。

2 .

「ん……あつ……」

切なげな吐息がマンションのワンルームに木霊する。

大人の男女が抱き合い、喘ぐ声――それは幾年も人の間で繰り返

されてきた密かな営み。

誰もが寝静まったはずの深夜、常夜灯のように夢の中に灯り続ける明かり。

いや、それは月明かり、か。

まるで閉め忘れ緩んだ蛇口から、ぽたんぽたんと零れ落ちる水滴のように。

私は男の中で我を忘れ、ひとりの女である証を貪っていた。

背中にこぼれる長い髪は汗を吸い、湿り気を帯びて夜光虫のように光っている。

その下に顕れた、まろやかな尻を鷺掴みにされ、律動し繰り返される歡喜の渦に酔いしれる。

まるで何かを忘れるように、何かを吹っ切るかのように思い切り――私は己の中の女の性を存分に解き放っていた。

「はっ……ああ……あ、ああ」

静まり返った室内に暗く灯る僅かなライトに照らし出され、のけぞるその女の白い肉体は、長年馴染んできた懐かしい温もりに、久しぶりにその肢体を預けている。

男はしかし、半ば戸惑っていた。

一度自分から離れたと思っていた芳しくも愛しい香りと感触が、こんなにも簡単にこの手に戻ってきた。

それはなぜなのか。

そう思えば思うほど、そんなことはあまりに無意味なことに思えてくる。

なぜなら女は今こうして確かに、自分の手の中で、たまらない快楽を伴いながら、切なく淫らに喘いでいるからだ。

「誠司さん……もっと……もっと欲しい」

耳元で叫ぶ大胆な囁き。そう、もっと……もっと。

私はただひたすら、我を忘れて狂おしい快楽に身を任せる。それはまるで、死の間際に遭遇する、あまりに刹那的な不思議な感覚に近かった。

そう——まるで生と死の狭間の一種の生存競争のような。

そうでもしなければ、自暴自棄にはなれない。いや自暴自棄になっているからこそ、今こんなことをしているのかもしれないが。

「どうした……急に？」

FOIJ東京本社に近いその高級マンションの一室に、突然私が現れると、鷹水は面食らうでもなく、あまりに自然に出迎えてくれた。

それがいつも彼が私に対して接してくれる態度だ。いつ何時も変わらずに。

その問いかけの答えを探すように、しばらく黙りこんでいたが、私はもどかしげに玄関ドアを閉めると、久方ぶりに昔の男の懐に入り、自ら内側から鍵をかけた。

” ユウシロウ君は……？ ”

鷹水は無論、その問いを口にはしなかった。たとえ訊いてもせないことだ。それはそう尋ねられる私自身としても、確かにそうだった。

「どうしてかな、急に——」

やっとそう一言だけ呟くと、突然胸が熱くなり、堰を切って涙があふれ出てきた。

気がつくとは私は鷹水の胸の中で、土砂降りのように泣きじゃくっていた。

自分でも卑怯だと思う。

こんな風に甘えられる場所が残っていたことを、私はまだ覚えていた。

——そして不意に浮かんだ、懐かしいその顔。

「抱いて……誠司さん」

鷹水は待ちわびたその囁きを逃さなかった。嵐のように強い腕の力で私を抱きすくめると、その髪にうなじに口付けした。

怖いくらいに押し黙ったまま、まるでこれまでの鬱憤を晴らすか

のように。鷹水の愛撫は容赦なかった。唇だけでは収まらないキスを、ついにはまるびでた躊躇いがちな丸く形のよい乳房に落としては、その先端を執拗に啄ばんでいく。

——舐めて、もっと。

もう止まらない。身体中を熱病に冒されたように……いつしか両脚を開かれ、熱い接吻をその濡れた下肢に受け入れながら。私はうわ言のように、その抱擁の迷宮で、高い声でずっと啼き続けた。

それなのに、どうしようもない妙な違和感が二人を押し包む。

少なくとも以前は、こんな誘い方をする女ではなかった。こんなあからさまな浅ましさを男の前で曝け出すやつではなかった。

そう……本当に私は自暴自棄になっていたのかもしれない。

”どうした——佐和子”

未だ熱い抱擁を降らせながら、鷹水はその甘い肌に問いかけた。

死にそうなほどの快楽に身を任せながら、それでも私の意識はどこかで醒めていることを悟っていた。醒めた俯瞰の視点の自分が、真上から意地悪く自分自身を見下ろしていた。

”ユウシロウ君を救いたいんじゃないかったのか？”

鷹水もまた、完全には溺れきれない違和感を肌で感じていた。

そう、それは心ここにあらずの人形を抱いているような……。

自分が生きるための方法を教え、これまで育て上げてきた可愛い

——愛しい、その魂の容れ物である身体の隅々までを覚えているからこそ。

あの日、彼女は一人立ちしようとしていた。自分の手から巢立っていかうとしていた。

それを促したのは、他の誰でもない、豪和ユウシロウ……。

それなら、それでかまわない。まるで娘を嫁にでもやる父親の気分だ。

父親、か。

鷹水は思わず苦笑した。

確かにそうかもしれない。俺は彼女の父親代わりだったんだ。

だが、それでもいいと思っていた。死んだ家族の恨みを晴らすまでは、指輪はつけないという約束を了解してまで、やっとエンゲージリングを手渡したというのに。

しかし、鷹水が佐和子に与えていたのは、父親、家族としての愛情だった。

無論、私はそれを心から望んでいたのかもしれないが。

ただ与えられる側から、与える側にメタモルフォーゼしただけなのだ。

私にその変化を促したのは、ユウシロウだった。

その”娘”とこうして交わっているんだから、俺も浮かばれないな。

相も変わらず続くその違和感の中で、鷹水は自嘲気味に笑った。

それでも翌日、私が落ち着くと、その心を試すかのように、やっ

と鷹水は告げるのだった。

結婚しよう——と。

3 .

あれから一週間、美鈴の体調はすっかり回復していた。

もつとも、少し風邪をこじらせてしまっただけで、肺炎に至らなかったのが幸いだった。

そんなことより、美鈴が気掛かりに思っていたのは、私、伊集院佐和子のことだった。

市内の病院を様子を見て退院してからというもの、佐和子の姿が家にないことを、美鈴はずっと気にかけていた。

乃三郎に訊いても、先生は自己都合で、しばらく休んでいるとしか教えてくれない。

結局、一度見舞いの花束を届けてくれただけで、終ぞ佐和子の顔

を見ることはなかった。

その代わり特自の実験の合間を縫って、頻繁にユウシロウが見舞いにやってきてくれたことは、美鈴としては、確かに嬉しかった。

——でも。

そのユウシロウ自身も、佐和子については一言も何も言わない。それは当然、美鈴の気持ちを汲んでのことだろうが、それではあまりに淋しすぎる。

”ユウシロウお兄さまは、先生のこと気にならないのですか？”
折を見て、何度そう尋ねようとしたことか。

だって”自分の好きな人の好きな人”のことですもの……。
気にならない方がおかしい。

美鈴の理屈としては、そうだった。

表面では微笑みを浮かべてはいるが、心なしかユウシロウの表情が悲しげに翳って見える瞬間があった。

やはり、伊集院先生のこと考えてらっしゃるの……。

「具合は大分よくなったか？」

美鈴は自分の身体のことより、ユウシロウの今の心の状態の方が、余程気掛かりだった。

これでは、どちらがどちらを見舞っているのかわからない。

物思いに耽って月を眺めていると、遠く離れたその人の面影が月の鏡に映る。

なぜなら月の鏡は、普段は見えないものを、光に反射して見せるから——。

4 .

数日後、私は鷹水の組織の元へと戻った。
まるで、何事もなかったかのように。

本社のある東京から遠く離れた北九州は福岡支部にも、足早に深まる秋の訪れがやってきていた。その屋舎近くの時計台の風見鶏が、窓辺越しに吹く寂しげな涼風に揺れていた。

私は鷹水の秘書として、共にその九州、FOEJ福岡支部に赴いていた。

無論、その目的は豪和の伝承の淵源である、筑紫王朝についての詳細な現地調査であったのだが（実は、その陰に巨大コングロマリットであるシンボルの存在も見え隠れしていた……）。

その薬指にいつしか光る、エンゲージリング……。

これでいい。これでよいのだ。元々こうするのが一番よい選択だったのだから。

私は、常に傍らで優しく微笑んでいる鷹水の存在を殊更に意識した。

まるで遠い昔から、既に仲睦まじく連れ添ってきたかのような二人の道筋。

その先には、どこまでも穏やかで平凡な幸せが、おそらく私を待っている。

しかし、それでもなおのこと自らの心を苛む、ある一つの存在――

……。そう、豪和ユウシロウ。

鷹水は彼のことは忘れる、と言う。

そして私自身も、そうしたつもりだった――多分おそらく一時は。だがやはり、未だにユウシロウが豪和の操り人形であるという事実が消えてはいなかった。

彼はどこへ行くこうとしているのだろう。そして、私も？

それは豪和という家が古くから持つ、永き時の因縁と直結していた。

その”時の輪”のただなかに自分自身も漏れなく捕えられ、巧みに組み込まれていたなどと、今の私にどうして想像しえただろう。

本当は鷹水の存在など軽く消し飛んでしまうほどの永きに亘って、この身と心とを拘束し続けてきたかもしれない、果てしのない結び目。

哀しき輪廻……平たく言えば、豪和が密かにその歴史の陰に包括し紡いできた、いわゆる——ミッシングリンク——という言い方もできるかもしれない。

その連綿と続く時の輪の中では、このユウシロウと私の刹那の物語など、取るに足らぬ一瞬の出来事にしか過ぎないだろう。それほどに豪和の歴史——いや、人類そのものが人知れず歩んできたかもしれぬ、その足跡は気が遠くなるほどに永いのだ。

少しでも、その人知を超えた秘部の一端に触れてしまった者に、それを忘れるというのは無理な話だ。

……いや、違う。本当はすべて洗いざらい忘れてしまった方が、一人の人間として幸せなのかもしれないが、

その意味で、だからこそ鷹水は私にあらためて求婚し、ユウシロウのことを忘れると言ったのかもしれない。

元々私は彼の言葉、望みを退けることなどできない。いや許されないのかもしれない。

私自身が彼から受けた恩恵の数々をまだ覚えていてというのなら。その私への見返りのない深い愛情を、すべて尊ぶことができるというのならば。

それほどまでに、これまで肉親のごとくの情愛を鷹水は惜しみなく与えてくれたのだ。

でも、どこかでまだ、私はユウシロウと鷹水とのあいだで揺れていた。

その愛の証であるエンゲージリングを鷹水から貰い受けながら——その婚姻の申し出を快く受け入れながら。

血が騒ぐ……（こういう言い方は、その時の私にとって心当たりのないことではあったが）なぜなのかは解らないが、それらしい実感を伴って、私にはそう思えた。

そう——私はユウシロウを忘れられない。

いや、決して忘れることなどできないのだ。

それはおそらく、愛や恋といった感情を超えて。

そしてだからこそ、その人の世の思いに私はあらためて立ち返りたかったのかもしれない。

——ユウシロウに、それを教えたかったのかもしれない。

？好き？という、どこまでも人間的な感情を。

しかし結局そのことが、変わらず鷹水を裏切ることになる……そう、結局何ひとつ変わらないのだ。

？なんて罪深い女？

その傷みを平然とヴェールの奥に隠しながら、根気よく待つてくれていた、懐深い男の元へと嫁ごうとしている自分。

こんな華奢な指環ひとつで、頑丈に繋ぎとめておけようはずもないのに。しかしそれでも鷹水は、だからこそ、こんな私を自分の元へ確かに縛り付けておきたかったのかもしれない。

後から考えてみたら——？真実？が明らかに”その日？”に私は、あらためてそのことを知ることになる。

運命に翻弄され、弄ばれる、木の葉のように。

まさに人の運命とは、風の向くまま……。

その風向きを知らせる風見鶏が、もしかしたら鬼であるユウシロウなのかもしれない。

少なくとも豪和に関わるすべての人間にとっては。

5 .

現在、大宰府督府とも呼称される筑紫王朝は、そもそも日本誕生の神話が筑紫に始まり、日本書紀に記された日本の古代史が大宰府を拠点に展開したことから、また倭国の前身である邪馬台国の女王

である卑弥呼伝説からも、元来この国の史実の始祖としても重要であつたかもしれない。

つまり七世紀後半ばまで大和（＝倭）王朝として日本列島を支配し、実質的に君臨していたのは、筑紫王朝であつた。

その軍事王朝の陰において、傀儡子の民として強大な力を欲しいままにした嵬の一族。

ともすれば、その卑弥呼自体が嵬の一族に操られていたと考えられぬこともない。

その後、「白村江の戦い」が発端となり、次第に中央集権が中心となつていく歴史の表舞台から姿を消し、倭国筑紫王朝は滅びてしまった。

それに伴い自然、嵬の一族も……。

その白村江の敗戦に潜む、人知を超えた妖しげな力。それが餓沙羅鬼であつたなどと、遠い史実の陰において、ゆめゆめ誰しもが決して思ふまい。

嵬、そして餓沙羅鬼を繋ぐ”ミッシングリンク”は、とりあえずそこで一旦途絶えている。

まさに、まほろばの夢と消えゆく縁起の源である。

だが、本当にそうなのか？

——嵬の一族とは、単にそういつた一つの単一種族を指すものなのか。

なんとなくではあるが、私にはそうは思えなかった。これは漠然とした実感として、であるが。

このことばかりは、鷹水にも誰にも解らないだろう。

この、どこから来るとも知れない、常人の理解を超えた、計り知れぬ胸騒ぎ。

わからない。それがなぜなのか、私にはわからなかった——けれど。

以前、ユウシロウとひとつになった時、身体の、魂の奥深くで感

じた、言い知れぬ感慨。

まるで、母の胎内にでも戻ったかのような。遠い宇宙^{そら}の星々の狭間に漂うかのような。

そんなどこか哀しげな安心感が、ひと時二人を包んだ。

その瞬間、”私たち”は”一人”であると実感した。

それほどまでに、心と肉体という二つの壁を越えて、その時二人はひとつになった。

その時、確かな”声”を聞いたような気がした……。

どこから来るのかも解らない、誰のものとも解らない、微かな、けれど確かなその言葉。

その声にならない声が、一秒の数千分の一ほどの刹那、ずきりと深い楔を二人の深遠に打ち込んだ。

”——イ、キ、テ？”

そしていつしか私は、己の心身が誰かの身代わりであると知る。

そう、ユウシロウを確かな生の現実へと誘うための。

生きて”ユウシロウ？——”。

誰かが私の中で叫ぶ。

その少女の陰代である私。

……だから私は、ユウシロウを愛するの。

おそらくその思いは、美鈴さんの思いでもあり、いま彼が出逢っている、そしてこれから出逢うだろう、かけがえのない人たちの思いでもある。

そして”彼女？にユウシロウを託すため、私は。

だから、せめて今だけは……。

——ユウシロウ、生きて。

突然ハッと私は目覚めた。気が付くと酷い寝汗を掻いている。なんだか少し怖い夢を見た気がした。でも不思議と恐怖感はない。

漠然と心身を包む妙な安堵が広がり、むしろ満足感さえ感じるほどだ。

それとともに、突然なぜだかユウシロウの面影が脳裏に呼び覚まされ、再び彼への恋しさが激しく募る。

が、それはとうに許されぬ身なのだ。ならばなぜ、私はこうして鷹水に寄り添い、遠い北九州の地にまで足を運んでいるのだ。

しかし理性とは裏腹に、ユウシロウと感じた”あの瞬間？の感覚が人知れず胸に蘇る。

実際、この地に赴いたのだって、餓沙羅鬼にまつわる縁起の謎を解き明かすため——結局は鬼であるユウシロウ自身に間接的に関わることなのだ。

その意味で、どれほど鷹水と行動を共にしようと、私はユウシロウと遠ざかることはなかった。

”やはり離れられないんだ……？

そう思うと、哀しいくらい、じんと胸の奥が熱くなる。

そもそも鷹水の方こそ因果な男である。好いた女をやつとこの手にしたと思えば、結局やつているのは、彼女にとってかけがえのない存在やつに関する調査なのだ。

だが、それもある意味で、いたしかたなかった。

第一これは私自身もだが、一ジャーナリストである鷹水自身、既に十分踏み込んでならぬ領域に片足を踏み入れているのだから。

そう、誰も戻することはできないのだ。おそらく、もう誰も——。

6 .

ユウシロウは”鬼”を見ていた……。

いや、それは確かに鬼と呼べる姿形と形相を呈していたが、実際”鬼”であつたのは、本当は自分自身であつたのかもしれない。

それは遙か彼方の記憶の連なりが見せた残像であつた。鎧と甲冑を纏った奇妙な姿。細長く突き出た鋭い牙と、それが異形のもので

あるという証の角と。

かつて遙か彼方の過去、かの地で彼は、確かにそれと一体となっていた。巨神は彼という御霊の容れ物だった——まるでパペットを操るかのごとく……。

そして謂われなき怒りに支配され、我を忘れ、ただ妄念にかられるまま、目の敵將たちを、その手にした巨大な鉾で、いとも簡単になぎ払った。

多くの意味なき死と屍。大地に流される、無数の朱い血。身体を突き抜けるような、阿鼻叫喚の嵐。それは、まさに恐怖そのものだった。

”俺は、嵬……”

最早、避けようもできない真実が彼を襲う。

ユウシロウは、襲い来るその呪縛から必死に逃れようとした。

だがその心さえ、虚しく虚空に絡め取られていく。

骨嵬——それは既に、彼自身と化していた。

脈打ち不気味に蠢く人工筋肉は、その血肉となってユウシロウの体内を駆け巡った。

千年の間が、ぽっかりとユウシロウ自身の内実に空白をあけて、彼を飲み込んでいた。

”夢——！？”

そう……夢、であって欲しかった。少なくとも今の彼自身には。

特自実験棟の宿舍寮の寢室に、薄青い闇が広がっていた。額の汗を拭い、見ると窓の外が、うつすら白くかすんでいる。

昨日の実戦シミュレーターが、やはりいささか堪えていたのだろうか。

ユウシロウはベッドの上で上半身を起こすと、軽くめまいを覚え、目頭を押さえた。

シミュレーションとはいえ、実戦さながらの臨場感と興奮をコクピット内に作り出すシステムである。確かに通常の人間ならば、既

に失神しておかしくない負荷を、T Aはその肉体と精神とに与えるのだ。

しかしユウシロウに限って言えば、彼はそれをほとんど苦もなく日々の実験において、こなしていた。

それなのに……。

何かが、おかしい。

ユウシロウは、考えるともなく思った。そんな彼を、どこかで誰かが俯瞰の視点でみつめているような気がした。

独りでいても、常に誰かの意識に晒されているような、奇妙な感覚。

ここのところ、そんな異様な感覚が彼自身を包んでいた。

——なぜなんだ？

ユウシロウは、ふと佐和子の面影を心に思った。

”彼女は……、”

いつかも不意に心に浮かんだ、漠然とした疑問がユウシロウを押し包む。

あの時、一瞬の再会で、ユウシロウは確かに彼女が自分にとって大切な、かけがえのないひとなのだと実感していた。

月明かりの中に揺れる、その長い髪。どこか哀しげな、淋しげなその瞳。

その瞳は、いつでも自分を優しく包み込んでいた。

瞬間、カチリとユウシロウの中で何かが音を立てた。

それは、何かの歯車が確かな刻ときを刻む音……。

”ユウシロウ……悲しまないで”

”先生……？”

いつしか夢の中で畏れにうなされていたユウシロウの心を、私はそつとどこかへ導いた。

まるで、溺れかけたひとを救けた人魚のように——その岸边は、確かにどこかで見覚えがあった。けれどユウシロウには、それがど

こであつたのか、最早、確かめるべくもなかつた。

ふとユウシロウは、舞を舞っている時の自分自身を思い出していた。

余流能楽。あまりにも自然に自身の四肢に染み付いている、その一つ一つの所作。

その無限の境地の彼方に浮かぶ、おそらくそれがその岸边であつたのかもしれない。

地面からくぐもり響き渡る呪文のような地謡の調。それはどこか、漠然と意識に鳴り響く”あの声”とも似ていた。

一旦面をつけた演者は、舞台に立つと現を離れ、己自身を棄てて、その精神をいずこへかに浮遊させる。

巫女のトランス状態……それがユウシロウをどこへ導くというのか。

それは、彼自身にもわからなかつた。

”そうだ、石舞台——”

ユウシロウの脳裏に鬼哭石の郷の石の能舞台が浮かぶ。

なぜか自分はいますぐにでも、その場所に赴かねばならない気がした。

遠い昔、いつか流された血と同じ血潮が、彼自身の中にも巡っていた。

その狂おしい生の証である血が、執拗に彼を駆り立てる。

”ユウシロウ、行つてはダメ”

私のその小さな叫び声に、彼は気づかない。

「先生……」

*

”その少女”の存在に気づいたのは、福岡で筑紫舞の公演を観てからだつた——。

古くから伝わる筑紫の幻の伝統芸能であり、かつて筑紫朝廷にて奉納された宮廷舞でもあったそれを、鷹水とともに観た私は、思わず絶句した。

その能舞台には、鬼哭石の郷で見たユウシロウの舞と、ほぼ同じ世界が広がっていたのだ。

余流能楽は、異端の能楽。北九州筑紫には、確かに「傀儡子」と呼ばれる謎の芸能集団が実在していた。

口承伝承という形のみで密かに受け継がれてきた幻の神楽舞。おそらくこれが余流能楽の源流……それらはまさしくともに、^{シャーマン}巫女による神招ぎの神事であった。

傀儡子の民は、海人の民。傀儡子の「クグ」とは、水辺に生える雑草のことである。古代の水辺の民、海人族の女たちは、この茎で「クグツコ」と呼ばれる籠を編み、それに魚や貝などの海産物を容れていた。

しかし、クグツコは単なる食糧貯蔵のための籠ではなく、海人族にとって靈験あらたかなる藻である「稚海藻」つまりワカメをしまう器でもあったのだ。

おそらく彼らにとって、それは豊かな海の恵みの象徴であり、同時に神前に捧げる供物であったのだろうか、この神聖なる稚海藻を容れるクグツコに、海人族は彼らの神として奉っていた人形も、ともに入れていたという。

その人形を「クグツ」と呼び、翻って人形を繰る彼ら自身も「クグツ」と呼ばれるようになったと、ある民俗学者は説いている。

古来より、人形は他人に呪いをかけるための呪詛の道具や、人の代わりに罪や穢れを引き受け、厄祓いをする呪術的なもの——つまりそれらの対象物としての形代^{かたしろ}であった。

現代でも神道の大祓等で用いられる和紙でできたものは、人形^{ひとがた}と呼んだり、あるいはこの形代と称したりする。

そして傀儡子もやはり人形を繰り、人の穢れを祓って廻る漂白の芸能の民という一面を併せ持っていた。人形浄瑠璃なども、あるい

はその傀儡子の民の残した一端かもしれない。

いつからか大陸から渡ってきたといわれる海人の民は、福岡市の志賀島に流れ着き、棲まうようになったそこで、彼らの始祖神である安曇磯良を祀った。それが現在の志賀海神社である。傀儡子の民である海人族は、そこから人知れず海伝いに日本各地へと四散していったという。

どんな位にも属さず、どのような権力にも支配されず……風のように自由自在に土地から土地へと巡り、神降ろしを行っては人々の穢れを祓い、霊的で神聖な優れた芸能を伝えてきた放浪の傀儡子の民。

その漂白の民が人知れず伝える舞は、回転や跳躍を取り入れた独特の舞で、それは確かにユウシロウが舞っていた余流能楽と酷似していた。

”誰かに伝えていかねば、地獄に堕ちる……”

だが、そんな怖ろしい言い伝えが、古より筑紫舞にはあったといわれる。数百年、いや数千年の時を経て、そうやって闇の中で人々の間に手渡され、密かに伝えられてきたかもしれない舞。

おそらく豪和は、その一端であるのだろう。彼らが同様に代々余流能楽を後世に伝えてきたのは。それは単なる伝統や因習ではなかった。そこに潜む神の神威。いや、もしかしたら、それは文字通り鬼なのかもしれない。

*

宮地獄古墳の横穴式石室。

そつと訪れたひんやりとしたその洞窟内に、私は一人佇んでいた。宮地獄神社の境内にある、その本古墳の墳丘形状は大型の円墳で、直径は34メートル、横穴式石室は約22メートルもある。今日内部を見ることができる最大規模のもので、文字通りの巨石墳である。

そこには馬具、頭椎大刀やガラス製の骨壺を収めた青銅製の骨臓器なども納められており、それらは国宝とされている。

つまり、まさにそこは、かつての九州王朝の王が葬られた墓所でもあった。

その不動洞窟で、かつて筑紫舞の唯一の伝承者である、ある女性の舞が奉納された。

実際その伝承者の女性の舞を見たわけではないが、それでも私の胸に去来する何かは、常に私自身に何かを語りかけてくるようになった。

そして、ぎゅっと胸を締めつけるような、胸苦しい感覚……。

”沙耶……、”

え？

”私を許して……”

憂いを湛えた哀しげな瞳をした少女が一人、そこに立っていた。

「ユウシロウ……」

次の瞬間、私は急に怖くなって、彼の名を呼んだ。

我に返ると、懐の携帯が突然鳴った。鷹水からだ。

洞窟内から外へ出ると、すっかり日が暮れ、満ちかけた美しい月が夜空を照らしていた。

そういえば、安曇磯良は海神であるが、同時に月の神でもあるという見方がある。

日本古来の陰陽の考え方で、陰を司る象徴の一つである月は、女性をあらわす。だからだろうか、筑紫舞の宗家である伝承者が女性であったのは。

深まる秋のひんやりとした夜気に当たり、急に寒気を感じて、私は思わずぶるつと身を震わせた。

けれど本当の理由は、それだけではなかった。

”あれは幻だったのだろうか……？”

神聖な場所である神社と洞窟内の墓所……霊的な何かを感じ取り、
寒気を覚えたのか、私は足早にその場を去った。

第七章 ― 星詠みの章 ―

1 .

「えっシンボルが……？」

鷹水からのTELは、意外な事実を私に告げた。

シンボルとは世界最大級の巨大コングロマリット——豊潤な資金力からなる同族経営会社から出発した神出鬼没の巨大組織のことだ。特定の株主の制約を一切受けない同族経営会社といえば、その規模こそ違え、豪和も同等の性格を持つ企業である。

その意味では、この両者間には奇妙な関連性があつたのだが、今時点の私たちにその詳細の何が解ろうはずもなかった。

そのシンボルの調査員が私たち同様に、この筑紫の地に足を踏み入れている、という情報が入ってきたのだ。文字通り無造作に投げ込まれた情報……。

無論、シンボルという謎の巨大組織の足取りが、多国籍に幅広く展開しているジャーナリズム組織である私たちにでさえ、逐一掴める道理もなかった。

明らかに「シンボル」とは、私たちの様々な情報網と知力を持つとしても、私たちにとってその存在は、単なる一つの記号にすぎなかったのだ。たとえその存在が実在することを知っていたとしても、その存在の過去から今日にわたる居場所は、ようとして知れることはなかった。

それほどにシンボルという存在は大きすぎ、そしてあまりに遠すぎるのだ——

その「遠すぎる、大きすぎる」謎に包まれた存在が自ら私たちに、その端緒を掴む機会を与えてくれた。

しかしなぜ、一体何のために？

……一つだけ考えられるのは、豪和のTA開発。

確かに現在、政府や特自までも巻き込み一子企業だけで進められている豪和の二足歩行型兵器開発には、様々な異常な点がひしめいていた。

（そう……それはまるで一種の”怨念”のような……）

その事実が今、シンボルの目に明らかにされたとしてもいうのだから。だとしても、なぜシンボルが。そうシンボルとて……いや。

”彼ら”には、彼らの何らかの確固とした「目的」があるのだろうか？確かに兵器開発もシンボルの企業としての一つの中心的柱であることは事実だった。それにしても。

「なぜシンボルが……」

「——それは俺にもわからない。だが一つだけ言えることは、彼らが我々同様、豪和の秘密に感じているかもしれない、という一つの可能性だ」

確かにありえない話ではなかった。何しろ相手は、基本的に国際展開されているとはいえ、私たちのような草の根的NPO団体とは根本のスケール自体からして異なる、桁違いの利潤を得ている巨大企業なのだ。

そう……何もかもが違いすぎる、遠すぎる。

私は一瞬、自分自身の無力さにも通ずる謂れなき虚無感を感じた。そのシンボルが、ここ北九州の地に足を踏み入れている。何かの確固たる目的を持って。

しかもその存在を自ら、こうして向こうから私たちの目に直接触れさせてきたのだ。

それはなぜ——

一種、奇妙な感覚が鷹水と私を押し包む。

それはまるで、巨大な力の前に屈服するしか術のない無力すぎる相手へのひとつの置き土産、のような。どこかで誰かが、その見えない口元に笑いを浮かべているような気がした。

一体シンボルは何を私たちに教えようとしているのだろうか？そんな形なき疑問までも浮かび上がってくるほどだ。

そう、相手は確かに何かを、何らかの意図を以ってこちらに伝達しようとしている……その無言の威圧によって。

——それは警告？

もうこれ以上は、この先前に進むな、と、彼らは私たちに伝えようとしている？

しかしシンボルという存在が介入してきた以上、かえって豪和のしようとしていることの重大さが垣間見えてくるような気もするのだ。

あらためて、私はぞっとした。

そうだ、彼らが冒そうとしていることの危険性は元より解っていたことだった。だからこそ私たちは、それを見過ごすことができなかった。そう、見過ごすことなどできなかった……。

特に私と鷹水は……いえ、私は……。

ユウシロウという存在を知ってしまった。

だが、その見るからに不気味な目に見えぬ”警告”は、私たちの無意識のうちの畏れが生み出したものにすぎなかったのだろうか。

実際、事実シンボルは何らかの通達をしてきたのだ。我々は確かにここにいるのだ、と。

しかし本当はシンボルが豪和のこととは無関係に、この地にやってきたのだということなど知る由もない私は——私たちは、一旦その歩みを徒に躊躇せざるをえなかった。

いやそれは、あながち無関係ではなかったかもしれないが。

*

佐和子が立ち去ってからというもの、豪和の家は元の静けさを取り戻していた。

せっかくそれと判った貴重な獲物をみすみす逃してしまった……、そんな焦りがあるわけではなかったが、一清はひとりごちた。

「馬鹿な親父様だ……」

しかしその父と、素性の解らぬどこの女とも知らないが——その女が産み落としてくれた娘がこうして戻ってきたのだ。

「そう、満千留と言ったか」

”結局は貴方も人の子だったというわけですね”

「まあ、いい……」

ふ。と、おかしそうに息を吐くと、一清は椅子の背もたれにけだるげに体重をかけた。

なぜ自分は彼女の家族を守ってやれなかった。いや守ろうとしなかったのだ。

それどころか、最も安全だと託した一番の親友の家と解っていてさえ。結果的に自分は見殺しにした。

だがその彼女が生きてこの家に戻ってきた。たとえ憎まれてもいい。何度帰ってきて欲しいと願ったことか。

だが佐和子は豪和の家に戻ってくるべきではなかった。

——やめろ！……やめるんだ。

そう何度”その声？に非難されたことか——しかし。

これは偽らざる真実。畢竟、自分の両の手は既に血にまみれているのだ。

この豪和という家に生れ堕ちたその日から。

2 .

卑弥呼……筑紫王朝の女王であつた弥呼^{みか}姫は、鬼道を用いたという。

それは陰陽道における呪術のようなものであつたらしい。だから弥呼姫は、星の人と呼ばれた。星から来た星の人。

それが彼女が民草から畏れを以って敬われた由縁であつたのだ。

「まるで、かぐや姫みたい——ね」

そう、卑弥呼の存在は半ば御伽噺のようなものだったかもしれない。だから今日の歴史ファンの中でも彼女の人気は殊更に高い。

しかし当の彼女には、そんなことは知る由もないことであると同時に、たとえその時代の人々に敬愛され傳かれたとしても、もしかしたら彼女にとってそれは、半分は心寂しいことであつたのかもしれない。

まるで観光にでも訪れたカップルのように、そんな歴史ロマンを語っている暇などないはずなのだが、目に見えぬシンボルからの呪縛に捕らえられた今では、私たちはどうにも動きようがなかった。しかし、ある意味もどかしい、その手持ちぶたさな時間がかえって考える時間を与えてくれたのかもしれない。

そもそもどうして鷹水は、私をユウシロウ——唄の縁の地である、ここ筑紫は福岡に連れてきたのか。それに現地調査であれば、直々に鷹水が赴かなくても済むはずである。

それはまるで何かの儀式のように……。

ふと私の薬指で冷たく光るリングに心臓ごとぎゅっと締め付けられるような気がした。

そういえば、左手の薬指は心の臓……心に最も近く経由する指だった。

そう。私は鷹水の妻となることを承諾したのだ。

「結婚しよう——」

その言葉は、待ちわびたような、そして胸苦しいような不可思議な響きに満ちていた。

本当はとても苦しかった。でも鷹水の抱擁には、真実が宿っていた。言葉より何より、それは何物にもかえがたい優しさに溢れていた。

だから苦しい……。

鷹水のことを愛していないといえば嘘になる。けれど。

” ああ、ユウシロウ？

決して呼んではいけないその名を、また胸の奥底で叫んでしまう。なぜだか私は、常に何かに縛られていた弥呼姫の気持ちが少しだけ解るような気がした。女性でありながら一国の主であり、その重い責務を一身に背負っていた卑弥呼。本当に欲しい人への愛を真っ直ぐ叫べない孤独。

それは不思議な呼応だった。

*

鷹水にとってそれは、一つの賭けに近かった。

佐和子はまだ知らない。その真実を鷹水は知っていた。

どうして自分はこんなことをしているのか。無論それはユウシロウに関することだ。

彼女が彼のことを忘れられないというのは承知の上だった。それでも鷹水は佐和子を愛していた。

だからこそ…… だからこそ？

” ダメだ、佐和子をユウシロウの元へ行かせては——？

それは彼女の身の破滅を意味する。だが……。

「俺は一体どうしたらいい？」

鷹水は独り自問した。

幸いシンボルが介入してきたことで、彼らは再考を余儀なくされた。

結果的に、そのことが佐和子のユウシロウへの歩みを遅らせるのに貢献した。

豪和の秘密。二足歩行型兵器の詳細。本当はそんなことはどうだっていい——鷹水は心の奥底でそう思っていた。

ただひとり佐和子の身さえ無事ならば……。

だが彼女自身は待とうとはしないだろう。それほどまでに佐和子はユウシロウ君のことを？

「ふ、まるで茶番だな……」

鷹水の胸中にあつたのは、本当は愛であつたのか、それとも憎しみであつたのか。

*

「貴嶋満千留という女性を御存知ですか？」

その男は単刀直入に尋ねた。この筑紫の地で彼女のことを知らぬ者はなかった。

それだけその名とその存在は、あまりにもこの土地と風土とに根付くものと深く関係していたのである。

「ええ、勿論ですとも……満千留さんの舞を見たことがない人間は、この土地には一人もおりません」

不意に尋ねられた町角の商店街の女店主は、にこやかに答えた。

「ただ——」

「ただ？」

ふと遠くを見るような眼差しになった年配の女店主に男は聞き返した。

「あの方はもう……」

「亡くなつた？」

「ええ、もう何年前になるかな、突然……」

そつ言葉を継ぐ店主の話から、生前の彼女がどれほど町の皆から愛されていたのかが垣間見られた。

「良い舞手さんだつたのにねえ……」

実際、貴嶋満千留の名は、その世界では著名なものだった。

筑紫舞のただ一人の伝承者。そして貴嶋神社の巫女であると同時に、その生まれ自体には、超常的な伝説的逸話が隠されているとい

うのだから驚きである。

彼女は神社の鎮守の杜に古くから祀られている、御神体の窟座いわくらより生まれ出たというのだ。しかし彼女自身は、無論そのことや幼い頃のことをほとんど覚えていないという。

だが、たとえもしそれが本当なのだとしても、あまりに途方もない作り話に聞こえてしまう。

しかし――、

鷹水とユウシロウの事とは別に、私の脳裏からは、あの日観た筑紫舞と宮地嶽神社の石室に現れた不思議な少女の姿が離れなかった。そして、この貴嶋満千留の話。実際、筑紫舞はその後、彼女の存在によって広められ、その死後も口伝伝承として残された。

不思議なことに、実際に彼女が舞を舞った宮地嶽神社や関連するその他の場所から、常に何かの気配が感じられるような気がした。それは奇妙なことに、あの日私が出遭った亡霊のような少女から感じたものと、あまりに似通っていたのである。

そう、少女から発せられていたオーラのようなもの……。

それにしても、どうしてこんなにも気になるのだろうか？ 本当はあまり思い出したいくない――なぜだか私は怖かった。

勿論、本物の幽霊なのだとしたら怖ろしくない方がおかしいのだろうが、そういうこととは別に、不可思議な恐怖感と悪寒が私を押し包んでいた。

あの哀しそうな瞳……どこかで見覚えがあるような気がする。でも一体どこで？ 思い出せない。けれど私は彼女のことを知っている。いいえ、あの少女だけじゃない。

貴嶋満千留。その舞を直接見たことも、本人に会ったことさえないというのに……どうして。

鷹水が福岡支社でシンボルの動きを探っている間、とにかく私は単身、その貴嶋神社へ向かうことにした。

だが私は、シンボルの上級エージェントがマーケティングするように

密かに探っていた情報に、いつしか触れていたことを知らなかった。

3 .

” 千年……、 ” いや。

おそらくそれ以上の遠大な年月を、その魂は生きてきたのであるう。

嵬とは、人知れずその身に遙か彼方、幾千もの膨大な時の記憶を宿す者。

空知検校は、深い吐息を清明なる大気の淀みに零した。

とうに秋は足早に過ぎ去り、山間の村落は早くもひんやりとした冷気に包まれていた。

最後の落ち葉が、紅の残像を臉に残して風に舞い散る。

その打ち沈む老いた背中を、木陰から一人美鈴が見詰めていた。

「空知のおじ様……」

「……美鈴殿？」

半ば不安げなその声色に空知は振り返る。

美鈴には予感があった。きっとユウシロウは、この鬼哭石の郷を訪れるのだと。

はたしてユウシロウは美鈴の予期した通り、空知の元を訪れていた。

御師匠ならば、何か知っているはず——。

そんなわけがあるはずが無い。だが、なぜ佐和子先生は……。

美鈴は、なぜだかとても不安だった。

だからまだ病み上がりの体だというのに、この寒空の下、こつそり家を抜け出してきたのだ。また……、

美鈴はすっかり悪い娘になってしまいました、お兄さま。でも。

先生とお兄さま——どうしてこんなにも心が騒ぐの。

私がお兄さまをお慕いしているように、先生も……。でも、そのことはもう……。ぜんぜん悪いとは思わない。けれど。

*

二人は奇しくも、この唄の郷、鬼哭石に引き寄せられるようにして来ていた。

そして当の私かというと、そのさらに唄の淵源とも言える、筑紫の地に身を潜めていた。

……豪和、特に一清の手から逃れるため、というわけでは特になかったのだが、結果的に私は今、この遠く離れた北九州の地に身を置いていた。

その総てが唄、そして豪和の謎に連なっている。

”ユウシロウ……！”

彼はまたしても、豪和の掌からすり抜けていた。

彼がこれほどまでに積極性を見せるようになったのは、確かに私が原因なのかもしれない。

時折送られてくるユウシロウ周辺の近情をメーカーでチェックしたあと、そう。私はまたしても不可思議な思いに囚われた。

秘事中の秘事とされた、空地の余流能楽が豪和という家を介してひっそりと受け継がれてきたように、この筑紫の地にあつて同様にして筑紫舞も、人知れず人々の間で密かに守られ、此処に息づいていた。

鬼哭石の郷で見たユウシロウの舞。そして数名の舞手をして繰り広げられた、荘厳な筑紫の宮廷演舞。どちらも変わらぬ静謐な空気に満ち満ちていた。

そして私は、そんな舞の動きの所作に惹かれている。あの幻の少女、そして貴嶋満千留という人にも……。多分。

ええ。ユウシロウ、彼自身に惹かれたように。

” 佐和子先生…… ” —— 何処にいる？

また、ユウシロウの声が聞こえる。変ね、こんなに離れているというのに。

だからユウシロウは、鬼哭石の郷へと訪れていた——先生の声がより近く聞こえる処に。

それが鬼の真実に連なる己の出生を知る鍵でもある、この場所にあるという事との奇妙な符号。それがどうしようもなくユウシロウを引き付ける。

なぜこんなに切ない気持ちになるのだろう。先生の髪に、指先に触れた瞬間、何かがどこか遠くへ逆流していくような心地になった。愛しくて、けれど、とても切ない気持ちに。

それは、私だって同じよ。

ユウシロウの唇、まだその感^{ぬくもり}触が残っている気がする……。

私は指先をそつと唇に押し当てた。そして、その見えない体温を両手で抱きしめる。

ただ一度だけ触れ合った、大切なぬくもり。

” 大丈夫…… 大丈夫だ。だから心配しないで ”

” ユウシロウ…… ”

お願い——石舞台にはのぼらないで。

けれど、逆に私のことを心配しているユウシロウの柔和な眸が脳裏に浮かぶ。

どこか淋しげで懐かしい、あたたかな瞳。

*

その懐かしい瞳を、私は目の前に佇む一人の少女に見たような気がした。

貴嶋神社に仕える、巫女——白衣に赤袴姿の。ぴんと背筋を伸ばし、不思議に凜とした気配を漂わせている少女。

いえ……少女というには若干語弊がある。もう二十歳になろうかという彼女は唾^{おし}で、一切口が利けなかった。

元来、筑紫舞の継承者には、障害者が多いのだと聞く。不具^{ふぐ}「福を呼ぶという縁起からか、どこかしら何か体が不自由な者は、神の意を伝える舞手に最良なのだそうだ。

では、貴嶋満千留も……？はたして彼女も、盲目の女性だった。

「——美命^{みこと}は御師匠……満千留の一番弟子でした」

傍らに寄り添う老宮司、貴嶋紀仁は言った。

ユウシロウのそれよりは少し気の強そうな、けれど芯の強さといったことでは共通するものを感じる少女の瞳。

彼女は両親に捨てられた孤児だった。貴嶋神社の近くに流れる宝満川の河原で満千留が見つけた赤子だ。育ての親も満千留自身である。

この子には「資質」がある——。

「いつしかそう見抜いて、満千留は美命に舞を教え込むようになったのです」

宝満川の「宝」とは、子供の意である。捨て子の川原でありながら。

なんと美しい名前だろうか……私はそう思った。

こんもりとした古墳の杜に抱かれるようにして、佇む貴嶋神社。

この地に大小数多くある神社や古墳の中でも、それほど大きくもなく、そして特に名が知れた処というわけではない。

けれど、そこには確かに神が宿っていた。名を持たぬ神。そう思わせる特別の静謐な空気が、鳥居の連なる苔生した石段の上に漂っていた。一段一段踏みしめ登る毎に、その気配は濃くなる。

なぜだか魂を吸い取られたかのように拝宮殿の社前に呆然と立ち竦む私に、神社の宮司である貴嶋氏が声をかけたのが最初だった。

「伊集院佐和子と申します。貴嶋満千留さんの……あの、お話を少し聞かせていただけないでしょうか？」

私はぺこりと頭を下げた。

＊

鬱蒼とした鎮守の杜の奥まった場所に、その祠はあった。そこには確かに真つ二つに割れた巨石が、注連縄で飾られ祀られていた。そこから”生まれた”という満千留……。

「実は、満千留も孤児なのです」

ああ、そうか…… 本当の娘さんではないんだ。

どうしてか、その途端、訳のわからぬ感情の塊が喉の奥から昇ってくるような息苦しさを覚えて、私は瞬間、戸惑った。

宮司の話によると、生まれたばかりの幼い満千留はこの二つに割れた岩の間で発見されたのだという。だから、この窟座から生まれたという神がかった逸話も生まれようというものなのだろう。

だがしかし、その神話的な話も、あながち嘘ではないと思えるような気配を満千留は常に身に纏っていたのである。

それでも。

おそらく満千留は一人の人間だったはずだ——なんとなくだが、そんな気がする。

不遇な生い立ちを持つ美命の気丈な瞳を見ると、私にはそう思えた。

多分それは…… 私自身も、そうだったからだ。

私は傍らに立つ美命に、そつと話しかけた。

「…… 満千留さん、優しい人だったのね」

美命は返事をする代わりに、にこつと微笑った。その輝くような笑顔には、何物にも変えがたい、すべての答えが宿っていた。

それを育んだのは、傍らにいてくれた人のぬくもり。満千留さんにとっての育ての父親である紀仁氏。（因みに奥様は既に他界されているそうである）

そして、満千留さんに育てられた美命さん。そう、だからこんなに強く生きて来られた。この嘘のない優しさを育めた。人は決して皆、独りぼっちではないから。

”命”は、ただそこにあるだけで美しい。それには障害のあるなし、生まれのどうこうなどは何も関係ない。だから、満千留はこの子を美命と名付けたのだ。

「よろしければ、美命の舞を観ていかれては……」

その貴嶋氏の提案は、思わぬ展開へと発展した。その晩、私は本当に思わぬ歓待を受け、美命さんの舞に触れるとともに、貴嶋家に一泊することとなった。

＊

「筑紫の日向の高千穂の霊しふる峰に天降りましき……」

「——それは？」

ふと漏らした空知の呟きに、ユウシロウは訊ねた。

「古事記、神代巻からの出典でございます。日本書紀にも同様の詞が」

筑紫は日本神話における天孫降臨の地。それは分かっていたが、なぜそれがここで……。

空知の屋敷の書院造の奥座敷にて、ユウシロウと空知は対面していた。後ろでは美鈴が一人、二人を見守っている。

不意に流れるひんやりとした静謐な空気。ひたと空知を見詰めるユウシロウの真剣な眼差し。

訊ねたいことは、唯一つだった。

「余流能楽の淵源が筑紫——北九州にあることは、既にご存知のはずですな」

それは遙か遠く、豪和の縁起が伝えている通りであった。しかし……。

「もしかしたら、佐和子先生は——」

ユウシロウの口にしたその名に、美鈴はびくつと震える。

「出雲同様、神話の地である筑紫には、いまだ神が降りますと申します。しかしそれは、日本古来からの純粹な八百万の神」

餓沙羅鬼とは異なる……空知はそう言いたいのであろうか。

そうだ、餓沙羅鬼は——余流は、異端の能楽。しかし遙か古に筑紫で行われた神事がそうでなかったという証はない。

むしろその淵源であれば、もっと色濃くその血を引いていると言えなくはないか。それがまごう事なき純血であれば、時にその靈驗なる純粹さは、残酷なほどに容赦なく時事を行う。

「伊集院殿は……いいえ」

空知の言い掛けた言葉に、ユウシロウは反射的に全身の意識を集中させる。

だが空知は、それ以上は口を閉ざし、何も語ろうとはしなかった。

「先生は筑紫にいらっしやるのではないかしら？」

空知の部屋を退室したあと、美鈴は庭先でユウシロウに囁いた。

「でも……」

ユウシロウ自身も、それはなんとなく分かっていた——しかし、だからと言って。

”お兄さまは、先生にお会いになりたくはないの？”

美鈴は心の内で一人呟いた。

まだ美鈴は不安だった。そして心配だった……ユウシロウと佐和子のことが。

その美鈴の予感^{さだめ}は、あながち間違いではなかった。それは鬼として生まれた者の運命^{さだめ}と言ってもよかった。そして、その同じ記憶を共有する者は互いに、同じ哀しみを追体験するという。

——否応なしにその身に刻まれる、おぞましい恐怖と哀しみ。

人は人であるがゆえに、時に力を欲する。そしてそのあくなき黒い欲望が、人を永遠とも思える深い悲しみに突き落とすのだ。

哀しみという絆――。

それを私は、まさに今この身に呼び覚まそうとしているのだろうか。

そうでない大切なぬくもりを、やっと此処に二人で見つけたというのに。

” ユウシロウ…… ”

” 沙耶……私を、許して ”

また……、あの声が聞こえる。

少女は、何を私に伝えようとしているのだろうか。

”――刹也”

その名に、全身の血が沸騰する。
しかしそれは、刹那の瞬き……。

4 .

” 時の依人インヴィテーターは、遙か古に、かの地^{むかし}に存在した ”

シンボル・ジャパン上級エージェント、朴は評議員メスの幻のような言葉を、今更のように思い出した。

そう――それは彼らの組織の最高機密にして最重要優先事項である「ナダ・プロジェクト」の柱である一人の少女に起因していた。

ある意味で”彼女”は人柱であったのかもしれない。その華奢な体の中に秘めたる未知の力ゆえに、シンボルという組織は一人の少女の半生を際限なく奪い続けるのだ。それは否応なしに行われる、絶対的な強制。

だが少女は一切それを拒まない。それはあまりに不自然な態度に

見えたが、その小さな一個の人間の思いを敏感に感じ取ることもせぬまま、巨大な組織は拒絶を許さぬ絶対の意思を以って、その巨大な歯車の中に、あまりに無力で脆弱な少女を呑み込んだ。

いや——彼女は決して弱くなどなかった。ただすべてを水の流れの如く超然と受け流していただけたのだ。

みはる
” 瞳 ”

その名は、あまりに静謐な、不思議な引力に満ちていた。

彼女はこのシンボルという檻の中で飼育されながら、すべてを受け入れているようで、その実すべてを見えない磁力で拒絶していたのかもしれない。

実験に次ぐ実験に身をやつしながらも、決して弱音を吐く事などない。むしろ歳に似合わぬ、その毅然とした態度が、さらに悲壮とまで思える静謐さを漂わせるのだ。

「日本人、か……」

自らもその同じアジア系民族の血を引きながら、朴は妙な感慨を思い起こさずにはいられなかった。そしてこの福岡の地に赴き、貴嶋満千留の逸話をたどる一足一足毎に、同じような不可思議な磁力に引き付けられた。

在日韓国人である彼には、日本という国はあまりに近すぎた。そして彼はこの神話の地にて、同時に遠いまほるばの国であることも不思議に実感するのであった。

かつて筑紫は、大陸との最も近い接点を持つ土地であった。だからここが中国文化を最初に受け入れた倭国の玄関口であったというのも頷ける話である。

今にして日本は世界を一步リードする先進国、経済大国となったが、初めはただの素朴で小さな島国でしかなかった。

そう、海岸線によって守られた島国……。ある意味で最初の日本の歴史は海洋国家としての歴史でもあったのかもしれない。かつて傀儡子の民が海人の民であったように……原初の日本、大和の国は

母のような海の懷に守られていた。

” そういえばインヴィテーターは月と会話するらしいな ”

あまりに荒唐無稽な話だが、確かにそれは妙な符号を見せていた。日本人——睦の国籍は、何を物語っているのか。

海の満ち引きは月の引力によって引き起こされるといふ、あまりに当たり前の自然現象を朴は思った。しかしその ” 当たり前 ” が自然界、宇宙そのものの理であることも、また事実だった。

元来日本文化は、引き算的な質素さに彩られていた。陰陽五行の陰だ。太陽的な欧米文化に対して、その陰の気質を持つアジア圏の日本文化。それは淡いパールの中の月の光の持つ引力と同じだった。要らぬものを削ぎ落とせるだけ削ぎ落とした処にしか存在しない、無の境地。そう、水は低きにこそ流れるのだ。

” まるでブラックホールだ……、 ” 朴は我知らず呟く。

インヴィテーター睦の異様なほどの落ち着きに何故か惹かれるものを感じていたのは、実質的な彼女の育ての親である評議員メスだけではなかった。

だからメスはこの調査を、自身の代わりに朴に依頼したのかもしれない。

*

「美鈴とユウシロウが？」

しかし、そう訊き返す一清には何の驚きの表情もなかった。

確かに未だ二足歩行型兵器の開発途上にある豪和にとつて、これ以上の実験の遅延を許すわけにはいかないのは事実であったが、同時に彼は知っていた。

そう ” 刻 ” ^{とき} が満ちつつあることを――。

「まあ、ユウシロウが美鈴と一緒にであるなら心配は要らないが……」
落ち着き払った乃三郎の態度に、一清は思わず鼻白む。

ふ、何も知らないとも思っているのですか……。

ユウシロウと美鈴。豪和家の末弟と末娘。たとえ憂四郎の記憶を転写したとはいえ、二人はあまりにしっくりすぎる兄妹だった。だが、本来の偽りなき姉妹こそは佐和子と美鈴の方だったのだ。そう、異母姉妹とはいえ。しかも佐和子は……。

最早一清は、笑いを堪える事が出来なかった。

”クク……豪和の末弟？……姉と弟、か”

実際、佐和子がユウシロウの精神に何を与えたのかは、彼にはどうでもよいことだった。いつしか意思を持った人形——しかし人形は、一度操り手の手の内に入れば。

そのために佐和子の存在は不可欠だった。いや、佐和子それ自体の存在こそが、豪和の淵源を遡る手助けとなってくれるやもしれぬ。いつでも手繰り寄せることができるよう、一清の掌の中には、その人形に繋がる糸が握られていた。

「総代、今一度ユウシロウには役に立って貰わなければなりませんね」

その言葉の意味するところに、乃三郎はまだ気付かなかった。

*

”メンタルバースト”——「機能相転移」とも、彼らは呼んでいた。それは兎が餓沙羅鬼を呼ぶ、まさにその兆候であった。これまでの実験においてユウシロウは、何度かその「メンタルバースト」を引き起こしていた。

言うなればそれは、文字通り精神の暴発だった。心拍数は優に300を超え、通常の人間ならば、とうに心臓麻痺を起こし死んでいくだろう。通常では考えられないような現象——それは驚異的なTAの性能向上を可能とした。無論それはユウシロウがの能力が、いかに常人離れしているかということを示すのに他ならない、尋常ならざる現象でもあった。

そればかりでなく、ユウシロウのTA搭乗時のメンタルバースト

は、同じチームを組む他の機体にも、同様の作用を否応なく引き起こす。

メンタルバーストが機能相転移、と呼ばれる所以である。

それは個体から個体へと、そう相対的に、それぞれがそれぞれの連帯であるかのように並列化されて起こる暴発。そしてまさにそれを操り司っているのが、T A小隊の母体とも言えるユウシロウ機。いや、ユウシロウ自身であった。（そのことは他の隊員の士気にも作用するため、表向きには公にされていないが――）

だからこのT Aプロジェクトに、真にユウシロウはなくてはならぬ存在なのだ。

「巫女の恍惚……」

ふと一清は呟いた。

能を舞い己が己でなくなる瞬間、仕手はまさしくそのトランス状態に陥る。だからこそ優れた能の舞手であるユウシロウが、同時に優秀なT Aパイロットであるということも頷ける。

唄——そして骨唄の映し身であるT A。その両者は既に鏡のように密接な関係性にあつた。

「次にユウシロウが、機能相転移を引き起こすのは、石舞台で……、かもしれない」

一清の言いたい事は大方解っている。乃三郎には、その不気味な嗤い貌がおの奥に沈む思惑が透けて見えた。

だが自分とて、どこまでその業に抵抗する事ができるだろうか。そう、己とて同じなのだ。同じ豪和の軛くびきから逃れられぬ宿命を背負っている。憂四郎はもういない。そして空也も……。だが、その亡くした命こそが、物言わぬ言葉で乃三郎を責め立てる。

その悲しげな亡霊の風圧が……。しかし。

「そう……いずれ佐和子を招かなければなりませんね。正式に豪和の娘——ええ、長女として」

「……！」

乃三郎は絶句した。

あまりに早いその瞬間の訪れ。だが、それも時間の問題であつたのだろうか。

”福岡——筑紫の地、ですか……”

佐和子が、いや彼女の所属するジャーナリズム団体の長兄である鷹水誠司が、そこで何を企んでいるのか、大方予想はついた。

知っているのだ、やつも。”妹”がその真の巫女であるということ。

……おそらくはユウシロウにも引けを取らない、その未知なる力。
”女……。”

一清はふと、嵬の始祖である傀儡子の民が、元は海人族であることを思い出した。

おそらく満千留も女性であるからこそ、真にその力を己が身に秘め宿すことができたのかもしれない。そして、女は子を産む。そうだ、その最たる純血を産み落としてくれるのだ。

ユウシロウはまだ少年だが——いや。嵬と嵬は互いに惹き合う。たとえ離れていたとて。

佐和子の中に宿る、その”種”を逃してはならない——決して。

「些か気が早いが……そうですね、」

その瞬間、能面のような一清の歪んだ貌は確かに笑っていた。かお

「早ければ早いに越した事はないでしょう。明日にでも迎えにいかねばなりません……かな？大切な妹……いや、愛娘を」

もはや乃三郎に言葉はなかった。

＊

「今宵のような宴は何年ぶりでしょうか——」

その祭礼をあえて”宴”という呼び方をした貴嶋宮司の心内は快く屈んでいた。

私は質素でありながら、心配りに溢れた料理を前にした客人の席に着き、隣に座する貴嶋氏の顔をそつと見つめた。

”不思議と他人という気がしない……”

それは目の前の舞台に静やかに佇む美命にも、同様に感じる事である。

ユウシロウの舞。その源流が確かに”此処”にもあった。

だからなのだろうか？こんなにも懐かしい思いが溢れるのは。

……いいえ、それだけじゃない。何かもつと……。なんだろう、この胸が熱く締め付けられるような感じ。

美命の舞は、あの筑紫舞の公演で観たものと違い、まだ若干こちなさを残していたが、それでもその荒削りな所作の中に、さらにもっと原初的な何かが見て取れるような気がするの、気のせいだろうか。

そう、ユウシロウの舞によく似ているわ。

やはり優しく清々しく凜と澄んでいて、でも、どこかとても悲しげで……。

私は次の瞬間、思わず自分の両腕を両手で抱き締めていた。

”な……に……？”

自然と涙が両眼から零れ落ちる。

えもいわれぬ、熱い何かが胸にこみ上げてくる。

——ドクン！と、身体の奥で胎動する何か……。

「どうかなさいましたか？」

貴嶋宮司の柔和な眸が、ふと訝しげに曇る。

「ごめんなさい——私、」

私は思わず席を立ち、座敷をあとにしていた。

その晩、月は煌々と闇に照り映えていた。

あの日、少女の幻を見た夜も、今は少しだけ欠けてはいるが、こんな美しく冷たい月夜だった。

”ユウシロウ、私……”

気がつくと、いつの間にか私は、あの真つ二つに割れた御神体の窟座の前を訪れていた。

まるで導かれるように、ひんやりとした苔生したその岩肌に触れると、自然と気持ちが落ち着く気がした。その感触に、ふとユウシロウの涼やかな気配が重なる。

けれど、ここまで走ってきたためか、突然溢れ出した感情のままに早鐘を打つ鼓動は、なかなか鎮まろうとしない。

どうして、急に……。

はあはあと弾む呼吸を何とかして整えながら、私は巨石を見上げた。その瞬間を静かに留めたまま二つに割れた岩は、凍りついた時のままに鎮座して何も語ろうとはしない。

しかし私には、その御神体の巨石が、母のように私の戸惑いを見守り、静かに包み込んでくれているような気がした。

しばらくその岩肌のぬくもりにもたれかかるようにして、私は一人目を閉じていた。

すると、その肩に背後から、そっと掌で触れる者があつた。

「……！？」

私は思わず、びくつと身を震わせた。驚いて振り返ると、そこに舞の白装束のままの美命が佇んでいた。

「美命さん」

突然、席を立った私を心配して追ってきてくれたのだろう。美命は静かに頷くと、私の肩に羽織っていた薄い絹衣をそっとのせた。

”綺麗……よく似合うわ……”

微笑む美命の唇が、そう動いた気がした。

「——ありがとう」

美命の優しい真心を感じ取り、私もぎこちなく微笑んだ。差し出されたその手にそっと触れると、さっきまで触れていた、ひんやりした岩肌を感じていたのと同じ懐かしさがこみ上げた。

”え？”

美命はふと目配せすると、私の手を取り、静かに歩き出す。

”佐和子が貴嶋家に——？”

自らが直接招いたのではないにせよ、鷹水はその必然のような偶然に思わず目を見開いた。

元はと言えば、そのために彼女を直々にこの地に連れてきた——佐和子の中に眠る唄の血を確かめるために。

千年を優に超える豪和の淵源。それが何を意味するのか……鷹水の思惑は、既に一ジャーナリストの目的を越えていた。

彼もまた確かめたかったのかもしれない。この日本という国に何が眠っているのかを。

国際化の波に洗われ、はや幾年月。物質的豊かさと表向きの発展を得るうち、この国は確かに何かを失った。次第に内側から腐敗し、衰弱していく日本人の精神。それはまさに緩慢な壊死であった。

鷹水は決して純然たる愛国者というわけではなかったが、それでも静かに惹かれていた。

——今まさに失われつつある、秘められた無窮の力に。

8年前、確かに彼女を燃え盛る炎の中から救け出したのは、単なる偶然であり、同時に彼自身の正義感が為したこともあった。

だが、それはさらに”出遭い”でもあった。

無論、そこにも何の下心などはなかった。ただ純然と彼女を守りたいと思った。

だからこそ孤児となった佐和子の後見人になり、その孤独な魂を育て見守り、そのまま将来も誓い合ったのだ。

しかし、彼は後に知ってしまった。豪和に復讐を誓った彼女こそが、豪和自身に最も益をもたらす存在であったことを。

いや——。

ジャーナリストとしての純粋な正義感？佐和子自身への愛？……違う。

佐和子の豪和に対する憎しみは、本当は己自身の感情でもあった。豪和ユウシロウ……。

彼が真に豪和の人間でないなどという事実は、最早、何の意味も成さなかった。

そんなことはどちらでもよいのだ。無論、世の道德に反する二足歩行型兵器開発の事実も、表向き非難する立場にこそあれ、鷹水自身の感情にとつては、どうでもよいことであつたかもしれない。

”ふ、国際ジャーナリストか……我ながら笑えるな”
鷹水は人知れず自嘲した。

これまで佐和子の豪和への憎しみが、己自身の心を代弁してくれていた。だが今となつては……。

どちらにせよ佐和子は、己自身の”力”に対する覚醒^{めいめい}も知らぬまゝ、まるで自ら引き寄せられるように自分自身の故郷に戻つた。
彼女がユウシロウに出逢い、ともに心を通わせるようになったのも――。

すべてが運命なのだ。嵬という名の、変えることの出来ない、偽らざる宿命。

ただ自分は、それを手引きしただけだ。豪和からも、そしてユウシロウからも遠ざかるようできて、その実、最も近い場所に。

もしかしたら、佐和子への自分自身の愛は、その”憎しみ”から生まれたのかもしれない。

愛するがゆえに……。

畢竟、人というものの真実などはそんなもの。

”救えないやつだ――”

佐和子からの携帯の着信を点滅させながら、鷹水は一人思った。

第八章 ― 覚醒（めざめ） ―

1 .

その岩室の洞窟の中には湯殿があり、滾々と温泉が湧いていた。言葉もなく美命に連れて来られて数時間――二人はまるで昔からの姉妹のように、共に湯に浸かり、その一時に私の心と身体はすっかり癒されていた。

” キレイ…… ”

私を見つめる、うつとりとした美命の瞳が、ふと潤んでいるような気がした。ほんのり桃色に上気する美命の頬に目をやると、ふとドキツとしてしまう自分自身に戸惑う。

確かに佐和子の素肌は白く透き通るように美しかった。

でも、それを言ったら美命さんだって……。

「 なんだか不思議。全然初めてじゃない気がするの 」

一人呟くような私の囁きが、湯気とともに湧き上がり洞窟内に木霊する。

この筑紫の地には同じように古くからの神を抱く神社が数多く存在したが、同様に古墳の杜と洞窟の墓所を持つものも多かった。

それがたとえ、あの宮地嶽神社のものと同じ空気を持つ岩殿であったとしても……。

ふと私の脳裏に、あの少女の姿が一瞬よみがえって消えた。

そんな私の背中を流す美命の表情は、心なしかとても嬉しそうに見えた。

” お母さん…… ”

” え？ ”

湯殿から上がってすっかり温まり、上気しかった私の背中に美命が抱きついてきた。

たと言葉はなくとも私には解った。美命さんの言葉が、その淋しげな心の裡が。

育ての親である貴嶋氏を安心させるためだったのだろうか。彼女は常に自分自身を毅然とした緊張感の中に置いていた。それは、この貴嶋神社の巫女であり、何より筑紫舞の伝承者の一人であるという自負と、そしてそれ以前の何かのために……。

”お母、さん”

再び美命が疼くように囁いたような気がした。

けれど次の瞬間、ぱっと私から離れ、振り返るとその表情はどこか所在なげに、はにかみながら歳に似合わぬ幼ささえ泳がせて見せる。ふと微笑むと、私はそんな美命の手を取る。優しく両手で包み込んだその指先は、心なしか震えていた。

「ありがとう……私、なんだかとても嬉しいの。美命さんに出会えて。それから、ここに来られて」

それは本当に嘘のない心からの気持ちだった。

それから私は、ほんの思いつきで、そして美命からの勧めもあり、その筑紫舞の衣装に腕を通してみる事にした。

最初は軽い気持ちからだった。ただ着替えの代わりに、と思った程度だった。

けれど不思議にその衣装を身に纏った途端、何かが弾け身体中の血を駆け巡った。

一体どうしたんだろう、私。舞なんか舞ったこともないのに……。それでも自然に”その時”はやってきた……。そう、あまりにも自然に。

初めは踊ってみるつもりなど、微塵もなかった。

でも筑紫舞は、この地に所縁の郷土舞。だから、ここに住まう者は勿論、ここに訪れたのも何かの縁。元来郷土舞とは、そういった親しみや素朴さに根ざしたものであった。

それに……ユウシロウ。

やはり私は、ユウシロウの舞や美命さんの守ってきた、この筑紫舞に強く惹かれていた。

”大丈夫、大丈夫”

まだ若干戸惑いがちな私に、楽しそうに目配せしながら一つ一つの所作を教える美命の瞳が無邪気に優しく頷く。あくまで初心者なので、最初は基本のみ、のつもり。

だが、その姿は、まるで――。

平安風に髪を結び、白装束に身を包み。なぜだか、ずっと背筋が伸びるような気がした。

”よく似合うわ”

美命は微笑むと私の手を取り、まるで従者のように岩殿の舞台上に導いた。

その姿を見た者は（無論、地元の人間に限ってだが）、かつて唯一この舞の伝承者であった、美しいその人と見間違えたに違いない。

”やはり――！”

その姿を戸の陰から見詰める視線が見開かれ、思わず絶句する。

慣れない和装に緊張し、けれど、なぜだかとても懐かしい心地がして、私は美命に導かれるまま、ぎこちなく足の運びを進めた。

ずっと扇子を手にした右腕を眼前に伸ばすと、途端に周囲の空気がぴんと張り詰める。

私は急に背筋に寒気を感じて、一瞬震え、身を強張らせた。

ひんやりした岩殿の洞窟内だから――いや。

”……！”

突然、呼吸が苦しくなり、同時に狂おしいほどの目眩に襲われ、私の身体はふらっと傾きかけた。早鐘を打つ自分自身の鼓動の音が、洞窟内に木霊する気がした。

それなのに、周囲の物音が急に遠ざかると、ただでさえ静寂の包む岩殿が、いつそう沈黙に閉ざされ、突然どこか違う場所に意識を持ち去られたように感じた。

”其処”は――どこまでも光に満ちた、茫洋とした拡がりだった。

次の瞬間、視界がぼやけたかと思うと、私の心は瞬時にユウシロウの元へと飛んでいた。懐かしいその腕が、悲痛な眸が私を哀しく出迎える。

”ダメだ、来てはいけない、先生……！”
でも……。

「お、か……あ……さん！」

その声は確かに美命の唇から発せられた。
痛いくらいに空気がキーン、と鳴る。

”だめ……だ、め……、”

胸の奥底で誰かが叫ぶ。誰……？あなたは、誰。

”お母さん……”

私の脳裏にまだ見ぬ、いいえ。もう永遠に逢えぬ母の姿が映る。
それと同時に、再びあの少女が目の前に姿を現す。

”——来てはダメ！”

少女の眸は、やはりユウシロウと同じ哀しみの色を湛えていた。
どうして、どうして——。

誰かが問う。それは私自身？ええ、そして……。

”沙耶……”

”あの日”の情景が、突如視界を覆う。

”刹也、弥呼姫——ああ”

次の瞬間、私は気を失って舞台上に倒れた。

*

奥座敷に敷かれた布団に寝かされ、青ざめた顔で私は昏々と眠り続けていた。

「これほど早く……」

傍らには、いつ報らせを受けたのか鷹水と、そして貴嶋宮司が控えていた。

「佐和子のことを手厚く歓迎してくださり、ありがとうございます」
半ば頂垂れた風情の貴嶋氏に、鷹水は恭しく頭を下げた。

「美命には黙っていましたか……」

「御氣持ち、お察しします。彼女はもはや貴方の娘同然、いや——」
ふと飲み込んだ鷹水の言葉に、貴嶋は重い口を開いた。

「筑紫舞……いえ、余流の能舞」

「唄——なんですね？」

確かめるように鷹水は貴嶋に問うた。

その舞手である血筋の呼び名に、問いかけられた横顔が厳しく強張る。

「その禁じられた舞を、私たちは、こうして人知れず静かに守ってきました——そう、満千留の遺志を継ぎ」

その眼差しは、愛しげに佐和子の寝顔に注がれる。人知れず、もう逢えぬ人の懐かしい面影を重ね——。

「しかし……」

「彼女は、佐和子さんは満千留さんの遺児であり愛娘。そうであれば、いつ豪和が彼女を」

白々しい——鷹水は一瞬言葉を途切らせ、胸の内思った。

ではなぜ、自分は佐和子をこの地に連れてきたのか。真つ先にこうなると知っていて、なぜ。

そして貴嶋自身でさえ、なぜ彼女を平然と迎え入れた。こうしてこの社と杜に佐和子を導き入れれば、自ずとこうなることは……。

だが、同時にそれが人の業であることも分かっていた。
同じだ。所詮、豪和と同じなのだ。

もしかしたら禁忌とは、破られるためにこそ、あるのかもしれない。
い。

美命は一人震えていた。

己自身の身に染み付いた、この舞。それが、いつか誰かを狂わせる気がした。怖かった……。

お母さんに逢えた気がしたただけなのに——ただ、それが嬉しかっただけなのに。

それでも、私は……私は、お母さんの舞を。

2 .

「えっ彼女が……」

一清から初めてその話を聞かされた清継と青春は、意外な展開に心ならず絶句した。

豪和家の地下深くにある情報中枢である機密室。ひんやりと淀んだ空気が重く押し掛かる。

先に福岡に送ったエージェントから送られてきた情報データから、既に佐和子の居場所は突き止めてあった。そう、たとえどこにいても一度豪和のターゲットになった者は、そう容易くは逃げられぬ。

豪和が一企業として成り立っていくためには、古くから主従関係にあったからとて、伊集院家のことは、いた仕方ないことだった。

乃三郎や一清のみならず、それは清継や青春にとっても同様に自明の理であった。

しかし——。

「まさか……伊集院佐和子が豪和の人間？ 本当なんでしょうね、兄さん」

「そのまさか、だ——」

一清は顔色一つ変えず頷いた。傍らに控える乃三郎は、ただ蒼白の表情を浮かべ、最早岩のように凍りつくばかりだった。

「しかも我が妹、佐和子は正当なる鬼の血筋にあるのだ」

「……ユウシロウ」

一清の言葉を受け清継と青春は互いに顔を見合わせた。まさか父や兄が彼女をユウシロウの傍に置いたのは、このためだったのか。

共にこの家の人間でありながら、二人は今更ながら豪和の業の深さに軽い目眩を覚え、血の気の引く思いだった。たとえ本当の姉弟でないのだとしても、佐和子とユウシロウ——二人を深く関わらせることで……。

そのユウシロウは今、美鈴とともに石舞台を抱く鬼哭石の郷に、空知の下に身を潜めている。

「そつえば筑紫は鬼の源流、豪和の源となる地でもあると、確か豪和の古い縁起に……」

清継は豪和の歴史を紐解く古文書の内容を思い出した。そうだ、筑紫王朝は余流の——。

「無論、空知検校は知っていたのでしょね？」

一清は半ば木偶のようになつた父に念を押すように訊ねた。

「筑紫の日向の高千穂の霊しふる峰に天降りましき……」

乃三郎のうわ言のような低い呟きが、ただでさえその場の重い空気を鬱々と震わせた。

「天地を揺るがす餓沙羅鬼の焰——」

返答にもならぬ父の繰言を受け一清が呟く。言葉にできぬ悪寒が背筋を這い上がる。

「ということは佐和子は今、北九州は福岡に」

三男の清春が思い出したように問いかけると、

「まさか、筑紫にも闘が！？」

科学者特有の勘の鋭さで清継が核心を突く。

「そつだな……殊更に我々は、かの地へ赴かねばならぬ、ということか」

清春はともかく、清継には自分が兄にここへ呼ばれた理由が今にして理解できた。

兄はガサラキの実験を、ユウシロウではなく、今度は佐和子を使つて……。

？嵬？が二人——いや、正確には……。

確かに一瞬、己自身の脳髓に閃いた光の矢。それを見逃すはずがなかった。

まるで人間離れたような銀髪に金色の眸。男は長身の背を優雅に揺らすと、窓際に立った。

『卑弥呼……弥呼姫^{みか}、その魂は幾重にも四散し、今や眠りから醒める刻を今か今かと待ちわびている』

だが、こちらの所有する駒は、未だもう一人の片割れとは出遭っていない。インヴィテーター^{ミハル}。お前の形代は、お前自身を受け入れることを拒むのだろうか。否、それは所詮、道から外れた行為……。

人間——命は、あまりに儚い。だからこそ嵬は嵬として生き続けるのです。千年、いや、そのさらに遙か遠大なる時を超えて。いかなる時の流れも、その宿命から逃れられはしない。その軛^{くびき}を断ち切ることなど、できはしない。

豪和……、その嵬の末裔である一族は、筑紫に淵源を持っているという。そう傀儡の民として——新たなもう一人の嵬は、今目覚めた。

日本、倭^{ヤマト}という国は、本当に面白い。無論、私自身も、かつてこの国で生を受けた。そして何千年もの時を越え、未来へと脈々と受け継がれる、この記憶。それは嵬であるなしに関らず、人という生命が持つ、業のようなもの。それを求めるがゆえに、私は再び蘇ったのです。

『……さて、最後まで見定めさせていただくのでしょうか？』
男の眸に常人離れた妖しい光が宿った。

月の裏側に位置する探査衛星が、その閃光を捉えた。それは、ほんの一瞬、瞬いた刹那の光でしかなかった。

けれど、宇宙の何処かから見つめる視線が、確かにその口元を

僅かに歪めて笑った。

それは、かつて幾度か時の彼方で繰り返してきた、その一瞬の煌きでしかなかった。

しかし、それが目醒める度に、そのものたちは言いようのない歡びに打ち震えるのだった。

——それは、生命そのものが存在し続けることの歡び。

*

「^{ミハル}睦が、どうしたというのだ？」

メスは目を通していた書類から視線を上げると、執務室に響く通信機から伝わる研究員の声に怪訝な表情を浮かべた。

『……実験のあとでした。彼女インヴィテーターが突然、』

「なに、歌？」

シンボルが誇る二足歩行型兵器メタルフェイクのプロトタイプ走行実験後、睦が突然、歌を歌いだしたというのだ。どのような刺激や働きかけに対しても、じつと無言のまま、ただ黙々と目の前の作業をこなすだけだった睦。それが……。

『あれは、おそらく——日本の』

「日本!？」

彼女の口から零れ出したのは、どことなくエキゾチックな和音を響かせる、日本の大和言葉のような和歌だった。民謡……？ どことなく哀しげな、それでいて底知れぬ美しさを湛えた。その例えようもない妙なる響きを高く長くそつと響かせる、その歌声。

それはどことなく鎮魂歌レクイエムのようだと、その時録音された音声を聴きながらメスは思った。

一体どうしたというのだ、睦。

やはり彼女の故郷は日本なのかもしれない。あの飛行機事故の現場から保護して以来、彼女の国籍は東アジア系であるということだ

けが判っていた。その歌の言葉は純然たる母音を響かせる大和言葉
いや、それどころか。まるで何かに呼応するかのように――、確か
に彼女が突然歌い始めた瞬間、その同時刻に月の探査衛星も異常な
兆候を捉えていた。

「……これは。やはり日本、それも北九州――だと？」

ほんの数秒だったが、確かに特異点の瞬きが日本列島の南西、そ
れも北部九州地方で確認されたのだ。

北九州、福岡。それは、ある調査のためにメスが派遣していた韓
国人エージェント朴が潜入している地でもあった。そう、筑紫地方。
かつて日本が倭国としてスタートした礎となった、ある王朝が栄え
た土地だ。まさかそこに特異点が。

メスの予感^{予感}は当たったのだろうか。以前、瞳とともに日本を訪れ
た時、彼女に現れた微細な変化。そこは京都近郊だった。だが、時
の拠人^{よりうと}インヴィテーターは、幾重もの魂の記憶をその身に宿すとい
う。まるで獣そのもののような鋭敏な嗅覚。そこで物言わぬ瞳の指
先が指し示した方角は、南西だった。

メスはその時の悲痛な眼差しを忘れることができない。

なぜだ、どうして……まるで初めて瞳の眸に手に取れるような感
情が表れたような気さえた。

まるで、何かを言いたげに。それでも、その唇は何かの禁忌を怖
れるように未だ閉ざされたままだった。

*

『ユウシロウ……』

その声にユウシロウは目覚めた。まだ宵の口であったにも関わらず、
山間の郷は異様にも思える静けさに満ちていた。

夢、なのか？　だが、そんなはずはなかった。額に流れる大粒の
汗。そして何より、圧倒的な質量を以って精神を圧迫する重苦しい
おびただしい気配。その圧力に確かに彼の胸は悲鳴を上げた。一体、

何が……。

それでも眠りの淵で確かに彼は、その人の面影を一人見ていた。平安風の髪を結い上げ、舞の装束に身を包み。その長い髪が翻った瞬間、覗いた白い項^{うなじ}。長い睫毛が美しく蒼い影を頬に落とす。どこか哀しげな、その横顔。

自分は、その人の幻をずっと夢の中、追いかけていた。——先生、佐和子、先生！

だが、そのひとは、その呼びかけには応えない。……ダメだ、行つてはダメだ！

悲痛に叫ぶ自分自身の声に、いつしか己を失う。

『ユウシ、ロウ——……』

伸ばした手が虚しく落ちる。本当は、ずっとユウシロウに助けを求めていた。怖かった……それなのに。

次第に自分自身が自分自身でなくなっていくような。そんな得体の知れぬ感覚に絡め取られ。いつしか私は気を失ったのだ。

「佐和子先生！」

やっとのことでユウシロウは声を出すことができた。そして金縛りから解かれたように、一足飛びに寝室から飛び出した。

行かなければ——。ただ、その衝動に突き動かされるままに、ユウシロウは夜を駆けた。

ただ当てもなく夜道を走ったわけではない。その動物的勘は確かに間違つてはいなかった。

突然、目の前の車道から一台、四輪駆動のジープが滑り込んできた。そのヘッドライトの眩しさに顔を左手で覆うも、目線はしっかりと、その車から降りてくる人物の影を捉えていた。

「ユウシロウ、なのか？」

そう呼びかける声には聞き覚えがあった。さらりとした長髪をなびかせた、そう、それは彼の兄の一人である清継であった。

「清継兄さん……」

思いもかけぬ兄との出会いに、いや、それでさえもユウシロウは既に全て知っていたのかもしれない。一体どうしたんだ、確かに郷にいると知らされてはいたが……、そう白々しく話す兄がここへやってきた思惑も、全て。

「……僕は行かなければならない」

ふと独り言のように呟く。ふ、そうだと思っていたよ、相手はまるで、そう言いたげにニヤリと無言で笑った。

「実は次のT A実地試験を行うことになった——ユウシロウ、お前には翌日にも北九州の福岡へ飛んで貰う」

それはまるで、あからさまな罠のようだった。だが、今の彼には願ってもないことでもあったのだ。例えそこで、どんな出来事が待ち構えていようと。自分は行くしかない。先生がそこにいることは間違いなかった。

してやったりの表情を浮かべる清継に促されるまま、ユウシロウは黙ったままジープに乗った。

3 .

翌日の午後、私はやつのことで目を覚ました。
傍らには貴嶋宮司と、そして心配そうに見つめる鷹水の姿もあった。

けれど……頭が、割れるように痛い。昨夜、一体何があったのかも、私は全く覚えていなかった。ただ、美命さんに連れられて湯殿に浸かり、そして、そのあと——。

記憶はそこで、ぷつぷつと綺麗に途切れていた。何かとても、特別なことがあったような。

「私……一体、」

未だ幻肢のような記憶に痛む額を押さえながら、私は握った掌に滲む脂汗をじっと視つめた。

「佐和子——」

どこことなく悲しげな表情で優しく微笑む誠司さん。どうして、そんな眸^めで私を見つめるの？ 何だか、まるで――末期患者を見つめる家族の眼差しのようだ。一体私は、どうしてしまったと言っただろう。すると貴嶋宮司の影に隠れるようにして、美命さんが青ざめた表情で私を見ているのに気付いた。

「まだ痛むのか、佐和子」

もう一度横になった私の額を冷たく冷やしたタオルで拭いながら、鷹水が囁く。

「ごめんなさい、大丈夫よ、もう……」

彼をこれ以上心配させまいと、殊更に気丈に振舞おうとする。けれど、先ほど部屋から出て行った貴嶋氏の横顔に盗み見た、押し殺したような苦悶の表情が気にかかる。

「もうしばらくこちらで休むといい。貴嶋さんも勿論、そうするようにと仰ってください」

「すみません……御心配おかけして」

いつも以上に優しい鷹水の言葉。自分や彼がここ筑紫へやってきた、その目的が、なぜだか急に意識から遠のく。突然、熱病にかかったようにだるく、そんな自分を氣遣ってくれる皆の優しさに、ふと涙さえ出そうになった。

それなのに、自分は何かを忘れている気がする。本当に大事な何かを。思い出そうにも、何一つ思い出すことができない。身体に力が入らないのと同時に、どこか思考までもが正常に動くことを拒んでいるようだ。

一体私は、何のためにここまでやってきたのだろうか？

「で、ユウシロウは早速筑紫へ向かったのか？」

「特自の実験中隊への通達も正式に済ませた――夜半にも各種機材とともにユウシロウを追って現地へと向かうだろう」

一清の問いかけに真顔で答える清春。自衛隊専用機にて自機とともに九州へ旅立ったユウシロウ。無論、豪和総研主任である次男の

清継も一緒だ。

同時に彼らの観測機器が独自に捉えた異様な兆候。僅かだが、その一瞬の明滅を豪和が見逃すはずがなかった。それは悲劇そのものであった……遙か過去から続く神依りの舞台。闘——^{しきみ}彼らがそう呼ぶ異常な空間軸。それは時折、世界各地でその観測を見出すことのできるものだった。おそらくは嵬。その資質を持つ者と、その場所とが遭う時、爆発的に観測される、いわゆる特異点と呼ばれる超常現象とも言えた。

異様な精神の暴発が引き起こすメンタルバースト（機能相転移）。それが一つの引き金となつて、その空間の歪みは現れる。そして、まるでブラックホールのように、全てのものを飲み込むのだ。難しいことはよく解らないが、清継の説明によると、それは物質と反物質同士が引き起こす対消滅。まさに膨大なエネルギーを放出させる、言ってみれば途方もない人体発電機である。

餓沙羅鬼の焰——それを古より嵬は、その能力によって自在に操ってきたという。豪和に伝わるその古い縁起は、決してただの御伽噺ではなかった。骨嵬。その力をかつての軍事豪族が欲しいままにしないわけがない。それは無論、科学万能の現代の世にあつても同様だ。いや、科学万能の今だからこそ、我々はその研究開発を独自に進め、今時点で唯一使える手駒であるユウシロウを利用して……。だが、そのユウシロウ自身が次第に己の自我に目覚めつつある今、もう一片の別の者の力が必要であつた。それは皮肉にもユウシロウの内面に働きかけ、明確な己自身に目覚めさせた張本人、伊集院佐和子。

いや、もうその名は相応しくない。我が妹、豪和佐和子……翻つて、その力の源のルーツから貴嶋佐和子でもよいが。一清は一人無言で口元を歪めた。

ユウシロウの心理操作は完璧だった。各種薬物投与から始まり、自己暗示マシーンにかけ、何度も豪和の末弟の記憶をその脳髓に刷り込ませた。改めて人というのは、まさに記憶によって成り立って

いるのだと知る。転写に次ぐ転写で元の人格さえあやふやになった、ただの操り人形。

しかし今となつては、やつには別の方法で役に立つて貰わねば……。

佐和子の存在を通じてユウシロウは自発的にT Aに乗り込む。そして、いかなる理由があろうとも、その宿命の軛くびきから逃れられぬ己自身を知るのだ。そう、貴様は鬼、鬼なのだ。

一清は、まるでその者たちへの憎しみの情を滲ませるように冷酷に嗤った。かつて、その資質が自身にはないと知った時の落胆と絶望の念。それは餓沙羅鬼を操り、その無窮の力を己が手にすることへの執念、ただそれだけのために生きている男の、それが今の姿でもあった。

＊

その翌日、とある韓国人男性が貴嶋家を訪れた。

「朴パク基赫キヒョクと申します——、私はフリージャーナリストなのですが、」

彼がこの貴嶋神社を訪れたのは、ずばり貴嶋満千留の舞に関する取材を行いたいとの趣旨からであった。市内の商店街で彼女の死を知り、それでは、せめて……ということ、実家であるこちらの貴嶋神社で話を伺いたい。流暢な日本語を話す朴は、いかにも純粋な日本文化への興味を持っていることが、その真摯な表情マスケからも窺えた。

しかし、肝心の一番弟子である美命は、昨夜の精神的ショックで舞うことができないでいた。適当に理由を繕って本日は、その舞をお見せすることはできないと貴嶋宮司が打ち明けると、朴はさすがに残念そうな顔を隠さなかった。

すると、奥から何事もないことのように鷹水が二人に歩み寄ってきた。

「……ほう、韓国の方？ 遅ればせながら、私はこういう者です」

にこやかに鷹水の差し出した名刺を受け取りながら、朴はこちらも笑顔を絶やさず挨拶した。

「朴です、どうぞよろしく」

私も美命さんの舞は一足遅く拝見することができなかったのですが、それでも、この地にやってきたその日に筑紫舞の公演を観劇しました……、本当に素晴らしい舞でした。

確かにその感想は真実だった。決して銜うことのない質素さの中に滲み出る躍動感。その日本的な舞の所作の中に、おそらくこの男も生き生きとした生の実感を確かめようと、この福岡は筑紫にやってきたのだらう。

それでも鷹水は、まだ何も知らなかった。この朴こそが、不可解極まる行動で、彼らの足取りをここに留めた、シンボルジャパンの極秘調査エージェントであることなど。

「国際ジャーナリスト連盟……、その昔、私もお世話になったものです」

今でこそフリージャーナリストで通していますが。朴の話には極々普通の韓国人らしい真摯さが垣間見れ、何一つ怪しい素振りなどなかった。それが鷹水の警戒心を解いたのかもしれない。

「聞けば、非常に起源の古い伝統的な舞と伺いました。お恥ずかしい話ですが、私自身、生粋の日本人でありながら、その存在については最近まで全く知らなかったのですから」

鷹水は素直に自分自身の無知について語った。

そう、知らないということは怖ろしいことだ。——そして同時に、知らないでいた方が幸せなこともある。

奇しくも二人は、同じ事を双方の胸中で、それぞれ思った。

「本当に日本という国は美しい所だと常々思います。瑞々しい海と山が生み出す自然、そしてそこに住む人々の素朴な暮らしぶり、まさにこういう所にこそ神は住まうのでしょうか？」

確かに日本という国の基盤には必ずそんな美しい風景があった。

その、時に厳しく時に穏やかな自然の懷に抱かれた風土。おそらく日本人の精神は、その心象風景が存在してこそ持ちえた独自のものなだろう。かつての日本人……、今は失われてしまったかもしれない、その光と闇の永遠のせめぎ合い。

遠く縁側から、そんな和やかな歓談の声が聞こえ、私は思わず身を起こした。

「誠司さん……？」

そつと障子を開け、穏やかな午後の陽だまりを眩しく見つめる。

「あの方は？」

その、少しやつれた風情を見せる美しく華奢な姿に、朴は思わず目を細めた。

「いえ、彼女は私の――、婚約者なのですが、旅先で少し風邪をこじらせて今休んでいたところですよ」

以前は当たり前だったその紹介に、浴衣姿の私は少しだけ、はにかむ。

「すみません……お話中の所、もしお邪魔でしたら、私」

とんでもない、貴女のような美しい方に出会えたのも、何かの縁。御世辞だと解つていても、何だか恥ずかしい。あちらの方は、とにかく表面に表す感情が豊かだと確かに聞いてはいたが。そんな御国柄を口実にしてか、朴は佐和子のことを、しきりに褒めちぎった。

「いや、鷹水さんは幸せ者ですよ」

――ところで、

朴の話は、そこから次第に核心に迫っていった。

仕事のため、いつのまにか退席した貴嶋宮司に代わって、その話が出るのは必然ではあったのだが。

「……貴嶋満千留さんですが、実は私はその昔、一度だけ貴嶋さんにお会いしたことがありますよ、」

えっそうなんですか？ その事実には純粋に驚く鷹水。

それは単なる偶然の出会いでした――、私は勿論、彼女がかの有

名な筑紫舞の伝承者だとは、その時全く知りませんでした。しかし、たおやかで美しい彼女に、これが生粋の日本人女性の美しさであると実感しました。そういえば、事故に遭った娘さんを、これから見舞いに行く所だと仰ってましたね。それからすぐ、私は自国での仕事が入ってしまい、彼女とはそれでお別れしたのですが。

ちょうど8年前、まだ彼女が生前の頃の話だという。

『……っ』

鷹水は一瞬、絶句した。貴嶋満千留は、あの心中事件のことを知っていたのだろうか？

というより、自分の娘が今どこにいて、どんな暮らしをしているのか……、数年前の不慮の死まで、その存在を常に気にかけていた？　しかしその時、彼女は実の娘を見舞うことができなかったのだろうか。

今この場にいる佐和子は本当の母親の真実^{こと}を知らない。何一つ知らずに自分の実家を訪れ、そして――。

佐和子が舞ったという筑紫舞。そう、まるで……満千留の魂が乗り移ったようだと言司は語っていた。そして嗚咽にも似た胸のつかえが彼を襲った。それこそは、禁断の舞。そうだ、余流の能楽とどこが違うというのだ。

「娘さんを、ですか」

何事もないかのように、佐和子が訊く。

「そういえば、満千留さん、彼女の一番弟子の美命さんのことを本当の娘のように思っていたって」

私、美命さんの舞を見て思ったんです。命は、こうして後世に受け継がれていくんだな、と。それが伝承の本来の美しさではないでしょうか……？

まるで穏やかに夢見るように話す私の口調。自然と脳裏にユウシロウの姿が蘇る。

「ですから美命さんも、ただ筑紫舞の伝承者であるという使命以前の何かに突き動かされて、舞を舞っているんだと思います」

それはきつと、お母さんの記憶――。
どうしてか、私の目頭に涙が浮かぶ。

「佐和子さん……」

朴の思いは本物だった。例えこの場の会話が偽の仮面を被った、単なる記号以前の何ものでないとしても。

貴嶋満千留を介して生まれる、このかけがえのない幸福感。それが、彼女が本当に満千留の実の娘であるからなのだとしても。

「そういえば佐和子さんは、満千留さんにとってもよく似てらっしゃいますね？」

えっそうですか？ その時、私は単純にこれも朴流の御世辞なのだと思っていた。

「美命さんにも、いずれまた……、今度こそ本物の筑紫舞を拝見させていただきたいと思います」

そう言つて朴は去った。そのどこか爽やかな振る舞いが、まんじりともしないままだった私達の沈黙に何かを残していった。

4 .

「空知のおじ様、やはりお兄さまは……」

早朝、目が覚めてから、しばらくしてユウシロウの姿が見えないことに気付いた美鈴が尋ねた。

しかし昨日、空知の部屋で対話していた時から、いずれ遅くない時期に兄の旅立ちの日が来ることは、既に悟っていた。それでも――

「美鈴殿……ユウシロウ殿は、あまり御家族に心配をかけぬうち、家に戻るようにと」

「はい、でも……」

空知が告げたユウシロウの言葉に従わないわけではない。けれど、やはり私は……、ふと一言一言、大切に置くように呟く。ユウシロウお兄さまと先生のこと、気にかかるのです。そう半ば独り言の

ように呟く美鈴を、空知は見やった。

痩せ細った華奢な肩が微妙に震えている。それでも蒼白だった頬には、どことなく淡い桜色の気色が見て取れた。若干俯いた美鈴の瞳は、それでもどこか一点を見定めるように静かに揺れていた。

「伊集院殿とユウシロウ殿の絆——それは、美鈴殿とユウシロウ殿との絆……」

えっ。その言葉に美鈴は顔を上げた。しかし空知のその言葉が告げる意味は、既に美鈴の中にそつと息づいていたものでもあった。ただ、それを不意に空知の口から語られたのが意外だった。

伊集院先生……、佐和子先生は、ユウシロウお兄さまにとって。

その先は本当は美鈴自身にも、よく判らない。それでも、どこか遠くで二人は強く繋がっている気がした。私自身がお兄さまを、とても大切に思っているのと同じように。

……だから、お兄さまは筑紫へ行かれた。

私はただ、そんなお兄さまの帰りを一人待っていることしか出来ないの？

——来るな、美鈴。

ただ、そんな兄の声が遠くから聞こえるだけだった。それは最愛の妹を気遣うユウシロウの心の声に他ならなかった。

でも違うの、お兄さま。私はお兄さまのことだけじゃなく、どこかで先生のこと……。

そう、とても気になって仕方ない。昨夜、二人のことを思っていたら、急に胸の奥がずきりとして。それは不意に訪れた胸騒ぎのようなものだった。いいえ——本当は、もっとはつきりと。確かに美鈴は、その瞬間、何かを感じ取ったのだ。それは、とてもとても哀しげな予感。よくは分からないけれど、どこかそんな悲痛な感覚にも似ていた。まるで遠い星の彼方で超新星が弾け飛んだような、ほんの一瞬の^{いた}傷み。

「先生、お兄さま……」

本当は私も行きたい。美鈴は兄を追って遙か筑紫の地まで行くこ

とのできない、そんな自分自身の不遇を悲しく思った。

「美鈴殿、」

そんな小さすぎる一四歳の少女の憂いの表情を、空知には、ただ黙って包むように見詰めることしかできなかった。

その日の内に、美鈴は豪和邸に戻った。

しかし父である乃三郎を残して、兄たちの姿はいつのまにか消えていた。いや。それぞれに忙しい身である一清や清継、青春の三人の兄たちが揃って家にいることは、むしろ稀にしかなかった。それでも美鈴には、そのことに妙な違和感があった。やはりユウシロウが筑紫へと赴いたのと何か関係があるのでは？ やはり、また何かの実験を……。

だが、美鈴が危惧したその思いは決して間違ってはいなかった。ユウシロウが九州へ向かったのは、佐和子に会うため。そして、それだけではない何かが、まるで暗雲が立ち込めるように二人の周りに漂っている気がしてならなかった。それはやはり、昨夜感じた異様な胸騒ぎと無関係ではないのだろうか。そう、きつとお兄さまは、先生を救うために。

「お父さま……」

いつになく乃三郎が庭に出て、虚空を眺めているのが気にかかった。佇むその姿は、まるで置き捨てられた人形のようにもあり、枯れ果てた巨木のようにもあった。いつのまに、父は老いてしまった。そんな虚しさが急に胸に押し寄せ、しくしくと痛むような喪失感とともに、それでも大切にしたいという切なる思いに美鈴の心は、しばし絡め取られるのだった。

「美鈴、今戻ったのか？」

「はい、お父さま」

不意に一人娘の存在に気付いた父に答える美鈴。そんな何気ない会話にも心が傷む。

乃三郎は無断で外出していた娘を特に叱るでもなく、それでも、

そんな父の様子に美鈴は思わず、ごめんなさい、声を上擦らせる様もなくそつと謝った。それは、必ず家へ戻つてくると信じていてくれる、そんな父への感謝の気持ちでもあった。

お父さま……、けれど再びその声を掛けるも、そのあとが続かない。しかし、とうに緩やかに凪いだ水面のように、乃三郎は思い出すようにゆつたりと言葉を紡いだ。

「ユウシロウのことか……、」

その瞬間、びくつと震える肩。そんな美鈴の様子を顧みることなく乃三郎は続けた。

「お前たち兄妹は、これからもずっと兄妹だ。だからその変わらぬ絆は、どんな困難にも打ち勝つことが出来る——」

「お父さま……」

確かにユウシロウは余流ただ一人の伝承者だ。だが、それとて今ここに生きている、たった一人の人間の前には、何の意味もない。違うか？ そう語る乃三郎の言葉は、確かな説得力に満ちていた。美鈴はただ黙つて、その寂しげな背中にとつと頷いた。

一瞬、遠い筑紫の地が急に美鈴に近づき、すぐ目の前に拡がった気がした。やはり人と人との絆は、遙か時間と空間をも越えてしまふのだろうか。次の瞬間、美鈴は父に問うていた。

「伊集院先生……、」

ん？ 父が振り返ると同時に、美鈴はしっかりと顔を上げて訊いた。

「先生も、やはり筑紫にいらつしやるのでしょうか？」

やはり気になるのか。そう答える父に頷く。どうしても、先生のこと שהוא人件と思えなくて。だが、ある意味、双つの意味合いによつて、美鈴のその思いは少しも間違つてはいなかった。

天孫降臨。その伝説は、確かにかの地が遠い神話の血を引く場所であることを示していた。そして神とは類稀なる力を持つもの。いや尋常ならざる無窮の力であればこそ、人はそれを畏れた。神話の時代は、人知の及ばぬ、その禁じられた聖域に人が踏み込むことは

なかった。だが一度その力を欲する欲望に駆られると、人は人ではなくなる。そうだ、餓沙羅鬼……。

「ユウシロウが舞を舞うのは、ただその神事を行い、伝承を伝えていくことだけではないのかもしれないね——、」

およそ豪和の歴史を、その背に担う総代とも思えぬ独り言を乃三郎は呟いた。

「我々はただ、その一人の人間の思いと行動を、こうして黙って見つめていることしかできない。だから、祈りは存在しているのかもしれないな」

お父さま……、私は、お兄さまのために、ここで一人お祈りしていることしかできません。それでも。

「先生とお兄さまのために、私は祈りたい——」

そう信じている。ただそれだけの思いが、父と娘をかの地へ繋いだ。例え豪和という業に自らを賣やうしていくしかない人生でも。己自身の愚かな行為に気付き、後悔し、果てしのない懺悔の海原へと追い込まれていくだけの旅路であっても。

美鈴もまた父と同様に、庭の松の木の深緑の向こうに広がる薄青い空を仰いだ。

*

「それにしても兄さん、本当に伊集院佐和子が我々豪和の……、」
清春が危惧するのは当然と言えた。たとえ豪和と言えども、やはり我々だって人の子だ。今さら何を、と長男で今や豪和のナンバー2としての実力を持つ一清には揶揄されるだろうが、それでも、もし佐和子が本当に妹なのだとしたら。二つ下の清春には姉ということになるが、それでも例え産みの母親が違うとは言え、彼女が本当に自分の肉親なのなら。

「ユウシロウだって、僕たちの弟じゃないか」

そう事も無げに言つてのける次男の清継は、典型的な科学者だっ

た。実験で得られるデータによって科学が新たな領域へ進むためなら、おそらくどんな犠牲も厭わない。確かにそこまで非人間というわけではないが、こと豪和の人間ともなれば、そういった倫理観がどこかで次第に薄れていくのだろうか。

その点で言えば、清継はまだ真つ直ぐに長男の一清の思惑に則って行動しているのかもしれない。兄の理想が自分の研究と重なるのであれば、それに異議を差し挟む余地などない。何よりT A開発によって過去の遺物から取り出した人口筋肉が、その科学の新たな進歩を担う発端となるのならば。

純粋な会社人間で、豪和においては政治工作や情報のリーク解析など、実質的な対外交渉を担っているとはいえ、三男の清春には、そんな二人の兄たちの姿は一種異様に思えたかもしれない。だが、どんな言い訳をしても、自分とて豪和の人間として、その片棒を担いでいないとは決して言い切れないのだ。そう、今さら……何を躊躇う。

「罪の意識、か」

ふと清継の呟いた言葉に、思わず清春は兄の横顔を見やった。

どうして我々豪和は、いつもこんなことばかりしているんだろうな……、不意に漏らした深い溜息とともに吐き出された言葉。

自衛隊輸送機に自機とともに同乗しているユウシロウ。その専用機を追うようにして同様に北九州へ向かっている機内の中で、二人の兄弟は一瞬、当たり前の人間としての感情おもひに立ち返るのだった。

——それでも、とうに我々には後悔の二文字は許されないのだ。そう、それが豪和という宿命そのものなのだから。

美鈴が立ち去ったすぐあと、鬼哭石の郷の一角に黒いリムジンが停車した。

その車から降り立ち、空知検校の屋敷を訪れた、ある一人の男。オールバックの髪型の広い額は、いかにその人物の知性が鋭いものであるかを伺わせた。ふ、鬼哭石の郷、か。我々がこんな鄙びた歴

史の辺境に未だ囚われているのは……、それもすべて餓沙羅鬼のため。その意味では、どれほど一大軍需産業として、際限なく進み続けるこの文明社会に契合しようと、豪和という一族は降り積もる過去の澱を拭い去ることもせず、その膨大な時の蓄積をこそ己自身の糧として今に生きているのだ。

一清がここを訪れた目的は二つあった。一つは空知から事の真相を暴き出すこと。そしてもう一つは、これから共に北九州は筑紫への同行を同意させることであつた。

無論、餓沙羅の舞の修行は一定期間、その神事の前には常時行われていたのであるが、何しろ今回は急を要する。当然、郷で悠長に修行している暇はないということだ。そのため急遽ユウシロウを、まず一路九州へと向かわせた。神事と並んで行われるＴＡ走行試験。一見して無関係の事柄が一つに繋がっている。過去と未来の結合。だから空知をいわば連行という形でも、我々と同行させる必要はあつたのだ。

「これはこれは一清殿、お久しゅうございます」

そんな白々しい挨拶を交す空知のどこまでも温厚な表情に、玄関先で一清は思わず鼻で笑つた。老いているとはいえ、この老人はやはり油断ならぬ。検校という名を認めて^{した}いるだけあつて、伝承という名の澱が降り積もつた砦の囲いの中で、じつと息を潜めて生きてきた。まさに生きた化石だ。

「空知検校、つい昨日まで、こちらにユウシロウと美鈴が来ていたようだが、」

おお、そうでしたな。あくまで、そんな悠長な調子を崩さぬ相手に苦笑いする。

……どうでもよいがユウシロウ、やつは我々の思惑通り、今北九州へ向かっている。ほう、それはまた御苦労ですな。相変わらず、空知は素知らぬ振りで鷹揚に構えている。

「ところで検校、余流の淵源は、その北九州は筑紫にあると――、そもそもこれは、我が豪和の古き縁起に描かれている伝承通りなの

だが」

まさに狙い定めたようなシナリオだが、そこには当然、^{じぎ}闘も存在しているはずだ。

——なぜ、白村江の戦いにおいて筑紫王朝は滅びたのか？ 空知検校、貴方は伊集院佐和子の実母である、貴嶋満千留について本当のことを知っていたはず。だからこそ父、乃三郎と彼女との間を取り持つような真似を、いや父が彼女から佐和子を貰い受けた後、行方不明になった満千留を一時、本州から逃したのもすべて……。

「はて、何のことでしょうか？」

相変わらず、白を切り続ける空知。しかし一清はふつと不気味に笑うと、一瞬押し黙った。

「卑弥呼の国、邪馬台国は、筑紫にあったのだという一説がある——……、」

その瞬間、一陣の風が双方の間を通り抜けていく気配がした。実際、開け放された玄関口には、冷たい外気以上の何かが漂っていたのではあるが。おぞましくとも見据えずにはいられない、そんな目に見えぬ闇が。

まあ、そんなことはどうでもよい。我々豪和が司っていた余流能楽の淵源が筑紫にあらうとも、別段驚きはしない。要は？ 力？ さえ取り出せば、全てはどうでもいいこと。だが、いずれ貴方にはユウシロウと佐和子の子を、その余流の伝承に則って教育して貰わねばなるまい。……その最後の一節に、空知は細い目をさらに細くさせ、^い巖のように沈黙した。

「——それは、またもこの空知に、新たに芽生えた命を犠牲の種にする手助けをさせようということですか」

一清は、やっと引き出したその本心に口元だけでニヤリと笑った。
……無論、ユウシロウには、まだまだ役立って貰わねばならぬ。

だが、いずれ先々の「保険」は必要だ。それに、それ自体がもし只者ではないとしたら……、やはり二人は、思わぬ落し種を産んでくれるということになる。

筑紫舞の宗家は、余流の淵源にして遠い先祖。その義理で行ったというだけではない、そう満千留には、それだけの力が眠っていたということなのだ。それを餓沙羅鬼の神事の犠牲にしてはならぬという、その心理が無意識のうちに働いたのだろう。だが、今回はそういうわけにはいかない。佐和子自身のものと、そしてその佐和子に出逢ってからというもの、一時保留となっていたユウシロウ双方の力。その融合が貴嶋満千留の持つものと同等、いやそれ以上の作用がないとは言い切れない。

「空知検校、なぜ私自身が直々に貴方を迎えにあがったのか、どうかその理由を思い出していただきたい……」

異様な一清の眼光に射竦められ、空知はかつて弟子の一人として修行を行った、まだ歳若い彼自身の姿を脳裏に蘇らせた。嵬としての素質を見出せず、結局は失意のうちに修行を中断せざるを得なかった、その苦悶の表情を。

なぜそうまでして、この男は己自身の野望を遂げるために、ここまで冷酷になれるのか。だが、最早そんなことは、敢えて尋ねる必要もなかった。いつかその野望は、餓沙羅鬼の焰に包まれ炎上し、いずれは——しかし預言者でも何でもない空知には、それ以上のことは語れなかった。

＊

……あの時、一体私はどうしたというのだろう。

不意によりみがえる記憶の中で、私は確かに舞を舞っていた。ユウシロウと同じ――。

でも確かにそれは怖ろしい体験であったはずなのに、不思議と恐怖は感じなかった。だって、少しだけユウシロウに近づけた……そう、少しだけユウシロウの気持ちに近づくことができた。あんなに離れていても近くに感じていた彼の、けれど私は、やはり傍にいてはいけない存在だった。なのに。

身体と心を包み込む、この例えようのない幸福感、そして思慕。

それは何もかもを超越するような至福に満ちた感情だった。忘れようとするほどの、彼を想う気持ちを停められない。もしも、それが許されざる行為であるなら、どうか早くこの身を――。

私は穢れた女。餓沙羅鬼の焰ほむは、ユウシロウのように舞を舞う者の元へおとなう。ならば私はいつか、その焰に焼かれる運命なのだろうか。そう、ね。多分私は、ユウシロウを庇うためなら……そう、きつと。

そんなとりとめのない思いに息を吐くと、薄明に染められた初冬の空は、今にも白いものを舞い躍らせてくるような冷たさに満ちていた。南国であるはずの福岡だが、ここ北九州は特に山脈に遮られることもなく、それだけに日本海から直接吹き付ける北からの冬の寒さは、当然この地にも本州同様にもたらされた。その空気の冷たさに、思わず人の体温が恋しくなる。優しくやわらかく……瞬間、？あの時？の彼の温もりを人知れず思い出す。

そんな私を傍らで見つめていてくれるはずの鷹水。そして私の舞を見て、言葉を失った貴嶋宮司。

――お願いだから、そんな風に私を見ないで。

それでも、その何かを守りたいと願う思いは、きつと私がユウシロウを守りたいと思う感情と一緒に。まるで砂の城のように海の波に浚われる、儚げな存在。けれどその砂の城は、崩れ流されるために存在しているのかもしれない。ただ形を持たぬ、「無」そのものに還るために。ならば、私は……私は、ユウシロウと一緒に。

「佐和子さん」

不意に背後から声を掛けたのは、貴嶋宮司だった。

？あの瞬間？青ざめた彼を襲ったのは、確かな恐怖だった。何かを消し去ってしまうかもしれない、恐怖。

あれほどまでに、まるで罪悪感にも似た、もしかしたら後悔の念に晒されていたのかもしれない貴嶋氏。でもそれは、私自身が望ん

だことだったかもしれない。もしかしたら、私はあの舞を——そう筑紫舞、そしてユウシロウの余流の舞に本当の自分自身を感じたのかもしれない、だから。

「満千留も、そうでした……」

「え？」

ふと言葉を紡ぐ宮司の表情は穏やかに、在りし日の人のことを思い浮かべるままに、ただ凪いでいた。

「まるで半ば筑紫舞を舞うために日々を過ごしていたようなのに、不意に満千留は、」

あれはおそらく、恋……きっと誰かを想って物思いに耽っていた姿だったのかもしれませんが。

その貴嶋氏の言葉に私はとっさに頬を僅かに紅^{あか}らめる。けれどそれは、とても優しい恥じらいだった。

「ですから、どうか。どうか佐和子さんも、後悔だけはなさらぬよう……」

「はい」

よもや貴嶋満千留が自分の実母だとは思っても寄らぬまま、私は頷いた。

穏やかだが、確かな思いやりに満ちたその言葉に、私の中に再び確かな核のようなものが生まれる。それは、ただ誰かをしっかりと抱きしめたい思い。そう、かけがえのない大切な誰かを。果てしない絶望以上に。もしもそれが許されることならば、私はユウシロウを——ユウシロウを、やはり守りたい。

第九章 ―古（いにしえ）の約束―

1 .

遙か昔、奈良に平城京の都が造られるより二四〇年も以前、ここに倭国筑紫王朝が形作られた。そしてその前身であると言われている邪馬台国。まるで漠然と伝説の巫女、女王のように思われている卑弥呼――もし、その不思議な力がこの日本、倭の国を作ったのだとしたら。そんな荒唐無稽な話は、科学万能の時代には無論受け入れられないかもしれないが、それでもその決して目には見えない真実にこそ、世界の、物事の真理が隠されていたとしたら。

福岡と大分とに跨る北部九州の最高峰、英彦山^{ひこさん}。北岳・中岳・南岳の三峰からなる標高一二〇〇メートルの頂は、かつて修験道の霊場として栄えた。古事記にて天孫降臨の舞台として描かれた地である。『筑紫の日向の高千穂の霊^くしふる峯^{かみ}』――そう謳われた山々に雲間から差し、降り注がれる後光のような光輝^{ひかり}を眺めながら、一人鷹水は思った。

……もし、佐和子が無意識のうちに舞ったという舞と、ユウシロウのそれとが同様のものであったら。

それより一体、貴嶋満千留という筑紫舞の舞い手は何者なのか。まるで降って湧いたように、彼女はこの地に現れた。その血を色濃く受け継いでいるはずの佐和子。彼女が、あれほど執拗にユウシロウという存在にこだわるのは。嫉妬などという性質のものを越え、二人が織り成す不可思議な磁場に、既に鷹水自身に取り込まれようとしているのかもしれない。

奇しくも同じ頃、昨日貴嶋神社を訪れた朴も、同じ伝説の伝わる峰々を茫洋たる思いで見詰めていた。

古^{いにしえ}の時、北九州は初めて日本という国が大陸文化の洗礼を受けた地。おそらくそれにより物質的なものばかりでなく、もつと根源的

な何かが、その時代の奔流の中、人知れず生み出された――。そう考えることはできないだろうか。あながちやはり、卑弥呼の奇跡は本物であったのかもしれない。ふと神話と現実が、いきなり二重構造の螺旋を描くDNA遺伝子の鎖のように絡み合い、まるで今に続いているかのような錯覚に溺れかける。

それはおそらく昨日、貴嶋満千留の血を引く伊集院佐和子に出会ったからだろうか。

なぜ評議員メスが、ここ筑紫にて日本古来の伝承文化について何らかの真実が掴めると考えたのが、今にして理解できた気がした。いや、実際メス自身がそう告げたわけではない。むしろそれは、朴自身の勘のようなものだったのかもしれない。その勘、一種のインスピレーションのようなものを辿った先に、偶然、彼女はいた。国際ジャーナリズム団体のエージェント鷹水誠司の婚約者。シンボルという組織に属している以上、その網目のように張り巡らされた情報の中の波の中で、点と点を結ぶ線を見つけてしまうのは致し方ないことだ。

それでも当然、朴は元より評議員であるメスを含めたシンボル自身でさえ、今はまだ何も知らなかった。特自と日本の軍需産業の一角を担う豪和の者が、よもや運命のTA起動実験を行うために、この地に向かっているなどと。

なぜ突然こんな本州の西南の果てでTAの走行実験を行うのだろうか。特自、特務自衛隊隊員や作業員の誰もがそう思っただろう。だが、その疑問について口を差し挟む者は誰一人としていなかった。それが現、特自がほぼ豪和に従事するような形でTA実験に参画している実態そのものだった。

そしてむしろ疑問に思うべきは、そのTAパイロットである隊員の一人、豪和ユウシロウの存在であった。彼はまだ若干一七歳。そして何よりれっきとした民間人なのである。実際、豪和の四男坊であるという事実を除けば、不可思議に思うことが何一つないわけ

はなかった。むしろ……。

相変わらず無愛想な現隊員たちの中で奇異な視線を向けられながらも、ユウシロウの視線の先が求めるものは、今自分が向かっている北九州の空にしかなかった。ただ無言でじっと一点を見詰める眸その氷の張った透き通る鏡にも似た水面のように凍りついた眼差しの奥に、確かに宿るあたたかな光。

『佐和子先生……』

もしユウシロウが私の元へ向かっていると知ったら、私はやはり彼を追い返そうとするだろうか。それでも、そんなユウシロウの真っ直ぐな思いが、私はやはり嬉しかった。きっと……、それでも、だとしても私は。貴方はもう、あの舞を舞ってはいけない。だから、その代わりに私が。ただ愛しいと思う人のために、生きることができるのなら。それはきっと、本当の意味で生きたと言えるのではないだろうか。

*

陸上自衛隊、西部方面隊管内、第四師団。その司令部である春日市に位置する福岡駐屯地。早朝、福岡空港にて、その地に降り立ったユウシロウは、他の隊員達と共にそこへ向かった。やはり何か胸騒ぎがする。事前に受け入れ態勢を整えていた駐屯地内へは、何の問題もなく入ることができた。それでも……。

特務自衛隊、嚮導団第三実験中隊。その隊長である速川中佐も、実は同様にこれまで以上の事の異常さを感じていた。

確かにT A開発の先導者である豪和の下で実験開発を続けてきた中で、ある種異常でないと感じるこの方が少なかったのは事実だった。

本当になぜ、わざわざ北九州まで出向く必要性があるのか。T Aの走行実験なら、これまでどおり豪和市に特別に設えられたシュミレーター訓練場や、あるいは関東圏内の演習場でも出来るだろう。

しかも今回、豪和を通じて上層部から発令された指令にも首を傾げた。普通、走行実験として考えられるとすれば、その実行場所は、佐賀の大野原演習場か西日本最大の演習場でもある大分の日出生台^{ひじめうだい}演習場、もしくは福岡県内であれば久留米市の高良台演習場などが候補として挙げられただろう。

だが豪和が提示してきた実験場は、福岡県内のある山間部であった。確かに元々狭隘な都市部戦に特化したTAならば、ある程度場所さえ確保できれば森林の生い茂る山間部でも、さして問題ないかもしれない。それにTAの存在については未だ世論に晒されておらず、実際その開発訓練も極秘裏に行われ、容易に人目に晒してはならぬものであるということは、これまでも重々実感してきたとおりだ。だが。

速川はふと思い出したように、数名の隊員たちの中で沈黙を守り続ける豪和の御曹司でありTAパイロットである豪和ユウシロウを見やった。

若干一七歳。しかも未成年である彼は同時に民間人でもある。絶対的に我々とは違うのだ。だのに……。

今回も彼は何の意見や疑問を差し挟むことなく、まるでそれが当たり前であるかのように豪和の意思に従った。それは確かに実験中隊の我々そのものの姿かもしれない。けれど不思議なことに、今の彼にはこれまでとは明らかに違う、確固とした意思のようなものが、その瞳に感じられるのだ。

数ヶ月前、盛夏の頃、一旦豪和に^{いえ}戻ったと思ったら突然、二週間ほど実質訓練に戻らない時期があった。しかしそれも、その後の実験成果の進展ぶりを思えば、何の問題もないことだった。そうだ。我々実験中隊の者にとって彼の存在は、TA開発という、しかるべき当然の責務によってのみ容認されるものでしかなかった。

本当に、ただそれだけの繋がり。

——豪和大尉。

しかし少年は速川の思惑など知る由もなく、ただ一人異質な積荷

の部品の一つのように輸送トラックに平然と乗り込むのだった。

「本当に、こういう任務なんでしょうね、今回の実地演習は」

思わず本音をさりげなくぶつける隊員の一人、池口洋輔の言葉に速川は振り返った。

……確かにそれは今、誰もがこの場で問いかけたい疑問だ。それでも、ただ黙々と作業を続ける隊員たちの中で、この池口の本音は、暗黙のうちに口にしてはならぬもののようにも感じられた。

「そうだな。しかしTA開発自体が豪和主導で行われている以上、それに従事する我々には何一つ意見することは出来ないことなのかもしれない」

自分でも酷く消極的な物言いだと思う。しかし事実、それが今の実験中隊の現状だった。豪和という、一企業にして一種強大な力を持つ存在には敵わぬ——いや元々その任務そのものに対しては従順な、我々自衛隊員にとっては意見してはならぬ現実なのかもしれない。

「豪和、ねえ……」

それでも、どことなく不服そうに、池口はトラックの窓外を見つめるユウシロウに、ちらと目をやった。

豪和の御曹司がなんで。もう幾度となく胸の内で繰り返してきた疑問を、再度池口は反芻した。確かにユウシロウはTAパイロットとして、ずば抜けた資質を持つ存在だった。同様に試験段階からTAに乗っている池口だから解る。自分はここまで来るのに三年はかった。しかしユウシロウは僅か一年で、まるで既に自分の手足のように苦もなくTAを操っている。それなのに自分は、人口筋肉を主動力とするこの鉄の塊に、未だ逆に使われているような感覚さえ覚えるのだ。

こんなもの、普通の人間が乗りこなせるもんじゃない——おそらく誰もがそう実感しただろう。実際、走行途中、強壮剤のようなものを体内に注入されなければ到底、最後まで乗りこなせない。その

尋常でない体力（そして精神力）を必要とする二足歩行型兵器に、この華奢な少年は、まるで汗一つかかず搭乗しているかのように見える。いまや一大軍需産業としての実績を誇る豪和でもあり、このTA開発は特自が参画する以前から、ある程度の段階まで開発が進められており、そこに当然大尉も加わっていたのかもしれないが。しかし、だとしたら……。

ふと、悪寒めいた感覚が背筋を這い上がる。

本当になぜ、正規の隊員でもない、しかも若干十七歳の未成年の少年が……大の大人でさえ根を上げる、こんな殆ど拷問のようなこの実験機の操縦に同調できているのだ。それが豪和の四男であるという点も、池口には腑に落ちなかった。まったく、どうにも解せないことばかりだ。

北九州という本州の西南の果て。どこをどう間違つて自分はこんな場所に来ているのだろ。何となくだが、何かの目に見えない力に操られている気分になる。それは確かに――。この実験中隊に関するようになってから豪和の掌の中で踊らされているように感じてきた、その酷く絶望的に抗えない現実に、池口はまたも絡め取られていつているような錯覚に陥るのだった。

*

福岡駐屯地に入所した翌日、ユウシロウは迎えに来た兄、清継と共に車に乗り込んだ。

『入所早々、早速お出迎えですか』

そんな皮肉交じりの隊員の一人、池口の含みありげな言葉が無言の背中を追いかけてきた。そして、それ以上に平静を装う速川の一瞥が何かを言いたげな眼差しを含みユウシロウに問いかけた。本当は何一つ知らずに、すべてを解っているような素振りにはできない。おそらく速川の思惑がそうであることに彼自身も気付いていたが、それでも豪和について全てを詳らかにするといふわけにもいかなか

った。それは暗黙の了解。

その彼を今まさに呑み込もうとしている闇。それがこの筑紫の地にも息づいていることは確かだった。いや——。

「既に空知検校も目的地へ向かっている」

清継の言葉が、ただ意識の表面を上滑りしていく。しかし空知が直々に鬼哭石の郷を離れ、ユウシロウを追ってここ筑紫へと足を踏み入れているそのことが、何かの真実を無言で語っている気がした。御師匠……。ユウシロウの脳裏に、ただ黙々と穏やかに一清の命に従う空知の姿が映る。それは豪和という呪縛に常に付き従い、己の使命を全うする老齢の意思でもあった。そしてそれは、——そうだ。俺自身の姿でもある。

伝承は語る。それそのものに操られるようにして、ユウシロウの身体は常に動いた。その内実で蠢き躍動する人工筋肉の調べ。それは同時に遥かな刻に忘れられた哀しき魂の叫びでもあった。その断片、いや本流であるかもしれぬ縁起がここにも息づいていた。否、それはユウシロウを待っていたのだ。

そのために我々はオマエを彼女に逢わせた——そんなはずが。なのに俺は、彼女が誰なのか知っている自分を知っている。お前は、誰だ。遠い記憶の彼方を辿るのももどかしく、ユウシロウは己自身に直接問うた。しかし、漠然と拡がる予感、彼自身を亡羊と包み込むばかりで何一つ答えようとしなない。ただ身を裂くような哀しげな感覚を、彼は確かにその身に覚えていた。

そこは溪流が眼下を流れる断崖の只中にあつた。

「ここは……」

そうだ、石舞台だ。ユウシロウの呟きの矛先を代弁するかのよう
に清継が続けた。そこはまるで鬼哭石の郷の石舞台そのものだった。
近くにダムが建設されているようだが、そのため立ち入り禁止区域
にもなっており——滅多に人が訪れることのない山間の秘境、とで
も表現すればよいのだろうか。そこに人工的に造られたのかそうで

ないのか、その巖が穿たれた石の能舞台はあった。

実験機材はまだ運び込まれておらず、いずれ訪れるだろう豪和総研の研究員たちの喧騒も、未だなかった。まさに嵐の前の静けさ。いや祭り、というべきか。そのマツリを彼自身の身が執り行う瞬間が次第にやってくる。ただユウシロウは黙ってそれを待つことしかできなかった。そう……それが、今までの俺自身。

「ユウシロウ殿……」

無言で舞台中央に立ち尽くすユウシロウの背後で人の気配がした。それは半ば一清に連行されるようにして、この地に飛んだ空知検校その人であった。そうだ、俺たちは傀儡くぐつ。誰かに操られることでしか己自身を生きながらえる術を持たぬ——。その悲しみを空知は知っていた。そして無論、ユウシロウも。

北九州のこの地においても、その事実は変わらなかった。むしろ、その悲しみの淵源がここにこそあった。そしてそれは、伊集院佐和子との絆。

沙耶……。その幼い少女の瞳を彼は知っていた。遥か遠い過去むかし、この地で出会ったひとの……妹？ いや、彼女は身代わりだった。卑弥呼？ いや正確には日の巫女だ。その女帝が身罷り日食が起った。違う、人々の安寧を約束する人柱として……、彼女は葬られたのだ。

その未来を知っていた彼女の、遠い嵬の同胞たち。それは単なる記憶装置、そして追跡子トレーサーだったのかもしれない。それが今も俺たちを遠く操る。なぜ彼女がそのひとの身代わりになったのか——今となっては、もう何一つ知るべくもない。だが。

「ユウシロウ、ここがお前の舞台だ」

そう、真の——その確信と共に見据えるゾツとするほど冷え切った眸が身を貫く。

まるで石の墓場だ。一清の視線を受けて立ち尽くすユウシロウを、それでも空知は穏やかに包み込むように凝と見詰めていた。

「で、俺たちは何処でT Aの演習を行うんですか？」

古賀市と若宮市にまたがる西山訓練場にて普段通りの基礎訓練を繰り返す数日のうちに、たまりかねた様子で池口が何気なく口を開き尋ねた。

「まだ正式な日時と場所は明らかにされていない」

そう答える速川自身、池口のみならず目に見えるような隊員たちの疑問を肌で感じていた。いつ通告が下ってもよいようT Aの整備と搭乗員の体力維持のための身体調整は滞りなく行われている。ただそれも来るものが来なければ何の意味もない。入れ替わるように連日、同じ豪和一族の青春氏が駐屯地に顔を出しているようだが、その間、豪和大尉、豪和ユウシロウの姿はないままだった。まるですべて示し合わせたかのように。

本来なら必要とすること自体がおかしい、その民間人の少年の存在。だが実際は、ユウシロウ本人がいなければ、この実験訓練そのものが成り立たない事実を速川は知っていた。どうしてそんなことが……、最初は己の目を疑った。無論、他の隊員たちの士気にかかわる問題でもあるだけに、詳細は一切伏せていた。

何より豪和が自分たちの身内——それも未成年の——を実験に差し出す理由、それを探すことの方が困難であっただけに、ある意味で腑に落ちる側面があったことは確かだった。その彼が豪和の兄に連れられて去ってから、既に数日が経過しようとしていた。一体何のために？　むしろその疑問は、この実験中隊の福岡行きそのものにこそ存在していた。

常に豪和は豪和の都合で物事を運んでいる。それは何も今に始まったことではなかった。だから突然、中隊の九州行きが決まっても、そして未だ何の通達が本部からないまま、豪和の御曹司だけが何処かに連れて行かれたとしても、何一つおかしくはない。

「豪和……か、」

速川自身も、漏らしたその呟きに、今ここに自分がいる理由を探していた。

あれから一週間が経ち、だいぶ体調が元に戻った私は、それでも鷹水の勧めもあって、しばらく貴嶋家に留まることになった。勿論、貴嶋宮司自身もそれを快く了解してくれた。自分の家だと思って、いつまでも居てくれてかまわない、そのくらいの気持ちで、まるで身内のように受け入れてくれる貴嶋氏に、むしろ申し訳ないくらいだった。

でも、いつまでもこのままここにいられる訳でもないことは私自身悟っていた。鷹水は一人、私を残して取材と称した調査に出掛けた。やはりシンボルの動きも気になる。そして何より最重要項目となったのは、まさかの豪和と特自実験中隊の福岡入りが昨日伝えられたことである。単なるNPO団体とはいえ、私たちの情報網は常に密に刷新されていた。専用パスワードで組織の者のみ入ることのできる情報サイトを経由して様々な報告を知ることができた。

——ユウシロウ。

私は彼がここ北九州に来ていることを知った。やはり予感的中した。彼が、今近くにいます。なぜか例え遠く離れていても、私たちは不思議に互いの存在を感知し合っていた。それでも、同じこの筑紫に今足を踏み入れているのだという、その実感は、互いの温もりそのもののような安心感と、そして同時に不可思議な不安感を胸に生じさせた。

ユウシロウ、やはりあなたはここへは来てはいけない。

だから私は彼より一足先に、この地に足を踏み入れたのだろうか。彼の行動そのものを停めるために。けれど決してそれだけではない事実を後になって私は知るのだった。

豪和と特自が動いたことは、同時に私たちの行動に関しても転機が訪れたことになった。いずれ私は、ここを離れなければならない。

それだけに気にかかるのは、やはり美命さんのことだった。あれから未だ心を閉ざしたまま、彼女は何かに怯えるように部屋に引き籠ったままだった。

「美命さん……」

どうしてあの日、彼女が私を筑紫舞の舞台に誘ったのか、無論そのことも気にはかかっていた。そして何より——私自身、どうしてあの舞台で筑紫舞を。目覚めてしばらくは記憶自体が混乱し、その瞬間のことを思い出すのも難しかった。しかし恐る恐る記憶を辿ってみる。そうすると、やはり脳裏に浮かぶのはユウシロウの顔だった。どこか心配げな、その表情。でもまだ私は、その時の感覚そのものに潜む、狂おしい過去の記憶そのものには再び触れられないままだった。

それでも本当の別れが来る前に、私はもう一度美命さんと話したかった。

——おかあさん、お母さんはどうして、行ってしまったの。

本当は、そう問いかけるのが怖かった。お母さんが本当の自分の母でないことくらい知っている。それでも美命は、母のことを唯一の拠り所としていたのだ。貴嶋満千留——筑紫舞の宗家、そのただ一人の伝承者。だからお母さんの舞は、私の命。私が守らなければならぬもの。でも、あのひとがやって来て、私は何かを悟った。

お母さんによく似た、綺麗なあのひと。優しく微笑んだ瞬間、お母さんが帰ってきたような気がしてドキリとした。でも本当は、貴方のことが憎かった。大好きで、でも、とても苦しいくらい……。

あの日、お母さんに本当の娘がいることを私は知った。お母さんの、たった一人の愛娘。じゃあ、私は？ やっぱり私は、お母さんとは血が繋がってないんだって実感した。それでも一生懸命お母さんの舞を習ったら、お母さんの本当の娘になれる気がした。ねえ、お母さん。そうでしょう？

でも私は口が利けないから、お母さんに直接そう尋ねることはで

きなかった。ううん、違う。むしろ自分が口が利けないことで私はどこか安心していた。だって口が利けたら、真っ先にお母さんにそう尋ねてしまうもの。……本当は私は、本当のことを知るのが怖かった。

貴方はどうして、そんなに優しく微笑んでいられるの？

*

福岡市内に事務所を構えるFOIJ福岡支部には特自の福岡入りのニュースに関する憶測が密かに飛び交っていた。

「なんでも極秘命令だそうだ——もっとも、こうして我々に勘付かれている時点で既にアウトだろうがね」

再び舞い戻った鷹水に支部長がそう語りかけた。

やはり豪和は佐和子のことについて真実を知っているのだろうか。むしろ貴嶋満千留のことを彼らが知らないはずがなかった。何より佐和子は豪和乃三郎の実の愛娘なのだから。ありていに言えば隠し種、愛人に産ませた子、ということになるだろうが、事はそんな俗事ではない。まさか——満千留が豪和の縁起の祖、筑紫舞の伝承者であり、両家のルーツが同じものであることを知っていてなお、惹かれてしまった関係なら、何という悲劇だろうか。

福岡駐屯地と西山訓練場を拠点としている特自に今時点で主だった動きはなかった。特自本部のサーバーに極秘裏に潜り込ませた探索網からの情報にも特に変化はない。

「一体豪和はここで何をしようとしているんでしょうか、鷹水さん」
おもむろに若い所員の一人にそう尋ねられた鷹水自身が、同じメンバーでもある佐和子の件について、その詳細を明らかにすることを躊躇っていた。しかし、それも時間の問題だ。おそらく豪和は、もう一度佐和子をその懐に取り込もうと画策しているのだろう。そして、あわよくば。

実質的なTA実験部隊である特自がユウシロウを伴い福岡入りし

たということは、豪和がここ筑紫の地のどこかでT Aの機動実験を行うつもりであることは明らかだった。まさか……。

「筑紫舞の、いや余流能楽の神事をここで行うつもりなのか……？」
鷹水は、ぞわりと腹の底からのぼって来る悪寒を抑えることができなかった。

やはり佐和子には、このことを知らせるべきではないのか。しかし最早それが無駄なことであることを鷹水は誰よりも深く悟っていた。何より無意識のうちに舞を舞ったという佐和子とユウシロウの間に、真に妨げる壁など存在していないのかもしれない。

あらためて空知とこの地で相対すると、ユウシロウは漠然とした奇妙な感慨を抱く自分を発見していた。

「御師匠……僕は自分がここへ来なければならぬのだと強く思った。だから来たのです」しかし、

空知自身までもが——それも半ば一清に強引に連れてこられた。そこにはやはり何かの秘密が隠されているのか。

「ユウシロウ殿が仰りたい旨は、この空知、よく存じておる所存——ですが、今こうしてこの地の空気に触れ、あらためて余流の子孫としての命を再び実感したようなもの」

ふと細い眼差しをさらに細くさせ、空知検校は溪流近くの枯れ木立の間から覗く薄蒼い空を仰いだ。鬱蒼とした静けさを纏う初冬の森林の清浄な空気が、殊更にユウシロウの精神を研ぎ澄まさせる。

「この地に古くから伝わる舞——筑紫舞と申すものがここに存在しております」

おもむろに続ける空知の話に、ただ神妙に耳を傾ける。

それは我ら傀儡^{くぐい}の民が漂泊の旅路の端々で各地に伝えていったものの源泉。いわば、それは余流の母。無論、それらは全く同じものといったわけではなかったが、同様の目的で王権に利用され、流派としては別々に伝えられていったのだらうが、それでもその魂が伝える根本は、ほぼ同じものだといえる。

「ですから、この空知もユウシロウ殿同様、自らの意思で参ったのでございます」

その言葉にあらためてユウシロウは目を見開く。

「この筑紫の地に自らの源流を今一度、見定める——そして、佐和子殿も」

その名に再び瞠目するも、しかしユウシロウ自身、すべて感知し得ていたことだったのだと、あらためて思い返す。

「佐和子、先生……」

やはり先生は、ここ筑紫に。まるでお互いに遠い故郷に帰ってきたような思いに囚われ、ユウシロウはそつと目を伏せた。

「筑紫野市内の古墳跡に作られた貴嶋神社……」

そこが貴嶋満千留の生まれ故郷だった。そこに佐和子自身が帰っていることは、彼女の姿を見かけたという町民の話からも推測できた。

「本当はそこで面白いものが見られたのかもしれないな、」

ふと一清は旅先の余興を楽しむかのような面差しで、ふっと口元で笑った。

ユウシロウら特自の部隊と、ほぼ同時刻に先に現地入りした次男の清継は、筑紫の鬨しきみと推測される山間の石の能舞台の調査と実験を始めるに当たったの現場の整備、そして三男の清春は单身、福岡駐屯地に赴き、実質的なT A演習のオブザーバーとして師団司令部への説明など具体的な実施日に関する各種調整を行っていた。

だが本来の意味で——、我々豪和の者が総代を除いて、ここ筑紫に集まったというのも一つの因縁か。一清にはそう思えてならなかった。どちらにしても佐和子の動向は、いつ何時でも掴めている。同様に鷹水誠司らジャーナリズム団体の連中が探っているこちらの動向も、ほぼ同じようなものだろう。今さらながら自衛隊の機密性は一体どうなっているのかと目を疑いたいところだが、むしろこれまでもそうだったように、敢えて彼奴らにこちらの内部情勢につい

て親切に教えてやっているようなものなのだ。

それもこれも、そこに伊集院佐和子が、いや貴嶋佐和子がいるからこそ。

「……いつでも、好きな時に迎えに行つてやれるわけだ」

我が愛しき妹よ。例え異母兄妹きょうだいとはいえ、確かに豪和の血で繋がっているのだ。それは忌まわしい血の繋がりがかもしれない。だとしても、一清には何よりそれが強い絆であると実感できた。そう、情というもので縛られた“肉親”であるという事実よりも。

「そうか、ユウシロウはまだ何も知らないんだつたな」

無論、それは伊集院佐和子のことである。福岡駐屯地にて清春と落ち合った一清は、その弟の言葉を聞いて一人ほくそ笑んだ。

「そうだな……、やつに教えてやつてもいいが、無駄に騒ぎを広げることになつても拙いだろう」

貴嶋満千留に纏わる佐和子自身の出自、真のそれを知つてユウシロウがおとなしくしてくる保証はなかった。一清は以前、ユウシロウが清春と清継、そして自らに放った言葉を思い出した。？俺は人形じゃない！？——その激しさはヤツらしからぬものだった。それを誘発させた恩人でもある、佐和子の真相ことを知ったら。かつてのユウシロウの言葉そのものの事態を招くことは、やはり避けておきたい。

そう、兎は兎として、その力を吸い上げるものの意思におとなしく従つていればよい。それがお前の宿命なのだ、ユウシロウ。

「姉さん、か……何だか唐突にくすぐつたい感じがするけど」

突然二つ年上の姉ができたという、その事実だけなら清春のその言葉そのものに純粋に頬を綻ばせることもできただろう。それでもそんな温かな感慨は、もはや我々には許されぬものなのだと知る。そのことを一時思い出したのか、清春は急に口を噤んだ。

「カズ兄さん、本当に伊集院佐和子を万が一の時のユウシロウの代わりにするつもり？」

ああ、そうだ。それを実行に移して何が悪い。一清の貼り付いた能面のような無表情には、そんな無言の言葉が現れていた。

「……所詮、代替品。とは、無論思っていないさ。何しろ彼女は、我々豪和の大切な長女なのだからな」

その地の底から響くような底冷たい声色に、清春は一瞬我を失った。

＊

それはまるでシンボルの物言わぬ介入に異議を唱えるべく決行されたもののようでもあった。

しかし、当のシンボル自体が豪和の二足歩行型兵器の存在を知り得ているのかは未だ定かでないにしろ、実質乗り込んだ福岡の地に、その足跡が既に残されていたことは特自も豪和自身も現時点では知る由もないことだった。

その男の嗅覚は根源的な豪和の力の源へと早くも触手を伸ばしていた。

「日本……」

今さらながら朴は、ここ北九州がこの国にとって特別な場所であることに思い至った。そう古代、卑弥呼の時代。大陸から渡来した民族はいつしか対馬、壱岐を基点に対岸の島国へと足跡を伸ばした。その海域の倭国圏にて栄えた渡来系海人は、自ら持ち得た高度な技術と知識とで次第に土着倭民族を圧倒していく。記紀神話にて自らを天津神と称した人々である。

そして全てを呑み込む血の混淆……、渡来系、土着倭人共々いつしか和合し、幾星霜もの歳月を経て一つになっていく。それは大陸側、半島の民族であるかつての新羅、百濟、そして現在の大韓民国人である朴自身も何ら変わらない。だから何とはなしに海の向こうに拡がるこの国に尋常ならざる親近感を覚えるのか。兄弟国、実質的な外交面においても、日韓は穏やかな友好関係を築き今に至る。

だが古の時代^{いにしえ}、それは確かに一つの侵略行為であつたのだ。強者が弱者を屈服させ領土そのものを収奪する。その善し悪しを論ずるより以前に、そうやって時代を経るまま世界地図はいつしか新たに構築されていく。当然、日本という国もそうやって出来上がった。最早かつての縄文人の面影はアイヌや沖縄に残された若干の少数民族にしかない。

それでも確かにこの国はこの日本列島で栄えた。血は血と交じり合うことで、その生を強くする。異なる種族の結合。確実に何かの化学反応がここで起こった。海……。

朴はあらためてその海原に隔てられると同時に生を繋いだ潮の道のりを思った。その人々が渡来人であつたのか土着倭人であつたのか定かではない。しかし、海人の血を受け継いだ漂泊の民は確かにいたのだ。福岡、そして韓国と日本が芸能の才で如実に結ばれていたのは何かのサインだったのか。芸能、つまり神楽はそのまま神へ捧げる祀りへと転じる。祀り^{リム}政ゴトであり、信仰や神事は端的に言つて政権を維持するための支配者側の表向きの言い訳でしかない。いや——、実質的に豪和はその神事によって何かを為そうとしていいる。それは目に見える力だ。決して人の心を惑わす類のものではない、？それ？を地上に顕現させようとしている。

シンボルの評議員メスはそれをナダ・プロジェクトと呼んだ。そうだ、シンボルも豪和と同じものを……。

朴の思考を遮つたのは懷に忍ばせた携帯端末だった。

「……特自が動いた？　それで豪和は？」

複数配置された末端エージェントの一人からの報告。それはまるで迫り来る嵐の前触れのように鼓膜に響く。やはり彼らの神事は体と心、二つを一つとする二重構造を成していた。

その道は、海を辿る道しるべのように海岸沿いに続いた。そして、いつしか山間へと分け入っていった。

鬼の道……それは、まるで獣道のように幾重にも道なき道をゆく、

その者たちしか知らぬ道。関東から京都へ、そしてここ筑紫に至るまで。だからユウシロウには、ここがどこなのか解った。一見して何の変哲もない森林地帯。だが確かにそこは誰も近づけぬ急峻な山岳地帯で、そこには人の侵入を拒む無言の磁場が潜んでいた。ただ鬱蒼と草木が生い茂る険しい山間部に僅かばかり開けた細長い溪流――T Aの視点は常に全高四メートルの高さから周囲を見渡す。巨人の視点。それでも奥深い山々は彼らをその懷から容易に逃がそうとはしなかった。ただ深層に分け入っていく動脈のように、その河川は山奥の上流へと向かって続いていく。否、それは彼らがやってきた道筋だった。

『フォーカス1、豪和大尉。上流A地点に敵、歩兵陣営を確認。フォーカス2とともに、そのまま叢林に潜伏してください――』

耳元のヘッドセットを介して指揮車両オペレーターからの指示が届く。しかし、半ば？そのもの？と一体となった精神には、既に周囲の溪流の水音しか聞こえない。いや、それは川の流れの音だったのか、それとも……。ドクドクと脈打つ鼓動が常に彼自身を圧迫する。ここがどこなのか、ただそのことだけが脳裏で別の情景を映し出す。確かあれば――マツリの前日だった。マツリ、祀り。そこで彼は舞を舞う、そのことだけのためにあてがわれた命。その？戦い？を勝利へ導くために……。巫女となるシャーマンの宴。

その少女は、そこに一人佇んでいた。誰にも顧みられることもなく。

「……どうしたの？ どうして兄様はそんな悲しそうな顔をしているの？」

兄ではない。けれど幼い彼女は自分のことをそう呼んだ。彼女は弥呼姫、女王卑弥呼の妹だった。……そうだ、弥呼姫には妹などいない。史実では、そういうことになっている。それでも卑弥呼の弟には妹がいた。夫であるとも、弟であるとも言われている。しかし呪術を執り仕切る女王に成り代わり、その片腕となつて実質政権を動かしていた弟には、弥呼姫だけが全てだった。

お兄さまは、沙耶がいらないの……。悲しげな表情で呟いたのは少女のほうだった。

「刹也、あの娘とはあまり関らないほうがいい」

そう雇い主のイエに出入りする行商の男に言われた。この男は何かにつけ、声を掛けてくれる。自分のような、ただ無為に生きていくだけのようない存在にすら、明るい笑顔をくれる。いや、本当は知っている。己自身の命は常にクニの命運を占う神事のためだけにあるのだと……。そして餓沙羅鬼を呼ぶため、いずれは。そのことを知ってか知らずか、男の差し障りのない一抹の笑顔は、抑揚のない声と無表情に降り積もる侘しさを忘れさせてくれた。

それでも、ずっと少女のことが気にかかっていた。あの子は、もしかしたら。

だから男にそれとなく止められても、少女のことを思い出すことを止められなかった。

「兄様あにさま、やっと笑った」

その時の少女の零れるような笑顔を自分は今もはつきりと覚えている。

実の兄から虐げられ、あまつさえ——少女は卑弥呼の身代わりとなった。そうだ、あの日蝕の日。

……沙耶は、ずっと待ち続けていました。兄さまのことを。だから、兄様が笑ってくれるなら、沙耶は好きなだけ、兄様の言う通りにします。……そうでしょう、兄さま。

少女はもう自分と兄の区別がつかなかった。精神を侵されてなお

——けれど、彼女は確かに自分のことを見つめていた。

弥呼姫は孤独な女性だった。そして己同様、所詮クニの先行きを占う道具でしかなかった。それでも姫を慕う民草は絶えなかった。彼女の身は既にこのクニと一体だった。だからこそ人々の人望を集め、その力と威光によって人々を導く希望でなければならなかった。だが、それ自体が弥呼姫を縛り苦しめた。女王であると同時に巫女

である彼女に人としての自由はない。いや、既に姫は人ではありえなかった。

その意味では、彼女は自分とどれほどの違いがあっただろうか。ただ神に近い姫と、人以下と称される自分。それでも同様に人ではないと、揶揄されていることは間違いなかった。その決して出合うことのなかった人と出逢った——そして時を同じくして、それはあの沙耶という少女との本当の出会いでもあった。

3 .

一清が貴嶋紀仁と連絡を取ったのは、まさにその日のうちにだった。

その男のことを知らぬわけではなかった。いや、むしろ……佐和子と満千留のことを言うならば「その家」について何も知らぬとは白を切ることなど出来ない。そして佐和子をそれと知って実家^{いえ}に招き入れた己自身の罪でさえ、どうして免れよう。そうだ、自分は彼女を豪和に売ったのだ。貴嶋にとって豪和は一つの枷でさえあった。満千留を渡すことはなかったが、それでも佐和子は……。常に己自身の半身を囚われているような、その忌まわしい枷。

「……夜分恐れ入ります、豪和です。ええ、そうです——」

電話の相手は何がしかを躊躇しているような様子だった。それでも、そんなことは構うことではなかった。ただ実妹^{いも}を迎えに伺うだけなのだ、そう一清は相手に手短に伝えた。

「早朝にもお伺いしたいと……実妹がお世話になり、大変恐縮しております」

こともなげに、そう鋭く重い声色で慇懃に礼を言うも、絶句した後ただ一言観念したかのように、……わかりました。そう呟いた貴嶋の言葉を聞くと、思わず口元に笑みが浮かんだ。

「豪和さん、佐和子は……佐和子を、どうなさるおつもりですか？」
それは、老宮司の精一杯の反論の言葉だった。

知れたこと——それでも、その半ば非難の色を帯びた言葉が、貴嶋氏の口から出たことが意外と言えれば意外だった。おとなしく我々に従っているだけかと思えば。

「養女さん、そう、美命さんとおっしゃいましたかな……そちらの舞も、ぜひ近々拝見したいものですね」

その名を出した途端、相手が再び押し黙るのが分かった。そうだ、どうとでもなる。豪和の息が一度かかれれば、決して逃れられぬと解っていればこそ。一清にとっては、まさに赤子の腕を捻るようなものだった。

「では、明日」

そう一言だけ言い伝え、一清は携帯を切った。

英彦山にほど近い山間部に僅かに開けた溪流沿いで、その起動実験は行われた。

周囲は千メートル級の急峻な筑紫山地が連なる、まさに秘境といった形容が相応しい奥深い山岳地帯だ。直方市で遠賀川から分かれた彦山川がさらに幾つもの支流に分かれ、次第に細くなり、その山々に吸い込まれていく。その峠を隔てた向こう側は既に県境を超えた大分県に入る。むしろ大分の日出生台演習場からの方が近い気さえする。

まったくもって、なぜこんな面倒な手順を踏んでまで、しかもまるで時間稼ぎか何かのように、隊員達にその意図を知らせず、実際の演習時期をずらすような真似をするのだらう。やはり今回の件には何か目に見えない思惑が潜んでいる気がしてならない。それはおそらく速川中佐も如実に感じていることだらう。

本当に何かのメリットがあるとは到底思えぬその実験に参加した隊員の一人、池口洋介は、ただただ首を傾げるばかりだった。むしろメリットよりデメリットの方が大きい。確かにこれまでの走行実験は、あくまで限られた場所でのみ行われた限定的なものばかりだった。だから今回の実験は、もっと範囲を広げ——というのも素人

考えなら思いつかないことではなかったが、かといって突然、行動範囲を拡げ難易度を上げられて山岳地帯というのも解せない話である。

確かに将来的には山岳地帯でのT Aの必要性も出てくるかもしれない。ただしそれも極めて限定的に、という鉤力ツコつきであるだろう。様々に状況を変え、想定されるあらゆる環境下での訓練を繰り返す、といったこのT A開発の基本的な趣旨も解らないではないが。

どちらにしても今時点の段階では、実験中隊のT Aの習熟度自体が、まだそこまで飛躍的に進んでいないことは誰の目にも明らかだった。それを考慮してかせずか、実際の演習場所には、ほとんど谷底のような溪流の際に僅かに開けた川沿いを選んでいる。しかし、だったら……わざわざこんな場所まで足を運ぶ必要性があるのだろうか。

それでも、やっと始められたT Aの機動走行実験だ。現実的には余計な疑問を差し挟んでいる暇などなかったのだが、それでもやはり気になって仕方なかったのは、彼が同じ小隊を組むユウシロウのことだった。

T Aの演習プログラムは基本的に四名二組が、それぞれにA小隊、B小隊を組んで相互に四機ずつで行動する。どちらかがフォワードなら一方がバックアップ。敵に突っ込んでいく先攻と、それを補佐し援護する後攻。一番解りやすいのが、そういったそれぞれの役割分担である。

だが、その日のユウシロウは、少し様子が変わった。慣れない見知らぬ場所で、しかもこんなワケの解らない実験に挑んだための緊張からだろうか。それなら自分だって少なからず同様ののだが、その自分以上にT Aの操縦に関して余裕で上を行っているはずのアイツにしては……。

『——豪和大尉、聴いてるか？』

おもむろに通信機越しに声を掛ける。しかし、返事がない。指揮

車両に筒抜けなのも構わず、池口は再度、ユウシロウに喋りかけた。

『おい、大尉！』

池口さん……、やっと腑抜けたような声がヘッドセットの耳元に届く。どことなく心ここにあらず、そんな感じもした。

「作戦の途中だが、ちよつと訊いてもいいか？」

自分でも、こんな時に何を突然言い出すのかと思ったが、この際だ。訊いておきたいことくらい、思い立った時に訊いておかまいとな、そう自分自身を無理やり納得させて話しかける――、何をです、という、はてなマークを思わず浮かべている様子の相手に構わず、
「……大尉は、他に何かやりたいこととかあつたんじゃないのか？」
そう唐突に問われて一瞬、返答する言葉に詰まる。

しかし、黙つたままのユウシロウに業を煮やし、だから……、ほら、色々あるんじゃないかねえの、大尉くらいの年頃にはさ。とは言つても、相手は豪和の御曹司。それに話に聞くとところによると、IQ二百は裕に越えているらしく、とつくに高校を飛び級して大学も卒業してるとか、なんとか。

それでも、エリート部隊である特自の隊員同士。なら、相手だつて自分たちと何ら変わらないはずだ。一応、防衛大は出ているものの、池口は実はスポーツ万能の特技を活かして体育教師になりたかつた。高校野球で甲子園にだつて出たかつたしな。

それが今やワケの解らない鉄の塊に乘せられて、今度はこんな九州の北の外れに飛ばされちまつた。それも、極秘で行われる走行実験は未だ目下、目的不明だしよ……。

速川中佐の叱責が飛ぶのも忘れ、池口は続けた。

「大尉はよ、もうちよつと自分の意見を言わねえと、周りに流されるまんまになつちまうからな」

何言つてんだ、俺。と思いつつ、やはりユウシロウのことが時々放っておけないと思えてしまうのは確かだつた。

『……池口、さん』

ありがとつ、ございます。しかし、そう朴訥とした相手の礼の言

葉を聞いたのが、ユウシロウと言葉を交わした最後だった。

特自の北九州でのT A起動実験が始まった。今頃、情報屋の鷹水はその一件に振り回され、奔走していることだろう。それも一つの計算のうち……だったのだが、当然やつはこちらの思惑でさえ、とうに勘付いているはずだろう。しかし、当人である佐和子自身は。おそらくユウシロウの名を出せば、難なくこちらの言うことを聞くだろう。自らを省みず、その情の深さが仇となることも知らず。いや、おそらく知っていたとしても、ヤツのためなら喜んで自分を差し出すのだろう。くだらん女だ……。

どちらにせよ、^{しきみ} 闘におけるT Aの起動実験と余流の神事。その二つにユウシロウとともに佐和子の存在も不可欠だった。

夜の闇は既に深く、異界へ繋がる入り口のように窓を隔て、ぱつくりと群青の帳が目の前に口を開けている。一清は無意識にその闇に手を伸ばしていた。福岡市内にある豪和インダストリーの事務室内。手元のコンピューター端末からは絶えず世界中の経済情勢が伝えられ、常夜灯のように青白く映し出されている。時刻は既に深夜を廻り、人の気配の途絶えた室内からは僅かに窓外の街の灯りが望めるだけだ。

自分が世界の中心にいるのだと、容易に実感させることのできる同時平行的な感覚は、常にどこにいても人を時代^{とき}の王者たらしめる。だのに「あなたは虚しくはないの、」そう語りかける真摯な眼差しが視界の隅に映る。ふ……、そう鼻先だけで笑う。一清の嗤いは常にどこか乾いていた。虚しい？ そんな感情は既にこの心のどこにもありはしない。ただ淡々と永劫に満たされ行くは、豪和の業である嵬とともに歩む、この道だけだ。三界火宅の如し——何処までも自らを灼^やくその業火の焰^ひこそを己自身の友とし、生きるだけ。

偽りの弟と本来の妹……、そのどちらもが、この野望を本来の形へと成すために必要なのだ。そのための憎しみの矛先となるならば本望。いや——。憎しみ。怒り。憎悪。それらは恐怖を呼び、ひい

ては餓沙羅鬼を呼ぶ。最早一清の嗤いは、止め処なく闇の深淵に吸い込まれていくばかりだった。

もう一度、あの磐坐へ行ってみた。

「ユウシロウ……」なぜだか鼓動が早く、妙な胸騒ぎがする。

どこかで啼く夜烏が夜の深みを増し、古墳の懷に抱かれた貴嶋神社の杜全体を深い水底へ沈めてしまったようだった。

もう時刻が変わってしまった。それは夜半のうちに今日を明日へとすり替える、まるで周到な罠のようだった。それでも私は……。その明日が、必ず夜明けに照らし出される真実を信じている。太陽は必ず昇る。夜はそのための一つの儀式なのだ。それは試練を越えるための仮初の暗闇と静寂。？偽りの闇夜？——思わず突然「それが脳裏に浮かんた。どうして……」。

あの磐坐は以前と何ら変わりがなかった。ふと、あの時と同じようにその岩肌に手を触れる。そのあと、ふっと肩にかかる絹衣の感触がして……。私は美命さんに連れられ、岩風呂に入ったあと。あれは確かにユウシロウの舞だった。何も考えないうちから手足が動いて、そして。

卑弥呼はどうして、何の疑問も抱かずに自分を捨てられたのだろう……。？不意に浮かんた問い。本当に信じる何かがなければ、それは到底成しえない使命だったはず。己自身より大事な何かに支配される。現代的な個などが存在しえなかった時代、それでも人は自分自身のために生きる本能そのものを持っていたはずだ。至極人間的な感情、思い、……。愛情。個と対峙する他者、そしてその概念は次第に国や世界そのものへと拡大していく。

——愛する人がいなければ、国や民でさえ救えない。

だのに絶対的な孤独が彼女を常に周囲の世界から隔絶していた。

その絶望を思い、思わず虚空に手を伸ばす。

ユウシロウ……。既に月も沈み、本当の闇が辺りを圧していた。澄み切った夜気は身を切るように冷たい。せんせい、そんな所にい

つまでもいたら、風邪を引く。ふと、その優しい声が聞こえた気がした。

『兄様…… どうして、兄様は……』

？その人？は確かに私の兄だった。けれど一度として私に振り向いてくれたことなどなかった。何度、その優しく包み込む声と体温を想像したことだろう。いつも、私は寒くて凍えていた。お願い、振り向いて。伸ばした手はいつでも虚しく落ちる。だからあの日、兄に初めて望まれたことが私は嬉しかった。それなのに。

「ユウシロウ……」

思わずその名を呟く。寒い、寒い、の、すごく。抱いて、私を抱いて欲しい。

半ば朦朧とする視界の中で幻の兄の背中が、見知らぬ少女だった私自身から遠ざかっていく。兄さん……ふと七年前に家族もろとも炎の中に失くした、本来の兄のことが胸に蘇る。私は今、何をしているのだろうか。それでも、あの瞬間から私の後の生き方は決まったのだ。鷹水の力を借りて一人生き残った私。しかし豪和というそのただ一つの仇の対象である業は、いまや私自身さえ呑み込みつつある。

そしてユウシロウという、たった一つの真実に出逢った。なぜそう思うの？ 今さらのように自分自身に問う。きっとそれは私自身にとつて大事な何かだったからだ。ただとりとめもなく、そう思うおぼろげな記憶。ゆらゆらと漂う霞のように、それは頼りないけれど、確かな確信が私を捉えて離さない。伸ばしたこの手に手を差し伸べてくれた、あのただ一つの体温の優しさを忘れない。

けれど私は、結局“兄”の言うことを聞いたのだ。ユウシロウ——、刹也。彼が選んだのは、彼女だったから。“私”がみつけた温かな太陽は、無慈悲な月の陰に呑み込まれた。

『そうだ、沙耶——お前は日女巫女ひめの身代わりとなるのだ……』

思わず脳裏に響くその声色にゾッと寒気を覚える。そう、“兄”が私を迎えに来る……。

確かにその時、やめろ、と俺は叫んだ。鷹水は改めて自分自身の無力さを呪った。

特自の動きを探っていて妙なことに気がついた。当然だがT Aの輸送方法だ。自衛隊飯塚駐屯地のある飯塚市、そして田川市から南へ約二〇キロ、英彦山を越えた大分との県境近く。その近辺はある一説では邪馬台国が存在した場所であるとも言われている耶馬溪やまけいに近い。ただ急峻な山々が連なり、何があるとも特に感じられないその場所へ、しかし、どうやってT Aを運ぶのだ。それを知るには、実際に豪和や自衛隊に気取られずに付近へ潜伏するのが近道だが。考えられるのは車道で乗り入れられる所まで輸送トラックで移動、そこからはそのまま操縦士がT Aを動かす。当然、山間部では指揮車の移動も限られる。本当に疑問なのは、なぜそうまでして、そんな人の侵入を拒むような辺鄙な山奥で、わざわざ起動実験を行うのかという、その動機だ。

だが、少なくとも餓沙羅鬼と嵬について少なからず知り得ている我々は、考えようによつては実際に実験に参画している特自より、豪和の真実に近いと言える。山には独自の磁場を持っている場所も数多い。特に英彦山は霊山とも言われ、古くから修験道が栄えた場所でもある。その場所特有のパワースポットと呼ばれる所以である。実際には福岡と大分の県境未確定の山域とも言われている。天高く聳え連なる大地と岩石が、異様な力そのものを引き寄せていて、別段おかしくはない。その上人里離れ、殊更人目に付きにくいという利点もあれば好都合だろう。

そしてシンボルの朴もまた、豪和と特自の動きに引き寄せられるようにして、その場所に赴いていた。

「さしずめ物見遊山、というところか」

それでも、事は慎重に当たらなければならない。シンボルのエー

ジエントである身は巧妙に隠されており、韓国の元ジャーナリストという肩書きは、せいぜい幾ばくかの人の興味という華を添えるだけで、特に検問に引っかけたりはしないだろう。山歩きの途中で道に迷った、とても言い訳すれば難なく近くまで潜伏できそうだがやはり噂は事実だったわけか……、朴は独自の情報ルートで豪和と特自のT A開発の計画実態にまで行き着いた。二足歩行型兵器といえば、各国でその概念研究が進められてはいるものの、未だプロトタイプの開発にまで実際に届いていない幻の机上計画でしかない。しかし既にシンボルは米軍の協力も得て、それを独自の高みにまで押し上げているのだ。無論これは極秘であるが、特にインヴェイターと呼ばれる^{ミハル}少女の存在が、それには不可欠なのだった。それでも未だ朴は特自と豪和のT A計画について評議員らに何も報告していなかった。それが本物であるか否かの判断についてもだが、もし日本の一私企業がそれを計画し、曲がりなりにも自衛隊がその開発実験に関与していると知れたら。シンボルにまず情報漏洩はありえない。いたずらに日本国内や世界の目にそれが晒されることは、おそらくしばらくはないだろう。それでも、もしそれがシンボル内部に明るみにされれば、是が非でも瞳を使つて事の真否を確かめようとするに違いない。評議員メスは、それでも温情に満ちた男だった。だがシンボルという組織にあつて、それは一つの致命傷でもあつた。

できれば朴は、その悲劇を少しでも遅らせたかった。

悲劇、か……。考えてみれば豪和もシンボルも、同様に人をその目的のために利用し、無情にも犠牲にしているのかもしれない。豪和のインヴェイター。それを追つて国際ジャーナリストの鷹水や伊集院佐和子が現地入りしたのなら。真に知るべきは豪和や特自の二足歩行型兵器ではなく、理不尽な運命に翻弄される、その人間そのものなのかもしれない。

T A演習は、のべ二日間に亘つて山地に野営を組んで行われた。

「…… ったく何の因果で、こんな人里離れた山奥で一夜を明かさなけりやならないんだろうな」

池口をはじめ、そんな悪態をつく隊員もいたが、T Aの稼働時間の短さを考えれば妥当だったかもしれない。当然、整備班やもしもの際の救護班も必要最低限の人員が操縦士らに同伴。近くには国道も通っているが、それでも圧倒的な山岳地帯である。本来ならこんな任務、早く終えて本州へ帰りたいもんだが……、それが皆の本音なのは、いざ知らず、誰も彼もが、その一種不気味な演習計画の無謀さに薄々勘付いてもいた。

その昨夜のことを池口は思い出していた。眠れないままにT Aの側に設営したテントを出ると、ユウシロウが一人夜空を見上げていた。

「どうした、お前も眠れないのか？」

背後から近づいた池口の問いにユウシロウは振り向き様、顔を左右に振る。どことなくその不穏な雰囲気、池口は再びこの演習計画の意味不明さを思った。ただでさえ晩秋の山間部は冷える。それが夜ともなれば、焚き火でも焚かなければ凌げない寒さだった。

だがユウシロウは、そんなことはおかまいなしに降るような星空を見つめている。

「大尉、お前——」

どうして……。ん？ どうして自分は、自分たちは、ここへやって来たんでしょう……。ポツリと置くように呟くその短い問いかけに池口は、そりゃ俺だって知りたいよ、と内思いながら、改めてしみじみと、そのどこか運命じみた疑問を自身も反芻した。

「そっぴゃ、速川中佐も似たようなことを言ってたな」

「速川中佐が？」

何でこんな辺鄙な所へ、くらいは誰だっけと思うだろ。それでも中佐の妙に思い詰めたような神妙な表情を思い出す。それが、さっきのユウシロウの不安げな横顔とダブったのだ。おそらく隊を預かるトップの人間として、今回の任務には特に疑問に感じる部分が大い

にあつたのだろう。

その速川中佐は下流に陣を敷いた指揮車両で待機。ただでさえ困難を極めるTA実験開発に初期段階から関っており、根っからの苦勞人である。

「何だか俺たち、体のいいモルモットって所だよな」

「……………」

その池口の本音は的を得ていた。その操縦に馴染み習熟するのでさえ困難な、二足歩行型兵器。見れば見るほどロボットにしか見えないそれは、常に人の懷柔を拒む野生動物であるかのようなだった。山岳地帯に潜む野獣。これ以上の絶妙のマツチングはない。それだけに、それを無謀にも飼い慣らそうとしている自分たちが、どこか滑稽に思えた。

「どうやらB小隊のやつらは、ぐっすり眠ってるみたいだな、」

どこか皮肉めいた視線が隣のテントを見やる。慣れない場所でのTAの操縦で尋常でない疲労が溜まっていたのだろう。逆に眠れない自分たちの明日の二倍増しの暗澹たる重い疲労を思うと、今すぐ無理やりにも寝袋に潜り込みたかった。

それでも、どこかユウシロウの眼差しは冴え渡っていた。まるで夜行性の野生動物のそのように、夜の冷気が殊更に神経を研ぎ澄まさせているような……。

その異様な眼光の鋭さを池口は奇異に思った。前々からおかしなやつだ、とは思ってはいたが。

——日蝕。あ？ 再び口を開いたユウシロウの一言に池口は相手を振り仰いだ。

「明日、北九州で日蝕があるんですよね……………」

そういえば、そうだったっけか。その時間帯は避けて行動するよに、というブリーフィングでの内容を思い出す。避けるも何も、TAの稼動時間帯に当たっているのが、そもそも妙だとは思うんだが……。どうやらそれも豪和の意向で決定したと言うんだから、速川中佐の苦惱も理解できるというものだ。

「北九州で日蝕といや、邪馬台国の卑弥呼だな」

見かけによらず、そんなことまで知っていた自分に呆気にとられる。北九州か畿内説か。そういった邪馬台国に纏わる論争が考古学界で起こっていることくらいは新聞記事やニュースなんかで見聞きしていた。卑弥呼……邪馬台国。すると、さらに考え込んだようになった重い表情のユウシロウを見て、池口はさらに怪訝に思った。

唐突に、まるで日蝕の日に合わせて今回の起動実験が組まれているような気がしてきて、どことなく怪しげな雲行きが漂いつつあることを池口は今さらながら悟るのだった。

4 .

“なぜ、突然……”

ユウシロウは自分が再び実験中隊に戻されたことを訝しんでいた。餓沙羅鬼の神事は、もうすぐそこまで、という所に差し掛かっていた。しかし、その稽古の最中に土壇場で自分は特自に呼び戻された。無論、TAの起動実験は用意周到に仕組まれた表向きのものでしかなかったかもしれない。それでも一つの神事として、それらは対を成すものであった。豪和にとってTA開発も、そして餓沙羅鬼を呼び出す神事も、そのどちらもが重要であることに変わりなかった。

“もしかしたら……！”

ユウシロウは自分がここへ来る前に見た夢を思い出していた。それは愛しく懐かしい人の……夢。

来てはダメだ、そう何度も叫んだ。それでも、その人は……。

そろそろ夜明けが近かった。結局、眠れぬままテントの中の寝袋で横になりながら、目は薄明に冴え渡るばかりだった。妙な胸騒ぎに誘われ、半ばもどかしげに寝袋から出て、テントを開ける。あたりは真っ白な朝靄に包まれていた。その風景を何処かで見たような気がした。それでも、その記憶は文字通り靄に包まれたまま、その

詳細をつまびらかにしようとはしなかった。

池口は傍らで小さくいじき鼾をかいて寝ていた。それを横目で見やつた後、ユウシロウは一人外に出た。

整備班のテントの傍らに鎮座するT Aは、さしずめ巨大な象のようだった。今はその鉄の塊も昏々と眠り、その懐の人工筋肉も唸ることすら忘れ、ただ忘却の時の彼方へ過ぎ去る、物言わぬただの物体でしかない。

しかし、それにいつの時も縛られている自分自身を感じる。それは遠い過去へ連なり、そしてまだ見ぬ未来へも続いている。その狭間の吹き溜まりのような場所では出逢った人。どこかで自分はその面影を憶えていた。だから——、それは、求められた感情。いいや、違う。

その愛しさは拒むことのできない遠い場所へ続いている。そしてそこで自分は確かにこの手を差し伸べた。哀しみに裏打ちされた感情。それは幾多の魂が繰り返し囁き続けた、生きたいと願った思いだった。生きたい、愛されたいと。

自分が選ぶのが誰であろうと、その？ 思い？ は確かに存在した。遥かな時さえ超えて——。

“ 佐和子、先生…… ”

だから、自分は守らねばならない。かけがえのない、その人を。そうだ……、己自身の命さえ、引き換えにしても。

*

黎明——いつでもそれは、生と死の狭間で生まれる。

いつしか静寂を引き裂き、白い薄明があたりを染めると、すべての生命が目覚め始める。杜に集う鳥の声。水のせせらぎ。晩秋の空は殊更に引き締まり、それでも次第に光を投げかける東の空が、ゆつくりと今日という日の訪れを再び告げる。生まれ変わる、新しい命の息吹きとともに。

“また……あの夢を見た”

幼い少女が蹲り、泣いている。擦り切れた裸足、冷たい指先。髪を撫でてくれる人もなく、ただ一人。

どうして、いつも届かないの。胸に湧き起こる不思議な痛みが、思い出したように、そう呟く。せつかく愛してくれた人の手をすり抜けて、それでも私が求めていたもの。何を引き換えにしても、手を伸ばさなければならなかったもの。……守りたい。

その感情はただ、無性に一人掻き抱いた胸の中で静かな炎を燃やしている。それは、守って欲しい。……愛して欲しい。その感情の裏返しだったのかもしれない。——だとしても。私自身が唯一、この命をかけて守りたいものがある。それは、きつとすぐそばにあるかもしれないのに。

……届かない。

それでも、そんな諦めも絶望さえ越えて、私は彼を守りたいと思った。ユウシロウ——。

例えばそれが一つの記号でしかないのだとしても、命は常に守られねばならない。

鷹水はいつの日も、そう考えていた。それが彼をジャーナリストという道を選ばせた直截的な動機だったかもしれない。世界各地には理不尽な事実が数多く存在する。そして、そのほとんどが国家という体制と力を持つ一握りの人間の都合で蔑ろにされ続けている。固く権力という砦に隠蔽された、その真実を明るみにする、それが彼らの組織の第一の存在意義だった。

それは暗黙のうちの無理解。畢竟、この世は悲惨な弱肉強食の世界だ。誰かに光が当たれば、誰かが闇に沈む。人は平等などという権利は、その世界の真理からすれば、儚い幻想でしかない。誰もが自分自身が生きるために誰かを犠牲する。それも無意識のうちに、だ。誰も好んで悪者になりたくなどはない。だから無関心という仮面を装う。それが完全なる悪である、という真実にも気付かず。

それでも、その世界の均衡を保つためには、目を瞑らねばならぬ現実もある。誰一人不幸にならない世界など、この世にはない。その他大勢が平穩に暮らし生き続けるために、暗黙のうちに存在する贅。その一握りの犠牲によって、この当たり前前の社会は平静を維持し、存在し続けられるのかもしれない。

“俺は一体、誰を犠牲にしようとしているんだろうな”

思わずついてでた疑問に、答えてくれる者はいない。それでも問わずにはいられない。命を守りたいと願った自分自身が、酷く滑稽に思える。善と悪。そのどちらもが当たり前前に存在する世界。そこで呼吸する者は、一体善なのか、悪なのか。

その男の周囲には常に一つの翳が取り巻いていた。

それは世界そのものを拒んだ妄執に囚われた怜悯な氣——それでも、そのものをよしとしてそこに存在する、男自身が翳そのものだったのかもしれない。

「日蝕、か——」

それはおそらく天が仕組んだ神の悪戯かもしれない。あの眩しく絶対的な太陽が、一瞬でもこの世の摂理を離れ、月に隠される。それほど面白いものはなかったかもしれないが、真に面白いのは、そんな一介の天体現象に人心を惑わされ、政治をも左右された、遙か古いにしえの人々の心理であろう。

一清は一人ほくそ笑んだ。天は我に味方した、などと大昔の武将ならば、大笑いしたことだろう。だが彼は、それを一笑に付した。

……西暦二四七年、三月。日の入りの日蝕が起き、卑弥呼は没した。そして翌、西暦二四八年、九月に日の出の蝕によって卑弥呼の宗女である壹ひと与という娘を女王に立て、邪馬台国は再び復活した。因みに世に言う邪馬台国、という呼び名は誤りだ。実際は邪馬壹やまいこく国。最もこれについても考古学者の間で諸説あり、であるが。

どちらにしても卑弥呼は故意に殺害されたのだ。そんなことは古の世ならば、五万とある話だろう。例えば為政者であろうとも、その

政権に翳りが現れれば臣下の態度は豹変する。残酷なものだな、人間というものは。

自らが生き残る、そのためならば人はどんなことでもする。そう
だ、それが所詮この世の真実なのだ。例え一時、政権をこの手にし
たとて、いずれその栄華は時が来れば脆くも崩れ去る。まさに時と
世は無常なり……。

“さて、今回の皆既食は一体誰を犠牲にするのだろうか”

まるで人事のように胸中で呟いた、その眼差しには誰一人映って
はいなかった。

結局、そのことを佐和子自身に伝えることはできなかった。それ
でも……。

「おはようございます」

未だ朝靄の消え残る晩秋の早朝、境内の落ち葉を掃き集める背後
から声を掛けられ、貴嶋は振り返った。

「今日も早いですね」

「ええ、何となく目が覚めてしまって」

そんな何気ない会話でさえ白々しく感じられる。それでも貴嶋は
笑みを絶やさなかった。その娘が自分の娘同然であると知りながら、
それでも穏やかな笑みを絶やさなかった。

「佐和子さん、」

「はい？」

静かに会釈したあと、その場から去ろうとした佐和子を貴嶋は思
わず呼び止めた。

「いつか……」

そう、いつかまたここへ寄った時には……、そう言い掛けたが言
葉が続かなかった。

「いや、なんでもありません」

何とはなしに微笑を返す。それでも、どこかで私には解っていた
のかもしれない。それが貴嶋宮司の精一杯の私への心遣いだったの

だ
と。

第十章　―紅の舞―

1 .

自衛隊における山岳演習が過去になかったわけではない。だが、今回我々が行うのは二足歩行型兵器という、未だ未知の領域を多分に含んだ開発途上の機体を主軸にして行われる起動実験だ。そもそもが、おかしいことばかりだった。北九州、そして唐突に決まった今回の日程。それに未だくすぶる民間人であり未成年である豪和大尉の半ば強引に決定された委託配属。速川は改めて強く思った。我々特自は豪和の玩具ではない――本来ならば、そう異議を唱えることもできただろう、しかし。

速川の脳裏を掠めたのは、やはり異常な習熟度でどの隊員よりもT Aとの親和性を見せた豪和ユウシロウのことだった。確かにT Aの反応率向上に豪和大尉の能力が深く関わっている。それは他の機体にも相互关系的に反映され、不気味なほどの双方向性を見せていた。まるでそれは女王蜂の意思そのものが働き蜂を動かすような……。

そう、それはまるで生物的な相互関係にも、どこか似ていた。

山岳地帯に潜んだ敵、一個小隊の動きを掴み、それに奇襲をかける……、表向きはそういった内容の模擬演習だった。確かに森林など遮蔽物が多く存在する錯綜した場所での戦闘はT Aに何より特化していた。だが今時点の段階で実戦さながら、というわけではなくとも、シミュレーターでの訓練を省略し、しかも近隣の関東圏でなく、この北九州の山間部まで足を運ぶ理由があるのだろうか。

豪和……。改めて速川は、そのヴェールに包まれた向こう側に存在する闇に目を凝らした。

最初はどこかぎこちなかった、その豪和大尉と同じ小隊でコンビネーションを組む池口との関係も、どうやら幾ばくか解れてきたようだ。速川は昨日、通信機越しに耳に入ってきた二人の会話を思い

出していた。豪和の思惑といい、未だ出口の見えないT A開発の中で、それがせめてもの明るく思える部分だった。

戦闘指揮車両は、このT A開発にはT A自体とともになくてはならない、戦闘に必要な様々な情報分析と実験解析を行う、文字通りの情報統合基地だった。T AのA I（人工知能）だけでは処理しきれない情報を多角的に分析し、それを各パイロットに伝える。無論それぞれの機体の位置確認や状況の把握、そしてパイロット自身のフィジカル・コンディションも小隊毎に担当するオペレーターが各々チェック。勿論、今回のようなケースでも同様に指揮車両はT Aの動向を離れた場所から常にチェックし、双方向的に連携して実戦模擬演習を行う。

T Aのピックアップは今回装備した軽量型トランスポーターで河川敷の川原に待機させ、いつでも充電、起動が行えるようにした。

それでも一抹の不安要素は拭えない。何より慣れない山岳地帯の走行によるパイロットの心理的な不安、そしてそれから来る予期せぬ事態である。勿論、もしもに備えて救護班も同行させている。それでも、この駐屯地はおるか人里離れた谷間たにあいでの行動には物理的制限があり、思わぬ支障が生じる場合もあるだろう。

それでも、ここで決行する明確な理由が何かあるというのか？

夜明けを迎え、二日目の朝がやって来ようとしている。急ごしらえのテントにも戻らず、各項目のチェックをしたまま、結局車両内で夜を明かしてしまった速川だったが、それでも離れた場所での演習行動を行う、各操縦士たちの心理面、身体面での様々な心配などがどうしても頭から離れなかった。

特に今日の午後、この一帯を飲み込むだろう、皆既日食。これも何かの因縁だというのだろうか、それとも。

無論、その間は一切の活動は行わない旨を既に隊員達には通達済みだった。だが……。

速川の胸に去来するこの得体の知れない不安は、一体どこからや

つてくるものなのだろう？

英彦山周辺の国道でジープを走らせながら、鷹水は妙な胸騒ぎを感じて車を停めた。

徐に道路脇で携帯を取り出しプッシュする。僅かの間を置いて、呼び出されたその声を聴く。

『はい。誠司さん……？』

「いや、何だか急に声が聞きたくなつてな」

例の舞の件もあり、佐和子は貴嶋神社に残してきた。むしろ彼女をこれ以上、豪和の件に巻き込みたくなかったという、せめてもの思いからだつたのだが。それでも、それが仇となることを鷹水は、この期に及んで想定していなかった。まさか、今日……。

朝靄に煙る山麓を朝陽が美しく照らし出そうとしていた。鷹水はその光景に眸を細めながら、何気なく彼女にも見せたい、と思った。

「今、山のほうだ——そうだ、英彦山の……薬師峠だつたかな」

紅葉は既に終わっていたが、神々しいその風景は、これから起こることなど微塵も感じさせず、ただ無心の慈愛に満ちて時そのものを包み込んでいるかのようだった。

『あの、誠司さん』

「ん？」

どこか躊躇するような、その声が気にかかった。

はやく……早く帰ってきて、……ください。そう遠慮がちに呟いた言葉のすぐあと、いいえ、何でもありません。彼女はそう否定した。いつの日も強気な姿勢で物事を見据えていたその眸が、急に弱々しく感じられた。それは気のせい？

『私なら、大丈夫ですから』

そう自分自身を励ますかのように佐和子は言った。

「わかった、すぐ戻るよ」

優しくなだめるかのように、そう応えた。しかし本当に鷹水は、彼女のそばに今すぐにでも駆けつけたい衝動に駆られ、自分自身で

も戸惑った。

そのTELを切ってから、私は思わず目線を足元に落とした。カサカサと音を立てる僅かばかりの枯葉が妙に心寂しげに感じられた。その紅が目には鮮やかに映る。あと少しで紅葉も終わる。季節の移ろいは早く、まるで一瞬で山肌を駆け上がるかのようだった。風の冷たさが、殊更にそのことを伝える。例えその一瞬の儂い時の移ろいに呑みこまれるのだとしても……そう、私は。

「誠司さん……」

携帯越しのその声が、やけに温かく感じられた。いつでも、そばにあることが当たり前だった、その温もり。いつの日も、私を待っていてくれた、その優しさ。守られることが半ば当たり前だった。けれど私は、結局その心に応えることができないのかもしれない。今さらながら、胸を小さな痛みが刺す。誰かに手を伸ばすことが、別の誰かとの別れを意味する。それでも、きつともう。

そう、私は随分前から決めてしまっていた。その華奢な肩が急にしつかりしたものに感じられて、それでもどこか儂いイメージを拭き去ることできない、その運命を私自身のすべてをかけて、包み込みたいと願った。その過酷な運命が、この掌から零れ落ちてしまふほどのものだったとしても。そう、もう全て決めてしまっていたのだ。

だから、その陰がこの杜に足を踏み入れ、私を迎えにきたのだとしても、何も怖れたりはいらないはずだった。

「兄、さん……？」

そうだ。今まで黙っていて、すまなかった。唐突にそう告げられ、私は瞬間その意味が解らず、瞬き一つできなかった。

豪和一清——その男は、何よりユウシロウを特自へと送り、その実弟を不遇な扱いのままに理不尽にも自分の野望のために利用しようとした男だった。突然やってきたその一清が、自分を私の兄だと

言う。一体何のことを言っているの。それでも、急に貴嶋満千留の存在が私の脳裏に浮かんだ。そんな、まさか……。

「貴嶋満千留は、お前の実母だ」

乃三郎と満千留との間に生まれた娘、それが佐和子だった。それじゃあ……。私は背後に控えていた貴嶋宮司を振り返った。その場で固唾を呑んだまま、貴嶋はただ深く目を伏せている。ギュツと握ったその拳は心なしに震えているようだった。

私が……。そんな、そんなことって。不意にあの舞を舞った時のことが蘇る。あれはユウシロウと同じ舞。それでは――。

「異母兄妹、ということになるが」

ユウシロウは私の弟ということになる。それほどまでに、豪和の血は同族の血潮を求めたということなのだろうか。そ、んな……。私の深い逡巡と絶望を見透かしたように、一清はふと、ほくそ笑んだ。

「ユウシロウとともに一度、家庭教師を頼んだことがあったな……美鈴とも母は違うが」

美鈴さん……。思わずその名を耳にし、あの長いお下げ髪が可憐さと清楚さを漂わせる制服の後姿を脳裏に浮かべる。兄と慕ったユウシロウを心から心配している少女。本当に、私たちが姉妹だったなんて――奇しくも、それは同じ思い、同じ思慕であった。

ただまっさらな朝の光の中で、自分だけが見も知らぬ暗闇に突き落とされたような……。

その闇からも朝の陽射しからも、目を逸らすように私はギュツと目を瞑る。

「――さあ、私と一緒に来るんだ」

佐和子、とその男は言った。不意に見開いた目の前の視界が揺らぐ。

あれは……。私の中で、もう一人の私が叫んでいる。呼び続けた、そう。私は一人、兄の背中に向かって。兄様……。悲しいほど、小さな指先を伸ばして。そして、やっと振り向いてくれた兄からの

申し出。その唯一の願いに応えることこそが、私の願いそのものでもあった。……違う、違うわ。

それでも“私”は、兄の望みを拒むことはできなかった。

……おいで、佐和子。

進み出た一清の腕に凭れ掛かり、私は気を失った。

……沙耶。その少女は、やっと手に入れたつかのまの幸福に、嬉しそくに目を閉じた。しあわせ

自分の腕の中で蒼白の表情のまま、意識の底に沈む妹——一清は無意識に、その長く額に垂れた前髪に触れた。一清の羽織っていたコートに包まれ、絶望のただ中に落ちた大切な妹。丁寧に扱わなければならない、何しろ金の卵を産む雌鳥なのだから。

今両手に抱いた佐和子は、既に自分の手の内に落ちたも同然だった。そのまま彼女を車に乗せ、貴嶋神社を後にする。貴嶋宮司は、結局何も言おうとはしなかった。ただ、その苦悶の表情が、すまないと語っていたことは一清の目にも明らかだったが、既にそんなことに頓着する彼ではなかった。

そうだ、お前には重要な役割があるのだ……。貴嶋神社で佐和子が舞ったという舞。そのための、すべてが御膳立てとしたら出来過ぎだが、それでも何らかの因果関係が彼女を己自身の実家に誘い、その舞を舞わせたに違いない。何より、筑紫舞の宗家、貴嶋満千留の血を色濃く引く娘。転じてそれは、余流の能楽と源を同じくするものだった。だからユウシロウとお前は……いや、それこそ理屈を越えた何かの因縁に他ならないが。

そこは奇しくも、ユウシロウたち特自の実験中隊が実験を行っている溪流のほぼ近くだった。最初はユウシロウを使って始める神事だったが、風向きが変わった。まさにその存在は、かつての貴嶋家の血の伝統を引き継ぐ存在であった。そして何より——まさかお前も、唄だったとは……。

まさに“その瞬間”のために準備は着々と進行しつつあった。そ

れは豪和の神事。余流と筑紫舞。それらの間に横たわる、遙かな時。それが佐和子がユウシロウと出会ったことで活性化されたのか。父、乃三郎が、最早そこまで考えていたのかどうかは定かではないが、どちらにしても、その一方の流れがこうして今、この手の中にあるのだ。

ユウシロウにはユウシロウの、今後の利用価値がある。そしておそらくは、今日始まる日蝕で――。

見慣れない黒い車がやってきた。その人を拒むような見知らぬ黒いリムジンで、？あの人？は連れて行かれた。

境内の物陰から美命は一部始終を見ていた。怖い……、あの男の人。最初、本能からそう感じた。そして美命はその会話の中で知った。まさか――“あの人”が……！

お母さんの、本当の娘。それじゃ……やっぱり。目尻一杯に涙が浮かぶ。あの舞は、本当にお母さんの舞だったんだ！それでも、例え全てを知っても自分には、どうすることもできなかった。お父さんさえ……どうして、どうして。

「こんな早くに申し訳ないが――早速、佐和子に面会したいのですが」

男はそう切り出した。貴嶋宮司は、どうしても佐和子を連れて行くというのですか。そう、苦渋に彩られた息の中から搾り出すように、やっと尋ねた。男は逆に、では、なぜ彼女を家に招き入れるような真似をしたのですか……そう詰るように訊き、相手の弱点を突いた。

「筑紫舞は、満千留の舞。そう、例えその血が彼女の中にも受け継がれていたのだとしても、それは決して貴方がたのものではない……！」

「ほう、やはり舞ったのですか」

「……っ」

凶星だった。絶句した貴嶋を他所に、一清は得意げに言葉を弄し

た。

「その舞は時を越え、そして場所をも越え、こうして我々を強く結びつけた。それこそが何かの奇跡でなくて何なのです」

そう、奇しくもユウシロウと佐和子は……一清は最早、嗤いを堪えることができなかった。

お母さん、私。美命は胸の中で母に縋った。“あの人”を助けて

……！

私があの時、あの磐坐から、あの人を舞台に連れていきさえしなければ。それでも、その美命の後悔の念ですら、既にただ一つの切っ掛けでしかなかった。彼女が「目覚める」ことは、止められなかった。あの磐坐で、あの人を見た瞬間、お母さんが帰ってきたような気がしたの。だから、わたし。

すごく、すごく怖がっていた。お母さんの本当の娘だつて知つても。そう、あの怖い男の人はまるで、あの人を捕まえに来たみたいだった。嫌だつて言つてた、あの人を目。まるで、蛇に捕まつた子リスみたいに。

お母さん……！ もう、お母さんを取られるかもしれないなんて思つたりしないから。

それでも美命の願いは、天の母に届くのかどうかさえ定かではなかった。

2 .

目が覚めた時、見慣れぬ白装束の和装に自分が身を包んでいることを私は知った。

そこは静かな奥座敷だった。少しばかり開かれた障子窓の外から、どこかに溪流が流れているのだろうか、静かな水音が響いていた。

「私は……ここは一体？」

そう問うても、誰も答えてくれる人などなかった。まだ朦朧とす

る頭のまま、僅かに痛む額のあたりに手を添えた。布団から起き上がって障子に手をかけ、外へ出る。

平安風に結った長い髪が風にたなびく。そこはまるでどこか異界にも似た、山水画の風景のような景色が広がる山間だった。寒い……思わず肩にかけられた上衣を胸の辺りで掻き合わせる。

ふと、どこからか能の謡が聴こえた。蔵かにして玄妙なその調べは、あたりの空気を震わせ、夢幻の如く響いていた。古い寺を改築したかのような檜の能舞台。辺りの風景と相まって、その舞台は殊更に別世界のように思われた。何となく、どこかで……。私はその能舞台に見覚えがある気がした。

「目覚められましたかな……」

ふと、その声に振り返る。

「貴方は――、」

そこに一人佇んでいた老翁を目にして、私は思わず声を小さく上げた。

空知検校、ユウシロウの能の師匠である。ということは、やはりここにユウシロウも？

「ユウシロウ殿は、ここには居られませぬ」

空知もここ、北九州を訪れていた。ということは、やはり。それでも、静かに頸を左右に振る空知に、私は何かを感じ取らずにはいられなかった。空知は確かに、私の姿を見て哀しげに表情を曇らせた。そういえば、これは……まるで、あの時、美命さんに着せられた筑紫舞の舞装束そのものだった。

「ユウシロウはやっぱり――特自でT Aの起動実験を？」

そのために彼は、この筑紫へ足を踏み入れた。そして、私自身もどこか儚げな風情の枯木立の間を、冷たい風がただ音も無くすり抜けていく。その度に周囲の木立が囁くような音を立て枝を震わせる。まるで姿を見せぬ何ものかの姿を、私たちの目に見せるかのように。

「伊集院殿……」

やはり空知は何かを躊躇しているようだった。そう、か——おそらく空知も知っているのだ。私が豪和の人間だったということを。貴嶋家と豪和家。でも、それなら、もしかしたら……！ 私は思わず弾けるように空知に尋ねていた。

「空知さん……もしかしたら貴方は、私の本当の母——……そう、貴嶋満千留について、何か知っているのではないですか？」

切なげに言葉を詰まらせ、少しだけ躊躇しながら、それでも私は単刀直入に尋ねた。

「ここ北九州は筑紫に伝わる筑紫舞……」

まるでその声色は、そのまま幽玄の世界へ遊ぶが如くの色を放ち、辺りの木立の間に吸い込まれていくようだった。そう、それは禁忌の舞……、我が余流と懷を同じくする傀儡舞。

どちらも、まるで人目を忍ぶかのように、それぞれの場で密かに守られ続けてきた。一方は豪和に、そしてもう一方は。それが何かの因縁で出合ったとしても言うのだろうか。そう……、貴嶋満千留と、そして豪和乃三郎。そして——。

ああ、ユウシロウ。私は悲痛な表情を隠そうともせず、思わず頭を振る。止め処なく眸から涙があふれ、知らず知らず頬を伝っていく。

「私……私は、ユウシロウを……」

「佐和子殿」

優しく穏やかに空知は私の名を呼んだ。その穏やかな声が包み込むように私に届き、くず折れたまま、なおのこと私は嗚咽を漏らす。「満千留殿は、真に乃三郎殿を愛しておられたのです、そしておそらくは乃三郎殿も」

おじさま、いいえ……。私は改めてその名に、自分の本当の父の面影を臉の裏に見た。

「その目に見えぬ絆は、決して宿業や野望に捕らえられたものではございませぬ、そう、それはただ一つの思い」

……ただ一つの。その言葉に私はユウシロウを思った。本当の血

の繋がり以上に、私は彼を。でも、でも。

「佐和子殿は、なぜここ北九州にまで足を運んだのです。それはやはり、御自身のその思いを信じるからに他ならないのでは？」

そう、そうです検校。私は、やはりユウシロウを。

ならば——、空知検校は静かに言葉を継いだ。貴方の望むべき答えは、ただ一つ。

「検校——茶番はそこまでだ」

山肌を滑っていく凍える風を殊更に冷え冷えと凍らせるような、その声が辺りに響いた。

見ると、その声の主が冷ややかな眼差しを二人に向けていた。

「一清殿……」

山肌にしがみつくように建てられたその屋敷の板張りの廊下に——清は立っていた。

「そうだ、佐和子。お前はそのため、ここへやって来た」

失われし伝承の吐息。筑紫舞と、そして余流の二つの流れを一つに束ねるため……。いや、そんなことは既にどうでもよいことかもしれない。佐和子、お前のその舞を今度こそ我々の前で見せるのだ。

真に無窮の力へと導く、その舞を。その半ば強制とも取れる傲慢な態度が、その宿業に捕らえられた冷徹な魂が、ユウシロウを。

私の怒りは、既に陰そのものである、その男を一点の曇りなく貫いていた。しかし……、

もし、もしも私がユウシロウの代わりに——そう、それによって全ての軛を断ち切ることができるのなら。兄さん、そう呼ぶことさえ躊躇われる、その男に向かって私は尋ねた。

「もし……もし私が舞を舞えば、ユウシロウを自由にして貰えるのですか？」

やはりそう来るか……。くく、と思わず笑い声を漏らす。そう、だな……。考えてやつてもよいだろう。

「餓沙羅鬼の神事だけじゃない、彼をTAから、特自の任務からも

解放してあげて」

その歪んだ嗤い顔のまま、しかし一清の視線は鋭く私を捕らえた。それも、お前次第だ——佐和子。

それでもまだ、すべてが悪い夢、まぼろしのような気さえする……。

私はユウシロウを追って、ここへ来たわけじゃない。そう、最初
はむしろ彼から離れるために。それでも。

やはり私はユウシロウから離れることはできなかった、それどころか。むしろ彼自身を呑み込む闇そのものに呑まれることになるのかもしれない。でも、それは私にとって本望だった。彼をユウシロウを、その闇から救い出すことができるのなら。

しかし兄は、一清は、それほど生易しい人間ではなかった。すぐにそのことを私は悟ることになる。

目を閉じると、やはりその面影が瞼の裏に映る。どうして……次第に遠ざかっていくその陰に私は怯えた。まただ。……兄様、兄様。少女はやはり、私の中で泣いていた。だから、その面影が本当に手の届かない遠くへ行ってしまうことが怖くて、私は兄の望みを拒めなかった。

そうだ、沙耶。お前は拒むことなどできはしない。そうだろう……。

兄を想う気持ち、寂しいと思う気持ち。そのどちらもが本当だった。……佐和子、お前は、私の妹だ。

そんな……。そんな、ユウシロウ。その幻に囚われれば囚われるほど、次第に自分が誰なのか判然としなくなる。わからない。そう、いつしか私は、その幻から逃れられない自分自身を知るのだった。

「兄さん、本当にあの薬を佐和子に？」

半ば半信半疑で清継は尋ねた。それはユウシロウの記憶を消去した際に使用したものと同じものだった。すぐには効かないかも知れ

ないが……、正気とも取れぬ、その返答に清継は絶句する。まあ、いい。本当はそんなものなど使わずとも、佐和子は言うことを聞くだろうがな、しかし。

佐和子はユウシロウが自分の本当の弟ではないことを知らない。だが保険は必要だ。どちらにしても、やつのは早く忘れさせた方が、妹のためでもあるだろう？ 確かに――。実の弟と関係を持ったなどという悪夢など。

「どちらにせよ、早急に餓沙羅の舞を完成させねばならない、そうユウシロウ以上の、な」

空知はずっと静かに私を見守っていてくれた。とりあえず呼吸慣らしのため、私は檜舞台にあがった。

基本的な所作は、やはり空知検校から教わった。それなのに私は、まるでそれを何年も前から習ったことがあるかのように、滞りなくスムーズに進められた。それが自分自身、とても不思議だった。それよりも……、ユウシロウのそれと同じ舞。私は彼の舞を鬼哭石の郷で見たときの事を思い出していた。

そう、それは最初は静かすぎるほどの静寂から始まる。けれど周囲の気配を己自身から消し、雑念を追い払い……そうしているうちに次第に導かれていく？ 向こう側？ の景色。まるでそれに手を伸ばすかのように、私は扇子を手にした右手を前方にスツと上げる。眸に映るのは、きつともう届かない彼方の地平。それでも。

どこかで彼が私を待っている気がする――、きつととても哀しげな表情をしながら、それでも私は、そんな彼に手を伸ばす。

ユウシロウのそれと同じ舞を舞おうとする度に鼓動が次第に激しくなり、呼吸が殊更に苦しくなる。ハアハア……、思わず我知らず呼吸が荒くなり、大粒の汗が額から滴る。

ユウシロウは、こんな思いをして、この舞を。改めて、それが荒業であることを私は知るのであった。

そんな私を―清は、ただ冷ややかに見つめていた。おそらくいつ

その兆候が現れるのか監視しているのだろう。身じろぎもせず一点のみを見つめる、その眼差しの鋭さ。それはそのまま、この豪和一族の業そのものであった。闇そのものを懷に抱いた――、おそらく父乃三郎は、本当はそんな宿業から一瞬でも逃れたかったのかもしれない。

また……、あの夢に囚われる。そう、私自身さえも、その豪和という闇からは容易に逃れられないのかもしれない。それでも私は、この舞が私とユウシロウとを、確かに繋いでくれているのだとも知った。この闇にいるのは、決して私一人だけじゃない。

兄様、兄様……。また“私”は兄の姿を探して一人荒野をさ迷っていた。

吹きつさらしの風が冷たい。そして私は、その樹の下で？彼？と出会った。

「どうしたの――、どこか痛むの？」

その青年は、どこか寂しげだった。その曇った眼差しに私は問いかけた。彼がどんな仕事をしていて、どんな境遇にあるか、私は何一つ知らなかった。そうだ、幼い私に何が理解できるはずもない。それ以前に、私は……。

「兄さま――、」いつしか青年を、私はそう呼んでいた。刹也、確かにその名前を青年の口から聞いた気がしたのに。よかった、兄さま、こんな所にいたのね。彼を見つける度に私は安堵した。

そんな私を煩がるどころか、彼はぎこちないけれど、いつでも優しい笑みで迎えてくれた。私の心は、もう真実を見極めることなどできなくなっていた。それでも……、兄が確かにそこにいてくれる、その安心感だけが、私自身を支えていた。

その静かな微笑みが、彼とダブる――、ユウシロウ。その優しい手のひらを、私に差し伸べてくれた人。けれど、それが決して赦されない望みであると知ることが、私が本当の兄からの呪縛に殊更に囚われる要因となるのだった。

「佐和子、お前自身がどう思うと、お前はユウシロウの姉に他ならないのだ」

舞の稽古の合間の僅かばかりの休憩時間を見計らって、一清がそう告げた。そう……、そう、なのだ。何一つ知らなかったとはいえ、私は。それでも、どうしてそんなことが許されよう。実際の関係云々というより、自分自身の思いという、もつと根源的な意味において。一清の指摘は、その私自身の弱点を見事に突いていた。そして水分補給と称して差し出されたその飲料を、私は疑うことなく受け取った。

“あの石舞台と同じ場所だ——”

入り組んだ谷間を穿つ渓流の景色を見つめながら、ユウシロウは思った。

辺りには急峻な山々が連なり、改めてここが外界から閉ざされた秘境なのだと強く実感させられた。

起動実験、二日目。TAの稼働時間には限界がある。そのための身体機能のチェックは入念に行わなければならなかった。特に今回のように千メートル級の高山での実験は無論、過去に前例がないばかりか、常に酸素吸入を怠らないなどの特別の措置が殊更に必要となる。どちらにしても、ただでさえ体力を酷使し、微妙な身体変化にさえ左右されるTAの操縦には、やはり苛酷な環境下であると言えるのだ。

実際、英彦山などで自転車レースなどが行われており、酸素に関してそれほど神経質になる必要はないと思われがちだが、TAパイロットに関しては、その限りではなく慎重な対応が必要だった。

医療班の急ごしらえのテントの中で操縦士たちは、それぞれに綿密な身体コンディションの精密検査を事前に受けていた。昨日の起動実験が、かなり堪えている操縦士も中にはいた。その僅かな酸素量の差で、これだけの支障が操縦そのものに出ることを彼らは思い知らされた。勿論、その酸素吸入にも限界がある。TAのように絶

対的に膨大な運動量と呼吸量とを必要とする行動には、僅かばかり携帯した酸素量では、すぐに消費し尽くしてしまう。

だから稼働時間自体も、通常の実験以上に制限せざるを得なかった。

「やっぱり無理がありすぎるんじゃないの……」

それでも昨夜、十分とは言えないまでも深い眠りに突いた池口でさえ、その困難を極める状況に閉口した。

予定通り午前と午後の二度、集中的に実験は行われた。その日は、幸い朝から気持ちよく晴れ渡ったものの、山の天気などあてにはならない。空気の冷たさとは裏腹に汗が滴り落ちる。今が晩秋であったのが、よかったのか悪かったのか。呼吸の苦しさは、むしろ通常の実験より改善されたようにも思えたが、それは最初だけで、酸素自体の消耗が激しいため結局は同じことだった。まさかT Aで登山……なんていう荒行をこんな所で行わされるとは夢にも思ってた。思わず、そうばやきたくもなる。同様にB小隊の隊員たちも午前の実験が終わる頃には、へとへとに疲弊しきっていた。

文字通りC I C（戦闘情報中枢）そのものである指揮車両は若干上流に移動し、T A演習全般を支える。操縦士である各々の隊員らのバックアップに努め、通常以上に常に彼らのフィジカル・コンディションに目を配った。

「中佐、今回の起動実験は、やはり無理があるんじゃないでしょうか？」

二日目から演習の視察に現れた豪和三男の青春が携帯を握りしめ、退室した隙に作戦オペレーターである徳大寺琢磨が速川に呟いた。実験中隊の中でも、速川の副官的立場にあり、様々な情報分析に長けている彼も、今回の実験内容の無謀さとその根拠の不在を疑問視しており、その彼にも、それを実際に隊員たちに命じなければならぬ速川の苦悩が手に取るように理解できた。

「現時点でT Aが山岳演習を強行できるかというところ、やはり大いに疑問が残りますしね」

徳大寺の脇の席に控えていたA小隊を支えるTAのシステムオペレーターも、同様の意見を呈した。

「……どちらにしても、ゴーサインを出したのは、豪和だ」

速川は、何一つ問題はないといった表情で視察に現れた清春を思い浮かべた。豪和にとつては、おそらくどれほど困難を極める実験であろうと、何らかのデータが得られるのであれば躊躇しない、といったところか。

「冷血漢」

もう一人の男性オペレーターが、そう囁いた次の瞬間、清春が車両内に戻ってきた。

「——どのような些細な兆候であっても、決して見逃さないでください」

清春は、そう事も無げに言い放ち、改めて後方の席に着く。

些細な兆候？　こんな苛酷な環境下で……速川は、そう胸中で呟かずにはいらなかった。

3 .

日本に派遣したエージェントである朴が連絡を絶つて数日後、評議員メスは極秘にシンボル・ジャパンを訪れていた。

「やはり日本における二足歩行型兵器開発が極秘に行われているという情報は確かなのか……」

当然、メスの目下の関心はその一点に絞られていた。

あれから^{ミハル}睦は、以前同様に心を閉ざしてしまった……それは、どこか硬い殻に自らを封じ込めようとするかのような。その先日の^{ミハル}睦の一件もあり、朴に北九州への極秘調査に向かわせるも、その動向に関しては、あくまで独自の自由な行動を許していた。

それにしても——、朴の行動には、どこかシンボルのエージェントらしからぬ純粹さが見て取れた。それが自ら報告を絶っている現時点での現状にも言えることだろう。シンボルらしからぬ、か。そ

れでも、冒されざる数多くの権限を持つシンボル評議員たるメス自身、それを責めることなどできなかったかもしれない。

それは、人としての情。一切の株式を非公開とする非上場企業である一大コングロマリットであるシンボルでさえ、その伶俐な企業論理と無縁でないばかりか、そのために組織そのものが出来上がっていると感じる瞬間さえある。

そう、それは時折メスが感じていた漠然たる思い。そして茫漠とした疑問。もしかしたら、まさにシンボルとは、この“ナダ・プロジェクト”のためにあるのではないだろうか……。

古来、大陸からの玄関口であった北九州は、かつて邪馬台国が存在していたとされる候補地の一つであった。その邪馬台国の女王、卑弥呼は文字通りの巫女であったと言われている。

……インヴィテーター。それはまさに神依りの儀式を行う者なのかもしれない。その北九州全土を覆う皆既日食の日。それが今日だった。

自衛隊のデータベースには「その記録」は一切残されていないが、その自衛隊のある特殊部隊が北九州に入ったという情報がメスの元に届けられた。無論、朴からはまだ何の連絡も入っていない。

ただメスの中で、部分的なキーワードが何度も繰り返される。インヴィテーター、卑弥呼、日蝕。そして特自。

「やはり一度こちらから朴を正式に呼び出さなければならぬか……」

“その瞬間”が目前に迫っていることも知らず、メスはそう考えた。

TAの視覚を通していても、その光景は微妙な現実感を欠いてユウシロウの脳裏に届いた。

全体としてなだらかではあるが、一部屹立した山地を覆う鬱蒼とした樹木。そこに僅かばかり穿たれた溪流の谷底。

ユウシロウが先日、稽古を行っていた能舞台に程近い断崖絶壁の石の舞台。おそらくは、そこと同じ場所なのだという漠然とした確信。……自分は、この場所を知っている……。そこは決して彼自身が見知っていた場所であるというわけではなかった。それでも位置感覚的に、彼はこの場所を確かに知っているということを知っていた。

彼らT A部隊は今まさにその場所に降り立ち、いつ見知らぬ敵が襲ってくるのではないかという茫漠とした恐怖と不安感に襲われていた。

勿論、それは野戦演習上でのあくまで模擬的な状況設定でしかない。その意味ではシミュレーターのそれと概念上は何ら変わりなかったが、それでも現実の場所が放つ独特の磁場のようなものに彼らは逆らえなかった。

“やはり何かが、ここにはある”

それは昨日から何度も感じていた感覚だった。その、まるで心臓を鷲掴みにされるような異様な感覚に、ユウシロウの鼓動は早くも早鐘のように打ち始めていた。

「フオーカス1、心拍数上昇！まだ許容範囲内ですが、このまま上昇し続けると……、」

この環境下での起動では何が起こるか分からない、そうオペレーターという言葉は暗黙のうちに指摘していた。

やはりユウシロウが感じていた異様な感覚は、他の機体の操縦士たちへも如実に伝わってきていた。それは物言わぬ圧迫感。周囲を取り囲む世界そのものが自分たちを拒否し、その確たる意思を持つてして、どこか手足の自由さえ奪われるような、そんな感覚。

“そこ”には、やはり“何者か”が存在していた。あれは風の音？ それとも……。瞬間、突然それが何かの歌声のようにも聴こえてきて、それが単なる幻聴なのかどうかさえも判らなくなる。どちらにしても彼らは今、言葉では言い表せられないような重い“気配”を感じていた。

しかし、あくまでユウシロウ自身が感じていた感覚の、その余波のようなものが他の者たちへ伝播したに過ぎない。それでも池口は我知らず、呼吸が荒くなり鼓動が早くなるのを感じた。

「フォーカス2、1の動きに追従できません！ 心拍数、血圧ともに上昇」

相次いで報告されるパイロットのフィジカル・コンディション。まだ実験を開始してから数分も経過していない。ハア、ハア……口元を覆う酸素吸入のためのマスクも、それほどの量を供給できるわけではなく、やはり呼吸が苦しい。指定された現時点での目標地点をバイザーのHUDで確認するも、池口にはそれが遥か遠くに思えた。

「ああ、今時点では何も起こってはいない。それは昨日のデータから同様の結果が出ているよ」

先程、一清から掛かってきた電話に清春はそう答えた。それでももし本当にここが闘^{しきみ}なのならば——、確かにあの日、一時的に異常なバーストが確認された。それは豪和総研のデータからも事実だと清継は言っている。

ここは、おそらくは、その日女巫が降り立った場所……貴嶋満千留、そしてその娘である佐和子が、その日の女巫の生まれ変わりだと言うわけではないが。我ら豪和一族が古来より守ってきた余流の能楽は、ここ筑紫に淵源を持っている。ならば、その起源を卑弥呼の鬼道に見出すことは可能だろうか。いや……。

それでも一清には、それが単なるこじつけには思えなかった。案外、兎の血はそこかしこに分散しているのかもしれない。それが傀儡の民の足跡であったとしても何ら不思議はない。

「どちらにしても能舞の神事と骨兎による闘いを同時並行して行う——それが真に餓沙羅鬼へと到る道なのだ」

一清は傍らの舞台で一心不乱に稽古を続ける佐和子を尻目に、そう呟いた。

日蝕とは文字通り太陽の陽光が月に隠される現象だ。しかし、それは厳密には月と太陽とが重なることでもある。しかも、それが皆既日蝕ともなれば、その「黒い太陽」の輝きは特別なものとなる。実に月から太陽への距離と太陽と月の大きさの比率が同じになるために、それは生じる。日蝕はこの地球上のみで観測される現象、まさにそれは宇宙の奇跡だった。

しかしなぜ、ちょうどその日に申し合わせたかのように豪和と特自は動いたのだろう。朴は改めて疑問に思った。確かにそこは、山自体が持つ独特の磁場に覆われていた。ダム建設のため、立ち入り禁止区域となつた山中へ意を決して朴は分け入っていった。

懐の端末の電源は無論、切つてある。おそらくメスは今頃、自分の行動に少なからずの疑問を抱いていることだろう。それでも、携帯電波の届かない山中での行動が逆にその言い訳にもなつた。本来なら一時的とはいえ、日蝕が起ると分かつていれば、なおのこと山へ分け入ることは危険が伴う。しかし……。

それでも朴は自分が、それを確かめなければならぬと強く感じていた。おそらくは今、鷹水も同様の行動に出ているかもしれない。ジャーナリストとシンボルエージェント。それぞれの立場も立ち位置も全く異なっていたが、それでも互いの間に流れるどこか同等の感覚に、朴は決して彼を他人とは思えなかった。

そして貴嶋満千留の奇跡は、確かにどこかその日蝕を思わせた。太陽と月が持つ力。その二つが融合し、そして同時に相殺される地上の者たちの混乱。人はいつでも特殊な能力を持つ者を畏怖し深く敬い、そして同様の心で自らと隔絶するのだ。

インヴィテーター……、我知らず朴の脳裏に浮かぶ、その言葉。そのバーストが起す爆発的な力の暴発をして、シンボルはそれを目指そうとしている。しかし、なぜそんなA A Aクラスのトップシークレットについてメスは自分に話す気になつたのだろう。

そして睦^{ミハル}という少女。どこかで朴は、その茫洋とした眸に哀しみ

の色を感じずにはいらなかった。

「本日の日蝕は、第一接触つまり蝕が始まるのが一四〇七、そして第二接触、皆既蝕の始まりが一四二八。いずれにしても第一が始まった時点で、出来得る限り各隊はそのまま待機、第二接触では一切の活動を停止する」

一応ブリーフィングで事前に各自に伝達していた内容を、速川はもう一度繰り返した。

『フォーカス2、確認』

第一小隊の池口をはじめ、第二小隊のそれぞれのパイロットも、その命令を各自承服した。

それでもユウシロウ機だけが答えようとしない。

「どうした！豪和大尉」

速川のその呼びかけにも一号機のユウシロウは反応せず、沈黙したままだった。

“俺は、こんなところで何をしているんだ——”

そう胸の内で呟くユウシロウ。その間にも彼の心拍数は早鐘のように打ち、繰り返し周囲を圧迫し包み込む、その“怨嗟の声”は、留まる所を知らぬ津波のようにひたひたと彼に押し寄せた。

何度もその声を聴いたような気がする。そして、その度に彼は止め処ない奔流に押し流されるように、我を失い、ただその憎悪の矛先となつて幾多の魂に導かれるまま、戦場を駆け抜けた。

その瞬間が、またやって来ようとしていた。それは彼自身の意思とは全く無関係に……。傀儡の民。神依りのシャーマンである彼らに最早、選択権などなかった。むしろ強要されたはずのその運命に、自らを失い、狂ってしまう資質そのものが彼らの悲劇だった。

闘いこそが、我らが宿業さだめ！

……だが、本当にそうなのだろうか？ しかし、その疑問も今は彼の中で本来の意味で機能しようとはせず、ただかつて眼前に繰り返された惨劇だけに、その眸は既に釘付けとなっていた。

そう、この場所。卑弥呼の死。それが偽りの命を供物とし、捧げられたその真実に？彼？の魂は猛り狂った。

どうして……、どうして。そしてその鎮魂の舞は、最早それとは違う意味を持ち、その灼熱の焰をこの地に放った。それが骨鬼を眠りから呼び起こす。それは戦いの神。いや、鬼……。留まる所を知らぬ戦乱の世に、卑弥呼の存在は確かに救済の意味を持っていた。しかし、その生と引き換えに捧げられた小さな命。どちらにせよ、乱世は人の心に繰り返される。その真実を彼は知った。

その鬼は人々の憎悪と怨嗟の心そのものだった。それに同調した哀しみの心が、ただ己を失い、闘いに駆り立てられる。それはまさに幾多の時を経て、目に見えぬ何者かが企てた？罠？だった。

“まさに宿業の焰が、この地を灼き尽くす……”

そのための人柱、なのだ。同時平行的に同じ闘で行われる餓沙羅鬼の神事。今や一清は、着々と各観測装置の設置が終わった石舞台袖の管制車両の中で、清春が指示している指揮車両から転送されるTA演習の様をじっと見つめていた。

モニターには同時に石舞台の様子も映されている。それはまるで鬼哭石の郷のそれと瓜二つだった。

古の時代、おそらくは我ら豪和に先んじて、その神事は今に伝えられていた。それが、ここ筑紫だ。むしろ本来の場所とは若干外れた山中に、それはあった。邪馬台国が本当にここにあったのかどうかは、最早定かではない。それでも、この石舞台がここにあったところこそが、無言のうちにそれを指し示していた。

そう、闘。この一帯の磐石から、異様な磁場が検出されていることは、既に清継の調査で確認済みだった。あとは、実際に神事と実験とで事実を確認するまでだ。そのすぐ下流で行われているTA起動実験。既にユウシロウのフィジカル・データは、異様な兆候を見せ始めていた。そして佐和子も……。

すぐに彼女はおとなしい、我が命に従順な乙女と化すだろう。そうだ、お前は可愛い妹。

一清は最早、不適な嗤いとその歪んだ口元に隠そうともしなかった。

——満千留、すまない……。

その心に残されたのは、おり澱のように降り積もる悔恨の念だけだった。

貴嶋は、そのまま佐和子が連れ去られた後の境内に一人立ち尽くすばかりだった。石のようになった意識が一つに固められたまま、貴嶋をいつまでもその場所に押し留めていた。

満千留の舞を、その血の中に受け継いでいたがために。決して、その血を亡者どもの餌食にするようなことがあつてはならない。それがために、生まれたばかりの佐和子を乃三郎殿の元に預けた。その身内の？悲劇？を嫌というほど味わったであろう乃三郎殿。彼の心を信じたからこそ……、だから木を隠すには杜の中、豪和乃三郎という本当の父の元へ授けたのだ。

だが……。美しく成長した彼女は、最早、満千留と見違えるかのような聡明さと勘の鋭さで、ここ筑紫の実家に戻ってきた。

否、それはやはり兎の血のなせる業わざなのか。

“おとうさん……！”

その姿を背後から美命はそつと窺っていた。

すぐに駆け寄りたいのに、今の彼女にはそれができない。お母さんの、本当の娘。それが？彼女？だった。あの人、そう私のお姉さん——は、あの舞を舞ったから何処かへ連れて行かれた。お母さんと同じ舞。それを最初に教えてしまったのは、私。お母さんに帰ってきて欲しかったから、けれど。

“行かなければ……！”

美命は反射的に貴嶋に縋り付いていた。

「美命？」

“お父さん！”

父の着物の袖を掴みながら、美命は必死の表情で訴えかけていた。

その眸が、叫ぶように語りかける。
まなざし

“姉さんを…… たすけて…… おねがい！”

貴嶋は、はつとした表情で我に返ったように、その半ば泣きそうな真剣な眼差しを見つめた。最早躊躇している暇などないと、半ば膠着していた自身に、その表情は語りかけていた。

“そうだ、彼に——鷹水さんに知らせなければ”

＊

「ユウシロウ殿……」

ふと呟いた空知に、私は振り返った。時を迎え、場所を溪流の石舞台に移した、その鏡の間での瞬間だった。

そう……貴方の舞は、ユウシロウ殿のものとよく似ておられる。

ユウシロウ、の？ 思わずその、酷く懐かしく感じられる愛おしい名を反芻する。勿論、技量の上では幼いころから舞っていたユウシロウと比べるべくもないだろうが、空知は何がしかを感じ取ったのか、鏡台の傍らに置かれた面に目をやった。

「その面はシテとしての演者を遠い忘却の彼方へ連れ去るためのもの。しかして貴方は、佐和子殿は、その面に何を隠して舞われるおつもりなのか」

既に分かりきっているだろうことを、改めて問われ、私は瞬間身を固くした。

私……私は……、もう何度、胸の内で呼んだのかも分からない。

ユウシロウ。

「この空知もその昔、一度だけ貴嶋満千留殿の舞を目にしたことがございます。それは、まさしく風の舞——我が余流と淵源を同じくする傀儡の舞」

その漂泊の民は軍事豪族としての業を逃れ、各地に散った。その大元の名残りが筑紫舞。

「満千留殿は仰られていました。もし娘である佐和子殿が舞を舞わ

れるようなことがいつかあるのなら、その時は、“愛する人”のために舞って欲しいと」

「……愛する人」

そう、そうなのだ。私は何よりも、その人のために。ユウシロウのために今、舞おうとしているのだ。

それでも、この目に貼りつくような闇にも似た、あの鋭い眼差しが蘇り、そして身を貫く——一清。

その姿が今にして遠い忘却の彼方へ私を連れ去ろうとする。否応なしに、それは遙かな過去へと連れ戻そうとする闇そのものだった。改めて鏡台の前に座る自分自身を見つめる。おそらくは、この面が、私自身を騙そうとする。私の想いを、騙そうとする。そう、もしかしたら私はずっと長い間、我知らず拘束されてきた。それが兄であると知る、ずっと以前から。けれど——。

……私が愛しているのは、その兄ではない！

兄と名乗った男が今、強要している舞を舞うのは、その男のためではなかった。決して、遠い過去より引きずられた魂の無念に従わないわけではない。その儚く散った想い。それを痛いほど実感できるのは、やはりユウシロウがいるからだ。今ここにいる私と、そしてユウシロウは、亡霊のように連なる過去を過去として葬れるのだろうか？ いやむしろ、その遙かな過去に左右されてしまっただけの「今」なのだろうか。

私とユウシロウが、こうして出逢ったのは、やはり過去の因縁の末の一繋がりなののだろうか。

「ユウシロウ……」

私は、まるで初めてその温かさに触れたかのように、その体温のぬくもりを今さらのように恋しく思った。そして、彼と出会ってからのことが懐かしく脳裏に過った。初めて出会った桜の木の下で木漏れ日に包まれながら、ぎこちなく微笑む制服姿。そして豪和の家で仮初の教師として彼の元に就いた日々。そして……、

あれは、やはり過ちだったのだろうか？ それでも、とうにそん

なことさえ越えて、あまりに自然に二人は……。

再び私を襲う慟哭。あまりに信じられないその事實は、私自身を貫くのに十分だった。私は二重に穢してしまっただろうか。九つ年下の私の実弟。もしかしたら、それは豪和の、そう一清の差し金だったかもしれない。ユウシロウと、そして私の中に潜む“何か”を引き出すための。

あまりに自然に父、乃三郎が私とユウシロウを引き合わせたことが、今さらのように遠く思い出される。

けれど、もうそんな風に、人を疑い傷つけ合うことなど、金輪際したくないと思っていたのに。

「佐和子殿……」

ふと我に返る私の傍らで、空知検校が哀しく微笑んでいた。

迷っておられるのですね、その言葉に一瞬、泣きそうになりながらも、私は必死で自分を抑えた。

ユウシロウは、どうしてもその「真実」から逃れられなかった。

その衝動が、どうしようもなく今の彼自身を我知らず操ろうとする。……殺された！そう殺されたのだ。少女は無為の心のまま、贅としてその身を捧げた。それを自分は見ていることしかできなかった。その無言の慟哭が、今も激しく胸を叩く。それはもしかしたら、自分の裡にずっと永い間閉じ込められている少女の心かもしれないなかった。

やめる！やめるんだ！

その虚しい叫びが、幼い命が散った空に無限に吸い込まれていく。そして、なおも彼自身を苛んだのは、身代わりの少女の亡骸に縋り、いつまでも泣いていた高貴な女の姿だった。それと知らず、彼は彼女と出逢っていた。少女との出会いと同じくして、しかし、その人はずっと以前から知っていたような眼差しで彼自身を深く捕らえた。

『刹也……、』

弥呼姫。沙耶——少女は知った。いつしか彼女の心を占めていたのは、決して兄の幻などではなく、確かな実体と体温を持った愛しいその人であったのだと。そして少女が新たに知る真実が、少女自身の心を壊してしまうのに十分であったことを、彼はそのすぐ後に知るのだった。

沙耶……、ごめんなさい、沙耶……。

少女はきつと恨んでいる。私と、そして弥呼姫を。

それでも、彼は同じ�である宿命を負った、その高貴な女性の側を離れることはできなかった。宿業は幾重にも連なり、戦乱の世を緋く染め上げる。そう、齡一三歳にて再びクニの女王として立てられた壹与。彼女はその後、卑弥呼の夫弟とともに畿内へと上った。

そうやって軍事豪族としての傀儡の民の血が大和全土へと自然に広まっていっただろことは想像に難くない。それは永の時を経て、繰り返される終焉のない一筋の道。

その枝分かれしてなお、己が宿命を失わぬ何の狂いのない遺伝子の命に従い、ユウシロウは今ここにいた。

お父さま……美鈴さん……。

ユウシロウにまつわる豪和の家を思う時、すぐに脳裏に浮かんだのは、あの三人の兄たちではなく、やはり父である乃三郎と母親の違う妹であった美鈴のことだった。豪和……そう、私の本当の家族。でも、その父も、ただ一人の妹、美鈴も、やはり私のことを許してはくれないだろ。せつかく、せつかく出会えた私の家族、だったのに。

そう思えば思うほど、悲嘆に暮れば暮れるほど、この思いはユウシロウへと向かってしまう。そして、そうなれば再び私は変わらぬ罪過に絡め取られるのだ。罪過、罪……？ それでも、この思いは、ユウシロウへの、この思いには嘘偽りなどないと誰かが胸の内 で叫ぶ。だから私は……、彼のために。

“お姉さま……”

ふと、その胸の中の私に語りかける少女の声がする。

お姉さま……。どうか、お兄さまを、ユウシロウお兄さまを守って……ください！

そう悲痛な表情に顔を歪める少女の瞳は、これ以上ないほどの切なる思いに潤んでいた。

それは、兄を思い、そして同時に姉であつた私への――、そう、そうだ。それは同じ思い。姉妹である私たちが抱く実弟であり、そして実兄である彼への思い。

美鈴さん……。

今にして私は、本当に彼女の気持ちが始めて手に取るようによく解った気がしていた。

そんな、そんなことって。心から愛してしまった人が、自分の家族だつた。それは赦されぬ想い。本来ならば喜ぶべき、その血の繋がりが、逆に私たちの思いを無残にも断ち切る。それでも、かろうじてそれは僅かな均衡を保ち、ここに確かに存在していた。それはやはり、私たちが――？

美鈴は妙な胸騒ぎを感じて、その場に一人立ち尽くした。

鬼哭石の郷から帰ってから、その思いはひたひたと押し寄せ、ずっと彼女の胸を深く覆っていた。

お兄さま……。先生……。二人のことを思うと、今でも身が引きちぎられるように痛い。けれど、今はそれとは違う感覚に心がどうしようもなく逸つた。

“行かねばならない”

鬼哭石の郷で空知と対峙したユウシロウの表情からは、そんな決然とした意思が感じられた。その時はまだ、時が来ていないと感じられたのもつかのま、兄はやはり旅立っていった。そう、遠く筑紫の地へと。

ただ待っていることしかできない、そんな自分自身が殊更に齒がゆかった。でも、でも……！

何だかとても嫌な感じ……そう、とても嫌な予感がする。何の力も持たない自分に何かができるなど、到底思えない。でも。

空知のおじ様、お父さま。美鈴は我知らず、祈るように救いを求めた。

豪和の家は、まるで降り積もる古い時に埋もれた牢獄のようだった。それでも、その時の砦の中に唯一感じられた、懐かしい安らぎが確かにあった。

それが兄ユウシロウであることは最早何の疑いも入れない。その懐かしい安らぎ、そして何ものにもかえがたい存在である兄と、その愛する人……。

もし自分に翼があるのなら、真っ直ぐ兄の元へ今すぐに飛んできたい。けれど、そこにはきつとあの人がいる。兄はきつと、そのためにかの地へ向かったのだから。それでも私は、二人を……、祈りたい。お兄さまと先生が無事であることを、私は祈りたい。

けれどユウシロウの元へ赴きたいという、その美鈴の切なる願いは、思わぬ所で叶う瞬間が直にやって来るのだった。

「フォーカス1、豪和大尉！」

いつしか一人隊を離れていくユウシロウ機。それを目前に示されたモニターのマークーとして捉える指揮車両内。しかも、その身体状況は過酷を極め、今にも爆発しそうな程に沸騰していた。

「……フォーカス1、心拍数二八五、脈拍数、アドレナリン値も規定値を越えます！」

ユウシロウ機は、それが当然の行いであるかのように、ひたすら上流に向かって突き進んでいく。

そして既に時は、そろそろ太陽が欠け始める頃合であることを如実に示していた。このままだとTAの活動限界を超えたまま、山中で遭難してしまう可能性も当然ある。しかしオーバーライド、指揮車両からの自動制御システムによる停止命令もユウシロウ機は全く受け付けようとしなない。

「速川中佐！」

深刻な響きを伴って耳に伝わるオペレーターの声。速川は逡巡した。が、すぐに我に返るように命じていた。

「豪和大尉のフィジカルコンディションに目を離すな、……実験は一時中止！」

背後の青春から、どことなく非難するかのような視線が送られた気がした。しかし、その気配はすぐに消えた。そうだ、ユウシロウの機体のデータは、まだこちらとリンクされている……。

例え実験が中断されたとしても、決してマツリは終わってはいないことを青春は知っていた。

清継は兄の常軌を逸した行為に次第に違和感を覚えるようになっていた。佐和子……。

石舞台の周辺に篝火の焰が灯され、次第に薄暗く青みを失っていく空を仰ぐ木立を異様な空気が包み込み始める。

神事という名目の元に行われる実験の舞。それは闇に突き動かされた豪和という業が古来、幾度も繰り返してきた行為だった。既に観測用の各機材やカメラは要所要所に配置され、豪和邸地下の情報センターや総研と繋がられたデータリンクも正常、あとは演者の登場を待つばかりだった。

それでも今になって清継は、自らの行いを疑問視する声を今さらのように心の最奥に聞いた。

そうだ、これは肉親を使ってまで、やらねばならぬことなのか？

しかし、そんな清継を背後から視つめる冷やかな眼差し——

清は一切の感情を排した心で周囲を圧迫していた。

“兄さん”

押し殺したような静寂が清継を押し包む。時折カチ、カチと響くサーバー音が彼を非情な現実に取り戻した。その現実、これが厳然とした定めであるかのように、ひたすら冷たく心突き放す。その時、おそらく彼を覆っていたのは限らない闇と絶望だったかもし

れない。それでも清継は、かろうじて残されていた理性で必死に考えを巡らせた。

“そうだ、父さん、父さんに——”

4 .

貴嶋からの連絡を受け、直ぐに鷹水は豪和の動きを改めて探った。
“くそ、やられた——佐和子！”

なぜ佐和子が連れ去られたのか、そんなことは既に解り切っていた。それよりも彼女を守りきることができなかった己自身の愚かさを呪った。やはり、ずっとそばにいたべきだった……。

しかし今、最優先で必要なのは、怒りや後悔よりも佐和子の居場所を突き止めることだ。

「貴嶋さん！何か、何か心当たりはありませんか？」

そう問われ、何がしか思い当たる節があったのか、一呼吸のあと貴嶋は弾かれるように答えた。

「はい、おそらく佐和子さんは石舞台に——英彦山の懷に抱かれたその場所にいるはずです」

「石舞台？」

一瞬の間のあと、すぐに返ってきたその答えによって、彼女が今自分のいる場所からそう遠くない所にいることが判った。

わかりました……！ 佐和子は、“娘さん”は、必ず私が取り返します。

その言葉を耳にすると、貴嶋は電話口に立ち尽くしたまま、声にならない嗚咽を漏らすのだった。

貴嶋からの電話を切ったあと、鷹水は早急に行動を開始した。

特自の実験中隊がTAの起動試験を行っている溪流沿いの場所は、彼が前日から現場の調査を始めてから程なくして判明した。英彦山周辺でダム建設が行われている場所は一つしかなかった。そこを改

めて洗い出すと妙な厳戒態勢を以て、その場所が登山道で封鎖されていたのだ。その名目を利用して豪和は……。

当然、この日の午後はこの地で日蝕が始まることから、山に登ろうとする人間は一人もいなかった、そのはずだが。それでも、その仮初の？ 闇？ に乗じて事を為そうとしている者たちがいた。そして、それを探ろうとする者たちも。

急ぎ車を再び発車させようとした瞬間、鷹水の携帯が鳴った。

「はい——……？ 貴方はっ」

一瞬の絶句のあと、彼は誰が自分の携帯に電話をかけてきたのかわかるのだった。

鏡の間で改めて目の前の女面と向き合う——その面は増髪おもてますかみというのだそうだ。

髪が乱れ、神が乗り移った狂気を表したその面は、確かに今の私自身に相応しいものかもしれない。精神の異様な昂揚、眉間に寄った皺……その激しさは高貴な女性であるにも関わらず、宿命的な狂気をその表情に表していた。

これを付ければユウシロウの元へ行けるのだろうか、私も。嵬であるユウシロウが垣間見ている世界。永遠の苦悩を繰り返す、その涯てに到る世界。けれど、私がそこへ行くのは他ならぬユウシロウを求めていることなのだ。そんなことは、もう分かりきったこと。

古の時を経て、この思いは何かを私の心で訴え続けている。そのことが、ここ筑紫へ来てはつきりと解った。

空知は、未だそんな私を傍らで静かに見守っていた。罪悪感とも哀惜とも取れぬ穏やかな眼差しで。程なくして遙か彼方から響いてくるような笛の音に身が強張り、もう戻れない合図のように私の身体を縛る。狩衣の装束に身を包み、その面を付ける。俄かに視界が狭まり、もしかしたらこれは……、ユウシロウが乗っているTAの視界なのかもしれない、ふとそう思った。

その中では、全ての現実が意味をなくす。そうしたら、もしかし

たら——そんなありもしない妄想に一時身を任せる。愛したい、愛し合いたい、もう一度……決して赦されぬ想い、だから。その想いは遙か昔、この地に散った少女の思いへと俄かに変容し、次第にすべてがその時の彼方に呑み込まれていく。

“先生……！”

ユウシロウは感じていた。もうすぐ彼女の元へ行けることを。

本当は自分が舞うはずだった……身代わり。身代わり？ 時を経て再現される奇妙な符合。そして今、それを決して許してはならないという激しい思いだけが、この身を動かしている。

“……佐和子、先生！”——いや、違う。

今こそ少女の願いに応えなければならぬ。その思いが彼自身を否応なしに駆り立てる。

今すぐ迎えに行く！……もう同じ過ちを繰り返してはいけない。

兄様、兄様……少女はずっと呼び続けていた。その彼女の想い。その一途な思いに一度たりとも答えようとしなかった者の代わりに、自分が。

刹也……、刹也……。それでも、自分を哀しげに見つめるその人の眸が今も語りかけようとする。その人は言っていた。沙耶を、……沙耶を。

守れなかった小さな命。応えてやることのできなかった、その思い。だから……？

しかし、今の彼には、本当の自分の気持ちを見定めることができなかった。

そして太陽は、まるでそれが一つの約束であったかのように、急速に光を失いつつあった。

*

鏡の間から出、橋掛かりを渡ると、そこは既に幽玄の世界だった。トクン、トクン……、早くも鼓動が待ちわびたかのように、軛くひきから解き放たれたように身体の中で脈動し始める。

ただ静かに摺り足で移動する。深い呼吸。身体の奥深くに確かな芯が生まれ、その核が重心を固定する。そう、それは決して迷いのない思い。構えの姿勢から、扇を手にした右手を前方に挙げるサシ、そして回転。

どの動きも予め、この身に刷り込まれたように違和感がなかった。ユウシロウが、あの日舞ったように——ただそれだけを念じ、心を無にする。

心を無にして舞い続けるうち、次第に私は自分が何ものであったのか思い出す。だから私は、彼ユウシロウと。いいえ。

思い出して、私を、思い出して……。ただ無心に願う。抱きしめて、私を。私の想いを。

その希ねがいを形にするように、もう一度、目の前に手を伸ばす。…

…ユウシロウ、刹也。

「被験者の心拍数、上昇し始めました！」

思わず眼前のモニターに身を乗り出す清継。その背後で一清が表情一つ変えず同様に石舞台を見つめている。

佐和子……。清継は次第に己を失っていく仕手の舞を見つめながら、やはり少なからずの後悔の念に激しく襲われていた。

父さん！ 父、乃三郎に連絡したことに、やはり一清は気付いているのだろうか。何事もないという無表情を貼り付かせた兄の顔を盗み見た。が、やはり何も感じ取れない。いつしか豪和という名の元と同じ目的に向かって邁進してきたはずが、それでもやはり清継には理解の及ばない所が一清には当然のように存在していた。

その罪過の重みにとうに気付いたのか、父乃三郎の思いは既にこの場所に兄とともになかった。

そして自分も……。このまま兄さんに付いていくことが、どんな深い悔恨をもたらすのか想像もつかない。

それでも——それでも清継は、究極には一清の張り巡らす呪縛から何人も逃げられぬことを、やはり知るのだった。

次第に光が失われてゆく。今にも泣き出しそうな、淡く僅かな青色を薄つすら滲ませる冬の空。

それでも深い山間にあつて、地上のどこよりも空に近い場所で……そんな錯覚さえ思わせる鬱蒼とした山々が神霊の磁場を放っているここでは、すべてが一幕の幻想のように感じられた。おそらく人間活動とは一切、切り離された宇宙の神秘が起こす仮初の闇が、次第に周囲を呑み込んで行こうとしていた。

その神の気まぐれが一時の刻の間断を生み出そうとしたとて、一体何の不思議があつただろうか。

“行かねばならない……”

ユウシロウは確かに感じていた。今度こそ自分が抱きしめなければ。そう、かの人はずっとそれを希^のんでいた。だから、初めて会った瞬間から、こんなにも――。

ためらいがちに触れた肌と肌。その狭間で感じていた思いは、遙か遠い時空の彼方からやってきたものだった。例えそれが嵬としての宿命を負った繋がりでしかなかったとしても。そうだ、嵬。嵬であつたからこそ出逢えた。その“哀しみ”に未だ捕らえられるしか術のない出逢いだったとしても。佐和、子……、

約束して、兄様。

その無垢な微笑みが心を締め付ける。少女は兄の願いがため、その身を葬送の棺へと投げ出す。一振りの短剣^{かたな}がその証拠だった。少女の血を吸ったそれは、ある高貴な女^{ひと}の命を救うため兄の手に握られていた。だが、畢竟それも、醜^{みにく}い政の道具としての存在でしかなかったことを貴姫の哀しみから彼は悟るのだった。

あに、さま。

すうっとユウシロウの瞳孔が縮まる。この地へ赴いてから何度か晒された悲しみと怨嗟の奔流が、今は別の思いを抱いて一筋の閃光となり、彼を包み込む。もはや機械的に動く手足同様、ユウシロウを懷に抱いた二足歩行型兵器は、その想いの塊となつて、ある一点を指した。

山間の溪流の断崖に穿たれた石の舞台。そこでは迫り来る薄闇に乘じて今まさに繰り広げられるであらう、因縁の宴を待ち侘び、監視する者達が人知れず犇いていた。ドクドクと高鳴る鼓動。心臓から送り込まれる血管の隅々まで、その血潮は哀しみに彩られた憎悪が満ち、今にも逆流していきそうだった。そう、遠い古の彼方へと何をしている……！

TAの視界越しに広がるその光景に、ユウシロウの鼓動がドクツと一際高鳴る。

まるで操り人形のように舞い続ける女仕手。その風に靡く長い髪には見覚えがあつた。

ここが何処なのかさえも、そして己自身さえ忘れ、ピンと張り詰めた氷の上で一心不乱に舞うような、その狂気の舞台で、それでも私にはそのことが解つた。

ユウシロウ！

それでも、私は舞うことをやめられなかった。すぐそばに夢にまで見た愛する人がいる、なのに磁石で縛り付けられたように、私は今自分が成していることをやめられなかった。ああ……、けれど、それが自分自身が選択したことなのだと改めて知る。私は身代わり。そうだ、それは他ならぬユウシロウのため。そのために、私は。

「……先生！」

やめろ、やめるんだ。その叫びが鼓膜の内側に木霊する。が、それは彼自身が叫んだのではなく、TAの機関砲が空を貫いた音だった。演習訓練用のマーカー弾は、しかし、それでも断崖絶壁の一端から孤を描いて放たれ、周囲の空気を圧する炸裂音と共に薄闇迫る虚空へ吸い込まれていった。

「TAがつ!？」

急遽モニターの一つに映し出された映像を見て、清継が絶句しながら席から立ち上がる。

「来たか……」

しかし一清は微動だにしていない。その落ち着き払った様子から、今さらながら清継は兄の思惑を知るのだった。

刻一刻と太陽は、その光が及ぶ範囲を急速に縮めていく。月の陰に呑み込まれる陽光。その瞬間、すべてが凍り付いた。

漆黒の闇に浮かび上がる光点。石舞台上、空の一点から?それは?は、やってきた。

一清の顔にいいよ浮かぶ不気味な嗤い。餓沙羅鬼——それが最早、伝承の上での御伽噺でないことは誰の目にも明らかだった。ちようど月の陰と重なり、その周囲に眩いコロナの白焰を発する「黒い太陽」……それは、まさにそこから地上へと伸びてきていた。

皆既日食。暗黒の太陽は、まるで人々を嘲笑うかのように、幻の舞台をそこに浮かび上がらせた。

ユウシロウ、来ないで……!

白い繭のような光に包まれた仕手。差し伸べた右手は、それでも最後の祈りを誰かに向けて解き放っているかのようにだった。

「被験者の心拍数、三〇〇を越えます!」

研究員のその声を背景に、清継はその場に立ち尽くしたまま、モニターと兄との間で交互に視線を彷徨わせる。

「……兄さん、ユウシロウはっ」

だが兄は絶対零度の嗤いを顔面に張り付かせたまま、こちらに振り向こうともしない。

「やつの……そうだ。ここからが、あいつの本領発揮というわけだ……」

無論、それは今や舞台上で対消滅の生成の場を発現させる人間発電機と化した実妹を見つめながら、しかし、それ以上の何かを期待する、その業に執り憑かれた兄の表情から窺えるのは、既に周囲の

言葉など耳には入っていないということだけだった。

ドクン、ドクン、ドクン……。

際限なくこめかみを押し続ける血流。緋い……、そう今やユウシロウの視界は真っ赤に染まっていた。

津波のように押し寄せる濁流のごとく、すべてが坂を転がり落ちるかのように暗転していく。

兄様……、兄様……、兄様——。

再び“その声”を聴く。既にその肉体は滅んだはずなのに、それでも新たな魂を得た少女の叫び。

私には、もう何も聞こえなかった。ただ、その愛を望んだ。その確かな想いだけに全てが呑み込まれていく。

あにさま。

「ゴ——！」

瞬間的にユウシロウは、そう命じていた。

弾かれたように飛び出したTAが、ほぼ垂直の断崖を駆け下りてゆく。アルムブラストの気化爆薬がクッションを作り、それでも神業としか思えぬ速さで獣のような、その黒いシルエットが薄闇を脱兎のごとく疾駆する。

だめ、ユウシロウ！

既に操り人形と化した身体は白焰の中で十字架に磔にされたように動かない。それでも私は必死に叫んでいた。

対消滅の光。それは確かにあの月から発せられていた。否、それは今眼前で繰り広げられる兎の舞との作用で生み出されたものだった。それは今、折しもの日蝕との相乗効果で何十倍にも増幅される。そして今、この場に兎が二人……。

その光景を上空から一閃のライトで照らし出しながら、飛来した一機のヘリが見つめていた。ヘリは一度だけ旋回すると、ホバリン

グしながら鳥のように断崖の上へと降り立った。

「お兄さま、先生！」

そのへりから弾かれるように一人の少女の影が飛び出した。それを追うようにして、どっしりとした体躯が駆け寄る。

「佐和子！ユウシロウ……」

老齡の枯木と化していた乃三郎の視界に、今まさに白い繭の中へ入っていかうとするTAのシルエットが映った。

「美鈴！」

乃三郎は、まさに崖から飛び出さんが勢いの娘の両腕を押さえた。
「お兄さま……せん、せ……い、……お姉さま」

半ば崩折れたまま、嗚咽を漏らす美鈴。彼女は何もかもを知ってしまった。そう、乃三郎と貴嶋宮司を通じて。

伊集院佐和子は豪和の家の娘、美鈴の実の姉であると。本当は乃三郎は、美鈴には生涯その秘密を告げるつもりはなかった。しかし、急遽貴嶋からの連絡を受け、事態は既に留まる処を知らぬ所にまで推移していることを悟った。一清……、そうだ。清継からの密告もあった。全ては長兄の独断で行われていることであるのだと。

それでも清継は、一見して兄に付き従っているのみの行いであるうと、豪和という宿業に囚われた、所詮は自身もその操り人形ではないことを知っていた。そうだ、それは既に乃三郎とて同じだった。

「餓沙羅鬼の焰……豪和、千年の悲願、か」

美鈴を押さえながら、呆然と呟く乃三郎。しかしユウシロウの搭乗したTAは、その軀くびきでさえ超越したかのように、その光の中へと手を伸ばす。

人口筋肉がぶるつと震える。一瞬、そのシルエットは光の中に消えたかのように見えた。しかし次の瞬間、くずおれた女仕手を両手にかき抱き、水飛沫を上げながら溪流を猛然とダッシュする姿に誰もが目を見張った。

その一部始終を鷹水と、そして朴も木立の間から瞠目していた。

互いがこの場で一堂に会しているとも知らず……いや、朴だけは知っていた。佐和子の保護者以上に彼にはその資格があることを。日蝕が始まってから、ほどなくして同時にその場に辿り着いた二人は、それでも、それがただの偶然ではないことに気付かなかった。シンボルと豪和、その目に見えない繋がり。だから、こうして双方がここへ導かれたということ。

「佐和子……！」

鷹水は、その四メートルを越す巨躯がしっかりと愛する者を抱く姿に安堵とも寂寥とも取れない思いに駆られるも、すぐにT Aが消えた叢林をじつと見据えた。ユウシロウ。同時に別の場所で眼前を見つめる視線にも気付かず。

あれが豪和の二足歩行型兵器か。朴は目の前の光景に絶句しつつ、メスが語っていたナダ・プロジェクトの根幹について瞬間、思い巡らせていた。まさか、あれが……！

全てを包み込むかに思えた巨大な光球も、仕手を喪った途端、急速にその光を失っていく。

「……総代が？ ふっ清継、あとはお前に任せる」

一清は事態の収束を見定めると、一人監視車両を出て行った。

第十章 ―紅の舞―（後書き）

CAST（想定含め）

豪和ユウシロウ／檜山修之

伊集院佐和子／篠原恵美

豪和乃三郎／小山武宏

豪和一清／高田祐司

豪和清継／速水奨

豪和青春／千葉一伸

豪和美鈴／こおろぎさとみ

空知検校／秋元羊介

鷹水誠司／森川智之

朴 基赫／大川透

メス／徳弘夏生

貴嶋紀仁／中博史

速川保／安井邦彦

池口洋介／岩永哲哉

貴嶋美命／高垣彩陽

本作はフィクションであり実際の団体その他とは一切関係ありません

第十一章 ― 零 ―

1 .

――それは、つかのまの再会。

けれど永遠とこしえとも思える時間を経て再び出逢った恋人たちのように、その逢瀬は確かな思いに満ちていた。

そこは巨大な鍾乳洞の中だった。永い時間をかけて大地が石灰岩と水滴の力で作り上げた自然の造形物トンネル。昼なお暗いその場所には無論、太陽の光は届かない。それでも日蝕の薄闇から、その只中へと踏み込んだ途端、微かな燐光に包まれ、その仄かな灯りに奥へ奥へと誘われる。

ポトン、ポトン……、不規則なリズムを刻むように時折、頭上を覆う岩盤の天蓋から透明な雫が零れ落ちる。

静謐。TAの駆動が辺りを壊してしまうのではないかと危ぶまれたが、それでも不思議とすべての物音が吸い込まれていくように静かで、そこは思いのほか頑強に出来ていた。近辺を流れる溪流の水音が遠くから響いてくる。しかし、ここには確かな静寂が満ち満ちていた。

「先生、佐和子先生……！」

ユウシロウはTAから降りると、その懷の中で気を失ったままの私に呼びかけた。

操り人形パペットの軀から解き放たれ、それでも未だ悪夢の中を彷徨っているばかりの閉じられたままの瞼。

ピチャン、その蒼白の頬を頭上から落ちた雫が瞬間叩き、う……ん……、そう呻いて、その冷たさに突然眠りから覚まさせられる。

「先生……、」

繰り返すユウシロウは私に呼びかけた。その必死の表情が次第に開いていく私の瞳孔に映る。

一体何度夢に見たかわからない、その柔らかく澄んだ瞳の色。懐かしい――、思わず私は遠い忘却の彼方から戻った人のように目の前に屈み込む彼の表情を瞬きしながら見つめていた。

「……ユウシ、ロウ？」

とても心配そうな眼差しを向ける彼が、本当に目の前にいるのか未だに私には信じられなかった。どうして？

ここはやはり嵬に縁の地なのだろうか。そんなことを思うより先にまじまじと彼の眸を見つめる。やっと、やっと逢えた、ユウシロウ。

けれど次第に朦朧としていた意識が戻るにつれ、私はおそらく舞の直前まで自らの心を苛んでいた彼にまつわる、ある記憶を思い出して苦しげに眉根を歪めた。そのつかのまの幸福感は、狂おしい現実の前に脆くも崩れ去る。

「ユウシロウ、私……私は……」

「先生？」

突然表情を曇らせ、目に涙を浮かべる私を見てユウシロウは狼狽した。ごめんなさい、ただそれだけを繰り返して嗚咽する。折角こうして再び出逢えたのに――、それなのに。

寒い。薄い和装の衣を通して冷気が忍び寄ってくる。私はその寒ささえ忘れ、けれどさつきから身体の震えが止まらなかった。

思えば私が自ら進んで一清の言葉に従い、舞を舞ったのは、勿論ユウシロウを豪和の業から解き放つためでもあった。が、もしかしたらそれだけではない思いも心のどこかにあったのかもしれない。

罪の呵責……本来ならば、私たちは互いに想いを交わすべき相手ではなかった。いや、それはもつと以前からあった一つの認識ではあった。曲がりなりにも教師と生徒だった頃の。それでも……、私たちは、私はこの思いを停められなかった。

「ユウシロウ、ごめんなさい」

なぜ……、なぜなんだ、先生？ ユウシロウは思わず反射的にそう問いかけた。

久しぶりに彼と再会できたのもつかのま、私はその？真実？を知ってしまった……。心が、痛い。

ユウシロウは、そんな私の潤んだ瞳を凝つと見詰め、けれど私は彼と見つめあっているそのことにさえ罪の意識を感じて、思わずユウシロウから視線を逸らす。

「先生？」そんな普通ではない私の様子に何か感じ取ったのか、ユウシロウはさらに互いの距離を縮めようとした。そつと手を伸ばし、震えている私の指先を包み込むように握り締めようとする。

「ダメ！」

次の瞬間、私はそう叫んで、己の身を引こうとした。……先生？だめ、だめなの、ユウシロウ。私に近寄っては駄目。けれど、そう思えば思うほど眸から涙があふれ、徒に頬を伝っていく。

そんな私を悲痛な表情で見詰めるユウシロウ。そんな、そんな顔しないで……。だのに彼を愛しいと思う気持ちは、際限なく胸にあふれてくる。その度に襲い来る胸の痛みに私は、ただただ一人泣き濡れるしかなかった。

「先生――、」

ふわり、私の頬に彼の髪が触れる。突然ギュツと強く抱き締められ、私は息を呑んだ。

いつかも、こんな風に彼に抱き締められた。温かい彼の体温。けれど、その時より明らかに抱擁に込める腕の力が違う。ユウシロウはきつく目を閉じ、ただ黙ったまま逃がすまいとするかのように、私をしつかりと腕の中に閉じ込めた。彼の胸の鼓動が直接肌に伝わってくる。そう……。あの時も、こんな風に。

「ダメ！やめてユウシロウ！」

思わず私はハツとすると彼の胸に両手をついて、その温もりを突っ撥ねようとした。ユウシロウは驚いたように呆然と私を見つめる。

「ダメ……ダメなの、ユウシロウ……私たちは、」

その先は溢れ出す涙に遮られて明瞭な言葉にできなかった。でも、でも言わなければ。

——私たちは、姉弟^{きょうだい}だから。

その言葉を聞いてユウシロウは見るも無残に愕然とした。出逢ってから、これまでのすべてが崩れ去っていくような。

「私の実母^{はは}は筑紫舞の宗家、貴嶋満千留。そして彼女とあなたの父親、豪和乃三郎との間に生まれたのが、私……」

だから私たちは。思いも寄らぬ告白。先生が、実の姉……そんな、ばかな。

一清からもたらされた真実とはいえ、私には心当たりのあることがないとは言えなかった。なぜ私は一度覚えただけのあの舞をあそこまでスムーズに舞うことができたのか。むしろそれが酷く自然なことに思えたのが不思議だった。そして貴嶋神社やその宮司である貴嶋氏にも不思議な愛着や言葉にできない懐かしさを感じた。

「……だから、あなたのお兄さん、豪和一清は私にあなたと同じ余流の能楽を舞うことを——いいえ、これは私自身の申し出でもあったの」

私は、もうあなたを……、『ユウシロウ、自由になって』その言葉がユウシロウの胸に再び去来した。

それは、ここへ来るまで彼自身の胸に刻み付けられ、守り神のように大切にしまってきた人の言葉だった。その言葉があつたからこそ自分は……、そうだ、今度は自分が。心に固く誓った何かが彼を動かした。

「佐和子——、」

再びギュツと強く抱き締められ、今度こそ私は酷く躊躇した。有無を言わせぬ抱擁。さっきとは比べ物にならない力で強く抱き締められ、思わず身を固くする。ダメ、はなして……。

けれどユウシロウは私に廻っていた腕の力をほんの一瞬少しだけ緩めると、深い眼差しで私を凝と見つめた。目と目が合わせ鏡のように永遠とも思える時空を繋ぎ、眩暈にも似た感覚に襲われる。その瞬間、時間が停まった気がした。

「ユウシロウ」

言葉もなく唇を奪われ、そのまま私はその場に倒れ込んだ。ユウシロウは熱に浮かされた夢遊病者のように私の肌に口付けを落とすていく。

いや……だめっ……、理性ではそう反論するのに、ユウシロウの唇の感触が素肌を滑る度に吐息とともに甘い声が漏れる。好きだ……好きだ……、繰り返しその言葉が無言の彼の抱擁から聞こえてくるような気がして、甘美な痺れに襲われていく。

朦朧としたまま、肌蹴られた着物と乱れた髪もそのままに、覆い被さってくる熱い愛撫に身を任せ、嵐のようなその一時を耐え続けた。以前の彼とは明らかに違う。しばらく会えずにいた時間の隙間を埋めるように、いいえ。

——そう筑紫へ来て初めて解った。

あにさま。

本当は、そう強く望んでいた。兄様……。わたしは頭がおかしくなんか、ない。

でも、兄様の言葉は絶対だった。だから、わたしは。

姉姉さまとあなたのことを、ずっとみていた。誰も知らない物陰から。

ほんとうは、姉姉さまにとられたくなかった。あなたを。

でも、でももう遅いの……

わたしには、あにさましか、いない。

覆い被さるユウシロウの頭髮を抱え、私は満足げに目を閉じる……。

このまま、時が停まってしまえばよかった。まるで赤子に差し出すように吸い付かれるまま乳房を肌蹴け、うわ言のように彼の名を呼ぶ。

「あつ……あ、あ……っ、ユウシロウ、ユウシロウ！」

いつかしたみたいに。ダメ、ダメ——、微かに意識の表層で、そう叫んでいる自分がいる。でも変だ。まるで金縛りにあつたように身体が動かない。朦朧とした意識の中で、それが当然の行いのように私たちは再び口付けを交わす。何度も何度も、媚薬に酔い痴れるように。誰も知らないこの場所に永久に二人だけで閉じ込められてしまったみたい。

姉と弟——本当に？ そんなはず、だって私たちはこうしてここで……、その先を脳裏に思い浮かべて血が凍った。それなのに、やめられないのだ。どうして？ 微熱に浮かされたまま、そう問いかける。

ユウシロウが好き。ただそれだけのこと。

嵬だから……？ そうかもしれない。けれど私は、そんなことを思う以前から。

出会った瞬間に？ それもずっと遠い過去から決められていたことなの？

そんな押し問答が頭の中で続けられている。わからない、でもただ一つ真実なのは、この気持ちだけ……。

彼と心も身体も繋がったまま、いつそのこと、このまま。

そのことを想像して、瞬間目が覚めた。

「——ダメ！」

白昼夢から醒めるようにハツとするユウシロウ。その眸に光彩が戻る。何のために私は。

「ごめん、ごめんなさい……ユウシロウ」

私はそのまま半身を起こすとユウシロウを掻き抱いた。愛してる

……、ギョツときつく優しく抱き締める。

「ねえユウシロウ——私、あなたと出会えてよかった、本当に心からそう思っているの」

そう、初めて口に出して告げた。ユウシロウが好き。そのことは以前も直接彼に囁いたけれど。

「だから例えあなたが私の実の弟だったとしても、この気持ちは変わらないわ」

「佐和子、先生……」

おかしなユウシロウ。もう私、あなたの先生でも何でもないのに。そして再び抱擁。

だのにまた、私は不吉な感覚が襲おうとしているのを感じて身を震わせた。あたたかい、どこまでもあたたかで大切な温もりに包まれながら。

＊

その日北九州地方に訪れた日蝕は、数分間の皆既状態を経て次第に収束へと向かった。

TA小隊は既に活動限界を越え、各人がその場で待機、非常用トランスポーターが回収に向かうのを持っばかりだった。しかし、初冬の薄い日差しがようやく戻ったのもつかの間、夕闇迫る山間部の一角に停められた指揮車両内には重い沈黙が蟠^{わたかま}っていた。

「一体、何だったんでしょうね、さっきの反応は……？」

固唾を呑み、訝しげに何度もモニター画面上を見つめるシステムオペレーターの一人。機能相転移、当然そうであることを知っている青春以外は、それがこれまでに何度か起こっていた異常兆候とは明らかに比べ物にならないものであるということ以外、事態を正確に把握することすら出来なかった。

豪和大尉——。

突然隊を乱し、行方不明となったユウシロウTA。生命維持など

フィジカルコンディションのデータリンクは未だ健在であることを示していたが、彼の突然の不在が意味する事実と今回の北九州での実験演習の是非を問うことが、全くの無関係ではないことを速川は実感として肌で捉えていた。

「豪和さん、あなた方は我々にやはり何かを隠しているのではないですか？」

重い沈黙を破り、単刀直入に鋭く青春に訊ねるも、相手が易々と真実を語るとは到底思えない。

「弟のことなら何も心配は要りません。既に場所は特定されていますから」

特定？ 一体何を根拠に――だが張り付いたような無表情を浮かべる青春から窺い知れることなど何もなく、諦念とも思えるような深い敗北感に己を沈めるほか、何一つ方法などなかった。

「ユウシロウ……佐和子、」

たった今眼前で繰り広げられた一幕を記録したモニター画面を前に清継は一人呻いた。長兄の一清から後の状況管理を任せられ、しかし一向にその場から動くことができない。夕刻を迎え、未だ揺らめく松明の炎は、本物の闇が辺りを侵蝕する眼前の溪流に穿たれた石舞台を何事もなかったかのように浮かび上がらせていた。

彼の仮定する理論が正しければ、一度あの光に触れたものは全て消滅するはずだった。しかし、石舞台に踊り出たユウシロウ機は無事そこから脱出した。その光球の原因でもある佐和子を連れて。

「かつてこの地で卑弥呼を葬った皆既日蝕は、同時に邪馬台国の復活をも意味していた――、」

もはや現実とは伝承の一部と化しつつあった。餓沙羅鬼の焰。だが、それが何を意味するのか、その現実を目の前に目撃した清継自身でさえ、全てを知りえることは叶わなかった。

「ユウシロウお兄さま……、お姉さま……」

未だその場に崩折れる美鈴を前に乃三郎は語る言葉を持たなかった。

やはり自分の判断は間違っていたのか。以前の彼には、美鈴に事実を告げることは決して得策とは思えなかった。しかし、そう考えることが、何も知らない方が幸せであると断定することが、果たして真実なのか。美鈴とて豪和の一員。そうであるならば、徒にそこから追いやり、全てを教えぬままにしていることの方が、よほど残酷ではないのか。

それが証拠に、何かの予兆を感じ取った美鈴に乃三郎は懇願された。そして清継からの報告もあり、美鈴を伴い、ここを訪れたのは、彼ら豪和の宿業が何度か繰り返してきた悲劇を今再び、この地に呼び起こしてはならないと悟ったからだった。

やはりあれは間違いだったのか——ここは古の豪和の源^{いにしえ}。我知らず導かれるようにして、そして出逢った一人の女性。一見して明朗快活でありながら、複雑な表情を見せるここ筑紫の風土と一致する風情を筑紫舞は醸し出していた。余流へと続く神楽舞。その凜とした佇まい。それに連なるものが、結局は乃三郎を惹き付けることになってしまった。

貴嶋満千留。彼は自らの母体である縁^{えにし}を見つけた。そして今再び繰り返される悲哀。所詮は傀儡の一族なのだ。それに抗うことは自らを否定すること……そうであることを知りながら、その過去から続く因縁とともにありながら、いつかは棄て去ることを選ばねば未来はないことを、泣き崩れる娘の姿に今一度心に刻むのだった。

「お父さま、お姉さまは……」

振り返り、乃三郎の気配に気付くと美鈴は尋ねた。

「お姉さまは、ユウシロウお兄さまとのことを……？」知っているのだろうか。

それはそのまま美鈴の心と同義だった。心から慕っている兄。そして愛してしまった弟。そうではない、すぐにでも、そう美鈴に告げるべきだったのか。だが、そうすることでユウシロウとの絆が断

絶するのではと、美鈴自身の本心を知りえぬ乃三郎には決定しかねることもあった。

「大丈夫だ、佐和子はユウシロウが」

ただ、いたいけな末娘である美鈴を安心させることでしか、自らを鎮めることが出来なかった。

2 .

日蝕が起こったその時間帯、月面の監視衛星が捉えた異常なバーストが観測された事実をメスはエージェントからの報告で受けていた。まさに彼がシンボル日本支部にて事実収集に当たっていた頃合であった。相変わらず朴からの報告は途絶えたままだ。もしかしたら彼自身、筑紫舞とその縁に引かれた存在に接触しすぎたのかもしれない。

「神依りの神楽舞、^{ミハル}瞳——、」

インヴィテーターである彼女も、やはり同様のバーストを感じていたのだろうか。今現在はドイツにて静養の日々を送る、その少女に思いを馳せる。ふと彼女が謡った旋律が今も鼓膜にこびりついて離れない。とりあえず来日したものの、それでもメスは特に自分が福岡へ訪問する必要はないと考えていた。

そこには朴がいる……彼ならば、必ず何かを見つけてくるはずだ。それが直接、閉ざされた瞳の心を開く鍵となるとは俄かには考えられなかったが、それでもなぜかメスは彼を信じていた。

日本というキーワードが常に彼らの周辺に集まろうとする。日本の一子企業である豪和と特自が開発しているという二足歩行型兵器の件もだが、必ず日本というこの国に全ての謎が隠されている。そうとまで思える何かがあるのだ。

過去と未来が交差する国——。

そして卑弥呼の伝説も、この国の過去のひとつであった。巫女、ナダの民。インヴィテーター。

その卑弥呼が没したという北九州は筑紫地方に今も存在する筑紫舞。

はたして朴は、一体どのような報告をもたらしてくれるのだろうか。

“マツリ”は終わった……、しかし鷹水には、決してそうだとは思えなかった。

ユウシロウとともに消えた佐和子。事実を確認したわけではないが、あの二足歩行型兵器に搭乗しているのがユウシロウであると、鷹水は直感で察していた。だからこそ、こうして半ば安堵した気持ちで豪和が次に仕掛けようとしている何がしかに注意を払うことができた。いや、正確には豪和一清——豪和長男であり、豪和の企業活動の一片を担うその存在が、実は全ての黒幕であると鷹水は既にある筋から知り得ていた。

佐和子の正確な居場所を教えてくれたのは、あの時彼の携帯に電話をかけてきた、ある人物だった。例え時前の調査と貴嶋宮司からおおよその位置を確認していたとはいえ、でなければ到底、彼は場所を特定し、侵入経路を確保することなど出来なかっただろう。

朴パク基キ赫ヒョク。さすがの鷹水も驚かざるを得なかった。なぜ彼が自分の携帯番号を知っていたのか、それにも増して驚愕したのは、彼が在籍しているという、ある組織についてだった。朴自身は特にそれと匂わせるものは何も語ってはいなかったが、それでも彼には直感でそれがシンボルであると解った。

シンボルが最近この北九州に潜伏していることは、鷹水も知っていた。何よりその一件があったからこそ彼らの行動が阻まれていたのだが、特自の北九州入りとともに状況は一変した。やはりシンボルも豪和の二足歩行型兵器について事実上探りを入れていたのだろうか。

無論、朴について、それ以上詮索することはしなかった。今必要なのは、そのことではない。そんなことより――、

そうだ、佐和子とユウシロウを護らねばならない。俺たちには武器がある。それは、ともすれば現在の日本を転覆させかけない諸刃の刃となるだろうが、もうそんなことは言っていられないのかもしれない。そのために冒す危険なら喜んで被ってやるさ。

シンボルの真の目的がどこにあるのか、それは定かではないが、それでも彼は信じていることができるような気がした。鷹水同様、おそらくはこの日本という国を愛しているからこそ、多分その行動であるような気がした。日本を愛している……そうだったのか。それは下手な愛国心よりも、もっと身近な感情だったのかもしれない。そう、最も身近に感じる、愛する者を守るのと同様に。

*

もつずっと、二人でこうしているような気がする。

ユウシロウとともに、この鍾乳洞で救援を待っている間、私たちは急ごしらえの焚き火の前でじっとしていた。夕刻を迎え、辺りに響くのは時折滴る水音と焚き火の焰が爆ぜる音だけ。TAの活動限界はとくに過ぎてしまっていたので、こうして二人して救援を待つほかなかった。

そもそも、どうしてユウシロウがこの鍾乳洞にやって来たのか、それは彼自身かららないのだという。ただ何かに導かれるように私を伴いTAを操縦した。あの状況下では無理もないだろうが、少なからず通常の状態ではなかったことにも左右されたのだろうか。幸い非常用の僅かながらの食料と眼前に広がっている地下水脈による小さな地底湖から水分の補給にも支障はなかった。確かに気温は低めではあるものの雨風は十分防げそうだ。

ずっと黙っているユウシロウの隣に座り、私は目の前で揺らぐ焰を見つめていた。

こうしていると、何だかあの時のことを思い出してしまふ。二人で豪和から逃げ出して、そして。

つと、再び涙が頬を伝い、膝の上に顔を埋めてしまう。

「……本当に、姉さんだったのか」

ふと呟くユウシロウに顔を上げる。さっきのことが嘘だったように訥々としたその言葉が、殊更に真実の残酷さを強調させる。

違う、そうじゃない、本当ならそう信じたかった。でも……。

「あなたと同じ舞を舞って、あなたの気持ちをもっと解ったような気がする……そのことは、すごく嬉しかった」

半ば泣き顔のまま笑ってみせる。そんな私を見て再び気持ちが昂ぶってしまいそうになりながら、それでもユウシロウは優しく私の髪を撫でてくれた。

「もう二度と先生にそんなことはさせない、だから」

佐和子、そう呼ぶことさえユウシロウは、どこか躊躇っているように見えた。だからといって当然、姉として接することなど。すべてがあまりに突然すぎた。二人の最初の出会いからして、すべてが先生、そのための諸々に、とりあえず彼が何とか対応できる呼び方。私はそれでもよかった。そう彼が側にいてくれるなら……。

お願いだから、もう泣かないで。無言で見つめる彼の心が、そう言っていた。

「……時々、そう時々夢を見るの。大昔、小さな女の子の私が草原でいつも泣いている。そして、いつもそんな私を慰めてくれる人がいて、」

その人はユウシロウ、あなたにそっくりで。

「でも、あなたには心に誓った女性ひとがいるの。幼い私にはどうすることもできなくて、それでもある時、私の兄さんが――、」

そこまで言いかけて私は絶句する。どうして今まで気付かなかつたんだろう。その兄が一清そっくりだということに。ぞっとした表情のまま、黙りこくってしまう私にユウシロウが声を掛ける。

「……どうした？」

「怖い」

そう呟いて自分の両腕を抱く。自分が兄には逆らえない、そう実

感したことと一清に命じられ、余流の舞を舞ったことが私の中で交錯する。

もしかしたら、私はずっと兄である一清に拘束され続けてきたのかもしれない。

「兄さん、総代が来たって本当なのか？」

そちらの状況を確認するために連絡を取った青春に一清は何事もないという風に嗤った。

『ああ、そうだ。——実験の神事？ まだ終わってはいないさ。ユウシロウも、それに佐和子もまだいるんだからな、』

通話を切った後、青春は兄がまだ自分の知らない何かを隠しているのではないかと感じ、絶句した。

＊

以前、とあるニュース番組の映像でその舞を見たことがあった。

例えば、それが美鈴とこの筑紫地方を繋ぐ不思議な縁のはじまりであったのかもしれない。——とても、とても似ている。お兄さまの舞と。決して直に兄の舞を見る機会があるわけではなかったのに、美鈴には、その空気がユウシロウが醸し出す緊張感のようなものにとっても酷似していると感じられたのだ。鏡の間で察したそれは、面を付けた兄の姿は、どこかこの世のものではないような気がした。

ここから出て橋掛かりを渡り、舞台に出た瞬間、その物語は幻から現へと立ち現れる。そして、ふわりと鬘を揺らし、面を付けたユウシロウが面を上げる。美鈴の想像の中で舞っていたユウシロウの舞が、そこにはあった。

——本当に、鬼哭石の郷の石舞台にそっくり。

そこはまるで豪和の記憶そのものが、遠く離れたこの場所に過去の時間ともども据え付けられたように、何もかもが酷似していた。……いいえ、そうじゃない。それでも美鈴にも、ここが豪和にとっ

て特別な場所であることが感じられた。どうしてそんなことが分かるんだろ。美鈴にも解らなかった。鬼という血筋を超えた血筋が、どんなものであるのか今の美鈴には想像すらできなかった。

「お姉さま……ユウシロウお兄さま……」

二人の間に流れるものと同じものを、以前から美鈴は自身の内に感じていた。だからきつと私はお姉さまのことを……、今さらながら美鈴は実の姉であつた佐和子に哀しいほどの共感を覚える自分自身を実感していた。

今さらのことでありながら、事の詳細を現場の責任者である清継から訊ねるために、総代としてここへやって来た、その本来の務めを果たさねばならなかった。しかし乃三郎には、この場所でその権威を行使することに最初から幾許かの躊躇いがあつた。そうだ、ここ筑紫での出逢いが、そもその発端であつたのだから。

ただ美鈴の思い、そして自らの子の親としての思いが、重い腰を上げさせた。否、いかねばならなかった。全ての宿縁のはじまりと決着を付けるためにも。

「TAの実験と餓沙羅鬼の神事——その二つを同時に執り行つ。北九州での日蝕のこの日を兄さんは狙っていたのかもしれない」

未だモニター前から腰を上げぬまま、清継が重い口を開く。父さん……！　しかし、突然立ち上がり振り返った清継の憔悴しきった眸が乃三郎を貫く。

「佐和子がユウシロウと同じ鬼であると、いつから知っていたんだ！」

豪和総代とその豪和の神事と称した実験を行う現場責任者としてではなく、父と子として今二人は向き合っていた。

そう、すべては彼女がユウシロウの教師として豪和の家に足を踏み入れた日から。いや、彼女が生まれた瞬間から、それは予想できたことだったのかもしれない。

それでも乃三郎には拒むことはできなかった。もう一人の実の娘

が豪和との絆を取り戻そうとすることを。そして父を詰る清継自身でさえ、長兄である一清の野心に準ずることを決して拒まなかった事実を彼自身、どうすることもできなかった。

業、か……。すべてが豪和の者として生きる業へと辿り着く。しかし、ユウシロウだけはそうではない。そのことをきつと佐和子は伝えたかったのかもしれない。

取り急ぎ特自の指揮車両を離れ、夕闇迫る中、清春は清継と乃三郎の待つ石舞台へと向かった。

未だ豪和に疑念を抱いたままの速川中佐は各T Aパイロットの回収を急がせていた。たいした装備もなく、底冷えするこの山間の闇夜に彼らを置き去りにするわけにはいかない。しかし、未だユウシロウは消息を絶ったままだった。生命維持のデータリンクだけでは正確な場所の特定は計れなかった。だが清春はその居場所を知っているという。一体、豪和大尉は何処へ向かったというのだ。そもそのこのT A演習からして謎だらけだったのだが、その全ての回答を導くものが案外ユウシロウ自身にあるのかもしれないと、再び速川の勘が告げていた。

日蝕の薄闇のさなか起きた各隊員達の混乱。ようやく繋がった回線に向かって速川は呼びかけていた。

「大丈夫だ。我々はT Aの回収が終わるまで、この場に待機している。お前たちをこのまま山中に置き去りにしたりなんかしない」

半ば冗談めいたことでも言わなければ、突然不可解な事態に見舞われた隊員たちの心を宥めることはできなかった。

ユウシロウ機が突然消息を絶ってからしばらくして、各T Aが異常な動きを見せたのだ。おそらくは例のごとくユウシロウT Aに反応しての極度の反応係数だったのだろうが、その突然の機能上昇に各パイロット達は呼吸、脈拍ともに追従できず、軽度のパニック障害に陥っていた。そしてそのまま稼動限界が訪れ、機能停止。

このままでは、豪和大尉自身に事の詳細を訊かねばならなくなる

な……。

他の隊員たちへの士気に関る、そう表面では考えながらも、もつと別の思惑が水面下で蠢いていることを速川はどうしても胸中で否定することができなかった。

「豪和大尉……一体どうしたって言うんだ」

池口は指揮車両との通信を切った後、コクピットの静寂の中で一人ごちた。

あの時は本当にどうかしまったのかと思っただけ。日蝕の始まるさなか、一人隊を離れていくユウシロウ機。その映像が池口の脳裏に繰り返し映されていた。何とかというか酷く切迫した空気を感じた。それ以上にその時の池口は突然動揺し始めた機体に全く付いていけず我を失っていたのであったが。

「たたくアイツ、本当に……」TAの内部は時折監獄のようだと感じる瞬間がある、それはもしかしたらユウシロウを閉じ込めるためだけに作られた空間だったのかもしれない。彼を見る池口の心はいつでも晴れなかった。

「それじゃあ、兄さんが向かったのは……」

「そうだ、おそらくはユウシロウたちのいる鍾乳洞だろう」

程なくして訪れた清春は絶句した。時前に一清からユウシロウの居場所は分かっていると訊かされていたものの、改めて乃三郎の口から、そこに何かがあるのか知らされた瞬間には言葉を喪った。

「そう言えば聞いたことがある……古い豪和の縁起、その古文書に筑紫の地に骨鬼くがいが眠っていると」

卑弥呼が没した際、その眠りが醒めされたのどうかは定かではないが、少なくとも日蝕の時を堺にその記述が増えている。大学時代に偶然それを見つけ、興味を持ったことを清継は思い出した。

「一清兄さんは、まだ終わりじゃないと言っていた」

清春の耳に未だこびりつく、半ば狂気を秘めたその兄の声色。

特自から救出隊が派遣されるよりも早く、そのもう一つの悲劇が

再現されるなどと、それでも本当は皆、信じたくはなかった。いや……おそらくは一清は、そんな弟たちを鼻で笑っているのかもしれない。今さら怖気づいたのか、と。

乃三郎でさえ一清にしてみれば豪和総代としての資格など、とうに喪っているようなものかもしれない。だが、それが人としての真実なのか。既に一清以外の者たちは、その「柔な」人間性に未だ立ち返ることができていた。それが豪和の者として、よいことなのか悪いことなのかは差し置いても。

まだ手遅れではない……。しかし、乃三郎はそう感じていた。

嵬——そんなものが、この世に存在しているなんて……。改めて美鈴は、さっきまで目にしていた怖ろしい光景に視界を阻まれていた。

「大丈夫だ、美鈴。佐和子は、きっとユウシロウが」

既に辺りには濃い闇夜が忍び寄って来ている。自分の羽織ついていた上着を美鈴の肩にかけ、乃三郎はそつとその華奢な肩先を両手で包み込んだ。

以前も同じように美鈴を励ました気がする。佐和子がユウシロウを連れて豪和から逃げた時。その時はまだ美鈴は無垢な魂の塊だった。そう、ただユウシロウを恋い慕うだけの。それでも今はそれが少しかだけ違っていた。兄と姉。そして嵬……。

どうして、そんなことが。美鈴の心は哀しみに張り裂けんばかりだった。きつとお姉さまもお兄さまも、ただお互いを心から想っていただけだったのに。ユウシロウお兄さまは、きつとお兄さまは、お姉さまのことを諦めたりなんかしない。

どうしてか、美鈴にはそう心から思えた。それは心から兄を慕う彼女の願いでもあった。

「クガイ……」

それは唯一つの幻のようだった。その囁きが示すもの、それ自体が命を持った被造物のように、かの少女の唇を狂おしく震わせるのだった。

——クガイ！

その叫びを合図に瞳はがたがたと身を軋ませ、自身を両腕で強く掻き抱いた。その後、空中に差し伸べられた両の手は、明らかに誰かの温もりを求めていた。

メスはその時、日本におり、少女の身に生じた異変を一切知らなかった。

おそらくそれは古来、豪和の護り神だったのかもしれない。いや、むしろ祟り神とでも言った方が正しいのか……。一清が空知を伴い、この筑紫地方を訪れたのは、“その存在”をこの目で確かめるためだった。たしかに空知は知っていた。どこに“其れ”が隠されているのかを。そして恐らくはその狂気こそが餓沙羅の舞と同等の、いやそれ以上の地平へと鬼の魂を誘うことが出来るのだと。

TAの駆動系に使用されているマイル1。それこそが、このオリジナルと拮抗することのできる現代の鬼の手だった。——そして今ここに眠る古の神。

「鬼哭石きなしの郷の御蔵、そして京の祠……それらとは似て非なるもの。それでもこの一体が此処にあることが、ここが鬼の懐であることの証」

ゆらゆらと燃え盛る松明の灯りに仏像のような空知の表情が浮かび上がる。物音一つしない洞穴内で、その焰の爆ぜる音だけが異様に生々しく響いた。

「……だからこそユウシロウと佐和子は、ここへ来た。その血が導くものこそが己の真実であると知っているからか」

一清は一人ほくそ笑む。傀儡とはよく言ったものだ。空知は己が運命を悟った従順な人形のように、唯黙々と一清に従った。その無

常の心はしかし、水面にいつしか清かなる小波が立つことを待っていた。みなも さざなみ

一清はそのことを知ってか知らずか、空知に向き直る。

「空知検校、今一度我が身に鬼の舞を御教授願おうとしよう……」
無論、一清は鬼ではなかった。その苦渋を滲ませた全てが今の彼自身を駆り立てている。……狂気。そうだ、狂気こそが真の恐怖を誘う。そのための贅は既に用意されている。

クツクツと嗤いを堪える一清の脳裏には、既に全ての映像が見えていた。鬼神の目前で抱き合う二人。巫女の恍惚こそが真に餓沙羅鬼を仰ぐ最高の呼び水となる。

＊

TAはずっと眠っていた。先程まで信じられない潤滑な動きを見せたその駆動系も今はただ静寂のさなかに沈むだけだった。

「まるで生きているみたい……、アナタがユウシロウと一緒に私をここまで運んでくれたのね」

私はその巨軀に手を触れながら幻のように呟いた。そう、生きている。自分がTAと一体となることで……確かに何かが目覚める。ふと振り向くと俯くユウシロウが微かに震えているような気がした。あなたと血が繋がっていたこと、喜んではいけないことなのかしら？ そう思う自分がどこかしら正気を失っていることは承知の上だった。それでも。

「……それでも私は、あなたと出会えたことが奇跡に思えるの」
ぽつりと置くようなその言葉に、再び二人の眼差しが重なる。もう何も要らない……、そう思った途端、唐突な眠気に襲われ、私はふつとユウシロウの肩に半身を傾けた。

眠いの、ものすごく……眠い。

「佐和子先生……？」

いずれ此処の火種は尽きる。そうならば救護班が居場所を付き留める以前に自分たちは凍え死んでしまっただろう。そう思うとユウシロウは意を決して佐和子を抱き上げるとT Aを残し、洞穴の奥へと向かった。

本来ならば場所を動くことは得策ではない。しかし……、しかし？ いや、もつと違う理由がある気がする。なぜなんだ。なぜ、この先に何かがあると思う？

まるで灯火に吸い寄せられる蛾のようだと思った。“其処”へ行けば、俺たちは本当に一つになれる。そう、決してもう過去の過ちに傷つくことはない。悔やむことなどないのだ。

先生は俺のものだ……！ なぜ自分がそうまで強固に思うのか、ユウシロウ自身定かではなかった。ただ……、過去の絆のため取り零してしまった命があることが、気づかぬうちに彼自身の深い悔恨となっていた。

唯々、嬉しい……その幸福そうに目を閉じる少女の寝顔が、今目の前で眠る人の面影と重なる。ただその想いに応えることこそが今の彼自身の使命だった。使命？ 違う、そうじゃない。

俺は、先生が……先生のことが……。しかし、その先は苦しげに閉じられた瞼の奥に一つの熱となって執拗に蟠るしかなかった。

愛してる、自分を愛していると言ってくれた女性^{ひと}。その全てを捧げておかまわれないと言ってくれた、そのひと。何もかも忘れて抱きしめたい。ただ、その想いの塊となつて！

それがさっきまでの自分。そして恐らく再びその狂おしい激情に身を晒さなければならない、その瞬間をこれからユウシロウは迎えないければならなかった。

耐えることなどない……、「我慢など、するな」

奥へ奥へと誘われ、いつしかその朽ちかけた祠にユウシロウは辿り着いた。そして見た。その幾年^{いくとせ}の眠りを今まさに覚まさんとする巨神の塊を。

さつきから呼んでいたのは、お前だったのか。そう呆然と得心するユウシロウの腕かいなに抱かれた私の臉が微かに動く。

だが、その陰で本当に自分を呼んでいたのは“兄”である一清であつたことを彼は同時に知るのだった。

「よく来た——佐和子、ユウシロウ」

長い髪を垂らし舞装束に身を包んだ華奢な身体を抱いたまま、ユウシロウは絶句した。

自らの欲望が導いた先に佇む一清。これは罠だ。そう理性では分かつていても、最早感情は出口を求め、先走るばかりだった。

その瞬間、私は目を覚ました。いや、目覚めたのは本来の私ではない。本来の私？ それは一体誰なのだろう。何の見返りも求めず、ユウシロウを愛しいと思つた私。それとも、意識の奥底に眠る、それは遙か遠い昔に生きていた少女の記憶？

「さあ、おいで……佐和子」

何度巻き戻されたか知らない古いにしえの記憶が再び私の中で再生される。はい、あにさま……。

唐突に“毒”が廻つてきたのかもしれない。それは半ば断ち切ることのできない縁えにしという猛毒だった。私は兄様を求めていた。そして兄様も。その本来の願いと仮定される何ものかが求めるものが、今こうしてここで皮肉にも再現されようとしている。

私は完全に自分自身を喪つていた。自分のものではない足が前へと踏み出し、求めるものを間違えた両手が差し出される。呆然と立ち尽くすユウシロウから離れ、私は一步一步ふらつく足取りで“兄”の下へと歩んでいった。

「愛している……、佐和子」——そう、お前は私のもの。

兄様……！ まるで白昼夢を見ているようだった。夢遊病者のように両の手を前方へと差し伸べ、微笑みさえ浮かべ、私は次第に兄の元へと歩み寄つた。

「佐和子先生！」

そんなユウシロウを嘲笑うかのように一清は自分の腕の中へ倒れ込んだ佐和子を抱き留め、挑発した。

「どうした？ユウシロウ。お前は、お前たちはその程度なのか」

いつしか一清の口元が私の首筋を這う。あつ……その微かな吐息を合図に次第に私は壊れていく。

ユウシロウを鋭く見据えたまま、一清は傍らの妹の着物の懷へと右手を差し入れる。その掌の中で形を変える丸い乳房。

「まるでお前自身のようだな、佐和子。誰の元へ行こうと従順に全てを受け入れる……愛しい我が妹よ」

やめろ！ やめろと言っているんだ！

一清の行いは既に常軌を逸していた。それでも私はその口付けでさえ喜んで受け入れてしまつたろう。クチユ、ちゅ……、耳元を犯していくその水音が、昂ぶるユウシロウの精神をさらに崩壊させる。

兄様……、恍惚としたその表情は既にすべてを失っていた。手にした大切な妹を自分の思い通りにする。一清のその思惑は遥かな古いにしえの時と何一つ変わらなかった。

なぜなら、それが�だと判つたから——遥かな過去、同じ日蝕の日、確かに“妹”は望みどおりの働きをしてくれた。その身を差し出し、あまつさえヤツの怒りが餓沙羅鬼の焰を呼んだ。

そして、今この時も。

「……先生をはなせ！」

その怒りが呼び水となつた。目に見えない激しい奔流が魂の抛り所を求めて荒れ狂う。カタカタ、武具として鍛えられた骨�の鎧が次第に鳴り始める。既に先の日蝕でその力は蓄えていた。あとはそれを開放させる切っ掛けを作つてやるだけだ。その鳴動が始まると、唐突に一清は佐和子を離した。

「——先生！先生ッ！」

そのあと彼は自分自身の身に何が起つたのかも分からなかった。ただ目の前の女性ひとを誰にも渡したくない、そう激昂する感情の出口として彼は彼自身の心と身体を捧げるだけだった。自分にとって彼

女とは何なのか？　その目に見えぬ押し問答の末に辿り着いた感情……。

愛している——その答えだけが、今は彼のすべてだった。

あとはもう全てを開放させてやるだけだった。狂ったように激情に己を任せ、ユウシロウは佐和子を掻き抱く。身に纏った拘束具のようなパイロットスーツを脱ぎ捨て、そして目の前の美しい女体を次第に露にさせる。肌と肌でしか感じ得ない何か。その何かがユウシロウの中で壊れていった。その身体の中に眠る鬼の血が二人を狂わせる。

「あつ……ああつ……あつ」

確かに刻み付けた自分自身を忘れないよう、あらゆる場所に口付け、そして一つになろうとした。

そう一つに、唯ひとつに……！

『好きなようにして、ユウシロウ——、』

その刹那、意識の底から届けられた愛しい言葉。それを合図に動き、艶かしい舌が動いた。己自身の奥底にて蠕っていた熱が一気に解放される。

カタカタカタ、その度に傍らの鬼神は、さらに力を蓄え目覚めようとする。一清が傍らで見ていることも構わず、二人はただ深く深く繋がるうとした。例えこれが最後まで、もう二度と悔いを残さぬよう……？　それだけが、偽ることのない真実だった。

そこは古の神殿いにしえ。自然石でできたその鍾乳洞の祠で、巫女シャーマンたちは性の宴を神に捧げる。そのための、これは一つの神事。

でも、そんなことはどうだっていい。愛してる、ただそれだけを伝えたかった。そのために目覚めるのが鬼神ならば、地獄に落ちてもかまわなかった。

艶かしく蠢く二つのシルエットが松明の灯りに映し出される。息も絶え絶えになりながら、激しい呼吸の中から彼の名を呼ぶ。

「ユウシロウ、ユウシ、ロウ……！」

私の腰を抱きながら、どうしたって一七歳にしか見えない華奢な

彼とは別人のような激しさで私を求め、いつ果てるとも知らない律動を繰り返す。痛々しいほどにユウシロウは必死だった。そうでなければ、到底取り戻せない何か彼の血潮を突き動かす。

私は、そんな彼の想いのすべてを受け止める——嬉しくて、嬉しくてたまらなかった。迸る汗と涙、そして互いの遺伝子を運ぶ津波のような血の海嘯。かいしやう

ああ、私たち姉弟だきょうだいったんだ……そうおぼろげに思うことすら、遠い幻のように感じられた。

「いい……ユウシロウ、すごく……上手よ、とても」

半ば泣きながら、それでもその想いの奔流を彼は停めることができなかった。

どうして、どうしてこんなことになってしまったの。自らの身代わりとなり、命を捧げた少女。その亡骸に追いつがろうと、もうあの日の微笑みは戻ってこない。貴姫は項垂れた顔を上げ、傍らに佇む一人の青年を見た。涙に濡れた、その瞳。けれどその犠牲によって確かに貴女は自らの運命に翻弄されることなく、こうして生かされた。そう、貴女はもう卑弥呼ですらなくなったのだ。

だが、本当にそれでよかったのだろうか。時代に見捨てられた為政者である彼女は、本来ならば終わり沈み行く太陽と共に、この棺に葬られねばならなかった。その正統な行いを誰かが乱した。ために彼女は生きることができた。そして、そのために散った一つの命。これも運命だったのだろうか。

……そんなことはない！

彼女を生かした夫弟は、畢竟彼女を政治の道具にしたにすぎない。彼女が生き延びたのは、自らの生を生きるためではなく、結局新たな政権をかの地にて起こすためであった。その鬼道は人々を従わせる大いなる力。それをもつてして、再び新たな繁栄を我にもたす——その男が望んでいたのは、最早一介の人間の感情ではなく、血塗られた野心そのものだった。

——……刹也。縊るような、その瞳。カタカタと、祠に眠る鬼神が共鳴りを始める。

小さくいたいけな少女の命。そして目の前で悲哀に封じ込められた貴姫。その二つの生を翻弄する、どす黒い野望。赦せない、決して赦しはしない。鬼神の鑄鉄の鎧が一層激しく鳴る。……刹也！――

――その思いがさらなる悲劇を呼ぶ。骨唄！クガイ……！

引き離されようとする思慕おもいのさなか、哀しみと憎悪が一つの白焰の柱となって大地を貫く。

あにさま。いったい私は誰を求めていたのだろう。いつでもその背中を追いかけていた。そして求められることが、こんなにも嬉しかった。兄様のためならば、私は命だって惜しくない。……けれど、けれど。

だから私は、こんなにも強くユウシロウに惹き付けられたのだろうか。好きで好きで、しかたない。どんなことがあるうと私は彼を救いたかった。そのために自分自身がどうなるうと。彼が求めるならば、何だってあげる。何があっても、彼を癒し守り、あたためる。「ユウシロウ、好きよ……」

耳元で囁くその声。半ば我を失っていた自分が目覚める。これでもう二人は永久に離れることはない……一つの雫が毀れ、私の頬を濡らす。それがあれば、もう怖くない。二人を繋いだ刹那が、途切れることのない明日へと向かって流れ始める。

「佐和子、先生……」

その瞬間、骨唄の胸部が開いた。ガシツというその音と共に私は立ち上がり、舞を舞う所作のようにふわりとその奥深くへと吸い込まれていった。

「先生！……ダメだ、先生！」

ユウシロウのその声が、まるで幻のように耳に届いた。

美鈴さん……、その瞳はそう語りかけてきた。真摯で、どこまでも真っ直ぐな眸。

姉さんのことをもう悲しまないで。涸れかけた涙、狂おしく胸を締め付ける圧迫感にも似た後悔の念。

けれど、あの時私を促してくれたのは他でもない、この人だったのだと美鈴は知った。美鈴は目に見えない手紙を受け取った。それは言葉ではなかった。繋がった心と心だけが知っている、“私は行かなければならないのだということ”

ユウシロウお兄さまに、とてもよく似ている。その人の風貌が、ではない。ふとした立ち振る舞いに滲む気配、のようなものだろうか。その人は筑紫舞のただ一人の伝承者。ああ、だからだろうか。ユウシロウお兄さまが知っている同じ空気を知っている、どこか哀しげでどこか柔らかな……。

貴嶋美命さん。歳は美鈴より六つほど上だったが、どことなく幼げな雰囲気と背の低さで見ようによっては美鈴と同学年にも見えないうこともない。彼女は口が利けなかった。だから余計な言葉より、ずっと大切な何かを美鈴に届けてくれたのだろうか？

……お姉さま。今はもう無き魂に無言で語りかける。私は今、ユウシロウお兄さまと貴嶋神社に來ています。皆、お姉さまのことを忘れてしまってるみたいだけれど、それでも私は。そう、忘れることなどできない。例え強制されたとしても、私はユウシロウお兄さまとお姉さまのことを忘れたりしない。だから、もうここへは二度と来ません。ただ、最後にお別れがしたかった。お姉さまが生まれた場所と、お姉さまの本当の命を心に刻み付けるために。

「美鈴……？」

境内から奥まった場所にひっそりと鎮座する磐坐に透明な朝陽が音も無く降り注いでいる。

その前に佇んだまま、美鈴は先程の美命との会話を思い出していた。言葉もなく静寂の裡に、ただ心と心で交わされる会話。

「ユウシロウお兄さま。私はあの時、行かなければという美命さんの心を受け取りました。……でも、本当に迎えに行つて欲しいのは実の妹の私であると」

だから。美鈴は乃三郎とともにここ筑紫へと向かった。それが身を引き裂くような悲しみを知ることになるのだということを知らない。お姉さま……お姉さま、何度そう心で叫んだことか。けれど、その人はもう歸つては来ない、もう……。

いつしか涙が蒼白の頬を伝っていた。その涙はユウシロウが零した涙だった。けれど兄は気丈に心を固めたまま、本当の涙を見せたりしなかった。そのユウシロウの流す涙の代わりに美鈴は泣いた。彼女はただただ悲しかった。ユウシロウの、そのいたいけな強さが、「どうして、どうしてお兄さまは泣かないのですか、お姉さまは、お姉さまは……、」

いつしかそう泣きじやくりながら美鈴はユウシロウに縋った。決してユウシロウを責めているのではない。それでもユウシロウは、その姿に酷く胸を締め付けられた。もつとお姉さまのことを想っていてもよいのではないですか？ そう大きく見開かれた潤んだ瞳が告げていた。お兄さまが愛してらした人。いいえ、きっと今も変わらずに愛している人。その心が本当なのなら、そう本当に兄は。

ふと哀しく微笑むその表情に美鈴は言葉^{かお}を喪つ。

——だから、お兄さまは？

「ありがとう。いいんだ、美鈴」

ただ夢のように目の前に佇む兄は言つた。美鈴のその気持ちだけで、きつと先生は。いや、俺は……、振り返らず前を向いて歩いてゆける。先生を想っていた時間、一緒にいたその時間は決して消えてしまったわけじゃない。そうだ、今もここで生きている。受け取った大切な何かを、悲しみだけで台無しにしてしまいたくない、そう思うから泣かないでいるだけなんだ。

美鈴はそんな兄の言葉を一字一句聞き漏らすまいと、微動だにせず兄をじつと見つめていた。そして、それだけで美鈴には兄の気持

ちが痛いほどよく解った。

——もう少し……、そう、もう少しだけ泣いていてもいいですか。掠れた声で美鈴はユウシロウにそう尋ねた。そつと包み込む兄の体温は確かなその存在の優しさを美鈴に教えてくれた。

そう、いつの日も兄は変わらず私の側にいてくれる。帰らぬ人を通して嘆かなくてもいい、もう十分すぎる涙を流したのだから——その優しすぎる温もりがそう言っていた。それでも美鈴は兄のために泣かずにはいらなかった。

4 .

静寂がその場所には満ちていた。あれは——？ 目を凝らすと遠い地平が目前に近づいてきた。遠い、それは古の景色^{いにしえ}。

緑も疎らな草原の所々に立ち枯れた木々が風に揺れている。その彼方に高床式の住居と竪穴式住居を幾つも構えた村とおぼしき集落が見える。いや、それはクニだった。外敵からの襲撃を避けるため、特に王の住処は地面から少しばかり隔たった場所に設えるのが、この時代の常だった。そしてそれに見守られるように集う簡素な民草の住居。

幾重にも高い城柵で嚴重に覆われ一際聳え立つように構えられた城とも思える高床式住居が、集落の奥まった場所に臨めた。

——女王卑弥呼^{ひみか}の住処だ。

私はその卑弥呼、弥呼姫に仕える侍従、いや侍女見習いの一人だった。幼い身でこうして弥呼姫に仕えることができたのは何を隠そう、兄の力添えがあつてのことだった。そう例え奴隷と同等の扱いでも私は兄に感謝しただろう。兄がいなければ、きっと私は

けれども私は知ってしまった、その人の存在を……。

弥呼姫の祈禱を助ける“カミツカイ”。彼らはその血に宿る力によつて醜悪な鬼神を操ることで権力という名の神威を人々の前に現す。無論、実際その武具を操る彼らは、その力の媒介者に過ぎなか

った。戦という名の神事に駆り出され、尊い姫を守ることによって日々生かされるだけの存在だった。そう、ほぼ奴隷同然の扱い——。その時代、下々の者に人権など赦されなかった。私もきつと彼らと同じだったのだらう、でも。

……その人の瞳は柔らかく美しい色をしていた。薄鈍色の前髪が、どこか寂しそうなその眸の色を隠していた。

私は、その人の笑った顔が見たかった。ただその人の優しい微笑みが見たくて……、そうそれは夢にまで見た兄の微笑みだった。

あにさま。いつしか、そう呼びかけていた。
でも、それは……つかの間の幸福だった。

鈍い痛みが知らぬ間に身を貫く。うつ、そう苦悶の表情を浮かべながら視線の隅で兄の姿を探す。

この痛みは——？　そう、あの少女が受けた痛み。それでも少女は笑っていた。兄の姿を見つけて微笑っていた。

『ユウシロウ……』

彼の名を囁いたはずなのに声が出ない。それでも拘束され動かぬ手足の代わりに、その鬼神が動いた。メリメリと赤錆びた鎧が音を立てて剥脱する。それでも構わず骨鬼は立ち上がり、目に見えぬ敵を求めて前進しようとした。一步、前へ踏み出そうとしてバランスを崩し、傍らの小さな祠をその腕で押し潰す。

「佐和子先生！」

そのユウシロウの叫び声が遠く意識の外から響いた。しかし、今はそんなことより前へ進まなければならぬ。

不思議とそう思い、私はぬるりと全身を包み込む繭のような内臓はらわたの中で奥歯を噛み締めた。全身に力が漲る。いいえ、そう感じたのは鬼神と一つになったもう一つの意識だった。血走った網膜に映るのは、ただ不毛のままに拡がる、おびただしい屍の山とどこまでもあか緋い血の情景。

それは刹也、ユウシロウが見ていた古の風景だった。来ないで、

来ないでユウシロウ。今近くに寄れば、きっとあなたを。その景色が指し示す事の異常性に気付く。けれど戦の世では、これが当たり前だった。生きるために殺し、殺すために生きる……こんなことつて。けれど、もう先に進まなければならぬことを私は悟っていた。

「……先生！」

必死の形相でユウシロウが叫んでいる。安心して、あなたを決して傷つけない。でも、私は……そう私は。

ユウシロウは視界の隅でほくそ笑む一清を見た。そのしてやったりの表情はユウシロウに冷たい一瞥をくれると私の乗った骨鬼を見上げた。それはもう実の妹へ向けた眼差しではなかった。

ユウシロウは本能的に残してきたTAの元へと走った。止められるのはTAしかない。それでも、その時の彼にはTAが既に稼動限界を越えていることなど頭になかった。むしろ確信していた。いや、それも違う。この身体の中に流れる血が確かに“敵”を求めていることに彼は気付かなかった。

TAの元に辿り着くと自力で搭乗し起動シークエンスを行う。思った通り機体はユウシロウの思いに応えるように、すぐに起動した。不可解であると考えるより先に意識は先程の骨鬼へと向かう。

ゆっくりとした歩調で私を孕んだ骨鬼は鍾乳洞出口へと向かって前進していく。その動きはさながら初動のTAのようにぎこちなかったが、それでも尖った牙、頭部に生えた双つの角とともに醜悪な面構えはまさに鬼そのものだった。どこか機械的なその動きが不気味さを助長させる。

TAの視界がONになると同時に早くも鬼神は姿を現した。このままここから出すわけにはいかない。本能とも思える思考がユウシロウの脳裏に閃く。何より佐和子先生を救えなければ、その思いだけでTAを動かそうとした、しかし。

……なん、だ。

いつしかユウシロウは、そのいつ果てるとも知らない怨嗟の声に

飲み込まれていた。

くぐもった幾つもの眩きが地の底から這い上がるように耳の奥のさらに奥底から響き渡った。それは脳髄を侵す地鳴りのようだった。一つ、二つと立ち現れたそれは、たちまち幾百の奔流となってユウシロウの精神を襲う。

その数多の“声”と一つになった意識が目の前の骨髄を敵と認識する。既にユウシロウには選択権は無かった。

——お前は、誰だ。

再び自分自身にそう問いかける。それはこの筑紫で彼が発した二度目の問いかけだった。

自分自身が自分でなくなるのを遠く感じながら、それでも必死にユウシロウは抵抗する。佐和子先生！大切なその人を自分は救わなければならぬ。しかし、そう思えば思うほど、どこかに吸い取られていく思いが目の前の骨髄へと向かう。

——オマエハ、ワレワレジン

頭蓋に響くその言葉を前にユウシロウは自身の意識を喪った。

……恐、怖？ そう、これは恐怖だ。だから奴を倒さねばならぬ。時間と空間がいつしか歪んでいく。

手放した意識の底で誰かの魂きおくと融合したユウシロウの意識が敵に手を伸ばそうとする。TAはいつしか骨髄に向かってダッシュしていた。さっきまで活動限界をとくに越えていた鉄の塊とは思えぬ俊敏な動きで。そして大破するのも構わず右腕を突き立てる。

その衝撃で両者はもんどり打ち、共に地面に叩き付けられる。その瞬間、二人の意識が繋がった。痛みと衝撃が直に伝わり、それがつかの間の覚醒へと導く。

『……ユウシロウ？』

「——佐和子先生！」

互いの無事を確認した、それがその第一声だった。

佐和子先生！——取り戻さねば、どうしても取り戻さねばならぬ

い、その人。ユウシロウのその悲痛な思いが、骨鬼を通して直に伝わる。でも、いいの。あなたさえ無事ならば……ユウシロウ、そのために私はあなたと出会ったのだから。

思いが満ち、私の両目から涙が溢れる。そして、今二人は闘わねばならないことを悟る。それが鬼の宿命。戦うことでしか、本当の想いを告げられない。闘っていられる瞬間だけ、互いを感じ取れる。骨鬼に乗るということは、そういうことだ。

TAに抑え込まれた状態で倒されていたかに見えた骨鬼が再び動き始める。そして思わぬ反撃。骨鬼の繰り出した一撃によって今度はTAの装甲が打ち砕かれ、剥離する。その両者の破壊された右手から人工筋肉が蠢き、のた打ち回っていた。

それは両者が同じ機構を持った同様の生物であることを思わせた。否、事実TAと骨鬼は同じものであった。ただ鬼の心を繋ぐ、遙か古の鬼の心を繋ぐ兵器として。そして、その過去から連なる記憶の奔流が餓沙羅鬼を呼ぶ。

……それは哀しみの連鎖。どこかでそれを断ち切らなければ、断ち切ってすべてを忘れさせなければ……、終わりの来ない永久の哀しみ。私が、その最初の発芽となる。すべてを忘れさせ、その忘却のさなかで本来の生を全うさせる、そのために――。

「佐和子先生！」

なおも悲痛な声で叫び続けるユウシロウ。しかし、心とは裏腹にTAは憎悪の塊となって相手を捻り伏せようとする。が、骨鬼も反撃をやめようとしな。それは、想いと想いの交感。相手への強い思いが力となって増幅され、ほぼ鉄の塊と化しつつある両者を、元ある無へと返そうとする。

ユウシロウ……。

あなたが何処にいても、そう誰になっても、ずっとあなたのそばに私はいる。そのことをどうか忘れないで。

——佐和子先生！

のた打つ人工筋肉を大破した右腕から覗かせながら、いつしか骨

唄はT Aから離れ、鍾乳洞の入り口とは別の方角の縦穴へと進んでいくのだった。

第十一章 ― 零 ― (後書き)

失礼ながら、まだ続きます(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8445o/>

櫻ノ舞 —gasaraki 外伝—

2011年11月11日03時24分発行